井尻Ｂ遺跡 15

市道御供所井尻線建設に伴う発掘調査報告書 Ⅳ

―井尻Ｂ遺跡第17次調査（Ｃ・Ｄ区）の報告―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第918集

２００７

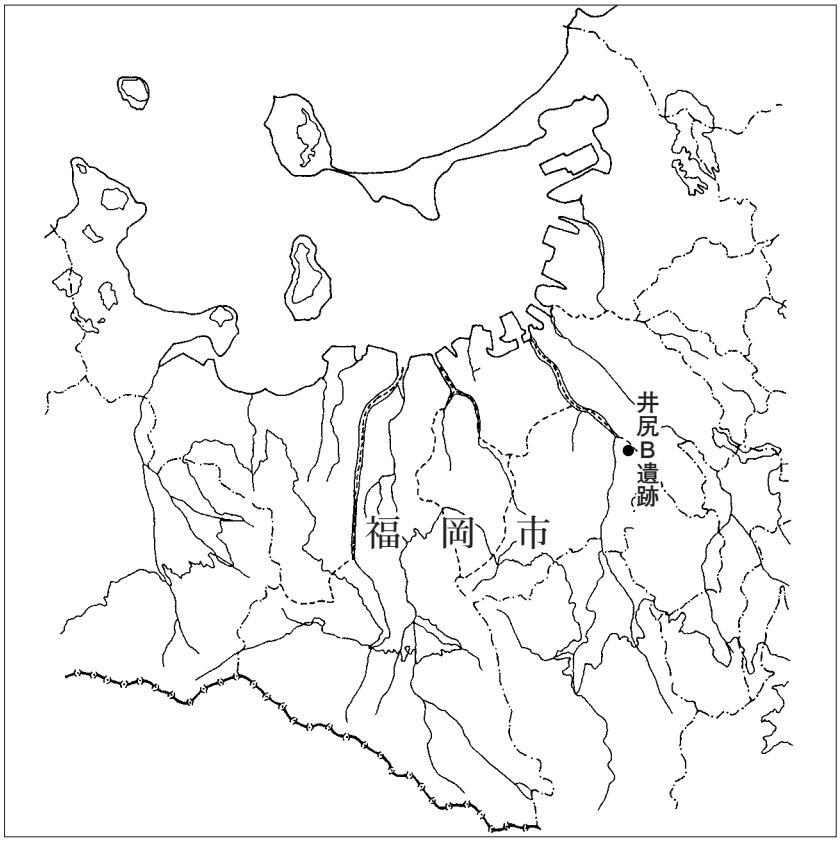
福岡市教育委員会

井尻Ｂ遺跡 15

市道御供所井尻線建設に伴う発掘調査報告書 Ⅳ

―井尻Ｂ遺跡第17次調査（Ｃ・Ｄ区）の報告―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第918集



調査番号　００２７
遺跡略号　ＩＧＢ－１７

２００７

福岡市教育委員会

C区全景（北から）

D区全景（東から）

C区SE05井戸出土仿製鏡（径7.4cm）

C区SE05井戸出土勾玉鋳型

C区SC01出土勾玉鋳型

C区SE03井戸出土取瓶

C区SE05井戸出土銅塊付着甕

鋳造関係出土遺物類

D区SE01井戸出土一括土器類

序

玄界灘を隔てて中国大陸と海路でつながる福岡市は、古くから朝鮮半島、中国大陸との交易、文化交流の窓口として独自の発展を遂げてきました。

この長年にわたる交流により、市域には数多くの遺跡が残されており、これらを永久的に保存し、未来の子孫たちに残していくことは現在に生きる私たちの義務でもあります。

しかしながら、現代の諸再生産活動によってこれらが失われつつあるのが実情であります。

教育委員会では、これらの開発によってやむを得ず失われている埋蔵文化財について事前の発掘調査を行い、写真類・図面といった記録による保存に努めているところであります。

本書は、都市計画道路の御供所井尻線の建設に伴う福岡市南区井尻Ｂ遺跡の第17次発掘調査について報告するものです。

井尻Ｂ遺跡は、弥生時代奴国で青銅器鋳造の一角を担った重要な遺跡であります。つきましては、この成果が市域の文化財保護への理解の一助となり、また学術研究資料として活用いただければ幸いです。

最後に、発掘調査から報告書刊行に至るまで多大なご協力をいただきました関係者の皆様方に対し、心から深甚の感謝を申し上げる次第です。

平成19年３月30日

福岡市教育委員会
教育長　植木とみ子

例　　言

1．本書は平成12年度から平成15年度にわたって発掘調査を行った井尻Ｂ遺跡（南区井尻地内）第17次調査のうち、平成14年度に調査を行った、Ｃ・Ｄ区の調査報告書である。

2．本書で使用した遺構実測図の作成は、横山邦継が行った。また、遺物実測図の作成は、横山の他に、阿部泰之、平川敬治、米倉法子、濱石正子、相原聡子、楠瀬慶太、撫養久美子が行った。

3．本書に使用した遺物類の整理は、副田則子、松田弘子、花田友美子、八代和美で行った。

4．本書に使用した図トレースは、調査員の他、副田則子が行った。

5．本書で使用した遺構写真、遺物写真撮影は、横山が行った。

6．本書は横山が編集を行い、第Ⅰ～Ⅴ章の執筆を行った。なお、第Ⅴ章の一部を比佐陽一郎氏（埋蔵文化財センター）にお願いした。

7．本書で使用した方位は、磁北である。

8．本書にかかわる図面・写真・出土遺物などの資料は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵される予定である。

本文目次

第Ⅰ章　はじめに …… 1
　１．調査に至る経過 …… 1
　２．調査の組織 …… 1

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境 …… 2

第Ⅲ章　Ｃ区調査の記録 …… 5
　－概要－ …… 5
　１．竪穴住居跡 …… 5
　２．掘立柱建物跡 …… 38
　３．土坑 …… 44
　４．貯蔵穴 …… 50
　５．井戸跡 …… 50
　６．溝状遺構 …… 63
　７．道路状遺構 …… 64

第Ⅳ章　Ｄ区調査の記録 …… 65
　－概要－ …… 65
　１．竪穴住居跡 …… 65
　２．掘立柱建物跡 …… 86
　３．土坑 …… 89
　４．井戸跡 …… 95
　５．溝状遺構 …… 104
　６．道路状遺構 …… 106

第Ⅴ章　おわりに …… 107

挿図目次

Fig. 1　井尻Ｂ遺跡群調査区位置図（1/10,000）…… 2
Fig. 2　周辺遺跡分布図（1/25,000）…… 3
Fig. 3　Ｃ区SC01住居跡出土状況実測図（1/50）…… 6
Fig. 4　井尻Ｂ遺跡17次調査区全体及びＣ調査区遺構全体図（1/200）……（折り込み）
Fig. 5　Ｃ区SC01竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3・1/2・1/1）…… 7
Fig. 6　Ｃ区SC02竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）…… 8
Fig. 7　Ｃ区SC02竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3・1/2）…… 8
Fig. 8　Ｃ区SC03竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）…… 9
Fig. 9　Ｃ区SC03竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3・1/2）…… 9
Fig.10　Ｃ区SC04竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）…… 10
Fig.11　Ｃ区SC04竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3・1/2）…… 11
Fig.12　Ｃ区SC05竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）…… 12
Fig.13　Ｃ区SC05竪穴住居跡主柱穴出土状況実測図（1/30）…… 12
Fig.14　Ｃ区SC05竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）…… 13
Fig.15　Ｃ区SC06竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）…… 14
Fig.16　Ｃ区SC06竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）…… 15
Fig.17　Ｃ区SC07竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）…… 15
Fig.18　Ｃ区SC07竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）…… 16
Fig.19　Ｃ区SC08竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）…… 16
Fig.20　Ｃ区SC09竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）…… 17
Fig.21　Ｃ区SC09竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3・1/2）…… 17
Fig.22　Ｃ区SC10竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）…… 18
Fig.23　Ｃ区SC10竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）…… 18
Fig.24　Ｃ区SC11・12・13竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）…… 19
Fig.25　Ｃ区SC11・12竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）…… 19
Fig.26　Ｃ区SC14竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）…… 20
Fig.27　Ｃ区SC14竪穴住居跡出土遺物実測図①（1/3）…… 21
Fig.28　Ｃ区SC14竪穴住居跡出土遺物実測図②（1/3・1/2）…… 22
Fig.29　Ｃ区SC15竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）…… 24
Fig.30　Ｃ区SC15竪穴住居跡出土遺物実測図①（1/3）…… 25
Fig.31　Ｃ区SC15竪穴住居跡出土遺物実測図②（1/3）…… 26
Fig.32　Ｃ区SC16竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）…… 27
Fig.33　Ｃ区SC16竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）…… 28
Fig.34　Ｃ区SC17竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）…… 29
Fig.35　Ｃ区SC17竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）…… 30
Fig.36　Ｃ区SC18竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）…… 31
Fig.37　Ｃ区SC18竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）…… 32
Fig.38　Ｃ区SC19竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）…… 32

Fig.39　C区SC20竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）…… 33
Fig.40　C区SC20竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3・1/2）…… 33
Fig.41　C区SC21竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）…… 34
Fig.42　C区SC21竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3・1/2）…… 35
Fig.43　C区SC22竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）…… 36
Fig.44　C区SC22竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）…… 36
Fig.45　C区SC6020・6207・6200・6279竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3・1/4）…… 37
Fig.46　C区SB01・02掘立柱建物跡出土状況実測図（1/50）…… 39
Fig.47　C区SB03掘立柱建物跡出土状況実測図（1/50）…… 40
Fig.48　C区SB04掘立柱建物跡出土状況実測図（1/50）…… 41
Fig.49　C区SB01～04掘立柱建物跡出土遺物実測図（1/3）…… 42
Fig.50　C区SK01～07土坑出土状況実測図（1/30）…… 43
Fig.51　C区SK08～13土坑出土状況実測図（1/30）…… 45
Fig.52　C区SK03・04・06・07・11・12土坑出土遺物実測図（1/3・1/2）…… 46
Fig.53　C区SG01・02貯蔵穴出土状況実測図（1/30）…… 48
Fig.54　C区SG01・02貯蔵穴出土遺物実測図（1/3・1/4）…… 49
Fig.55　C区SE01井戸跡出土状況実測図（1/30）…… 50
Fig.56　C区SE01井戸跡出土遺物実測図（1/3）…… 51
Fig.57　C区SE02井戸跡出土状況実測図（1/30）…… 52
Fig.58　C区SE02井戸跡出土遺物実測図（1/3）…… 52
Fig.59　C区SE03井戸跡出土状況実測図（1/30）…… 53
Fig.60　C区SE03井戸跡出土遺物実測図（1/3）…… 54
Fig.61　C区SE04井戸跡出土状況実測図（1/30）…… 55
Fig.62　C区SE04井戸跡出土遺物実測図（1/3）…… 56
Fig.63　C区SE05井戸跡出土状況実測図（1/30）…… 57
Fig.64　C区SE05井戸跡出土遺物実測図①（1/3）…… 58
Fig.65　C区SE05井戸跡出土遺物実測図②（1/3）…… 59
Fig.66　C区SE05井戸跡出土遺物実測図③（1/3）…… 61
Fig.67　C区SE05井戸跡出土遺物実測図④（1/1）…… 62
Fig.68　C区SD01～06溝出土遺物実測図（1/3）…… 63
Fig.69　C区SF01溝出土遺物実測図（1/3）…… 64
Fig.70　D区遺構出土状況全体図（1/200）…… 66
Fig.71　D区SC01・02竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）…… 67
Fig.72　D区SC03・04・05竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）…… 68
Fig.73　D区SC01～05竪穴住居跡出土遺物実測図①（1/3・1/2）…… 70
Fig.74　D区SC05竪穴住居跡出土遺物実測図②（1/2）…… 71
Fig.75　D区SC06竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）…… 72
Fig.76　D区SC06竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3・1/2）…… 73
Fig.77　D区SC07・08竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）…… 74
Fig.78　D区SC08竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）…… 74

Fig.79　Ｄ区SC09竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）…… 75
Fig.80　Ｄ区SC09竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）…… 76
Fig.81　Ｄ区SC10竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）…… 77
Fig.82　Ｄ区SC10竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）…… 78
Fig.83　Ｄ区SC11・12竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）…… 79
Fig.84　Ｄ区SC11竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）…… 80
Fig.85　Ｄ区SC13竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）…… 81
Fig.86　Ｄ区SC13竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3・1/2）…… 82
Fig.87　Ｄ区SC14竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）…… 83
Fig.88　Ｄ区SC14竪穴住居跡炉跡出土状況実測図（1/30）…… 83
Fig.89　Ｄ区SC14竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）…… 84
Fig.90　Ｄ区SC15・16竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）…… 84
Fig.91　Ｄ区SC15・16・5032・5143竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3・1/4）…… 85
Fig.92　Ｄ区SB01～03掘立柱建物跡出土状況実測図（1/50）…… 87
Fig.93　Ｄ区SB03・05掘立柱建物跡出土遺物実測図（1/3）…… 87
Fig.94　Ｄ区SB04掘立柱建物跡出土状況実測図（1/50）…… 88
Fig.95　Ｄ区SB05掘立柱建物跡出土状況実測図（1/50）…… 89
Fig.96　Ｄ区SK01～12土坑出土状況実測図（1/30）…… 90
Fig.97　Ｄ区SK01～03・05・07・08・12・13土坑出土遺物実測図（1/2・1/3・1/4）…… 91
Fig.98　Ｄ区SK13～22土坑出土状況実測図（1/30）…… 92
Fig.99　Ｄ区SK17～22土坑出土遺物実測図（1/3・1/4）…… 93
Fig.100　Ｄ区SK23～28土坑出土状況実測図（1/30）…… 94
Fig.101　Ｄ区SK23・24・27土坑出土遺物実測図（1/3・1/2）…… 95
Fig.102　Ｄ区SE01井戸跡出土状況実測図（1/30）…… 96
Fig.103　Ｄ区SE01井戸跡出土木器実測図（1/2）…… 96
Fig.104　Ｄ区SE01住居跡出土遺物実測図（1/3・1/2）…… 97
Fig.105　Ｄ区SE02井戸跡出土状況実測図（1/30）…… 98
Fig.106　Ｄ区SE02井戸跡出土遺物実測図（1/3・1/4）…… 99
Fig.107　Ｄ区SE03井戸跡出土状況実測図（1/30）…… 99
Fig.108　Ｄ区SE03井戸跡出土遺物実測図①（1/3）…… 100
Fig.109　Ｄ区SE03井戸跡出土遺物実測図②（1/3）…… 101
Fig.110　Ｄ区SE03井戸跡出土遺物実測図③（1/3）…… 102
Fig.111　Ｄ区SE03井戸跡出土遺物実測図④（1/3）…… 103
Fig.112　Ｄ区SD07溝跡土層断面実測図（1/40）…… 104
Fig.113　Ｄ区SD03・05・07溝跡・遺構検出面・試掘トレンチ出土遺物実測図（1/3・1/2）…… 105
Fig.114　井尻Ｂ遺跡出土の鋳造関係遺物集成（1/2・1/4・1/6）…… 108
Fig.115　鉛同位対比分析の結果図…… 111

図版目次

PL. 1　井尻Ｂ遺跡17次Ｃ調査区南半部全景（南から）
PL. 2　井尻Ｂ遺跡17次Ｃ調査区北側住居跡出土状況全景（南西から）
PL. 3　井尻Ｂ遺跡17次Ｃ調査区周辺状況全景（北から）
PL. 4　井尻Ｂ遺跡17次Ｃ調査区北側住居跡出土状況全景（南から）
PL. 5　井尻Ｂ遺跡17次Ｃ調査区南端部遺構出土状況全景（南から）
PL. 6　1　井尻Ｂ遺跡17次Ｃ調査区北端部遺構出土状況全景（南から）
　　2　井尻Ｂ遺跡17次Ｃ調査区SC05竪穴住居跡出土状況（南東から）
PL. 7　1　井尻Ｂ遺跡17次Ｃ調査区SC05竪穴住居跡主柱穴土器出土状況
　　2　井尻Ｂ遺跡17次Ｃ調査区SC05竪穴住居跡床面土器出土状況（西から）
PL. 8　1　井尻Ｂ遺跡17次Ｃ調査区SG01貯蔵穴出土状況（北から）
　　2　井尻Ｂ遺跡17次Ｃ調査区SG01貯蔵穴土器出土状況（東から）
PL. 9　1　井尻Ｂ遺跡17次Ｃ調査区SC12竪穴住居跡出土状況（東から）
　　2　井尻Ｂ遺跡17次Ｃ調査区SC12竪穴住居跡床面土器出土状況（東から）
PL.10　1　井尻Ｂ遺跡17次Ｃ調査区SC14竪穴住居跡出土状況（南東から）
　　2　井尻Ｂ遺跡17次Ｃ調査区SC14竪穴住居跡床面土器出土状況（南東から）
PL.11　1　井尻Ｂ遺跡17次Ｃ調査区SC15竪穴住居跡出土状況（東から）
　　2　井尻Ｂ遺跡17次Ｃ調査区SK04土坑出土状況（南から）
PL.12　1　井尻Ｂ遺跡17次Ｃ調査区SK12土坑出土状況（東から）
　　2　井尻Ｂ遺跡17次Ｃ調査区SE01井戸内土器出土状況（北から）
PL.13　1　井尻Ｂ遺跡17次Ｃ調査区SE04井戸内土器出土状況（北から）
　　2　井尻Ｂ遺跡17次Ｃ調査区出土遺物①
PL.14　井尻Ｂ遺跡17次Ｃ区出土遺物②
PL.15　井尻Ｂ遺跡17次Ｃ区出土遺物③
PL.16　井尻Ｂ遺跡17次Ｃ区出土遺物④
PL.17　井尻Ｂ遺跡17次Ｃ区出土遺物⑤
PL.18　井尻Ｂ遺跡17次Ｃ調査区SE03・05井戸・SC01住居跡出土遺物（小型仿製鏡・銅塊付着甕底部・勾玉鋳型・土製坩堝）
PL.19　1　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区遺構出土状況全景（東から）
　　2　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区SC01・02・04・05・09・10竪穴住居跡出土状況全景（東から）
PL.20　1　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区SC04・05竪穴住居跡出土状況（東から）
　　2　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区南側遺構出土状況全景（東から）
PL.21　1　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅡ調査区遺構出土状況（東から）
　　2　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅡ調査区SC09～11竪穴住居跡出土状況（東から）
PL.22　1　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅢ調査区SF02道路遺構出土状況（北から）
　　2　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅢ調査区SD07溝土層断面（北から）
PL.23　1　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅢ調査区SF02道路遺構補修状況（西から）
　　2　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区SC01竪穴住居跡出土状況（東から）
PL.24　1　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区SC02竪穴住居跡出土状況（西から）

2　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区SC02竪穴住居跡出土状況（西から）
PL.25　1　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区SC04竪穴住居跡出土状況（北から）
2　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区SC04竪穴住居跡出土状況（北から）
PL.26　1　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区SC05竪穴住居跡出土状況（西から）
2　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区SC05竪穴住居跡出土状況（西から）
PL.27　1　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区SC05竪穴住居跡出土状況（西から）
2　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区SC04・05竪穴住居跡出土状況（東から）
PL.28　1　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区SC06竪穴住居跡・SK07土坑出土状況（南西から）
2　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区SC09竪穴住居跡出土状況（東から）
PL.29　1　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区SC09竪穴住居跡出土状況（東から）
2　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区SC09竪穴住居跡出土状況（東から）
PL.30　1　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区SC09竪穴住居跡出土状況（東から）
2　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区SC10竪穴住居跡出土状況（北から）
PL.31　1　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区SC10竪穴住居跡出土状況（北から）
2　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区SC11竪穴住居跡出土状況（北から）
PL.32　1　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区SC12竪穴住居跡出土状況（北から）
2　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区SC13竪穴住居跡出土状況（北から）
PL.33　1　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区SC16竪穴住居跡出土状況（東から）
2　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区SK04土坑出土状況（東から）
PL.34　1　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区SK04土坑出土状況（東から）
2　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区SK09土坑出土状況（西から）
PL.35　1　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区SK08土坑出土状況（北から）
2　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区SK28土坑出土状況（北から）
PL.36　1　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区SE03井戸出土状況（西から）
2　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区SE03井戸内土器出土状況（西から）
PL.37　井尻Ｂ遺跡17次Ｄ調査区出土遺物　①
PL.38　井尻Ｂ遺跡17次Ｄ調査区出土遺物　②
PL.39　井尻Ｂ遺跡17次Ｄ調査区出土遺物　③
PL.40　井尻Ｂ遺跡17次Ｄ調査区出土遺物　④

表 目 次

Tab. 1　蛍光Ｘ線による材質調査表

第Ⅰ章　はじめに

１．調査に至る経過

平成11年３月31日付けで南区井尻１、２丁目地内に新設される市道「御供所井尻線」の事前審査申請書が市土木局建設部南部建設課より教育委員会文化財部埋蔵文化財課に提出された。

申請地のうち、井尻１丁目地内は「井尻Ｂ遺跡」と呼んでいる周知の遺跡であったため、事前の試掘調査によって遺構の遺存状況を確認する必要があると判断し、担当課と協議を重ねた。

しかし、当該区域は古い市街地であり、道路も狭いことから必要な試掘調査もできない区域もあったが、以前の周辺調査成果や対象地の用地買収の終了した地点の試掘調査によって記録保存の調査区域を確定した。

市道「御供所井尻線」建設に伴う井尻Ｂ遺跡の調査は、第17次目にあたる。このうち買収の完了した路線用地の南側からＡ～Ｆ区の調査区を設定し、発掘調査にあたった。南側のＡ区は平成12年６月から調査を開始し、平成13年６月４日から同14年３月31日までにＢ・Ｃ区北半部・Ｄ区を、同14年度にＣ区南半部の調査を行った。

井尻Ｂ遺跡第17次調査においては、路線幅20mの調査区が丘陵を南北に貫く形となったため、弥生時代から古代までの長い時間の複合関係が明らかとなった。弥生時代後期の青銅器鋳造遺構や古代建物群などが特徴的である。

平成14年度以降では調査区は北西側の五十川遺跡群へと移行した。調査成果は、平成19年度以後に刊行予定である。

２．調査の組織

調査委託　土木局建設部南部建設課
調査主体　教育委員会文化財部埋蔵文化財課
調査総括　埋蔵文化財課長　山崎純男
　　同調査第２係長　（前）山口譲治、（現）田中寿夫
調査庶務　文化財整備課　（前）宮川英彦、（現）御手洗清
事前審査　埋蔵文化財課　（前）中村啓太郎・田上勇一郎、（現）井上繭子
調査担当　同第１係　横山邦継、屋山　洋
調査作業員　一ノ瀬フミヨ、上野龍夫、浦　伸英、江嶋光子、大塩　皓、加藤常信、幸田信子、坂下達男、大長正弘、橘　良平、橘　智子、高野瑛子、谷　英二、谷　正則、遠山　勲、徳永静雄、中村尚美、布江孝子、税所篤英、廣田安平、前山政義、三浦　力、宮川ヤエ子、大和育絵、山下智子、吉住政光、其田昌祥、大和武史、森本良樹、伊藤美伸、藤原直子、林　厚子、乾　俊夫、伊藤ミドリ、一宮義幸、牛尾輿志助、梅津宏子、川岡涼子、倉光政彦、高橋茂子、中園登美子、土生ヨシ子、満田雅子、三好道子、山田ヤス子
整理作業員　四反田美香子、青木悦子

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境

井尻Ｂ遺跡は、福岡平野の中央部を北流する那珂川中流域右岸に広がる阿蘇火砕流からなる低丘陵上に展開する。この低丘陵上には解析された谷地形によって多くの遺跡群が分布する。

遺跡南側には、須玖永田遺跡や須玖坂本遺跡等、弥生時代後期の青銅器・ガラス製品鋳造工房が複数在ったことが判っている。本井尻周辺においても、江戸時代から青銅器鋳型が出土したことが知られており、奴国の青銅器生産を支える工房群の一つとして認識されてきた。また、これまでの発掘調査においても鋳型の石材として使用された石英長石斑岩片が多く出土することから、弥生時代後期には本遺跡においても数多くの青銅器が生産されていたと考えることができる。

また、本遺跡の北側にあたる那珂・比恵の丘陵には、弥生時代から古代にかけての大規模な遺跡が展開している。これらの遺跡は弥生時代では竪穴住居・大型掘立柱建物・道路状遺構等の遺構密度が非常に高く、また古代においても那津官家・那珂郡衙等と考えられる掘立柱建物群や該期の遺物類が出土することから、弥生時代～古代の奴国の拠点的集落遺跡と考えられる。

本遺跡は、上記のように南・北地域に弥生～古代に亘る大規模な遺跡が展開することからこれまで同期の重要な遺構が残されている可能性が指摘されてきた。しかしながら、遺跡周辺では大正13年に九州鉄道により福岡－二日市間に電車が敷設されて井尻駅ができたことから、駅周辺の小規模な開発が進んだが、区画整理には至らなかった。この結果、遺跡地には旧来の細い道路によって連絡する地割りが残り、大型車両等の進入路が確保できないことから、これまで大規模な開発は見られなかった。このことにより本遺跡にかかる発掘調査も小規模にとどまり、全体像を窺うことのできる成果は少なかった。本遺跡では、これまでの発掘調査成果から旧石器時代から古代にかけての遺構・遺物が検出

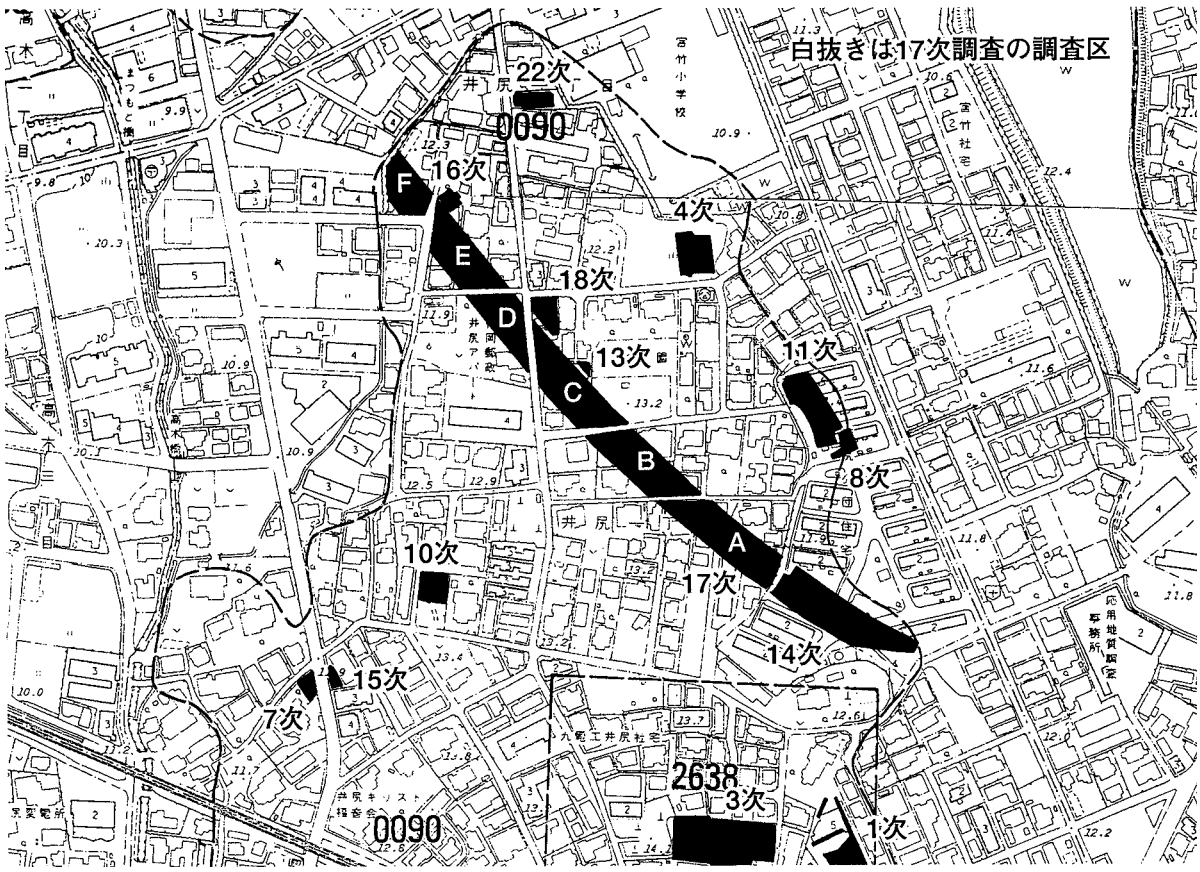
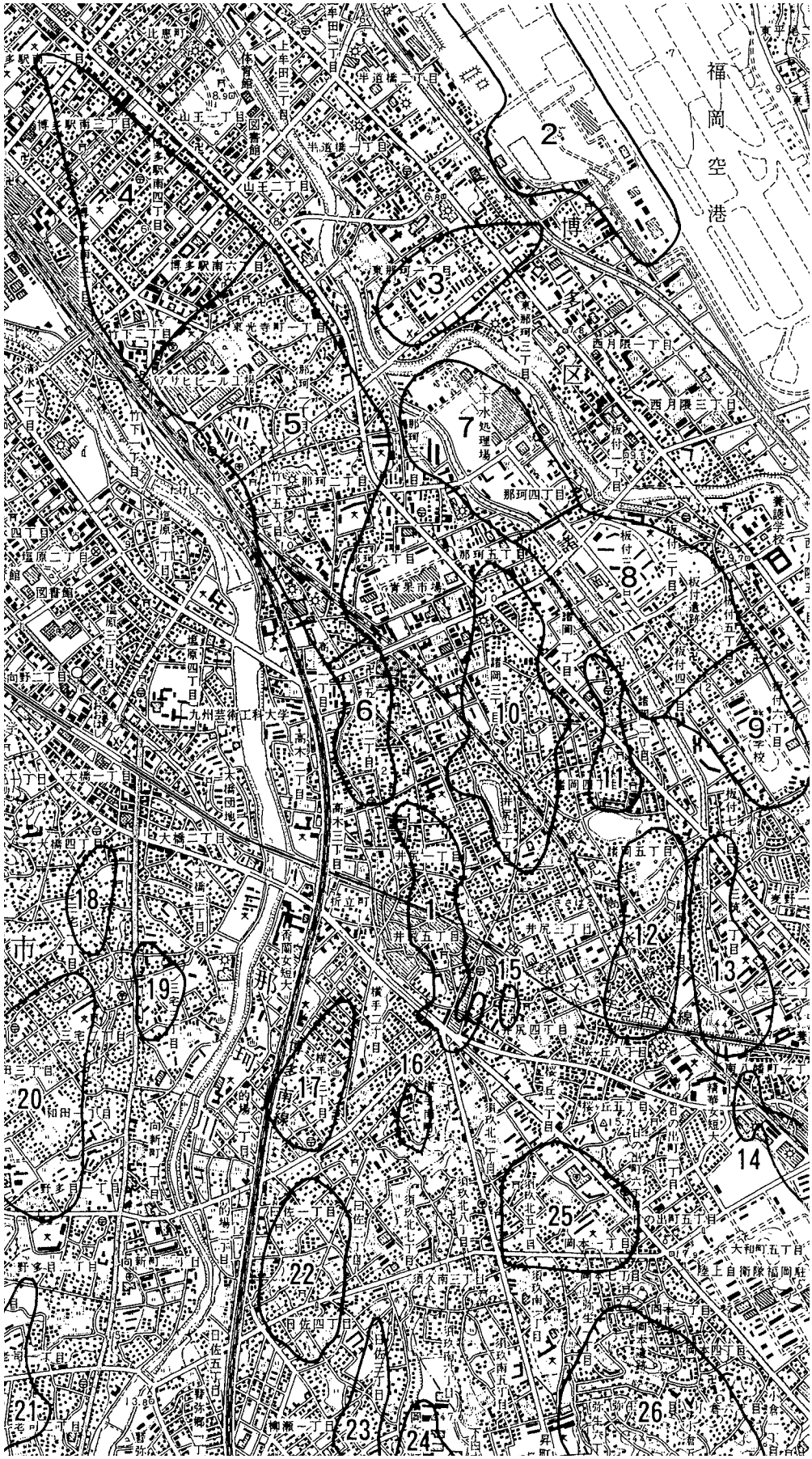


Fig. 1　井尻Ｂ遺跡群調査区位置図（1/10,000）



1　**井尻Ｂ遺跡**
2　雀居遺跡
3　東那珂遺跡
4　比恵遺跡
5　那珂遺跡
6　五十川遺跡
7　那珂君休遺跡
8　板付遺跡
9　高畑遺跡
10　諸岡Ａ遺跡
11　諸岡Ｂ遺跡
12　笹原遺跡
13　三筑遺跡
14　南八幡遺跡
15　井尻Ａ遺跡
16　寺島遺跡
17　横手遺跡
18　大橋Ｅ遺跡
19　三宅Ｃ遺跡
20　三宅Ｂ遺跡
21　野多目Ｃ遺跡
22　曰佐遺跡
23　弥永原遺跡
24　曰佐原遺跡
25　須玖遺跡群
26　岡本遺跡群

Fig. 2　周辺遺跡分布図（1/25,000）

されている。旧石器時代では主に丘陵南端部でナイフ形石器、細石器等が出土しており、丘陵北側部では原位置を止めるものは少なく、出土数も少ない。該期には東方の諸岡Ｂ遺跡でまとまった出土が知られる。続く縄文時代では、打製石鏃が少量出土しているが、土器類や遺構は伴っていない。

弥生時代では、最も古いもので丘陵の北西端部において夜臼式土器甕や板付Ⅱ式土器の小破片が第17次調査Ｅ区で出土しているが、遺構を確実に伴うのは中期前葉の城ノ越期で、貯蔵穴が散見される。この後、弥生後期前半までの検出遺構は残りが悪く、数的にも少ない。しかしながら、弥生中期の土器片は後期や古代遺構の覆土内より数多く出土する事から、本来は該期の集落遺構が多数存在したが削平により失われて、遺物が遊離したものと考えられる。また、量的には中期後半から後期前半期でも中期中葉期程ではないが土器類も多く出土しており、竪穴住居等の遺構も数軒が検出されている。続く弥生後期後半期になると丘陵全体に集落の形成がはじまり、次の古墳時代前期までの間に多くの竪穴住居跡や掘立柱建物遺構が顕著になってくる。この時期には大規模な集落を形成するのみでなく、後期末には青銅器鋳造関係遺物やガラス勾玉鋳型が出土するなど当時の先端技術を示す遺物が出土する遺構も目立って知られる。この後、古墳時代中期になると竪穴住居等の生活遺構はほとんど検出されなくなる。このことは、遺跡南端部に井尻Ｂ１号墳等の５世紀後半の前方後円墳が造営されることから遺跡全域が該期の墓地となったと想定されているが、これまででも古墳周溝等の遺構が検出された地域は限定されている。続く６世紀代には、少量ながら第11・17次Ａ区調査で須恵器の出土が知られる。これまでに該期の遺構は伴っていないものの、7世紀に現れる掘立柱建物群に先行した集落が形成されていたものと思われる。また、７世紀末から８世紀初頭では、丘陵中心部に寺院・官衙遺構が出現し、関連する該期の遺物が多く出土する。この時期の遺構は、丘陵北端に位置する第22次調査や南端に近い第６次調査等でも検出されており、遺構の分布する範囲は南北約650m、東西250mと広域に亘ることが明らかとなった。この時期の瓦類を出土する遺跡は、周辺では対岸の那珂川左岸に位置する三宅廃寺や同右岸で須恵器類を多く出土する那珂遺跡、御笠川左岸の高畑遺跡等があげられる。これらの遺跡のうち、高畑遺跡は太宰府水城東門からの官道に沿い、三宅廃寺や本遺跡は水城西門からの官道に近接する。この西側官道に関連して、平成18年末に、７世紀後半～８世紀初めに創建されたとされる観世音寺の屋根瓦を焼いたほぼ完存状態の老司瓦窯跡が官道西側で発見された。老司窯の北方には三宅廃寺に近く岩野瓦窯跡があり、一連の製品が運搬の利便のために官道を経由したことは想像に難くない。

【既刊報告書】

①『井尻Ｂ遺跡』「福岡市埋蔵文化財調査報告書第175集」1988　②『井尻Ｂ遺跡』「福岡市埋蔵文化財調査報告書第411集」1992　③『井尻Ｂ遺跡３－第４次調査報告－』「福岡市埋蔵文化財調査報告書第412集」1995　④『井尻Ｂ遺跡４－第５次調査報告－』「福岡市埋蔵文化財調査報告書第441集」1996　⑤『井尻Ｂ遺跡５－第６次調査報告－』「福岡市埋蔵文化財調査報告書第529集」1997　⑥『井尻Ｂ遺跡６－第８次調査報告－』「福岡市埋蔵文化財調査報告書第571集」1998　⑦『井尻Ｂ遺跡７－第11次調査報告－』「福岡市埋蔵文化財調査報告書第644集」2000　⑧『井尻Ｂ遺跡８－第12次調査の報告－』「福岡市埋蔵文化財調査報告書第645集」2000　⑨『井尻Ｂ遺跡９－第９・10次調査報告－』「福岡市埋蔵文化財調査報告書第679集」2001　⑩『井尻Ｂ遺跡10－第16次調査の報告－』「福岡市埋蔵文化財調査報告書第721集」2002　⑪『井尻Ｂ遺跡11－第14次調査の報告－』市道御供所井尻線建設に伴う発掘調査報告書Ⅰ「福岡市埋蔵文化財調査報告書第736集」2003　⑫『井尻Ｂ遺跡　12』市道御供所井尻線建設に伴う発掘調査報告書Ⅱ「福岡市埋蔵文化財調査報告書第787集」2004　⑬『井尻Ｂ遺跡13－第21次調査の報告－』「福岡市埋蔵文化財調査報告書第788集」2004　⑭『井尻Ｂ遺跡14－第17次Ｂ区の報告－』市道御供所井尻線建設に伴う発掘調査報告書Ⅲ「福岡市埋蔵文化財調査報告書第834集」2005

第Ⅲ章　C区調査の記録

―概　要―　C区は、御供所井尻線調査区のほぼ中央部にあたり、調査前は木造宅地や畑地とでなっていた。また、周辺道路は、ほぼ東西・南北に街区を区切る位置にあって、南東側A調査区の古代交差溝やC区で検出された道路状遺構の方位も現在の地割りとほぼ一致する。

調査区では、特に南半部に後世の溝状や土坑状の攪乱が著しく、竪穴住居跡等はかなりの削平を受けており、遺構としての残りは悪いものである。

調査では、弥生時代中期初頭期の円形竪穴住居跡２軒、同後期中～終末期方形竪穴住居跡24軒、同後期の掘立柱建物４棟、同後期の土坑13基、同中期初頭期の貯蔵穴２基、同中期末～後期後半の井戸跡５基や同後期～中世期までの溝状遺構８条、道路状遺構４条等が検出された。

また、C区の北東側に隣接する民間調査（第16次）でも弥生時代後期から中世期までの生活遺構が密度濃く検出されており、各時期の集落は更に大きなものであったと窺うことができる。

また、調査で出土した遺物類で特筆されるのは、SC01住居跡から小銅鐸形土製品やガラス勾玉鋳型、SC02住居跡から不明鉄器、SC14住居跡から長方形鉄板、SC20住居跡から板状鉄器、SC21住居跡から鉄片や鉄器が出土しており、SK11土坑からは小型鉄斧が見られた。

さらに、SE05井戸では、ガラス勾玉鋳型、内底部に銅の固着した甕、小型仿製鏡１面等が出土している。このように出土品は、各時期の土器類の他に青銅器やガラス製品等の鋳造関係遺物が目立ち、井尻B遺跡が奴国の青銅器製造の一角を担っていたことを示している。また、出土品としては住居跡や土坑から鉄器等や小型石包丁の出土の多いことが注目される。

１．竪穴住居跡（Fig. 3 ～45、PL. 6 ～10・18）

SC01竪穴住居跡（Fig. 3 ・ 4 ・ 5 ）

本住居跡は、調査区北端部隅で検出された。南壁及び西壁の一部が残り、壁は南側で50cmが残る。形態は、隅丸方形若しくは長方形と考えられ、壁下に壁溝が巡る。南壁長1.5m、西壁長2.5mを測る。主柱穴等は明らかでないが、南側隅に柱痕の残る径50cm程のピットや壁に沿う東隅にも同規模のピットが見られる。また、東隅の床面には径70cm程の赤く焼けた浅い炉跡が付せられている。

本住居跡に伴って出土した遺物類は多くない。住居内の壁溝や覆土中からのものである。

出土遺物（Fig. 5 、PL.18）

土器のうち、**06003**は、外開する短い口縁を有する甕口縁である。器面は荒れが著しく、外面に縦ハケ目・内面に斜めハケ目を施す。口径22.4cmを測る。**06001**は、同様の形態特徴を有する甕である。胴部の最大径は頸部よりやや下がった位置にあり、底部は下端がやや丸味を帯た平底を有する。全体に磨滅が著しい。内外面ともに荒いハケ目調整が残る。器色は赤褐色～灰味を帯びた黄褐色を呈する。外面にはススが付着する。口径20.5cm・器高25.1cm・底部径7.2cmを測る。**06004**は、底部下端がやや丸味を帯び、不安定な壷底部である。外面にハケ目、内面に指オサエを残す。外面には黒斑が多く、黄褐色を呈する。底部径4.2cmを測る。

次に、土・石製類である。**06002**は、小銅鐸形土製品と考えられる。頭部のみを残す製品であるが、頭部平坦部の中央に焼成前に開けられた２個の舞孔がその特徴となっている。

孔径はそれぞれ1.2mmを測る。棒状工具による穿孔である。器色は、黒褐色を呈する。関連の銅製小銅鐸は、本調査のB区から出土しており、本土製品は銅鐸の外形の構造をよく分かった工人の手によるものかと考えられる。**06165**は、ガラス勾玉の鋳型である。破損品であるが、鋳型面から２個以

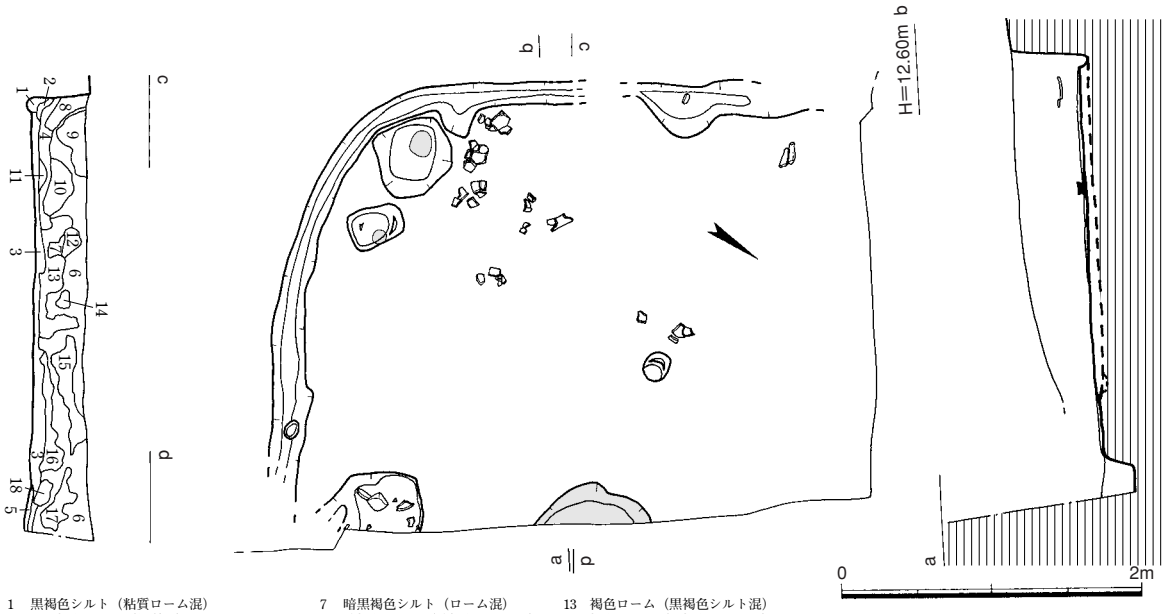


Fig.3　C区SC01住居跡出土状況実測図（1/50）

上の勾玉を同時に製造した製品である。側面には合わせ目の記号が見える。また、下端部の隅にははみ出した溶解ガラスが固着し、黒味を帯びた膜として残されている。鋳型の勾玉部分は、外形で長さ3.8cm、頭部径2.4cmを測り、同サイズのものが近接して残る。全長5.5cm、厚さ1.5〜0.8cmを測る。

26001・26002・26003は石包丁である。**26001**は、外形・刃部ともにほぼ調整の終わった杏仁形石包丁であるが、穿孔時の作業失敗によるものか両面とも剥落が著しく、紐孔の貫通には至っていない。刃部は両刃であるが、背部はやや分厚く調整が不良である。全長9.5cm、身幅4.4cm、厚さ0.8〜0.4cmを測る。玄武岩製。**26002**は、身幅の狭い半月形と考えられる石包丁破片である。刃部は両側から刃付けされている。凝灰岩製。**26003**は、石包丁未製品である。外形からは身幅の狭い半月形に仕上げる意図が見える。成品とするために背部からの階段状剥離による調整が顕著である。石包丁のうち**26002**は弥生後期の形態的特徴が強い製品である。

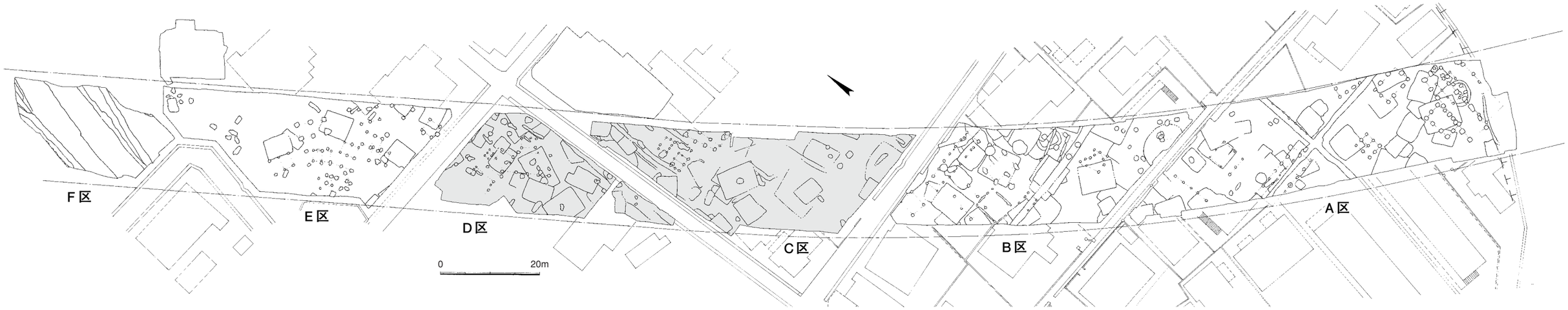
SC02竪穴住居跡（Fig. 4 ・ 6 ・ 7）

本住居跡は、調査区北端に位置する。また、SC01住居に隣接しており、同住居跡に切られ、これに先行する時期の所産である。形態的には平面が長方形を呈すると考えられる。後世の攪乱による破壊も著しい。壁は、南辺長3.1m、東辺長1.8m以上、西辺長2.3m以上を測り、壁高は僅かに0.1〜0.15m程度を残す。床面では主柱穴は確認できないが、東側の壁近くで長径1.2m、短径0.7m以上、深さ0.2m程度の浅い不整土坑を検出した。また、出土遺物については、削平による影響で原位置を保って出土しものは少なく、全体の出土量も限られたものとなっている。

出土遺物（Fig. 7 ）

出土遺物のうち、土器類では**06005**が平坦口縁を有する弥生中期の甕破片である。口縁はしっかりした造りで、断面が逆Ｌ字形を呈する。

全体に器面の磨滅が著しく、調整は口縁上端部に横ナデが残る。器色は赤褐色を呈し、外面の口縁



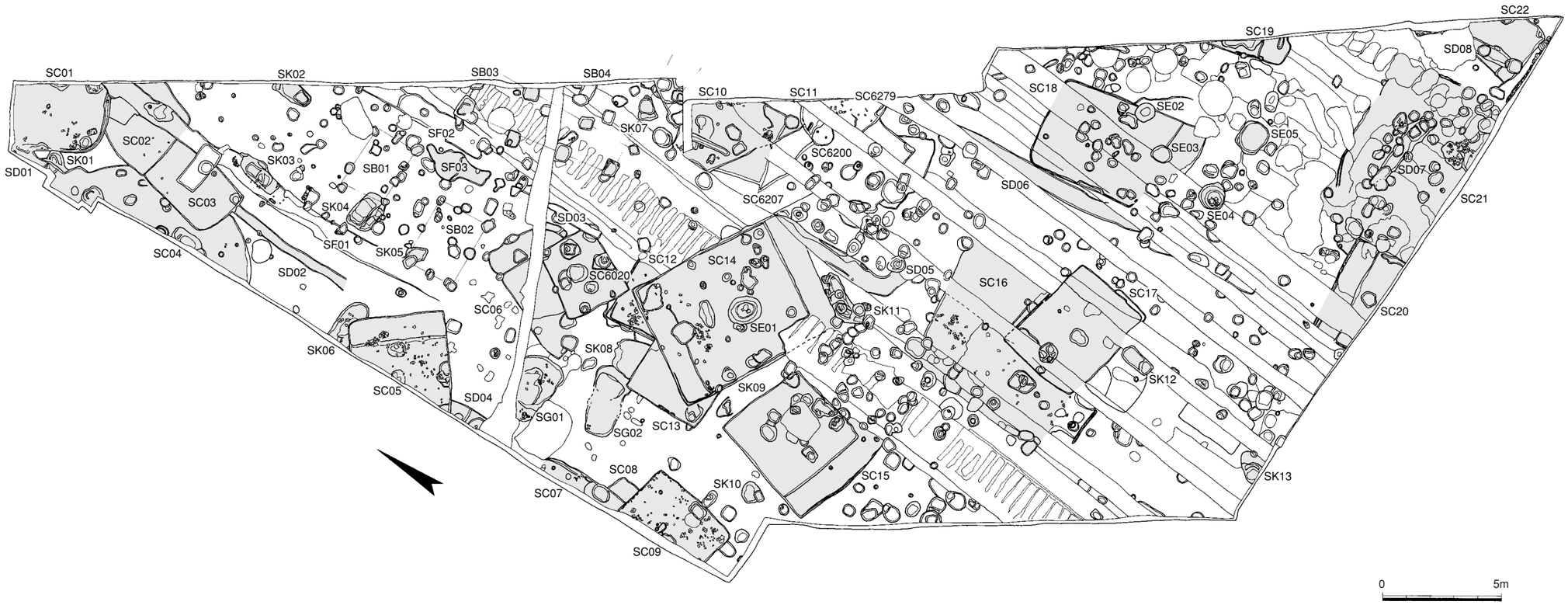


Fig. 4　井尻Ｂ遺跡17次調査区全体及びＣ調査区遺構全体図（1/200）

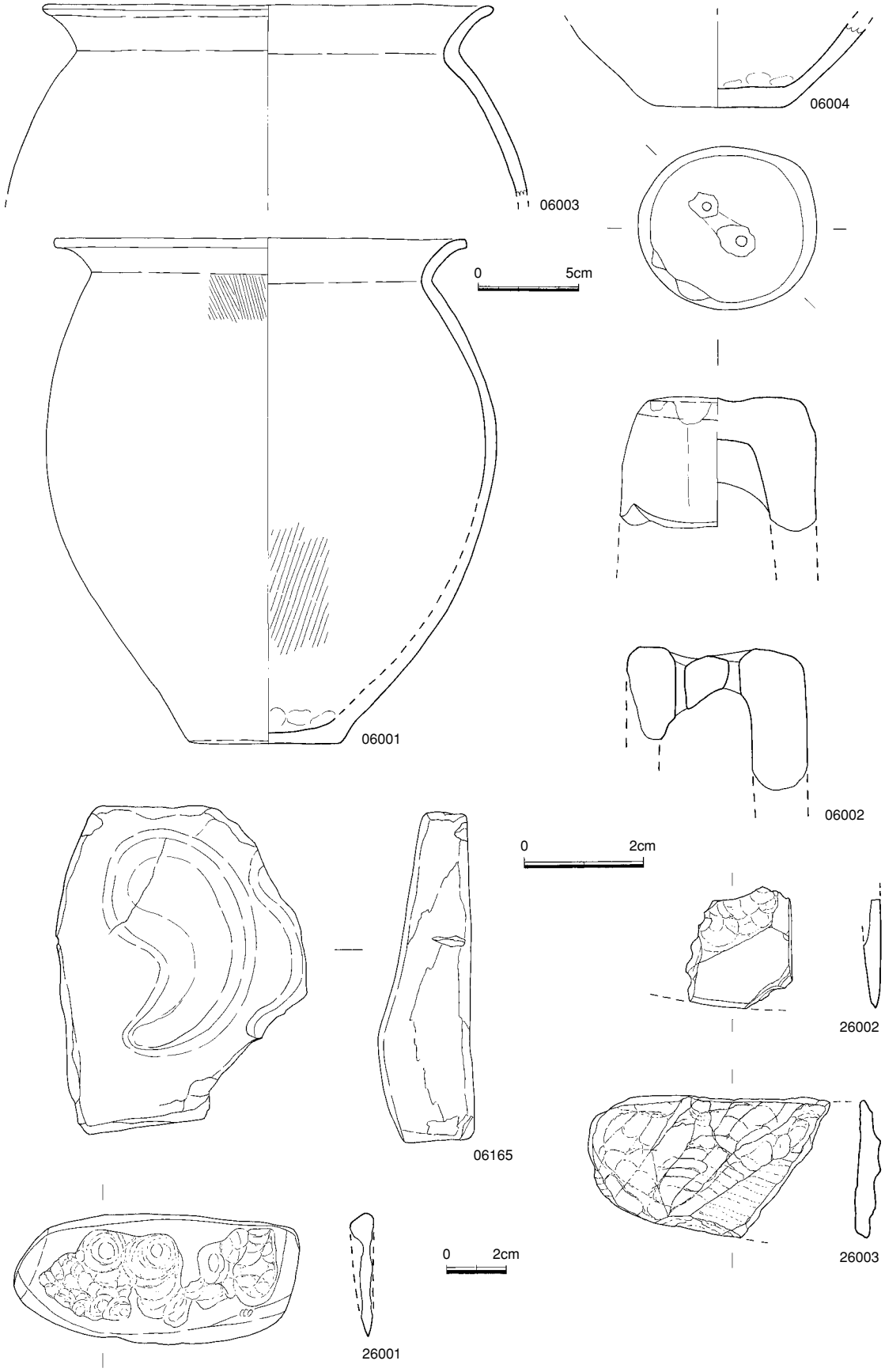


Fig. 5　C区SC01竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3・1/2・1/1）

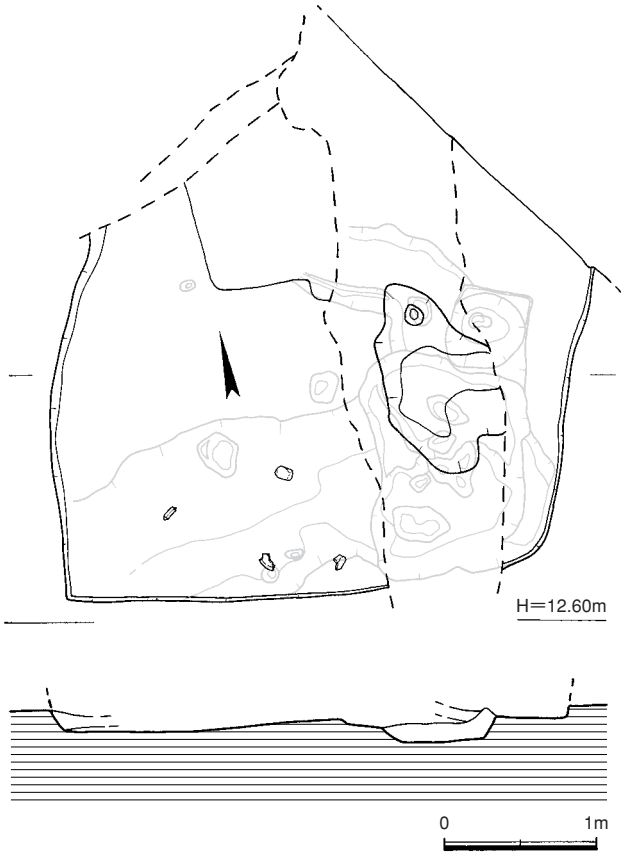


Fig. 6　C区SC02竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）

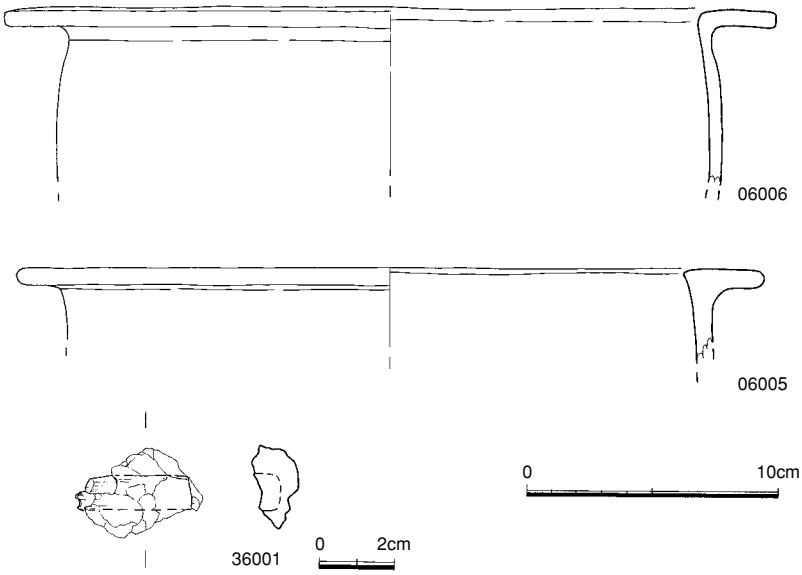


Fig. 7　C区SC02竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3・1/2）

部下面にススが付着する。焼成は堅緻である。口径29.4cmを測る。

06006は、口縁部がほぼ水平に長く伸びる平坦口縁をもつ中期甕である。内外面共に器面の磨滅が著しく、調整は不明である。器色はやや赤味を帯びた黄褐色を呈し、焼成も堅緻である。口径30.4cmを測る。

次に**36001**は、不明鉄器の破片である。全体に錆化が著しい。断面形は、一辺が約１cm程度の角柱状をなすことからタガネ等の工具に属する鉄器である可能性もある。残存長2.8cmを測る。

SC03竪穴住居跡（Fig. 4 ・ 8 ・ 9）

本住居跡も調査区北端に位置する。北側の壁でSC02住居跡と切断関係にあり、これより先行する所産である可能性がある。

また、東壁は道路状遺構のSF01側溝により失われている。平面形は長方形であると思われる。壁のうち、東辺長3.6m以上、西辺長3.3m以上、南辺長2.4mを測り、概ね４×2.5m程度の規模に復元されよう。壁高は、0.2m程度を残す。南東隅と東壁に沿う中間部床面に、径が0.5～0.6m、深さ0.2～0.3mを測る浅いピットが並ぶが、主柱穴ではなかろう。本住居跡でも削平の影響で共伴する遺物の出土量は限られたものである。

出土遺物（Fig. 9）

土器類では小破片の甕類が多く見られた。**06010**・**06009**・**06007**はいずれも平坦口縁をもつ中期甕である。

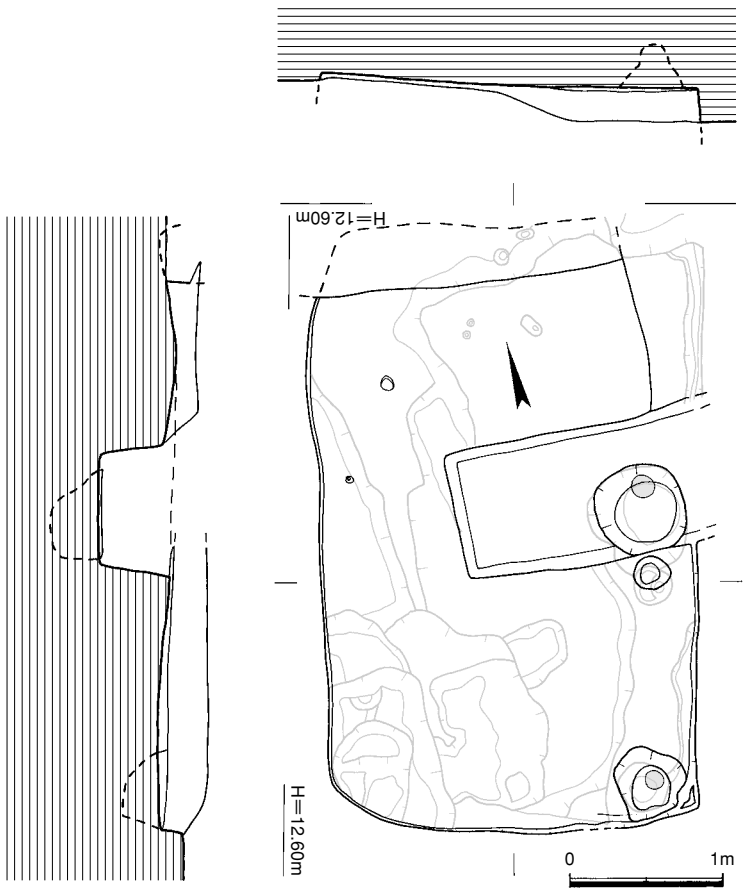


Fig. 8　C区SC03竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）

06010は、やや細身の造りで、端部がやや垂れる中期甕である。内外面共に磨滅が著しく、器面の調整は不明である。器色はやや赤味を帯びた黄褐色を呈し、焼成は堅緻である。

06009は、口縁内面が嘴状に尖り、外側はやや垂れる中期甕である。しっかりした造りで、口縁部上端に黒斑が見られる。また、外面には、ススが付着していたと考えられる。器面は磨滅が著しく、調整は不明である。器色は黄褐色を呈する。

06007は、やや内傾する口縁部を有する中期甕である。器形的にはやや大型であると考えられ、甕棺と使用された甕である可能性もある。器色は黄褐色を呈し、焼成は軟質の部分がある。器面は磨滅のため、調整は不明である。SC03上層出土。

06008は、鋤先形口縁を有する大型壷である。口縁上端は平坦で、口唇部の造りも手慣れており、定型化した中期甕である。外面は赤味を帯びた黄褐色を呈し、丹塗であった可能性もある。復元口径

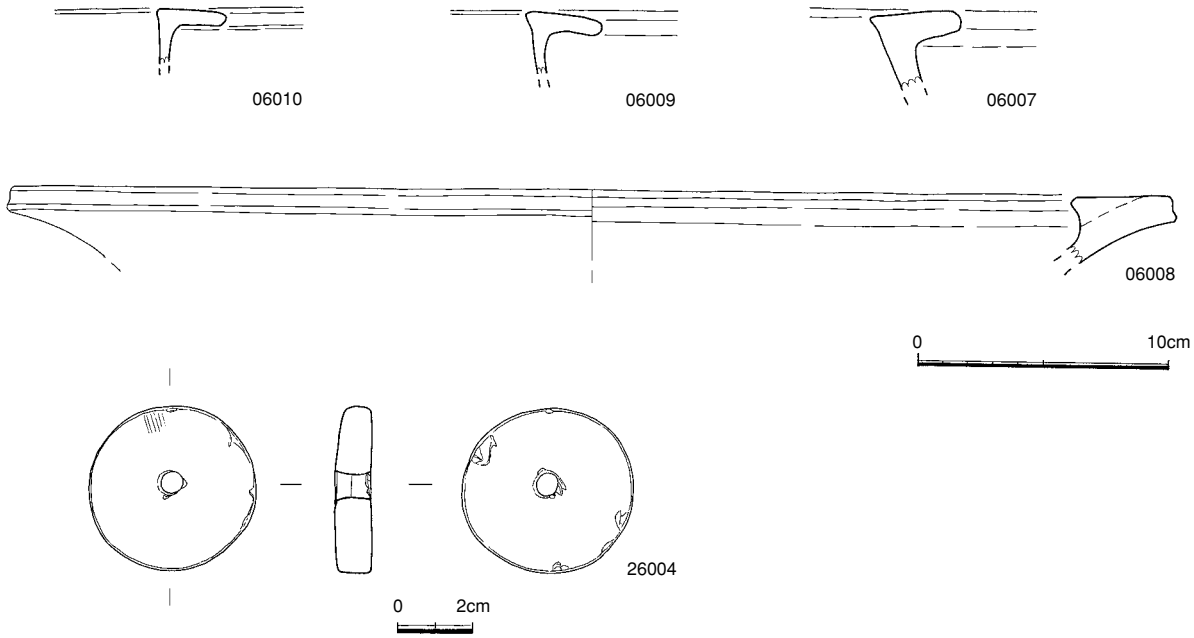


Fig. 9　C区SC03竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3・1/2）

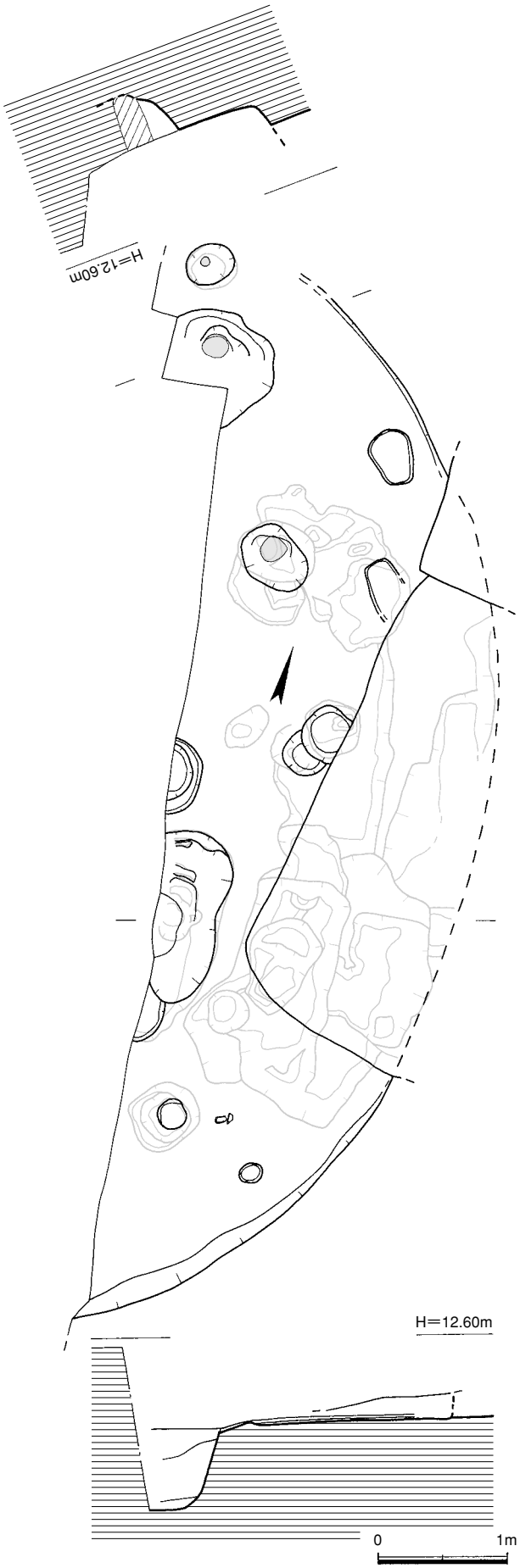


Fig.10　C区SC04竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）

は46cmを測る。胎土は密で、焼成も堅緻である。上層出土。

26004は、石製紡錘車である。径が4.4cm、孔径0.6cm、厚さ１cmを測る。穿孔は両面からか。一部に研磨痕を残しており、全体が平滑に研磨されている。

SC04竪穴住居跡（Fig. 4 ・10・11）

本住居跡は、調査区の北西隅で検出された。全体の殆どが調査区外にあたるため構造は掴みにくいが、正円に近いとすれば半径4.6mを測り、直径9.2m規模の円形住居かと想定できる。

主柱穴は壁から１～1.2m内側をこれに沿って1.5m程度の間隔で一周する構造と考えられる。主柱穴には、径が0.15～0.2m程度の柱痕跡を持つものがある。

また、今回検出できた調査区西端には、隅丸長方形で、長径1.2m、短径0.5m以上、深さ0.7mを測る土坑が知られる。これはいわゆる中央土坑に相当する遺構かも知れないが、位置的には東側に寄っている。内部の埋土は焼土・土器片等を若干含む暗褐色の粘質土である。住居跡に伴う遺物類は細片が多く、また土器以外のものでは越岳産黒曜石の小石核や剥片類などが目立って出土している。

出土遺物（Fig.11）

土器類は甕を中心として小破片が出土した。

06011は平坦口縁を有し、外方への発達の弱い口縁部をもつ中期甕である。口縁下には低い三角状突帯１条を巡らす。器面は磨滅が著しく、調整は僅かに突帯下に横ナデが残る。

器色は、やや赤味を帯びた黄褐色を呈し、焼成も堅緻である。

06012も中期甕である。外方への発達の弱い口縁部は上端部がやや窪む。器形上胴部の最大径が口縁部近くにあると考えられる。器面は内外面ともに磨滅が著しく、調整は不明である。

器色は黄褐色を呈し、焼成も良好である。

06014も外方への発達の弱い口縁を有する中期甕である。口縁部と頸部が不明瞭で、口縁部は肥

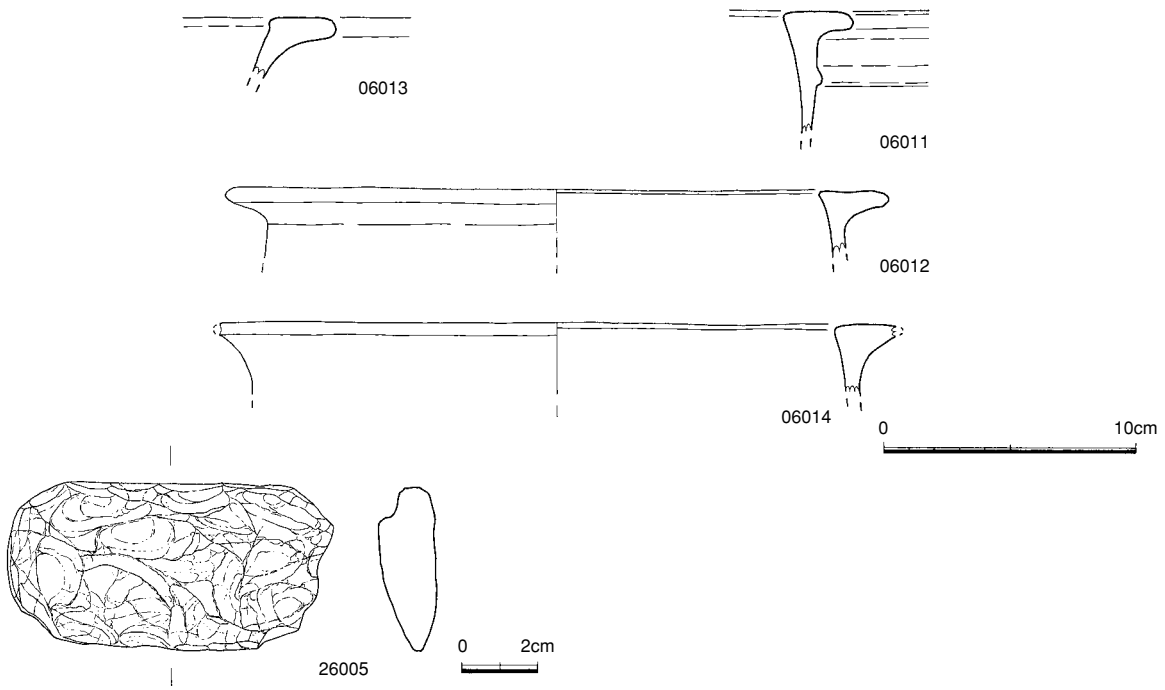


Fig.11　C区SC04竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3・1/2）

厚し、外端部は細い。本住居跡の出土甕では最も古い形態と考えられる。器面は磨滅が著しく、調整は不明である。器色はやや赤味を帯びた黄褐色を呈し、焼成も堅緻である。

06013は平坦口縁を有する中型の中期壷である。口縁部の内面への張り出しが弱く、より古式の様相である。口縁部上端には丹塗痕跡が見られる。器色は赤味を帯びた黄褐色を呈する。

また、口縁部上端を除く器面は磨滅が著しく、調整は不明である。焼成は堅緻で、胎土には石英砂粒を多く混入する。

26005は、石包丁未製品である。調整は背部からの階段状剥離や刃部付近の調整剥離が特徴的に残り、ほぼ外形は整ったものの全体を更に薄く仕上げる必要のある段階の製品と考えられる。想定できる成品は隅丸長方形の両刃石包丁か。全長8.5cm・幅4.4cm、最大厚1.9cmを測る。

本住居跡と同時期の遺構は、周辺のＤ・Ｅ調査区でも散漫に分布が認められる。

SC05竪穴住居跡（Fig. 4 ・12・13・14、PL. 6 － 2 ・ 7 ）

本住居跡は、調査区西壁沿いの中央部付近で検出された。調査では、全体のほぼ半分が対象となった。住居跡は、平面形が長方形を呈し、北東側の短辺にベッド状遺構を付設する。また、主柱穴は、住居の長軸線中央に炉を挟んで２本の構造と想定される。出土遺物は細片を含めると図化可能な土器類が比較的まとまって出土した。

以下では住居の各部分遺構規模について述べる。

①　平面プラン

住居はほぼ西半部が調査区外となるが、床面南西隅に西側のベッド状遺構の一部が検出されていることから長辺が５m、短辺４mの規模の長方形プランであったことが知られる。また、壁高は、ほぼ0.3mを測る。

さらに住居跡の覆土は大きく４層に分離できる。壁際を除き、ほぼ水平堆積である。第１層ー黒褐色シルト（ローム・黒灰褐色シルト混)、第２層ー黒褐色シルト（ローム混)、第３層ー暗黒褐色シル

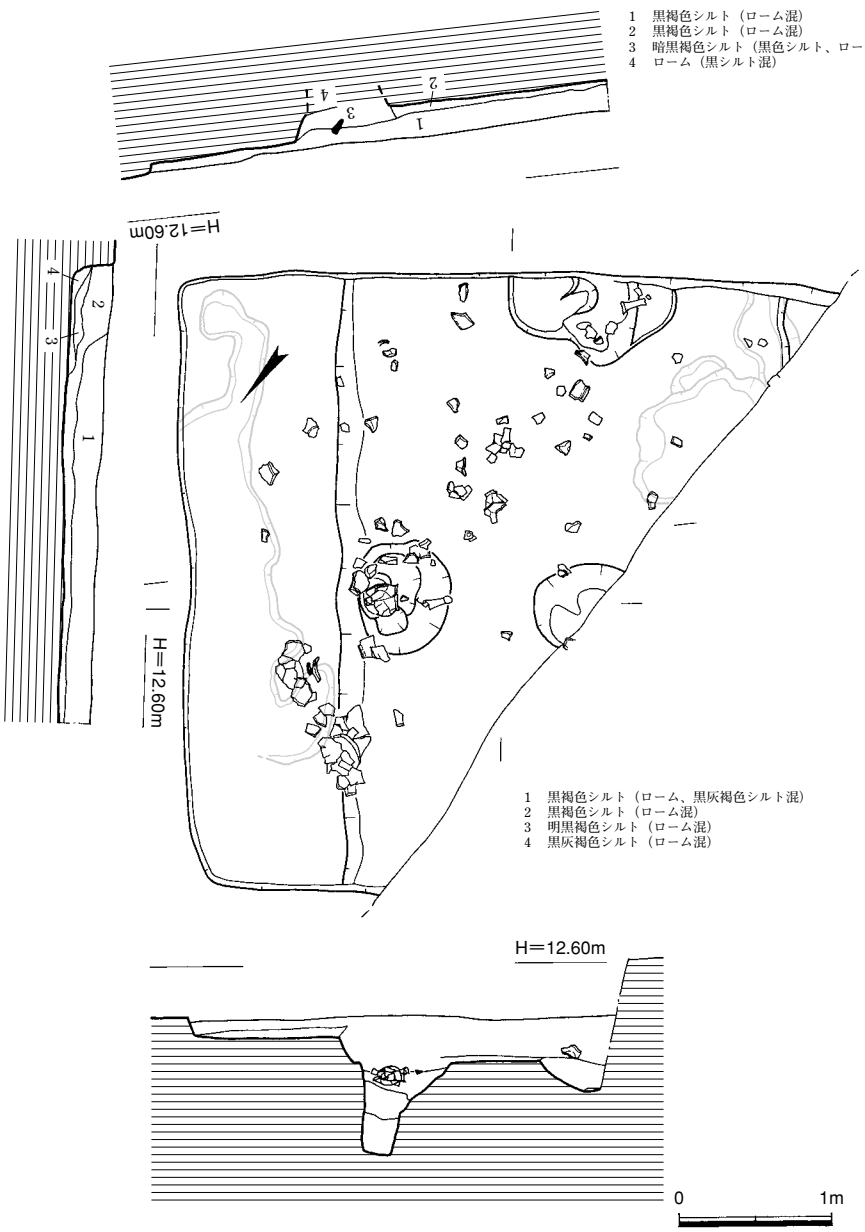


Fig.12　C区SC05竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）

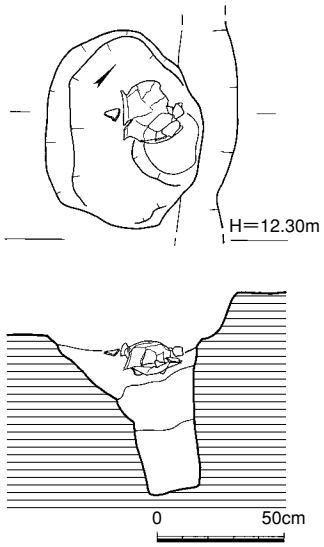


Fig.13　C区SC05竪穴住居跡主柱穴出土状況実測図（1/30）

ト（黒色シルト・ローム混）、第４層ーローム（黒色シルト混）である。いずれも薄層である。出土遺物は上層の第１・２層のものが多い。

②　付属施設

ベッド状遺構は、住居の短辺に対置する位置に付設されている。東西の両ベッドとも幅１m、長さ４m、床面との比高差0.15mを測る規模と考えることができる。

また、主柱穴は住居の長軸中央線上にあり、中央の炉跡を挟んで２本と考えられる。東側のものは、ベッド裾に接して掘られ、長・短が0.7×0.6mの楕円形掘り方をなし、深さ0.6mを測る。なお、掘り方上端には柱抜き跡後のものか、甕１個が投入されている。

また、中央の炉跡は、径が0.5×0.6m、深さ0.2m程度の円形をなす土坑である。

③　出土遺物（Fig.14）

出土遺物には甕類を中心とした土器類が多く見られる。

06031は、短く外開する口縁部を有する甕である。器壁は非常に薄く、口縁部で2.0～2.5mm、胴部でも3.0mmを測る。器面調整は、内外面共にヨコナデが残る。器色は明黄褐色を呈する。胎土には細砂を多く含み、焼成は堅緻である。復元口径は18cmを測る。

06018は、緩く伸びやかに外開する口縁部を有する甕である。頸部は良く絞まり、長い胴部をなすものと考えられる。器面の荒れが著しく、調整は残りが悪く、頸部下に一部荒い平行タタキが残るの

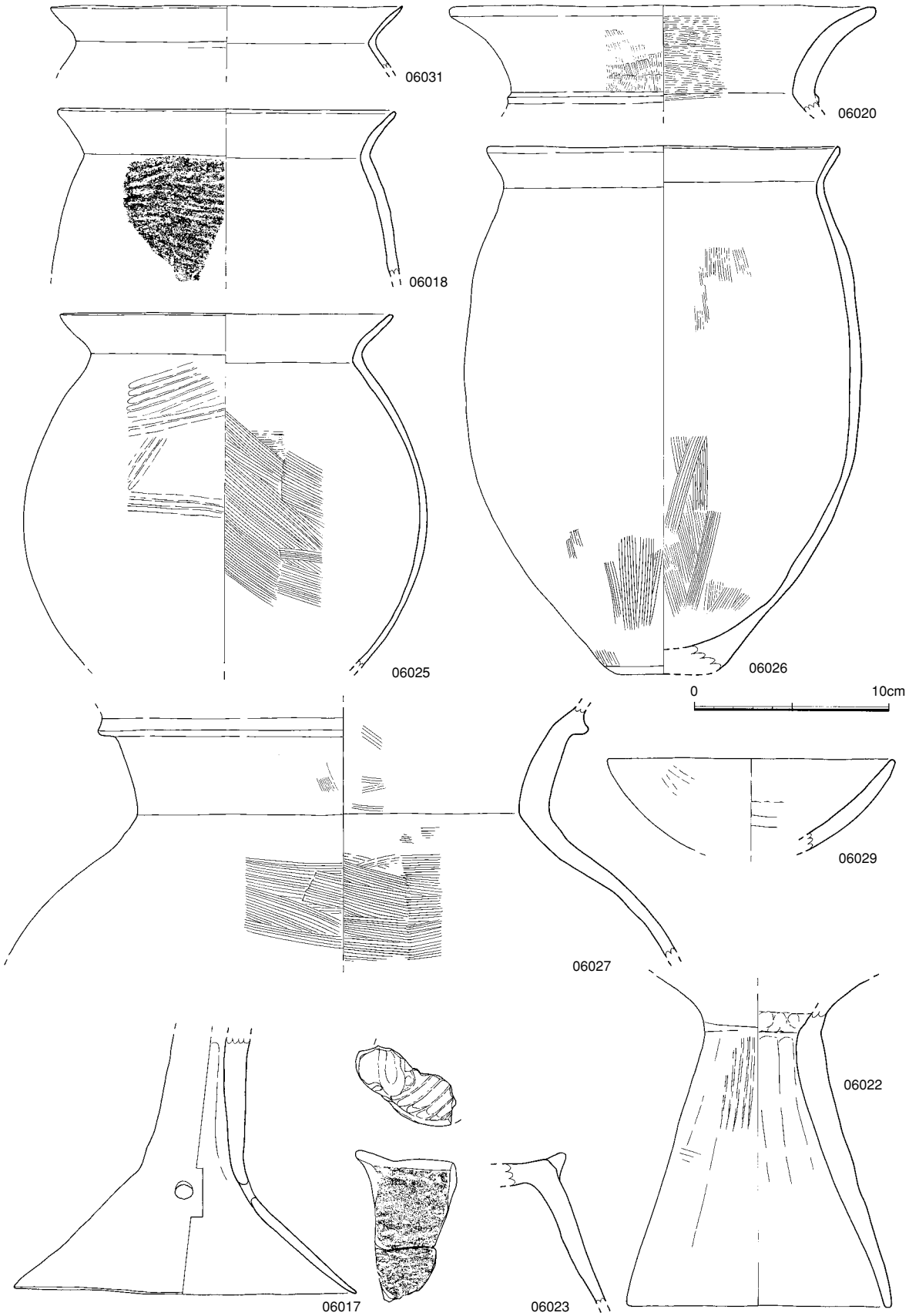


Fig.14　C区SC05竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）

みである。器色は浅い黄橙色～明黄褐色を呈する。

胎土には石英細砂の混入が多く、焼成は堅緻である。復元口径は17.4cmを測る。

06020は、よく絞まった頸部から急激に外方に開く口縁部を有する甕である。口縁部は長く、頸部には鈍い三角突帯１条を巡らす。

器面は調整が比較的良く残る。外面は細かい縦ハケメ後にヨコナデで、内面は細かい横ハケメ後にヨコナデを施す。

また、器色は、外面が暗橙色、内面が暗褐色を呈する。胎土には石英の細砂を多く混入し、焼成は良好である。復元口径は22cmを測る。

06026は、緩く外開する口縁部と長胴を有し、底部が不安定な小さい平底をなす甕である。全体に器壁の変化が激しく、調整が十分ではない。

器面は磨滅のため十分に調整痕を残さないが、外面では下半部で比較的細かい縦ハケメ、内面でも全面に細かい縦ハケメが施される。また、口縁部内外は、ヨコナデが残る。

また、器色は、外面が浅い黄橙色～暗黄褐色、内面が浅い黄橙色～黄橙色を呈する。胴部外面に黒斑が見られる。胎土には石英砂を多く混入し、焼成は堅緻である。復元口径は18.2cm、器高26.9cmを測る。

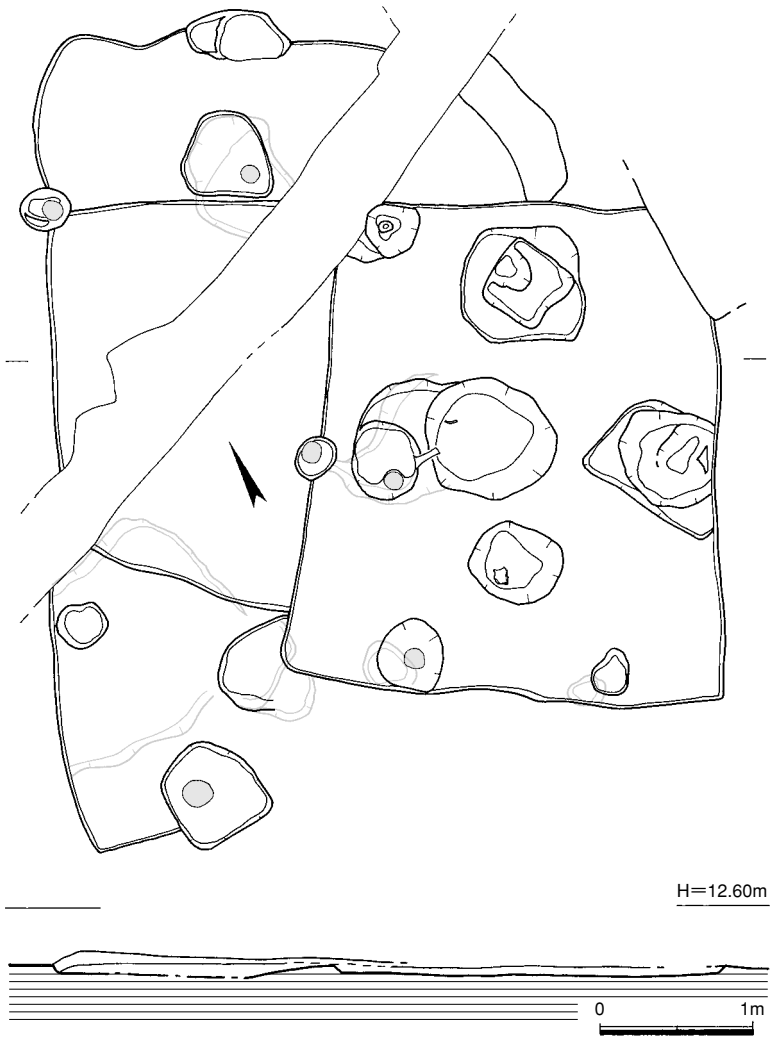


Fig.15　C区SC06竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）

06025は、半球状の胴部に、やや内湾気味に外開する口縁部を有する甕である。底部はやや尖る丸底となるか。

器面は、胴部の下半以下に火に罹った痕跡があり、同中位を主に黒斑が見られる。

また、器面の調整は、口縁部の内外面がヨコナデで、胴部外面に長い平行タタキが残る。内面は荒い斜めのハケ目調整である。

また、器色は、外面が明黄褐色～黄橙色、内面が明黄褐色を呈する。胎土には石英砂を多く混入し、焼成は堅緻である。復元口径は17cm、残存高18.1cmを測る。

06027は、口縁端部を欠くが、大型の二重口縁壷である。口縁部の立ち上がりは非常に分厚く、屈折部には大きい下向きの突帯を張り付ける。

器面は調整がよく残り、内外面ともにヨコナデ後に荒いハケメ調整を行っている。

器色は､外面が淡黄色､内面が淡黄色～灰黄色を呈する。

胎土には石英粗砂を多く混入し、焼成は堅緻である。復元頸部径は21.15cm、残存高12.4cmを測る。

06017は、杯部を欠く高杯脚部破片である。円筒形の筒部から急激に裾広がり、脚部へと移行する。造りとしてはいびつである。筒部との境に透かし孔４個を施す。

器面は表面の荒れが著しく、調整は不明であるが、円筒部のしぼりは明瞭に残る。

また、器色は、外面が浅い黄褐色で、内面が黄橙色を呈する。胎土には石英粗砂を多く混入し、焼成は堅緻である。復元脚裾部径17.6cmを測る。

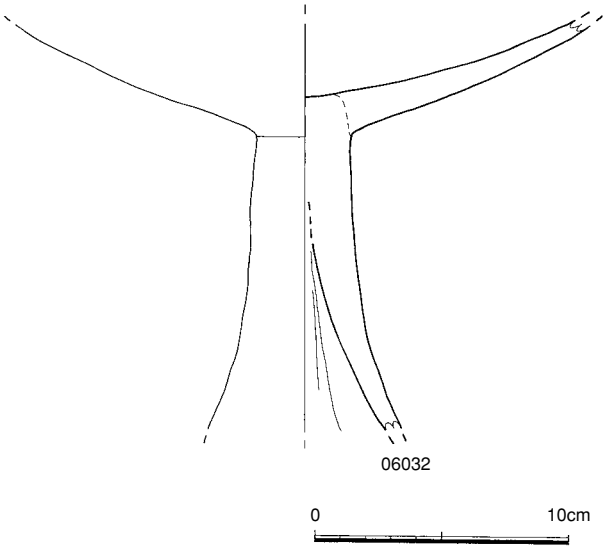


Fig.16　Ｃ区SC06竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）

06023は、いわゆる沓形器台といわれる支脚破片である。上端の平坦部から家鴨の嘴状に飛び出した受け部が特徴である。器面は、上端部及び脚胴部の外面には非常に荒い平行タタキを施し、突出部の端部はナデ調整が残る。また、器色は、内外面共に暗黄橙色～灰黄褐色を呈する。胎土には石英細砂を多く混入し、焼成は堅緻である。上端部復元径は６cmを測る。

06022は、上半部を欠く大型の器台である。上半部は比較的低く、緩く外開する形態となると考えられる。脚部は緩く開き、畳付部分は小さく平坦となる。

器面は荒れが著しいが、外面に荒い横タタキと荒い縦ハケメが残る。また、内面は指オサエ、指ナデが残る。

また、器色は、内外面共に黄橙色を呈する。胎土には石英粗砂を多く混入し、焼成は良好である。復元脚径は13.6～14cmを測る。

06029は、小型の鉢である。比較的に浅い資料で、底部を欠く。器面は、内外面共にそれぞれ斜め・横方向のハケメを施す。また、器色は、外面が灰黄色～黄褐色、内面が黄灰色～浅い黄色を呈する。

胎土には石英粗砂の混入が多く、焼成は堅緻である。復元口径は、14.35cmを測る。

この他本住居跡では、図示しなかった土器類も多くある。

SC06竪穴住居跡（Fig. 4 ・15・16）

本住居跡は、調査区のほぼ中央部で検出され、平面プランは長方形と考えられる。周辺部の攪乱や削平によって壁高は0.1m内外であり、かろうじて外形を確認できる。その規模は、西辺長5.3m、北辺長2.0m以上を測り、内部の東側に寄った位置に南北長3.2m、東西長2.9～2.5m規模の床面が知られることから、本住居跡は北・西・南側の三面にベッド状遺構を伴う形態であった可能性がある。

床面の柱穴では南北の長軸線上よりやや東寄りに径が0.5～0.7mのピットが主柱穴に相当する可能

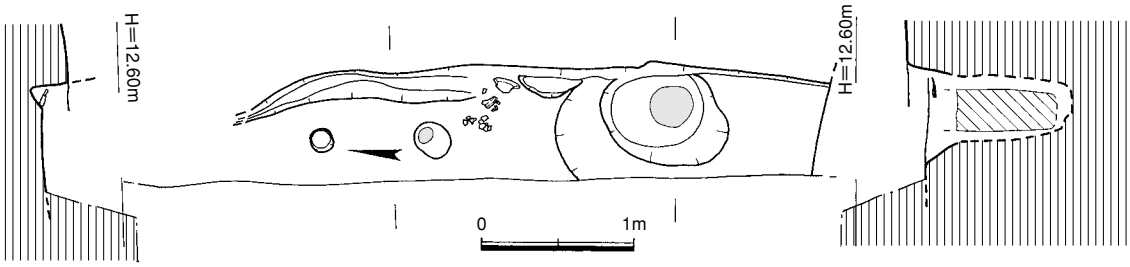


Fig.17　Ｃ区SC07竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）

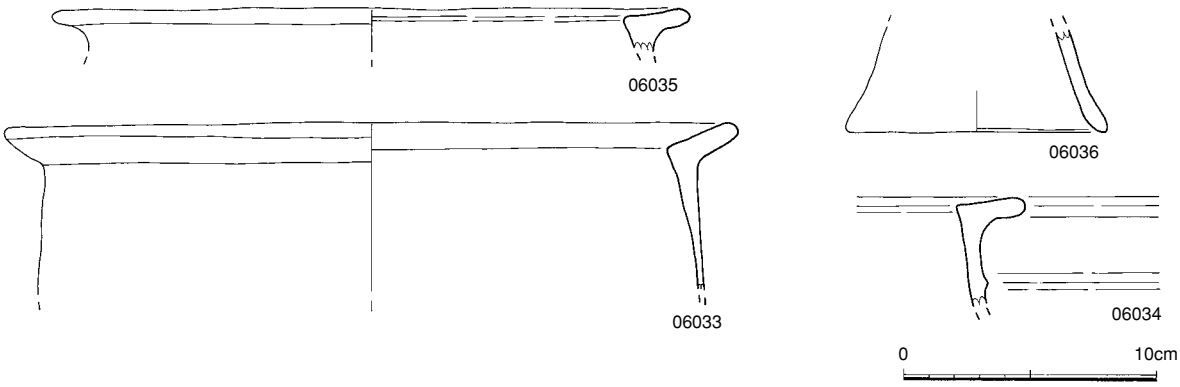


Fig.18　C区SC07竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）

性もある。また、炉は、中央部の径0.8mの浅い円形土坑と考えられる。本住居跡に伴う遺物は、削平の影響もあり、非常に少量である。

出土遺物（Fig.16）

06032は、杯部と脚端部を欠く大型高杯である。杯部は緩く立ち上がることから口縁部いたるまでに反転して外開するものと考えられる。器面は荒れが著しく、調整は不明である。

また、器色は、内外面共に橙色を呈する。胎土には石英細砂を多く混入し、焼成は堅緻である。頸部径は3.8cm、残存高16.2cmを測る。

SC07竪穴住居跡（Fig. 4 ・17・18）

本住居跡は、調査区南西端に位置し、その一部が検出できた。遺構は、一辺のみであるが、東側の長辺に沿って浅い壁溝が検出できたことから住居跡と決定した。住居プランは、他の中期例から長方形である可能性が高い。床面では主柱穴等の確実なものは検出できていない。また、床面からは弥生中期土器の破片がまとまって出土した。

出土遺物（Fig.18）

06035は、口縁部の小破片である。やや内傾する甕口縁部で、上端中央はやや窪む。器面調整は、内外面共にヨコナデである。器色は、内外面共に橙色を呈する。胎土には石英細砂を多く混入し、焼成は堅緻である。小破片のため誤差もあるが、復元口径25.2cm程度を測る。

06033も口縁部の内径する平坦口縁甕である。口縁は肥厚し、胴部は非常に薄造りである。器面は荒れが著しく、調整は不明である。また、器色は、外面が浅い黄橙色で、内面は橙色を呈する。胎土には石英粗砂を多く含み、焼成は堅緻である。小破片のため誤差もあるが、復元口径は29cmを測る。

06034は、口縁下に一条の低い三角突帯を巡らす甕小破片である。器面調整は、内外面共にヨコナデを施す。器色は、内外面共に黄橙色～橙色を呈する。胎土には石英細砂を多く含み、焼成は堅緻である。

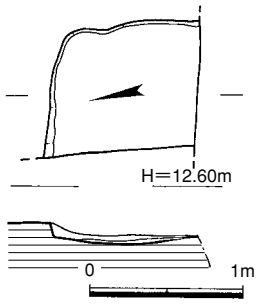


Fig.19　C区SC08竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）

06036は、小型器台である。裾部でやや開く形態である。器面調整は、内外面共にヨコナデである。器色は、外面が橙色～黄橙色で、内面が橙色を呈する。

胎土は石英粗砂を多く混入しており、焼成は堅緻である。復元底部径は、10.4cmを測る。

この時期の遊離した土器類を初めとする遺物類は調査区の新しい時期の遺構から数多く出土し、弥生後期～古墳時代にかけてこの時期の集落が削平を受けた結果ものと考えられる。

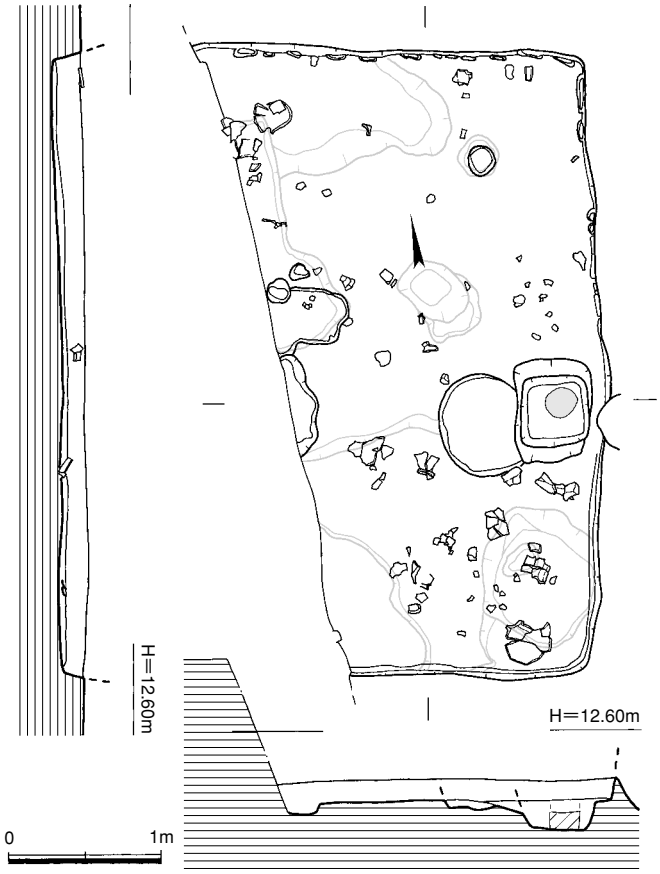


Fig.20　C区SC09竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）

SC08竪穴住居跡（Fig. 4 ・19）

本住居跡は、調査区の南西側に位置する。SC07・09住居跡と切り合いにあり、北東側のコーナーを残すのみである。壁高は、0.1m程度であり、平面的には方形若しくは長方形のプランと考えられる。住居の覆土中からは図化しえる土器類などの出土は無かった。

SC09竪穴住居跡（Fig. 4 ・20・21）

本住居跡は、調査区の南西端で検出された。平面プランは方形に近いものと考えられる。

住居跡は、東辺長 4 m強、北辺長2.6m以上、南辺長1.6m以上を測る。また、壁高は、0.2mを測り、比較的残りは良好である

床面では特にベッド状となる施設は検出されていない。また、東壁に沿う中間部直下に径が0.7×0.5規模の隅丸長方形ピットが見られ、径0.2m程の柱痕も確認できることから、これが東

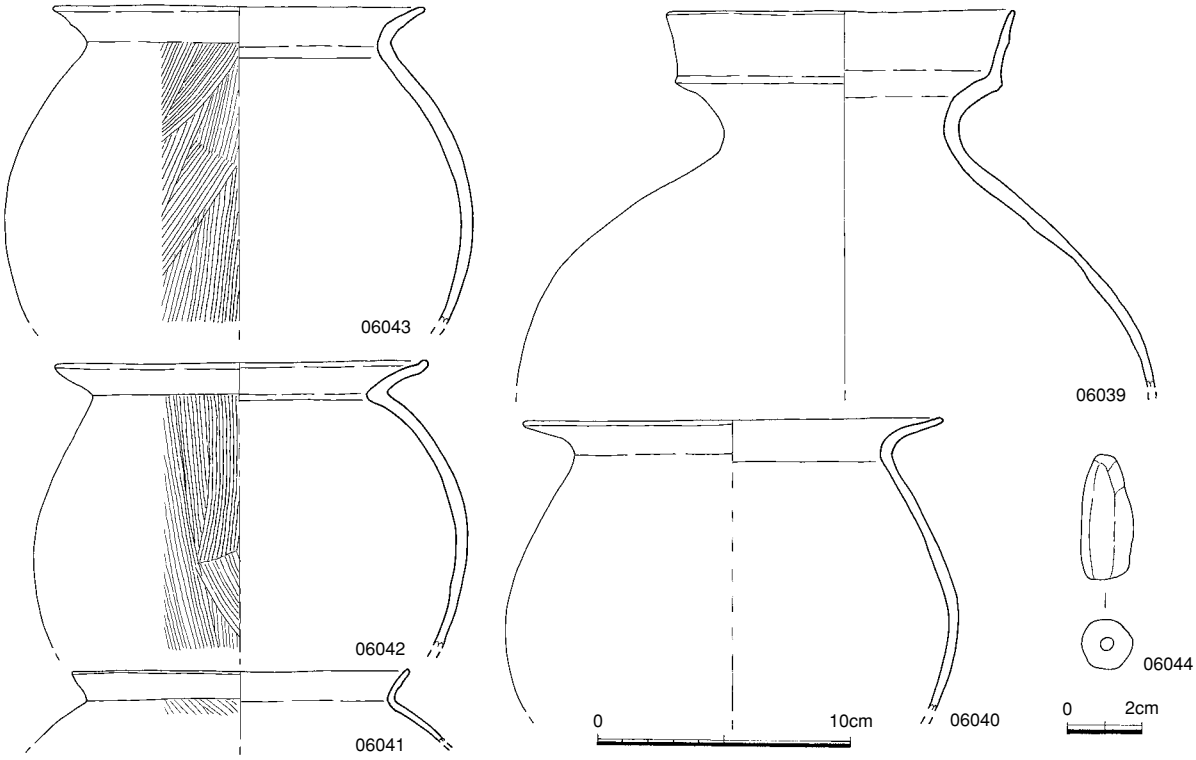


Fig.21　C区SC09竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3・1/2）

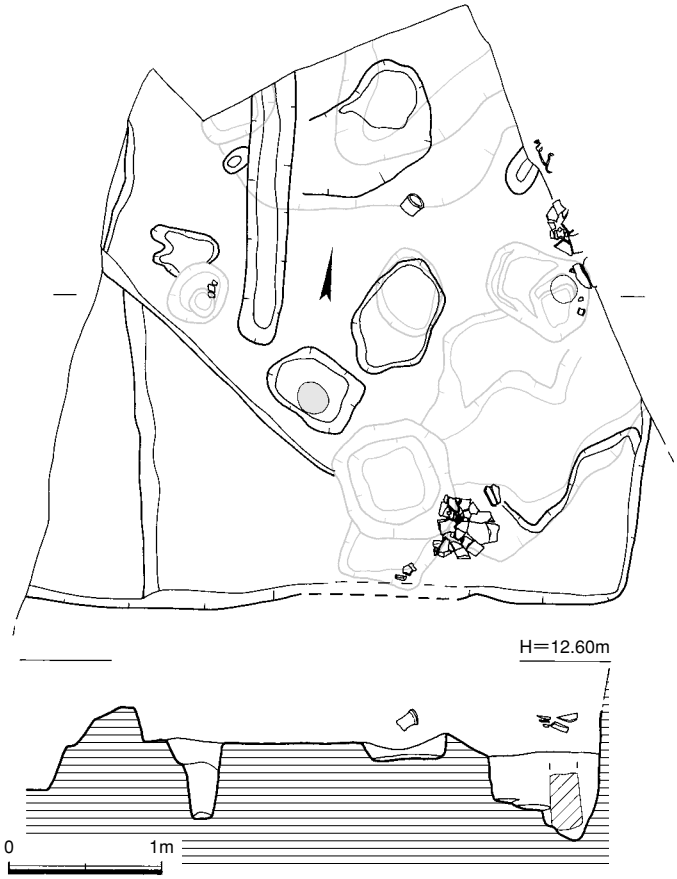


Fig.22　C区SC10竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）

側の主柱穴である可能性がある。また、北壁及び東壁の北半部直下には長さが0.2～0.1mを測る板状の材をほぼ等間隔に付設した可能性のある痕跡が見られる。なお、炉跡は中央部の不整な浅い土坑部分と考えられる。本住居跡では、覆土内から比較的まとまった遺物類が出土している。

出土遺物（Fig.21）

06043は、半球状の胴部から短く外開する口縁部を有する甕である。口縁部内外面はヨコナデ、胴部外面が荒いハケメ調整、内面は斜め方向のヘラケズリを施す。器色は、黄褐～暗褐色を呈し、外面にススが付着する。

胎土には石英細砂や赤色粒を多く混入する。焼成は堅緻である。復元口径14.6cmを測る。

06042は、半球状の胴部を有し、外開する口縁部は端部で跳ね上げ状となる甕である。器面調整は、外面が荒い

Fig.23　C区SC10竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）

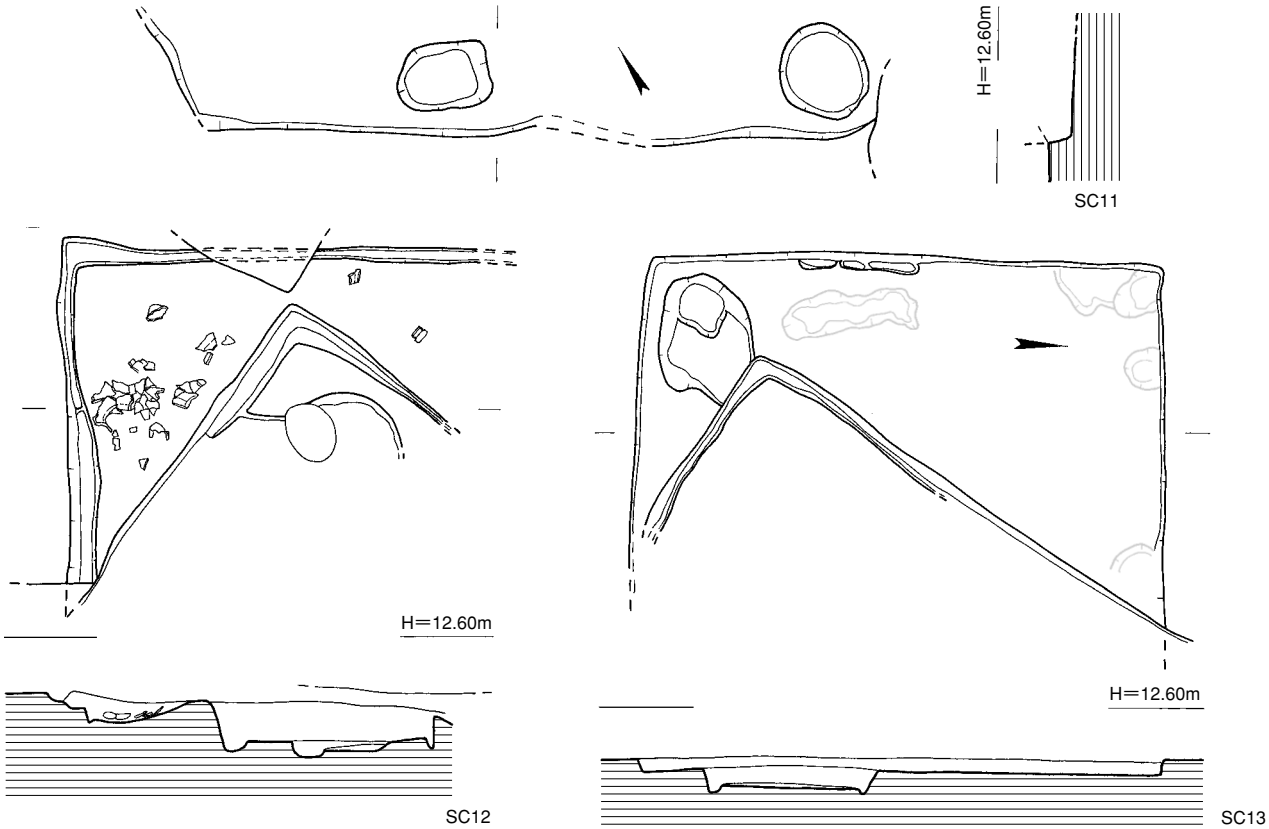


Fig.24　C区SC11・12・13竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）　0　1m

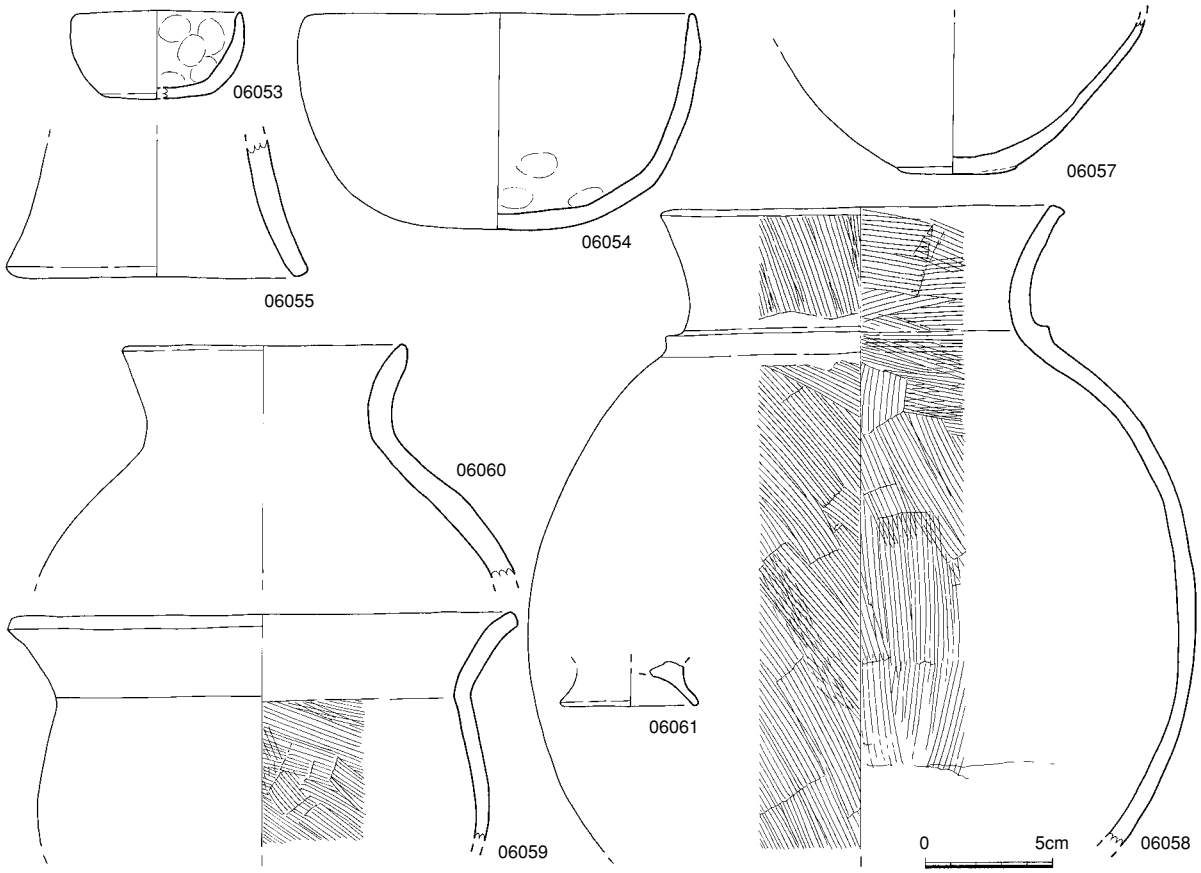


Fig.25　C区SC11・12竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）

ハケメ調整、内面は斜め・横方向のヘラケズリ調整である。口縁部の内外面はヨコナデである。器色は、赤褐色を呈し、外面にススが付着する。器形は底部がやや尖る丸底となるか。胎土に石英粗砂を含み、焼成は堅緻である。復元口径は、14.8cmを測る。

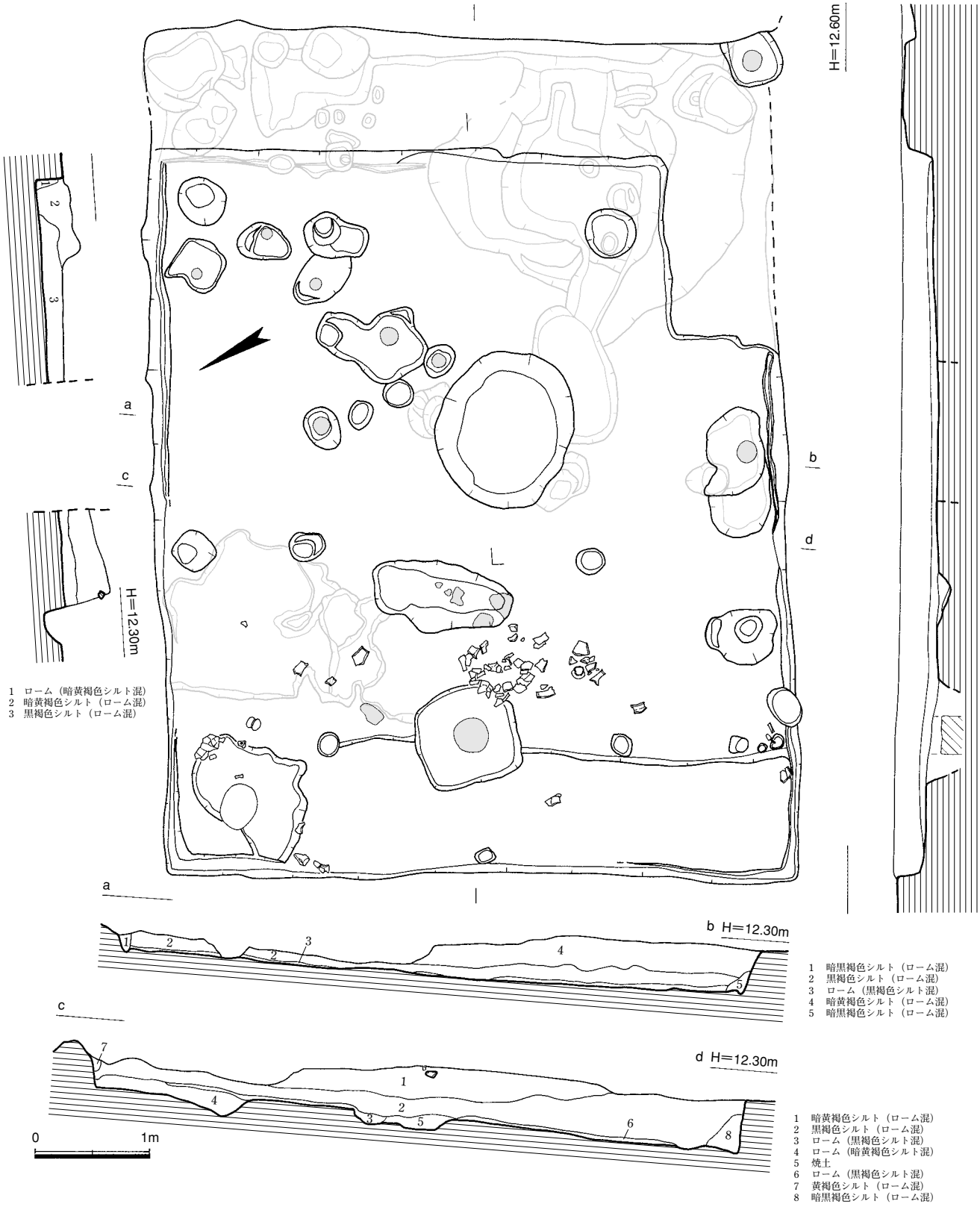


Fig.26　C区SC14竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）

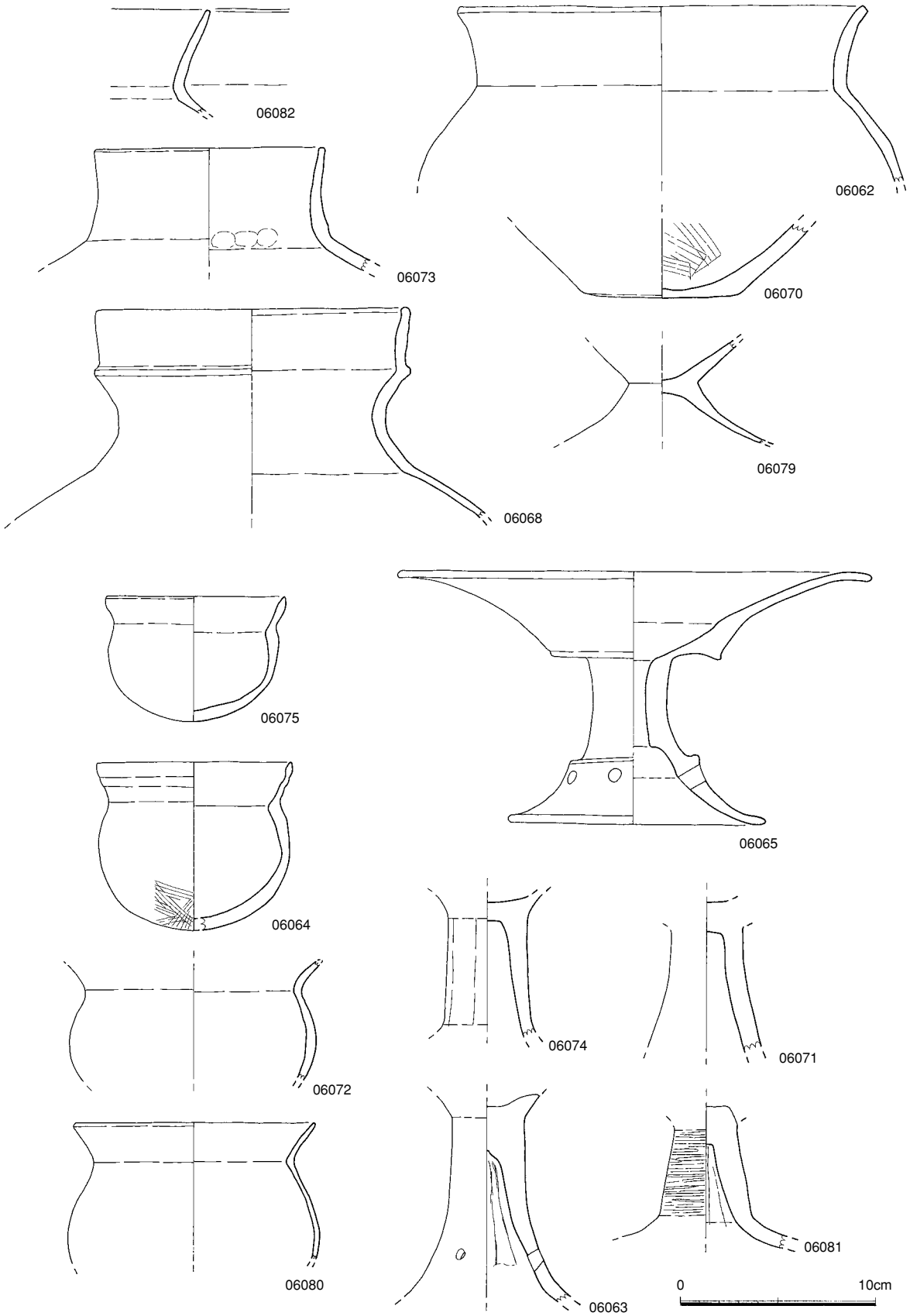


Fig.27　C区SC14竪穴住居跡出土遺物実測図①（1/3）

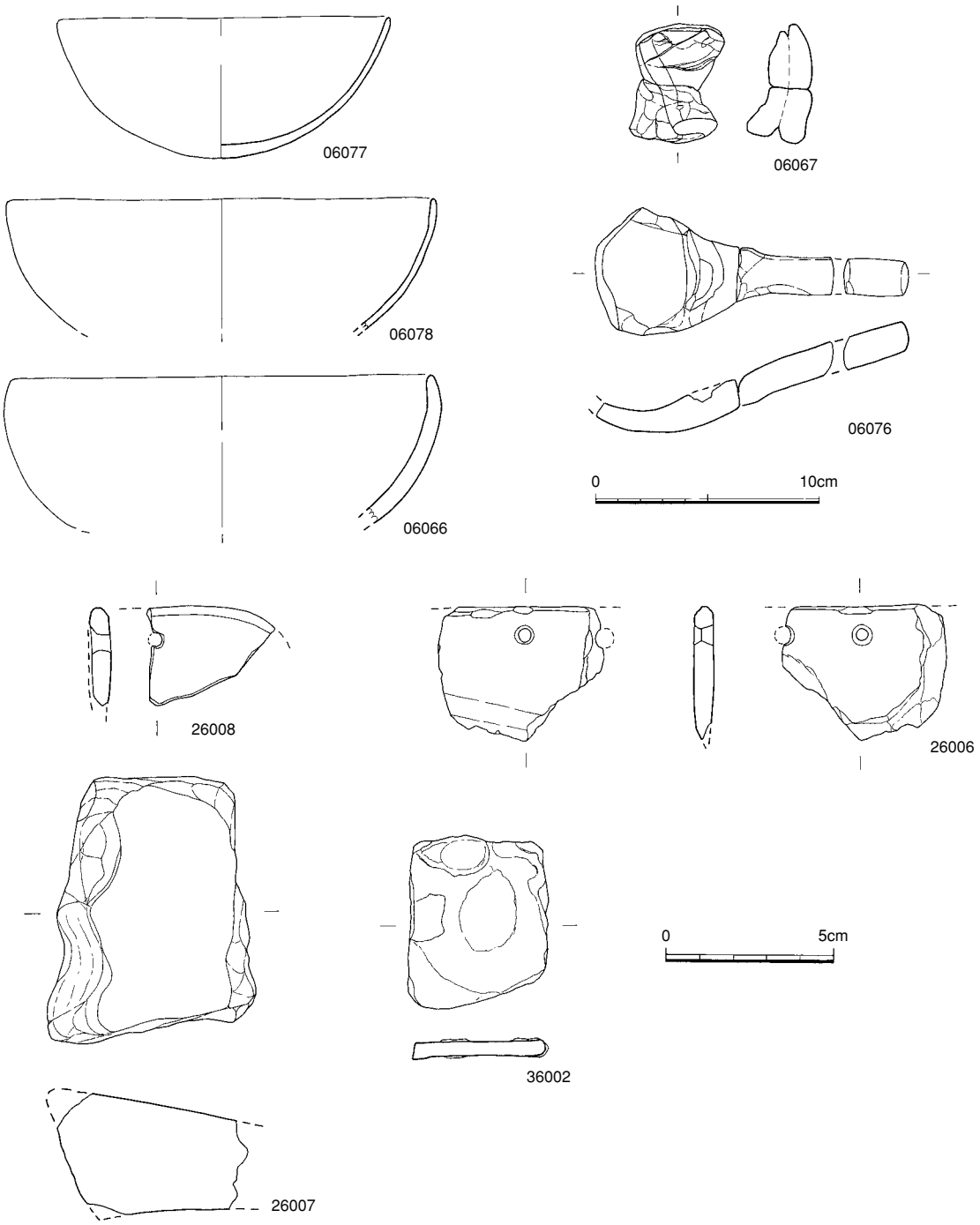


Fig.28　C区SC14竪穴住居跡出土遺物実測図②（1/3・1/2）

06041は、やや口縁部が立ち、半球状の胴部を有する甕である。非常に薄造りである。器面は、磨滅が著しい。外面は荒いハケメで、内面にヘラケズリが残る。器色は黄褐色で、胎土に石英砂・赤色粒を含む。焼成は堅緻である。復元口径16.5cmを測る。

06040は、半球状の胴部から反転して開く口縁部を有し、端部は跳ね上げ状となる。内面にヘラケズリが残る以外は調整不明である。器色は、黄褐色を呈し、胎土に石英砂・赤色粒を含む。焼成は堅緻である。復元口径は16.5cmを測る。**06039**は、大型の二重口縁壷である。器面調整は、磨滅のため、胴部内面がヘラケズリである以外は不明である。器色は、赤味を帯びた黄褐色を呈する。胎土は密で、石英砂を含む。焼成は堅緻である。復元口径は13.7cmを測る。

06044は、小型の管状土錘である。現存長3.25cm、径1.4cm、孔径0.35cmを測る。器色は、暗灰褐色を呈する。

SC10竪穴住居跡（Fig. 4 ・22・23）

本住居跡は、調査区の中間東側の壁際で検出した。住居は、平面形が方形若しくは長方形プランと考えられ、南・東側壁の一部が確認された。このうち南辺長は、 4 m以上、東辺長1.2m以上の規模である。壁高は、0.2m程度が残る。遺物は、床面に密着した高杯・甕類が出土している。

出土遺物（Fig.23） **06051**は、直立する口縁部を有する甕である。器色は、明褐色を呈する。胴部内面にハケメが残る。胎土に石英砂を多く含む。焼成は堅緻である。復元口径は16.2cmを測る。**06052**は、袋状口縁壷である。器色は、浅い黄褐色を呈する。口縁部最大径13.4cmを測る。**06045**は、手づくね鉢である。分厚い造りで、底部に二次穿孔が見られる。器色は、黄褐色を呈し、焼成は軟質である。口径13.4cm、器高11.1cmを測る。**06048**は、浅い杯部をもつ高杯である。器色は、浅い黄褐色を呈し、焼成は堅緻である。杯部径34cmを測る。**06050**は、上部を失う器台である。外面に荒いハケメ調整が残る。器色は、黄褐色を呈し、焼成は堅緻である。底部径16.6cmを測る。

SC11・12・13竪穴住居跡（Fig. 4 ・24・25）

SC11住居跡は、調査区の東端に位置し、南壁相当の4.5mと西側壁の一部が検出された。壁高は15cm程度を残す。これに伴う遺物は少量が出土している。

出土遺物（Fig.25） **06053**は口径6.5cmを測る手ずくねの小型鉢、**06054**は径15.4cmの大型鉢である。全体に器面の磨滅が著しい。**06055**は、脚径が11.8cmを測る器台である。床面掘方内出土。

SC12住居跡は、SC14住居跡に切られる。北・西壁長が2.7×2.2m以上を測る。プランは、長方形の可能性がある。壁溝を巡らす。西側には本来ベッド状施設があった可能性が高い。ベッド状施設付近から土器類がまとまって出土した。

出土遺物（Fig.25） **06060**は、外湾気味の短い口縁を有する甕である。器壁は非常に厚い。内外面共にナデ調整である。器色は、暗褐色を呈する。復元口径11cmを測る。**06059**は、口径の大きい鉢形の甕である。器面調整は、外面は斜めのタタキ、内面胴部がハケメである。器色は、赤味を帯びた灰褐色を呈する。復元口径20cmを測る。**06057**は、不安定な平底を持つ甕底部である。円盤貼付仕様である。器色は、浅い黄褐色を呈する。**06058**は、口縁がやや外開し、頸部に突帯一条を巡らす甕である。器面調整は、内外面共に荒いハケメ調整が残る。口径15.8cm、残存高25.2cmを測る。**06061**は、椀或いは鉢脚台である。器色は、黄褐色を呈する。脚部径5.5cmを測る。

SC13住居跡は、SC14住居跡に切られる。南北壁の一部と西壁を残す。南辺長2.1m以上、北辺長2.3m以上、西辺長3.4mを測る。また、壁高は0.1m前後を残す。西壁中央付近に沿って長さ0.2〜0.3m程度の痕跡が残る。本住居跡ではこれに伴い、図化に耐える遺物類の出土は無かった。

SC14竪穴住居跡（Fig. 4 ・26〜28、PL.10）

本住居跡は、調査区中央に位置し、調査区最大の規模であり、ほぼその全プランが確認できる。

南側隅の壁延長を一部失うが、長辺長7.4m、短辺長5.6mを測る長方形プランである。また、壁高は、0.3mを測る。短辺の東西壁と南壁の一部に幅１m強のベッド状施設を付設する。また、主柱穴は西側のベッド状施設に重複する隅丸方形の掘方を持つ柱穴で、柱痕跡も径0.3mを測る。南北・西壁には壁溝が巡る。住居に伴う遺物は多く、図化に耐えるものも少なくない。

出土遺物（Fig.27・28）　**06082**は、やや内湾気味に立ち上がる土師器中型壷である。器面は荒れが著しく、胴部内面にヘラケズリが残る。**06073**は、ほぼ直立する口縁部を有する土師器甕である。器色は黄褐色を呈し、焼成は堅緻である。復元口径11.6cmを測る。**06062**は、球状の胴部に緩やかに外開する口縁部を有する土師器甕である。器面の荒れのために調整は不明である。器色は、浅い黄褐色を呈する。復元口径は20.8cmを測る。**06070**も不安定な平底を有する弥生後期甕底部である。器面調整は、内面に荒いハケメを残す。底部径８cmを測る。**06068**は、土師器二重口縁壷で、口縁立ち上がり部が段をなす。外面の頸部以下はヘラミガキを施す。器色は、黄褐色を呈する。復元口径は16cmを測る。**06079**は、土師器脚台付き鉢か。薄造りである。器色は、淡黄褐色を呈する。**06075**・**06064**・**06072**・**06080**は、いずれも土師器小型丸底壷である。いずれも精良な胎土を使用しており、器面の磨滅が著しい。**06064**では底部外面に荒いハケメが残る。**06063**・**06071**・**06074**・**06081**はいずれも土師器高杯である。脚部は円筒状をなす。また、**06065**は段をなす脚台と透かし孔それに大きく開く杯部が特徴の器台である。いわばパレススタイルの土器と言えようか。**06066**・**06077**・**06078**は土師器マリである。器面は荒れのために調整不明である。

土・石・鉄製品では、**06067**が平らにならした粘土をロール状にし、中央を押圧して、平たくした土製品である。**06076**は、土製柄杓である。複元全長は14cm以上を測る。**26006**・**26008**は、磨製石包丁破片である。特に**26006**は、凝灰岩製である。弥生期の所産である。**26007**は、砂岩製砥石である。また、**36002**は、幅４cm、厚さ0.5cmを測る板状の鉄製品である。

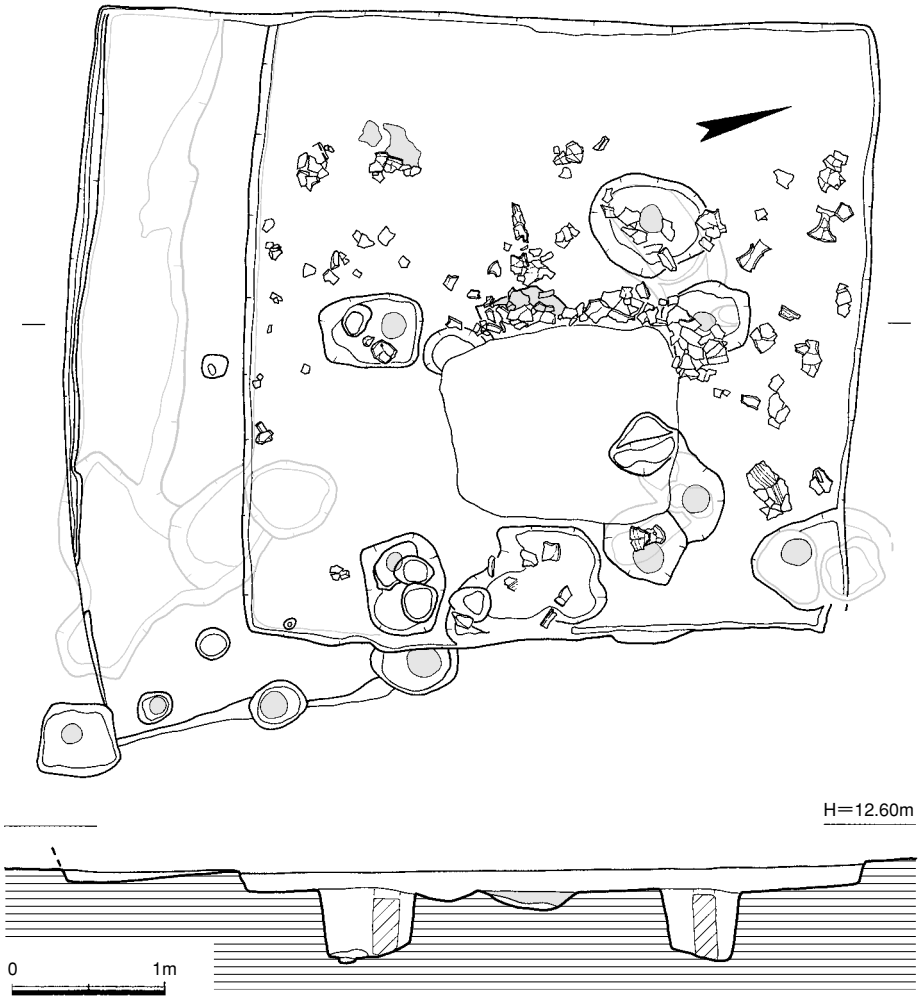


Fig.29　C区SC15竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）

SC15竪穴住居跡（Fig.４・29～31、PL.11－１）

本住居跡は、調査区の南西端に位置し、削平を受けながらほぼ全体プランが確認できる。

住居は、歪ながら南北に軸をとる長方形をなし、南側と東側に幅１m強のベッド状施設を付設する構造と考えられる。規模は、南辺長4.6m以上、北辺長3.3m以上、東辺長５m、西辺長５mを測る。また、主柱穴は、南北中軸線上にあり、径が0.6～0.7mの隅丸方形ピットがこれ

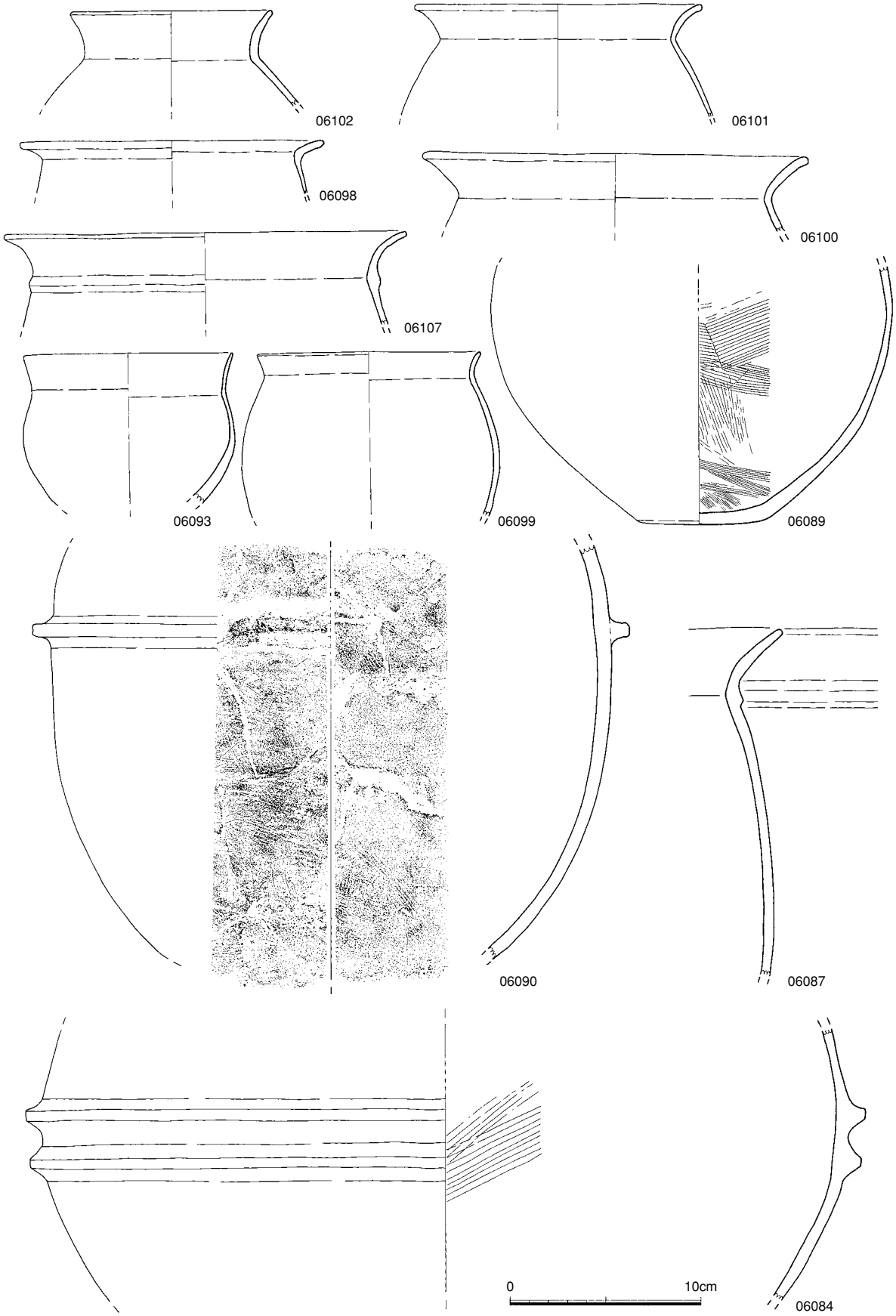


Fig.30　C区SC15竪穴住居跡出土遺物実測図①（1/3）

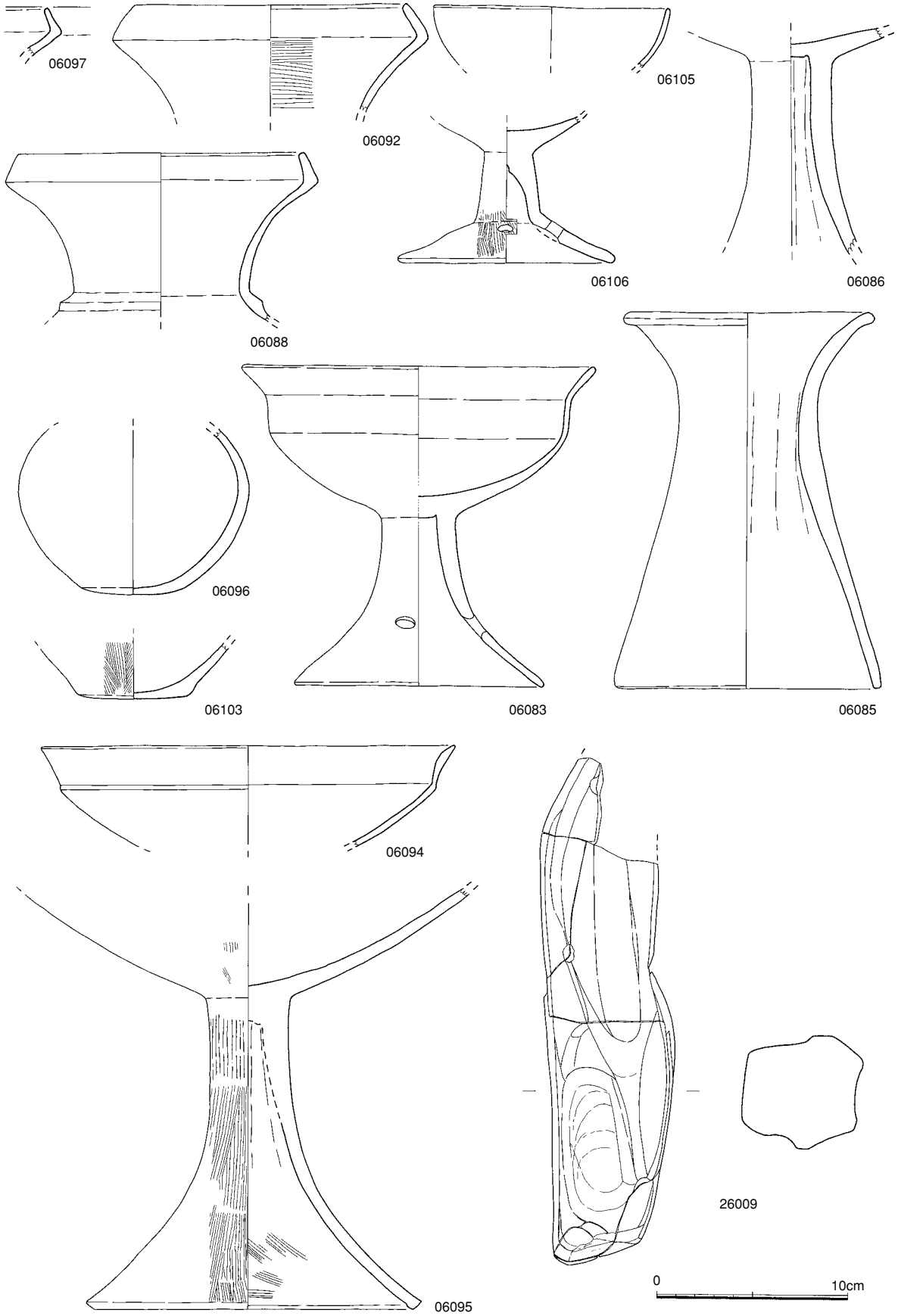


Fig.31　C区SC15竪穴住居跡出土遺物実測図②（1/3）

にあたる。ピット内の柱痕間は、芯身で2.3mを測る。また、炉跡は主柱穴間に位置し、攪乱により大半を失っている。住居の覆土内からは比較的まとまった遺物類が出土している。

出土遺物（Fig.30・31）

06100・**06101**・**06102**・**06098**は緩く外開する口縁を有する甕である。器面調整は荒れのために不明である。**06107**は、頸部に鈍い突帯を巡らす薄造りの甕である。復元口径は28cmを測る。また、**06089**は不安定な平底を有する甕である。内面にハケメ調整を残す。

06099は、口縁部が短く立つ土師器甕である。復元口径は15.6cmを測る。また、**06093**は、口縁部がやや反転しながら立ち上がる土師器壷である。器面の荒れのために調整は不明である。口径は14.5cmを測る。**06090**は、胴部中位よりやや上がった位置に断面コ字形の突帯一条を巡らす甕である。器面調整は、外面で平行タタキの後ハケメ調整、内面は荒いハケメを施す。器色は黄褐色を呈する。突帯部付近の復元径は、28.6cmを測る。**06087**は、頸部に低い突帯一条を巡らす長胴の甕である。器色は黄褐色を呈する。**06084**は、大型壷の胴部破片である。器面は磨滅しているが、内面の一部に非常に荒い斜めのハケメが残る。器色はやや赤味を帯びた黄褐色を呈する。復元最大径は、42cmを測

Fig.32　C区SC16竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）

る。**06097**は、外面屈曲部に緩い稜をもつ壷破片である。また、**06092**も、口縁部外面の屈曲部に弱い稜を持つ壷である。内面に横ハケメが残る。復元口径19cmを測る。**06088**も口縁屈曲部に弱い稜を有し、頸部に低い突帯一条を巡らす壷である。復元口径20cmを測る。**06096**は、球状胴部に不安定な平底を有する壷底部である。**06103**は、不安定な平底を有する甕底部である。**06105**は口径が16.6cmを測る土師器小型マリである。

06083・06086・06094・06095・06106は、各種高杯である。**06086**や**06094**を除くと土師器が多く、**06083**の様に小型鉢形杯に外開する脚を付すものや小型の円筒部を有する**06106**などが見られる。

06085は、器高19.5cm、口径13.1cm、脚裾部径14cmを測る器台である。

26009は、大型砥石である。全周を砥面として利用する。

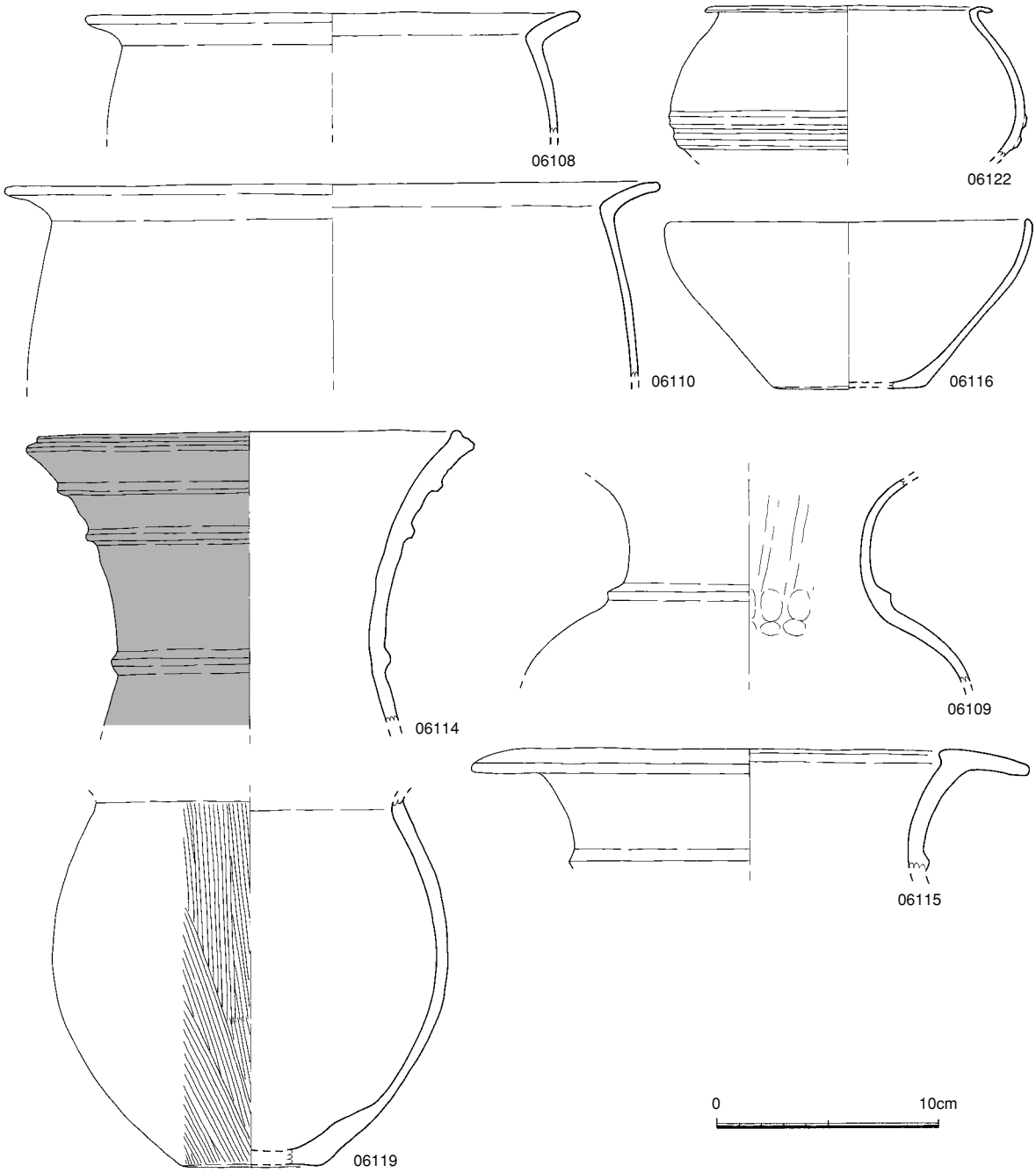


Fig.33　C区SC16竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）

SC16竪穴住居跡（Fig. 4 ・32・33）

本住居跡は、調査区南端近くで検出した。南コーナー付近でSC17住居跡と切り合っており、これに先行する時期の所産である。直線的な壁延長から長方形プランの住居と考えられる。その規模は西辺長6.6m、北辺長５m以上、南辺長３m以上を測る。壁高は、0.15m前後を残す。主柱穴については特定できない。住居内では北側の比較的床面に近い部位からまとまった土器類の出土があった。

出土遺物（Fig.33）

出土遺物では土器類が大半である。**06108**は、口縁部がく字形に屈曲する中期甕である。器面調整は荒れのために不明である。器色は淡黄褐色を呈する。胎土には石英細砂を多く含み、焼成は堅緻である。復元口径は22.2cmを測る。

06110は、06108と同様に口縁がく字形に屈曲する中期甕である。器面は荒れが著しく、調整は不明である。器色は赤味を帯びた黄褐色を呈する。胎土には石英細砂を多く混入する。復元口径29.4cmを測る。

06119は、口縁部を欠くが、安定した平底の甕であるが、端部が丸く、後期甕の形状である。器面調整は、外面に非常に荒いタテハケメを残し、内面は磨滅のために不明である。

06122は、無頸壷下半に二条の断面M字形突帯を巡らしていることから脚台が付くタイプのものである。器色は淡黄褐色を呈する。器面調整は、磨滅のため不明である。胎土には多くの石英細砂を混入し、焼成は堅緻である。復元口径は13cmを測る。

06116は、口縁が内湾する鉢である。器色は黄褐色～赤味を帯びた灰色を呈する。器面の荒れのために調整は不明である。

胎土には石英細砂を大量に含み、焼成は堅緻である。復元口径16.6cmを測る。

06114は、大型器台の口縁部である。上端部は肥厚して、中央部が窪む。また、外面には口縁部付近に二条の頭部が平らな、三角突帯を巡らし、器のしまった中央には頭部が鈍い三角突帯一条を巡らしている。このことから器は、全高20cm程度のサイズと考えられよう。器は、外面が全面丹塗である。内面の器色は、赤味を帯びた黄褐色を呈する。胎土には細砂を少量混入する。焼成は堅緻である。

復元口径は20cmを測る。これは中期後半期の非常に優れた土器製作技術の高さを示す秀品である。

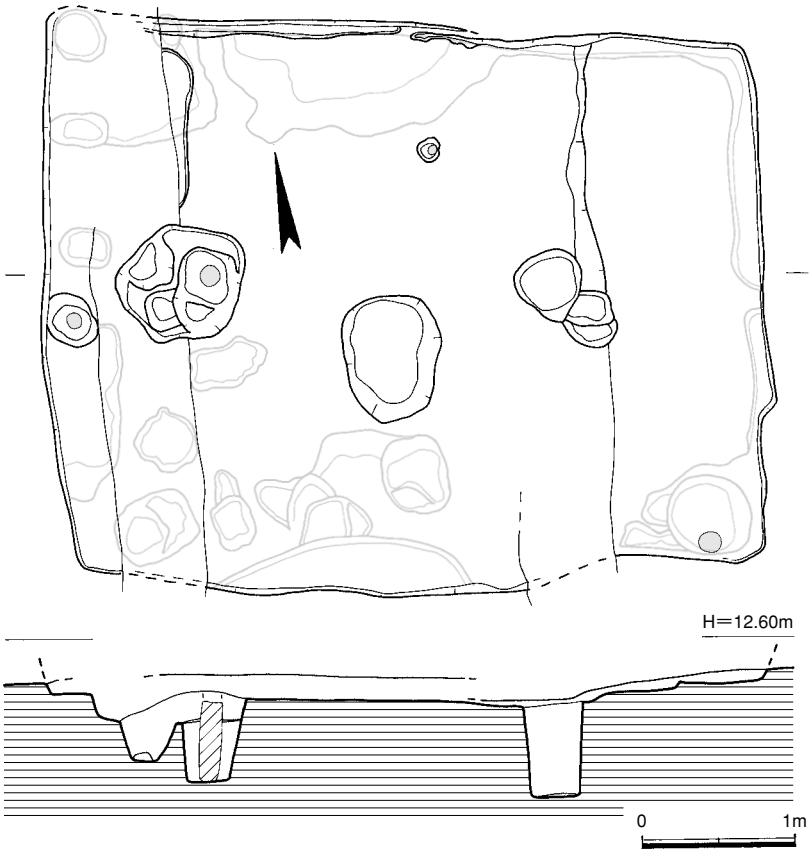


Fig.34　C区SC17竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）

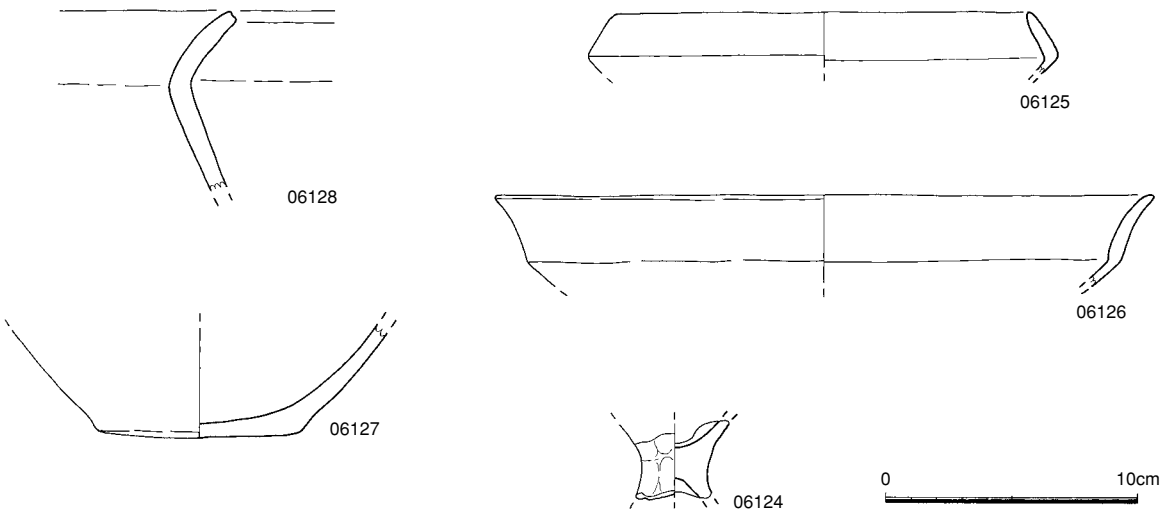


Fig.35　C区SC17竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）

06109は、口縁端部を欠く中型の中期壷である。やや薄造りである。口縁端部は鋤先状口縁をなすものと考えられる。口縁下には明瞭な段状突帯一条を巡らす。器面調整は、磨滅のため外面は不明であるが、内面に指ナデ、指オサエが見られ、胴部はヨコナデかと考えられる。器色は黄褐色を呈する。胎土には石英砂の混入が多く、焼成は堅緻である。

06115は、外端部がやや垂れる鋤先口縁を有する中期壷である。しっかりした造りで、器壁も良く調整されている。器面調整は、磨滅のため内外面共に不明である。器色は黄褐色を呈する。焼成は堅緻である。胎土には石英粗砂を多く混入する。復元口径は25cmを測る。

SC17竪穴住居跡（Fig. 4 ・34・35）

本住居跡は、調査区の南端に近い中央部に検出された。前のSC16住居跡と切り合い、これに後出する所産の住居跡である。プランは、ほぼ東西に軸線をとり、長方形をなす。東・西の短辺に対置して幅がほぼ１mのベッド状施設を付設する。

住居は南側の壁を攪乱により殆ど失っている。その規模は、東辺長3.5m、西辺長3.7m、北辺長4.7m、南辺長4.6mを測る。壁高は、ほぼ0.1m程度が残る。

主柱穴は、ベッド状施設に接した中軸線上に配置される。西側のものは径が0.5×0.6mの長円形掘方、東側のものは径が0.4m程度の円形掘方である。柱痕跡から主柱穴間の距離は、芯身で2.3mを測る。

また、床面中央のやや南よりにある0.8×0.7m、深さ0.1m規模の浅い長円形土坑が炉跡である可能性が高い。

住居内の覆土からは小破片ながら時期を示す土器類が少量出土した。

出土遺物（Fig.35）

06128は、緩くく字形に屈曲する口縁部をもつ甕小破片である。器面調整は、磨滅のため内外面共に不明である。器色は黄褐色を呈する。胎土に石英細砂の混入が多い。

06127は、不安定な平底の甕底部である。外端部は丸く、円盤貼付の形状が判る。器面は荒れのために内外面共に調整が不明である。器色は黄褐色を呈し、胎土には石英細砂を多く含む。焼成は堅緻である。復元底部径は８cmを測る。

06125は、口縁屈曲部が内傾し、外側に稜を持つ壷口縁部破片である。器面調整は、荒れのために

内外面共に不明である。器色は褐色を帯びた灰色を呈する。胎土には石英砂の他に赤色粒が混じる。焼成は堅緻である。復元口径は16cmを測る。

06126は、大型高杯の杯部破片である。杯部全体は浅い形態らしく、緩く外反する。器色は黄褐色を呈し、黒斑も見られる。器面調整は荒れのため内外面共に不明である。胎土には石英砂を多く含む。焼成は堅緻である。復元口径は、小破片のため誤差があるが、26cmを測る。

06124は、脚台を伴うミニチュア土器である。外面には指痕が顕著である。器色は赤味を帯びた淡褐色を呈する。胎土には石英砂の混入は少ない。

SC18竪穴住居跡（Fig. 4 ・36・37）

本住居跡は、調査区の南東端近くで検出された。プランは、ほぼ南北方向に向く長方形をなす。

住居は、ほぼ全周に壁溝を巡らし、現在では短辺の南側にのみに幅が１m強のベッド状施設を付設が見られるが、床面の推移から考えると短辺の両側にこれを付設していたものと考えられる。

主柱穴は、長軸線にあり、やや中央に寄っているかもしれない。

住居の覆土内からは少量ではあるが、図化にたえる土器類が出土した。

出土遺物（Fig.37）

06129は、本来的なのか口縁部が内湾気味に外開する甕破片である。鉢形となる可能性もある。

器面調整は、口縁部内面に一部ヨコナデ或いは横ハケの痕跡があるが、他は不明である。

Fig.36　C区SC18竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）

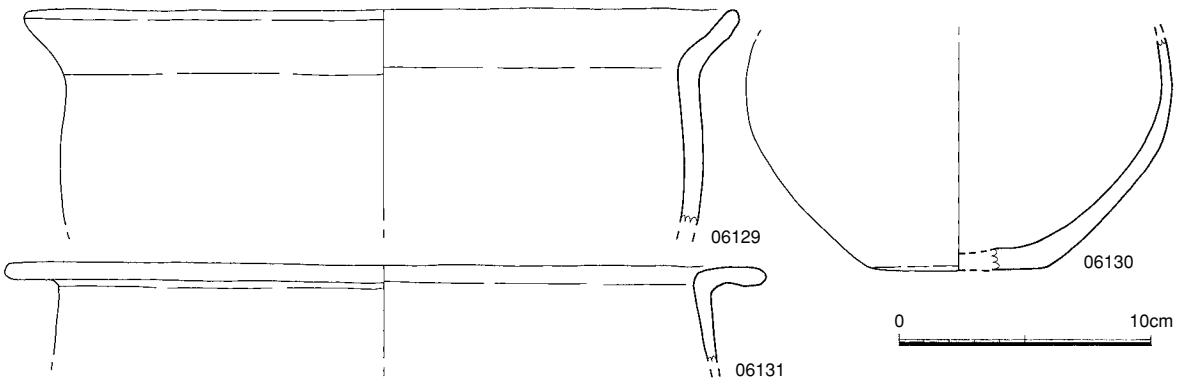


Fig.37　C区SC18竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）

器色は外面が黄褐色で、内面は灰黒色である。胎土には石英砂を多く含む。焼成は堅緻である。復元口径は、28cmを測る。

06130は、半球状の胴部に不安定な平底を有する後期壷である。器色は明るい褐色を呈する。外面の上部と底部付近に黒斑が見られる。器面調整は荒れのため内外面共に不明である。胎土には石英細砂～粗砂を含む。焼成は堅緻である。復元底部径は、７cmを測る。

06131は、口縁がＬ字状をなす中期甕である。器色は黄褐色を呈し、内面は赤味を帯びる。器面調整は荒れのために内外面共に不明である。胎土には石英粗砂を多く混入する。焼成は堅緻である。復元口径は、30cmを測る。

SC19竪穴住居跡（Fig. 4 ・38）

本住居跡は、調査区の東端壁際で検出された。住居の平面プランは方形若しくは長方形であると考えられる。西辺長3.3m以上、南辺長1.4m以上で、壁高は0.2m程度を残す。

また、南辺には幅１m程度のベッド状施設が付設されている。

本住居跡からは特に図化に耐える土器類の出土は無かった。

SC20竪穴住居跡（Fig. 4 ・39・40）

本住居跡は、調査区南端の中央部の壁付近で検出した。SC21住居跡と切り合い、これより後出の所産である。平面プランは、長方形と考えられる。

住居跡は、北壁及び東西壁の一部を残し、北壁に沿い幅1m強のベッド状施設を付設している。

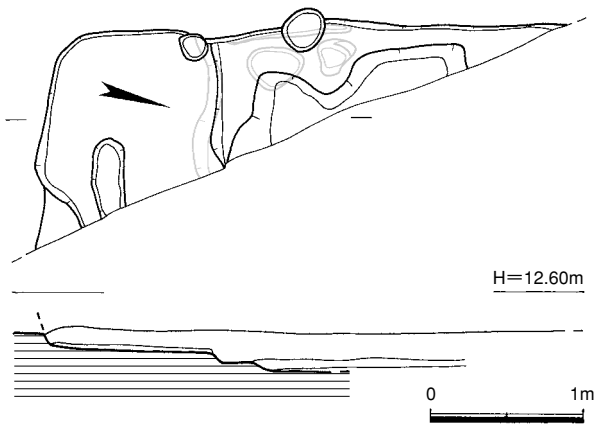


Fig.38　C区SC19竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）

また、ベッド状施設の中間に接して、北側主柱穴と考えられる柱穴がある。柱穴は、径が0.7×0.65mを測る円形で、深さ0.3mを残す。柱穴内には柱痕跡が残り、径0.25mのサイズである。

また、住居跡の外周及びベッド状施設に沿っては細い壁溝が巡る。北側壁中央から東半分にかけては、壁溝内に径が0.1m弱の小ピットが連続して打ち込まれていることから住居跡外周の壁の構築材の痕跡と考えられる。

本住居は、北壁から北側主柱穴までが1.5mを測るが、通常のこの規模とプランを持つ住居跡の成果を援用すれば、床面の主柱穴間の距離

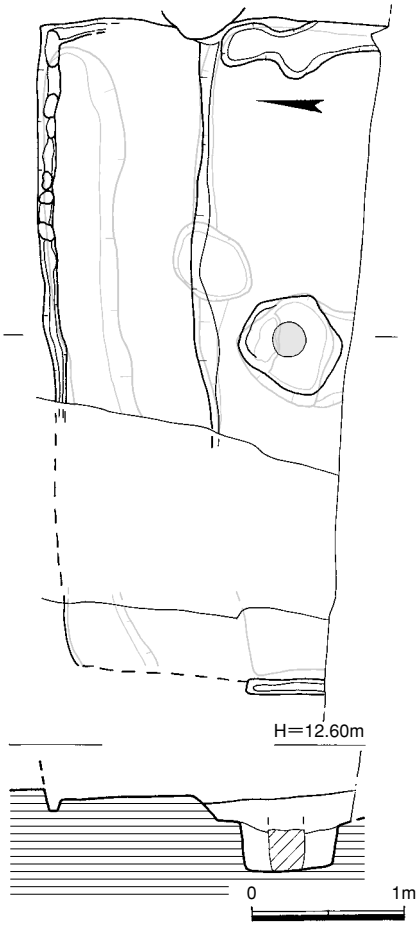


Fig.39　C区SC20竪穴住居跡
出土状況実測図（1/50）

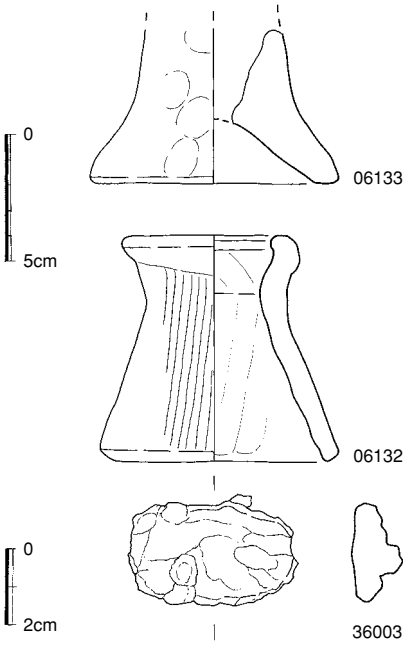


Fig.40　C区SC20竪穴住居跡
出土遺物実測図（1/3・1/2）

は約2.3m～2.4mを測ることから全体の長軸長を推定すれば、約5.3m～5.4mとなる。このことから本住居跡の規模は、壁の長さが4.2×5.3m～5.4mの長方形をなし、南・北側にベッド状施設をもつ構造であったと考えられる。

削平のため壁高は、残りが0.1m以下と、非常に低いものとなっている。これに伴う出土遺物は、削平が著しいために土器細片が殆どであり、図化に耐えうる遺物は少ない。

出土遺物（Fig.40）

06133は、底部中心を欠くが、中実の小型器台である。器形はややひずんでいる。筒状の胴部から緩く開く分厚い底部を有する。器面調整は、外面の筒・脚部ともに指オサエ、ナデを施す。また、底部内面は、板状工具によるナデ調整か。

器色は赤味を帯びた黄褐色を呈する。胎土には石英細砂を少量含む。底部径10cmを測る。

06132は、小型の器台である。上端部近くで良くしまり、口縁部はやや肥厚して端部が丸味を帯びる。

器面調整は、外面に非常に荒いタテハケメを施し、口縁端部はナデである。また、内面は屈折部上半が、斜め方向のナデで、下半部は縦方向のヘラナデである。

器色は、やや赤味を帯びた黄褐色を呈し、内面の上半は暗褐色をなす。

胎土には石英細砂を多く混入し、焼成は堅緻である。

口径は７cm、器高8.9cm、脚部径9.8cmを測る。

36003は、小型の鉄滓である。サイズは、2.5×4.0cm、厚さ１cm程度を測る。床面掘方内の出土である。

SC21竪穴住居跡（Fig. 4 ・41・42）

本住居跡は、調査区南端中央の壁際で検出した。前述のように長方形住居SC20と切り合い、これより先行する時期の所産である。

住居跡は、全体に削平による影響が大きく、低い壁の平面形をかろうじて確認することができた。西側は殆ど壁を失い、北壁及び東壁で壁高0.1m程度の壁が断続的に繋がっている。その規模は、東西長8.5m程度、南北長4.7m以上を測り、出土状況から長方形住居プランの北側部分が露出しているものと考えられる。

しかしながら、床面相当部分には円弧状に、径が0.3～0.5mを測るピット群が連続して検出できる点から、本住居跡にはさらに弥生時代中期の円形住居と重複している可能性が高いと考えられる。

遺構内からは、まとまった遺物の出土は無いが、土器類と磨製石器・土製品が少量出土した。

出土遺物（Fig.42）

06148は、扁円状の胴部に突帯一条を巡らす壷の胴部破片である。底部及び口縁部を欠くが、口縁部は口縁がラッパ状に開く円筒形をなす形態か。

器面調整は、荒れのために不明であるが、突帯の裾部はヨコナデが残る。

器色は外面が鈍い橙色、内面が鈍い黄橙色を呈する。

胎土には石英微砂を含み、焼成は堅緻である。胴部突帯部径15.2cmを測る。

06149は、鉢形土器を杯とする高杯である。内湾気味の口縁を持つ精美な鉢に良く踏ん張った脚を付す。

器面調整は、剥離及び磨滅によって殆ど不明であるが、脚部外面に縦方向のヘラナデが一部残る。

器色は、内外面共に浅い黄橙色を呈する。胎土には石英粗砂を多量に混入する。杯部口径は26.3cm、器高19cm、脚端部径17cmを測る。

06147は、口縁部が直立気味に立ち上がる大型甕である。

器面調整は、外面が、磨滅が著しいため明瞭では無いが、胴部に斜め方向の荒い平行タタキ痕が残る。また、内面は非常

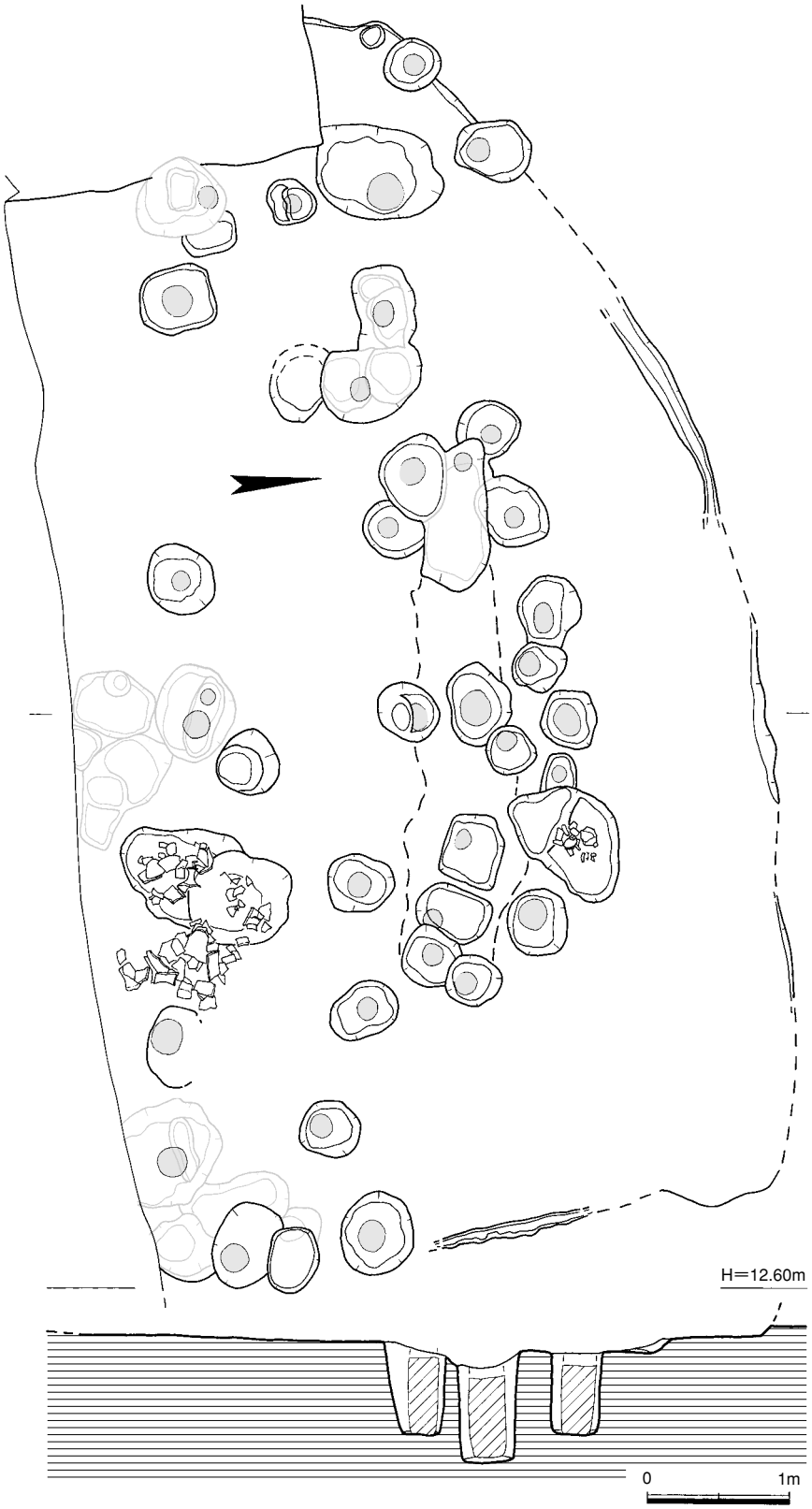


Fig.41　C区SC21竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）

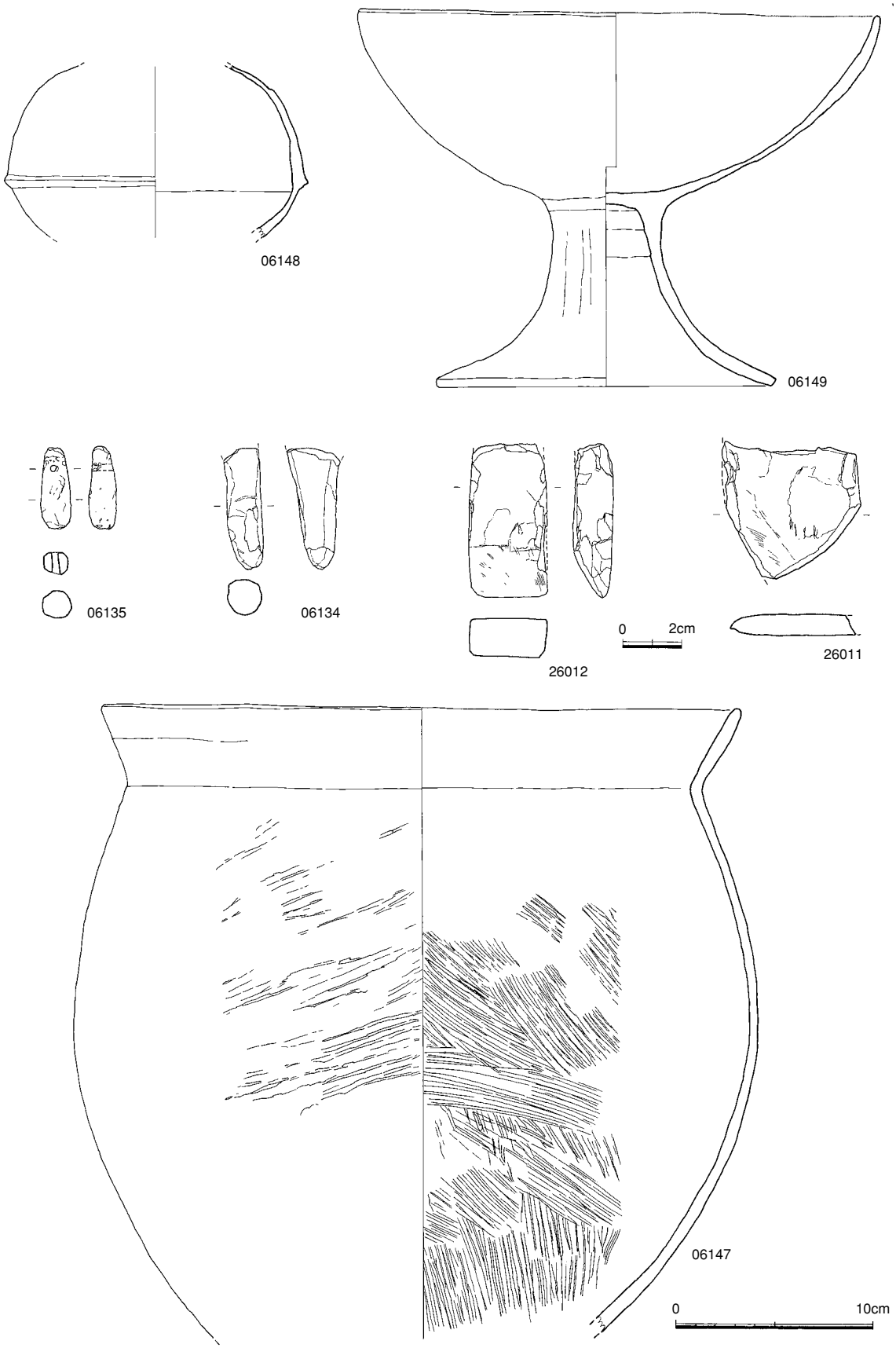


Fig.42　C区SC21竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3・1/2）

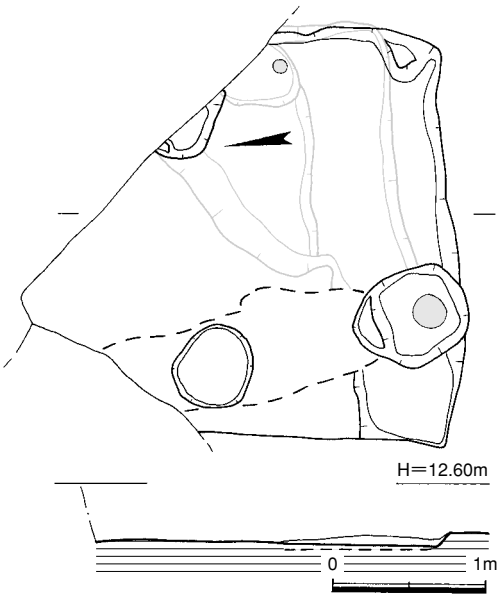


Fig.43　C区SC22竪穴住居跡
出土状況実測図（1/50）

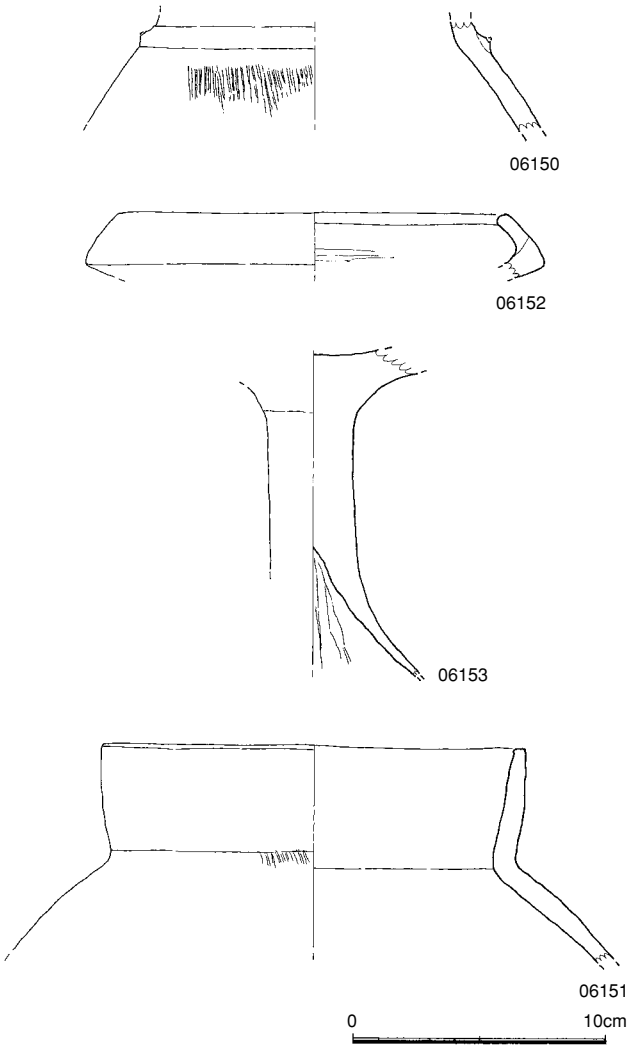


Fig.44　C区SC22竪穴住居跡
出土遺物実測図（1/3）

に荒いハケメが胴部以下に残る。

器色は外面が浅い黄橙色で、内面は鈍い橙色を呈する。胎土には石英・長石砂を多く混入し、焼成は堅緻である。口径は32.1cm、残存高31.2cmを測る。

土製品では、**06135**が頭部近くに孔を穿つ円棒状土製品である。下半に従って大きく、断面は円形をなす。焼成前の頭部への穿孔から垂飾品の一種かと考えられる。器色は灰褐色を呈する。全長４cm、重量8.37gを測る。

06134は、土製杓子の柄部分か。断面は円形をなし、端部及び側辺部には面取りが僅かに認められる。

器色は鈍い黄橙飾を呈する。胎土には石英・長石粒を大量に含む。焼成は良好である。残存長6.1cmを測る。

26012は、小型の扁平片刃石斧である。断面は長方形に良く調整され、側辺に制作時の剥離痕を一部残す。石材は頁岩か。全長5.2cm、幅2.6cm、重量34.6gを測る。

26011は、磨製石包丁破片である。両刃である。石材は粘板岩を使用する。残存長4.6cm、重量19.73gを測る。

SC22竪穴住居跡（Fig.４・43・44）

本住居跡は、調査区の南東隅で検出された。

住居は、やや小型で、平面が長方形プランをなす形態と考えられる。

その規模は、南壁長2.6m、東壁長1.1m以上、西壁長1.7m以上を測り、壁高は0.15m程度を残す。

床面にはベッド状施設は検出できなかった。

覆土内からは土器類が僅かながら出土している。

出土遺物（Fig.44）

06150は、頸部に低い突帯一条を巡らす後期壷である。器面調整は、外面に荒いタテハケメを施し、突帯の上下はヨコナデである。また、内面はナデ調整を施す。器色は、内外面共に灰色味を帯びた黄褐色を呈する。胎土には石英砂を多く混入する。焼成は堅緻である。

06152は、屈曲部外面に緩い稜を有する二重口縁壷である。器面は内外面共に荒れで、調整が不明である。器色は、内外面共に橙色を呈する。胎土には

石英・長石砂を多く混入する。焼成は堅緻である。復元口径は、15.4cmを測る。

06153は、中実の脚を有する高杯である。器面調整は、荒れのために内外面共に不明であるが、脚内面にはしぼりが残る。器色は、外面が黄橙色、内面が橙色を呈する。胎土には石英・長石砂を多量に含む。焼成は堅緻である。筒部径3.3cm、残存高12.8cmを測る。

06151は、口縁部が直立気味に立ち上がる壷である。器面調整は、頸部に荒いハケメが一部に残る。他は荒れのために不明である。器色は内外面共に橙色を呈する。また、胎土には多量の石英・長石砂を含む。焼成は堅緻である。復元口径は16.6cmを測る。

この他に、調査では住居跡として考えた**SC6020・6200・6207・6279**などが見られる。

SC6020竪穴住居跡（Fig. 4 ・45）

本住居跡は、調査区の中央SC06住居と切りあって検出された。

出土遺物（Fig.45）

06155は、不安定な底部を有する甕底部である。外面はヘラナデで、内面にハケメ調整を残す。

06156は、甕底部である。底部径 6 cmを測る。中期甕か。

06157は、いわゆる沓形器台である。嘴状に伸びる突起部を有する。残存高 7 cmを測る。

SC6200竪穴住居跡（Fig. 4 ・45）

本住居跡は、調査区中間部の東端に位置し、北壁の一部と考えられる東西方向の壁延長 2 mとその南側 2 mの位置に炉跡（径0.7mの円形）が検出された。これに伴う遺物も少量が出土した。

出土遺物（Fig.45）

06160は、高杯杯部破片である。口縁は大きく屈曲し、反転する。内外面の荒れが著しく、調整は不明である。

SC6207竪穴住居跡（Fig. 4 ・45）

本住居跡は、調査区中間の東端部で検出した東西方向の壁延長1.8mである。

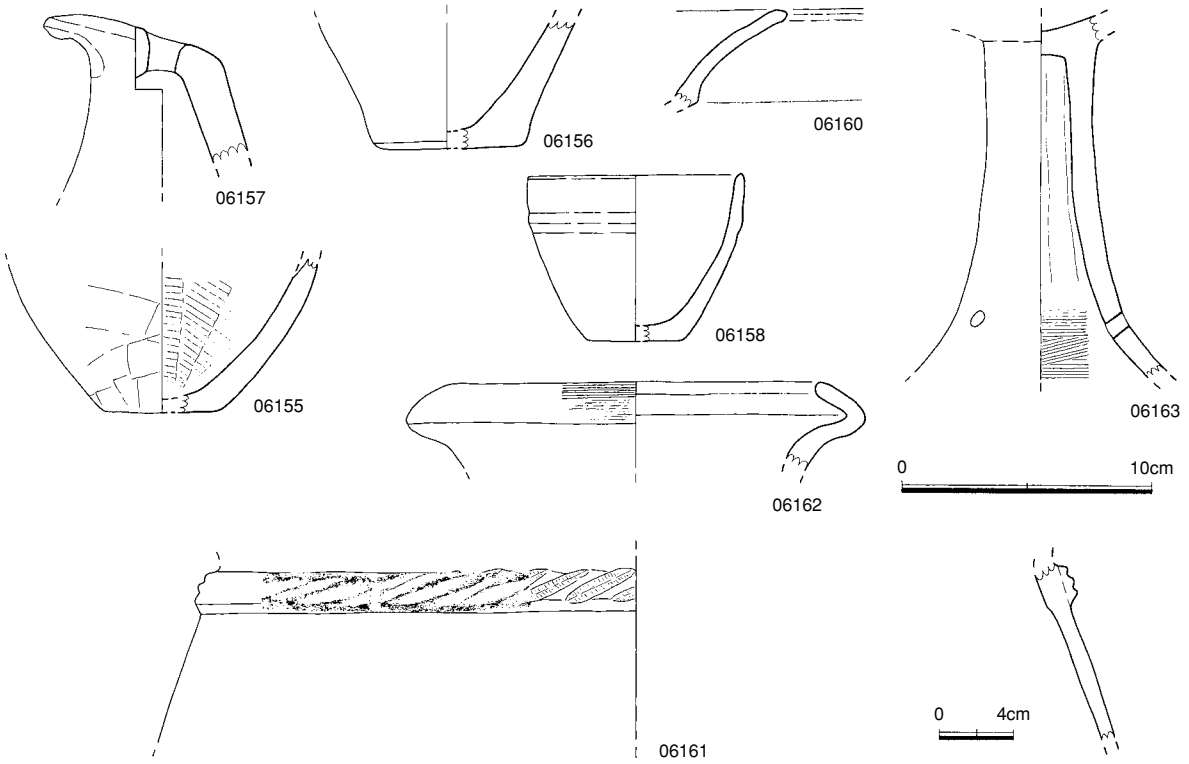


Fig.45　C区SC6020・6207・6200・6279竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3・1/4）

出土遺物（Fig.45）

06158は、口縁部外面に低い突帯一条を巡らす小型の鉢である。内外面共に器面の荒れが著しい。口径8.5cm、器高6.8cmを測る。中期後半期の所産か。

SC6279竪穴住居跡（Fig. 4 ・45）

本住居跡は、調査区中央の東端、壁際で検出された。東西の壁延長1.8mを測る。

出土遺物（Fig.45）

06161は、胴部に斜め方向の原体刻み目を施した突帯を巡らす大型の甕である。胴部は下半部にその最大径があると考えられる。突帯部径35cmを測る。

06162は、口縁部の屈曲が著しい袋状口縁壷破片である。口縁部外面に細かい横ハケメが残る。口径18.3cmを測る。

06163は、杯部と脚端を失う長脚の高杯である。外開する脚部付け根に円形透かしを施す。脚部径4.2cm、残存高13.8cmを測る。

２．掘立柱建物跡（Fig. 4 ・46～49）

本調査では、調査区北東隅側に集中して４棟以上の掘立柱建物が検出された。規模では、２×２間２×３間以上、２×２間以上のものであるが、検出された多くのピット群には未だ多くの建物が組立てられるものと考えられる。

SB01建物（Fig. 4 ・46・49）

本建物は、調査区の北端に検出された２×３間規模の不整な東西棟建物である。建物は、梁間全長が、1.9～1.2m、桁行き全長2.5～2.8mを測る不整な側柱建物である。掘り方内に残る柱痕跡は、径10～15cmを測る。図中の柱痕を塗りつぶした柱穴からは、小破片であるが土器類の出土があった。弥生中期甕破片を中心に後期甕破片も出土したが、図化できるものは少ない。

出土遺物（Fig.49）

06281は、中期前半期の甕小破片である。口縁部上端はヨコナデで、外面の一部にハケメが残る。器色は浅い黄橙色を呈する。柱穴番号７出土。

SB02建物（Fig. 4 ・46・49）

本建物は、調査区の北端に検出された２×２間規模の東西棟建物である。SB01建物の南側に隣接する。建物は、梁間全長が、2.1m、桁行き全長3.0～3.1mを測る側柱建物である。掘り方内に残る柱痕跡は、径10～15cmを測る。図中の柱痕を塗りつぶした柱穴からは、小破片であるが土器類の出土があった。弥生中期前半期の甕破片を中心に直口壷や高杯、無頸壷破片が大量に出土したが、図化できるものは少ない。

出土遺物（Fig.49）

06282は、中期大型壷底部破片である。器面調整は、外面に荒いタテハケメ、内面にヘラナデを施す。器色は浅い黄橙色を呈する。胎土には石英細砂を多く混入する。焼成は堅緻である。復元底部径10.8cmを測る。柱穴番号１出土。

06283は、短く外開する直口壷破片である。器面調整は、内外面共にヨコナデである。器色は浅い橙色を呈する。胎土には石英粗砂を多く含む。復元口径22cmを測る。柱穴番号１出土。

06284は、口縁上端部がやや内傾する中期前半期の甕破片である。器色は鈍い橙色を呈する。胎土のは石英細砂を多く含む。柱穴番号２出土。

06285は、緩やかに外方に延びる口縁を有する甕で、内面端部はやや跳ね上げ状となる。器面調整

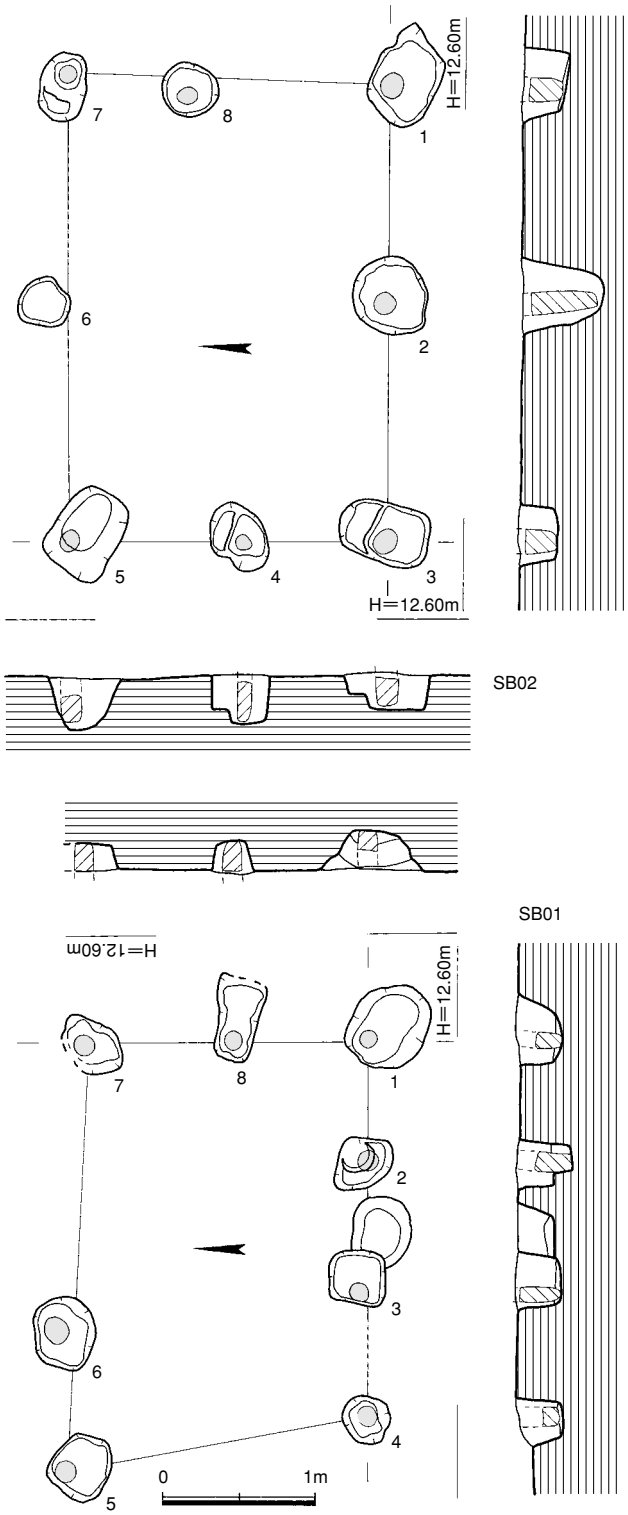


Fig.46　C区SB01・02掘立柱建物跡
出土状況実測図（1/50）

は内外面共にヨコナデである。器色は、黄橙色～鈍い黄橙色を呈する。胎土には石英細砂を多く混入する。焼成は堅緻である。柱穴番号２出土。

06286は、直口する口縁を有する小型鉢である。器面調整は、内外面共に荒れのために不明である。器色は黄褐色を呈する。胎土には石英細砂を多く混入する。焼成は堅緻である。復元口径14.0cm、残存高5.3cmを測る。

06287は、小型器台の破片である。器面調整は、内外面共にヨコナデか。磨滅のために不詳。器色は浅い黄橙色を呈する。胎土には石英粗砂～細砂を多く混入する。焼成は堅緻である。復元底部径９cmを測る。

06288は、中期前半期の甕口縁部の小破片である。器色は淡黄色を呈する。口縁上端部にヨコナデが残る。焼成は堅緻である。柱穴番号７出土。

06289は、く字形に屈曲する口縁を有する甕小破片である。器色は淡黄褐色を呈する。胎土には石英粗砂を多く含む。焼成は堅緻である。柱穴番号５出土。

06290は、く字形に屈曲する口縁部を有する甕小破片である。器面調整は、内外面共にヨコナデである。器色は黄褐色を呈する。柱穴番号５出土。

06291は、口縁部上端が内傾する中期前半期の甕小破片である。器面調整は、内外面共にヨコナデである。器色は黄橙色を呈する。胎土には石英砂を多く混入する。焼成は堅緻である。柱穴番号３出土。

06292は、甕底部である。底部中央には二次穿孔がなされる。小型甑か。器面調整は、内外面共にナデである。器色は淡黄褐色～浅い黄色を呈する。胎土に砂粒を多く含む。焼成は堅緻である。復元底部径７cmを測る。柱穴番号３出土。

SB03建物（Fig.47・49）

本建物は、調査区北東端に検出された東西棟建物である。その規模は西側の梁間で全長6.5mを測

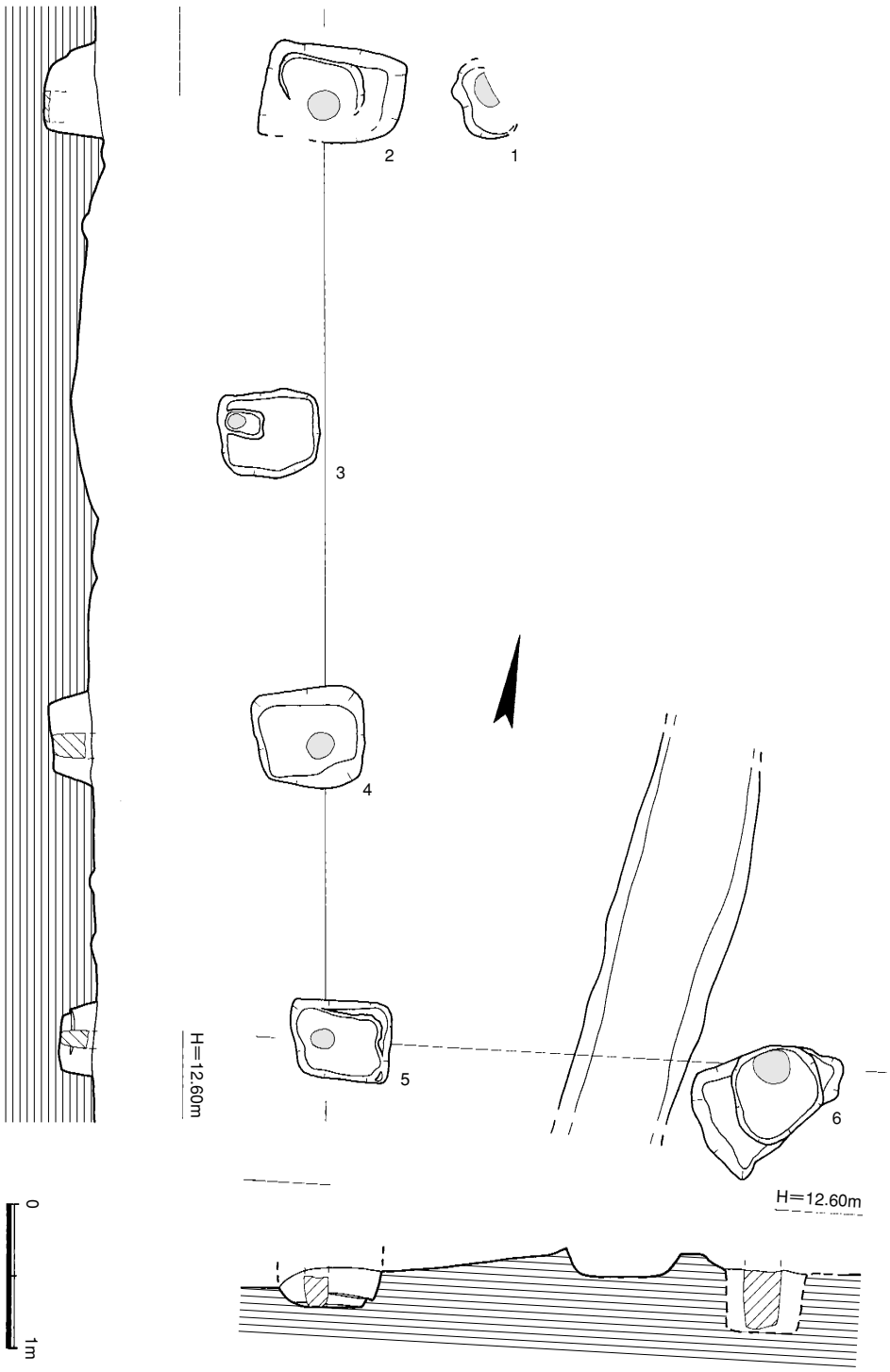


Fig.47　C区SB03掘立柱建物跡出土状況実測図（1/50）

る。柱間はやや通らない柱も見られるが、柱間は芯身で2.1～2.2mを測る。また、柱掘方は、径が0.7×0.5m程度の長方形を呈し、柱痕も0.1～0.2mのサイズが確認できる。３×２間以上の建物である。

また、桁行きは、南側で全長3.1m以上を測る。桁間は、梁間よりもやや大きなスパンとなる。出土遺物は、中期甕や後期高杯・甕類の破片があり、図化できるものは少量である。

出土遺物（Fig.49）

06293は、中期壷の底部である。器面調整は、内外面共にナデである。器色は赤橙色を呈する。胎

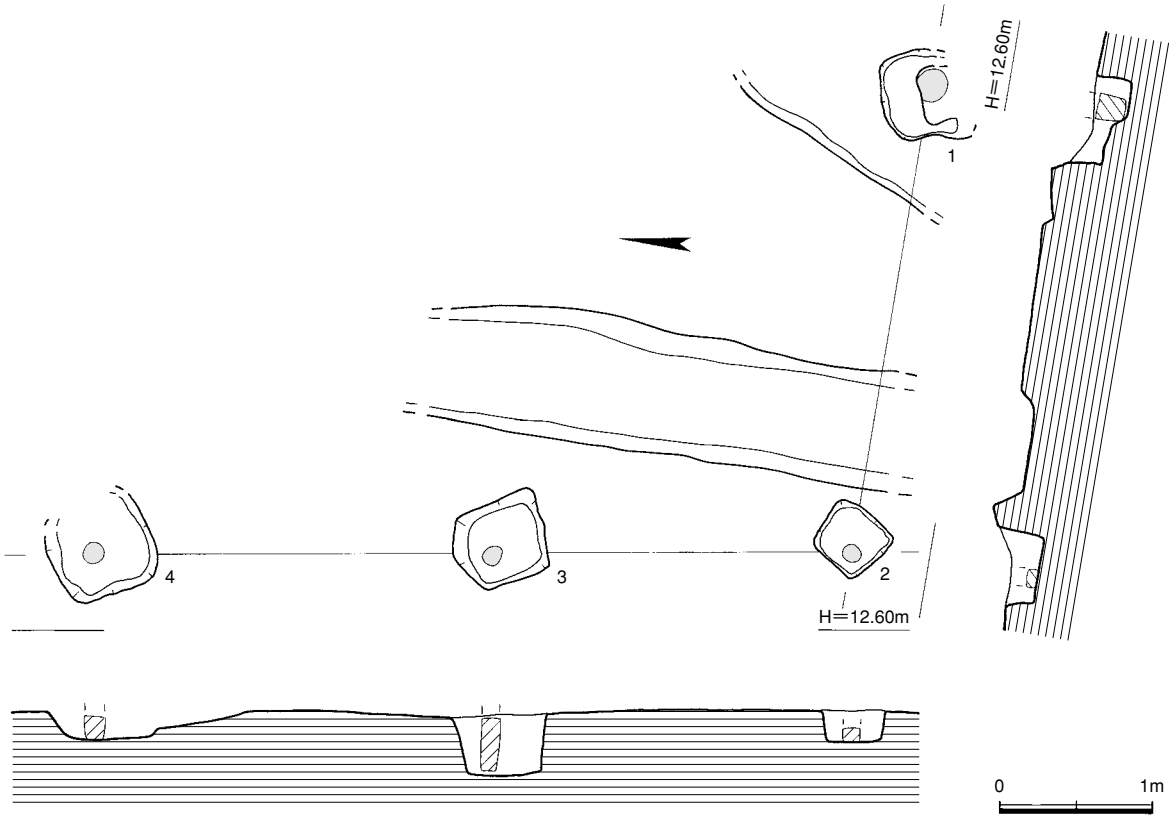


Fig.48　C区SB04掘立柱建物跡出土状況実測図（1/50）

土には多量の石英細砂を含む。焼成は良好である。復元底部径8.9cmを測る。柱穴番号５出土。

06294は、口縁端部がやや内傾する中期甕の破片である。内外面共にヨコナデを施す。器色は明褐色を呈する。胎土には石英細砂の混入が多く、焼成も堅緻である。柱穴番号３出土。

06295は、中期甕底部破片である。調整は、内外面共にナデである。器色は灰褐色を呈する。柱穴番号３出土。

09296は、平坦口縁を持つ中期甕で、口縁上端は窪む。また、口縁下に低い三角突帯一条を巡らす。調整は、内外面共にヨコナデである。器色は黄褐色を呈する。胎土には石英粗砂を含む。焼成は堅緻である。復元口径35.6cmを測る。柱穴番号１出土。

06297も**09296**と同様の特徴を持つ中期甕である。調整は、内外面共にヨコナデである。器色は黄橙色を呈する。胎土には石英粗砂を含む。焼成は堅緻である。柱穴番号１出土。

06298は、口縁上端がやや内傾する中期甕破片である。調整は、内外面共にヨコナデを施す。器色は浅い黄橙色を呈する。胎土には石英粗砂も含む。焼成は堅緻である。柱穴番号１出土。

SB04建物（Fig. 4 ・48・49）

本建物も調査区北東隅で検出した２×３間以上の建物である。SB03とやや軸線を違えるが、東西棟建物と考えられる。規模では、梁間全長５m以上、桁行き全長3.2m以上を測る。また、柱痕は、径0.1～0.15mを測る。柱掘方からは中期～後期の甕を中心とした土器破片が出土している。

出土遺物（Fig.49）

06300は、小型甕底部である。調整は、内外面共にヨコナデである。器色は橙色～黄橙色を呈する。胎土には石英粗砂も含む。焼成は堅緻である。復元底部径5.6cmを測る。柱穴番号４出土。

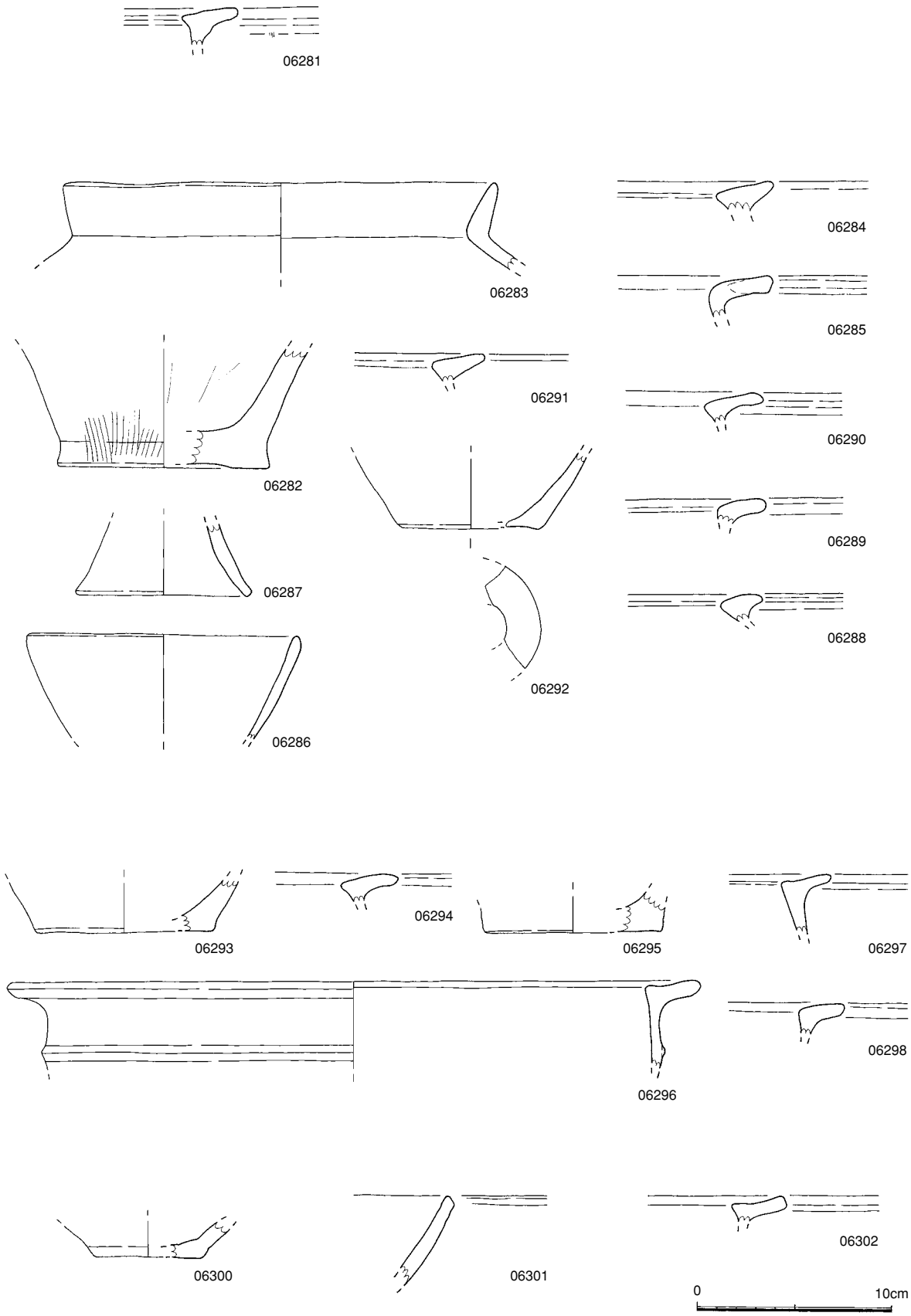


Fig.49　C区SB01～04掘立柱建物跡出土遺物実測図（1/3）

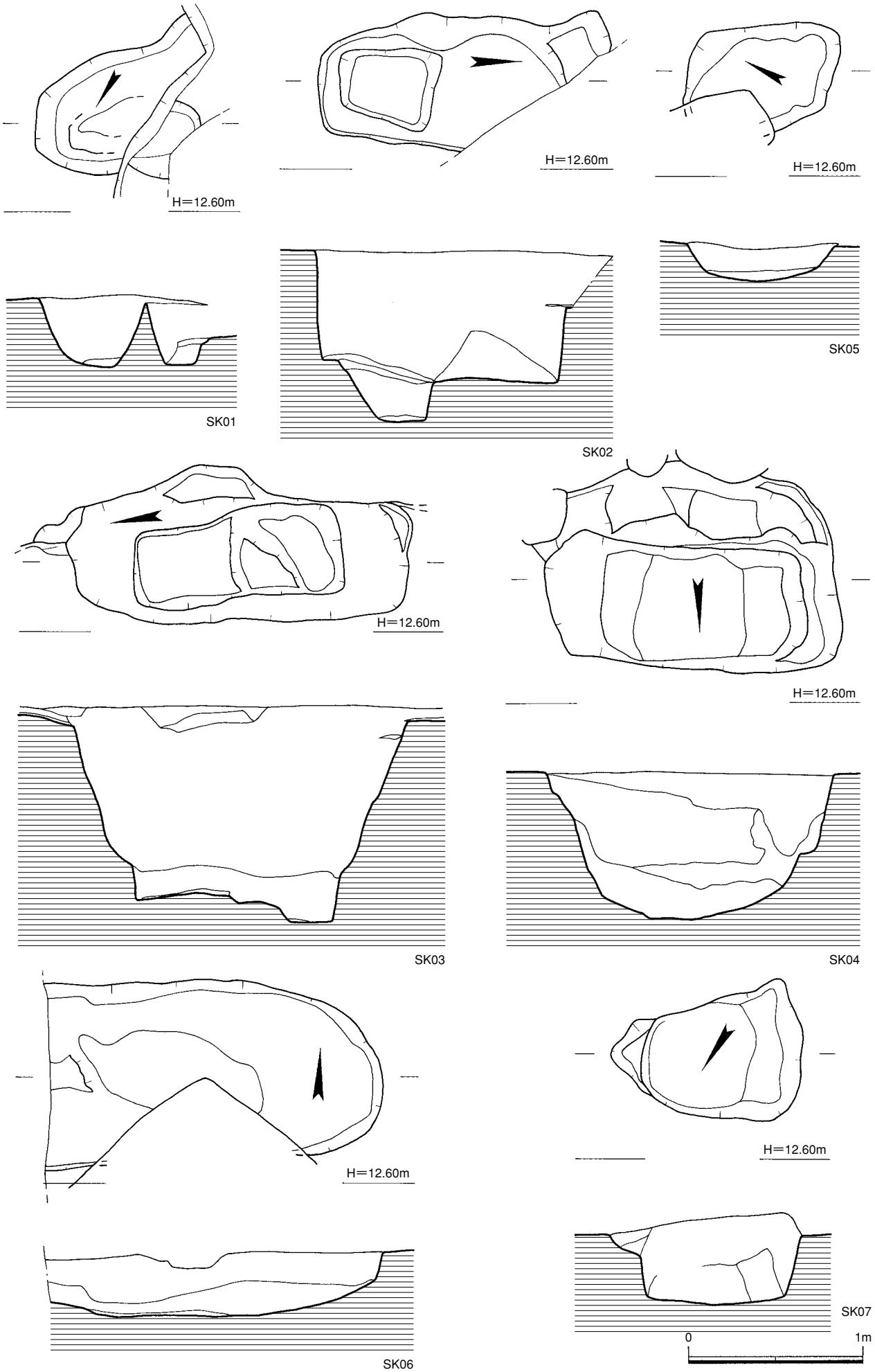


Fig.50　C区SK01～07土坑出土状況実測図（1/30）

06301は、小型鉢の口縁部破片である。調整は、ナデで、口唇の下端部に稜を持つ。器色は黄橙色を呈する。胎土に石英粗砂の混入が多い。焼成は堅緻である。柱穴番号３出土。

06302は、口縁部上端が緩く窪み、内傾する中期甕破片である。調整は、上端部にナデが残る。また、器色は黄橙色～明黄褐色を呈する。胎土に石英粗砂の混入が多い。焼成は堅緻である。柱穴番号３出土。

３．土　坑（Fig.４・50～52、PL.11－２・12－１）

土坑は、全体で13基（SK01～13）が検出され、調査区の全域に散在する分布となっている。中にはSK02・03・04の様に、ほぼ同規模で中心軸線を揃えたり、また直交方向に掘られたものも見られる。

SK01土坑（Fig.50）

調査区の北端部で検出された長幅が1.14×0.6m、深さ0.35mを測る不整長方形の土坑である。本土坑からは図化に耐える遺物は出土しなかった。

SK02土坑（Fig.50）

調査区の北東壁付近で検出された長幅が1.7×0.75m、深さ0.73～0.96mを測る長方形土坑である。底部は平坦であるが、南側は段をもってピット状となる。本土坑からも図化に耐える遺物は出土しなかった。

SK03土坑（Fig.50・52）

本土坑は、調査区北端部中央で検出された長幅が1.98×0.73m、深さ1.05mを測る長方形をなす土坑である。外周はほぼしっかりとした長方形で、床面に1.2×0.5mの長方形掘り込みがあることから墳墓の可能性も想定したが、墳墓に関する遺物の出土は無かった。

出土遺物（Fig.52）

06166は、中期甕底部破片である。外面に精緻なタテハケメを施す。内面はナデで、焦げ付きが残る。底部径7.8cmを測る。

06167は、口縁が平坦をなす中期甕である。器色は浅い赤褐色を呈する。復元口径29.6cmを測る。

06168は、大型筒形器台の口縁部破片である。外面は横方向のヘラミガキ、内面はナデである。タガ下に長方形透かしを施す。器色は赤味を帯びた褐色を呈する。復元口径19.2cmを測る。

06169は、小型の甕である。外面に荒いタテハケメ調整を残す。器色は明赤褐色を呈する。底部径４cmを測る。

26013は、磨製石剣の茎部破片である。穿孔痕が２個あり、関側が貫通している。

SK04土坑（Fig.50・52、PL.11－２）

本土坑は、調査区北端部中央で検出された長幅が1.65×1.1m、深さ0.83m程度を測り、平面形が長方形をなす土坑である。壁の断面形は丸く、底面も平坦ではない。

出土遺物（Fig.52）

06170は、中期初頭期の甕である。調整は、外面にタテハケメを残す。器色は赤味を帯びた黄褐色を呈する。復元口径は31cmを測る。

06171も中期初頭期の甕口縁部破片である。器色は赤味を帯びた褐色を呈する。口縁部にスス付着。

06172は、中期初頭期に特徴的な分厚い上げ底の甕底部である。器色は赤褐色を呈する。復元底部径は6.8cmを測る。

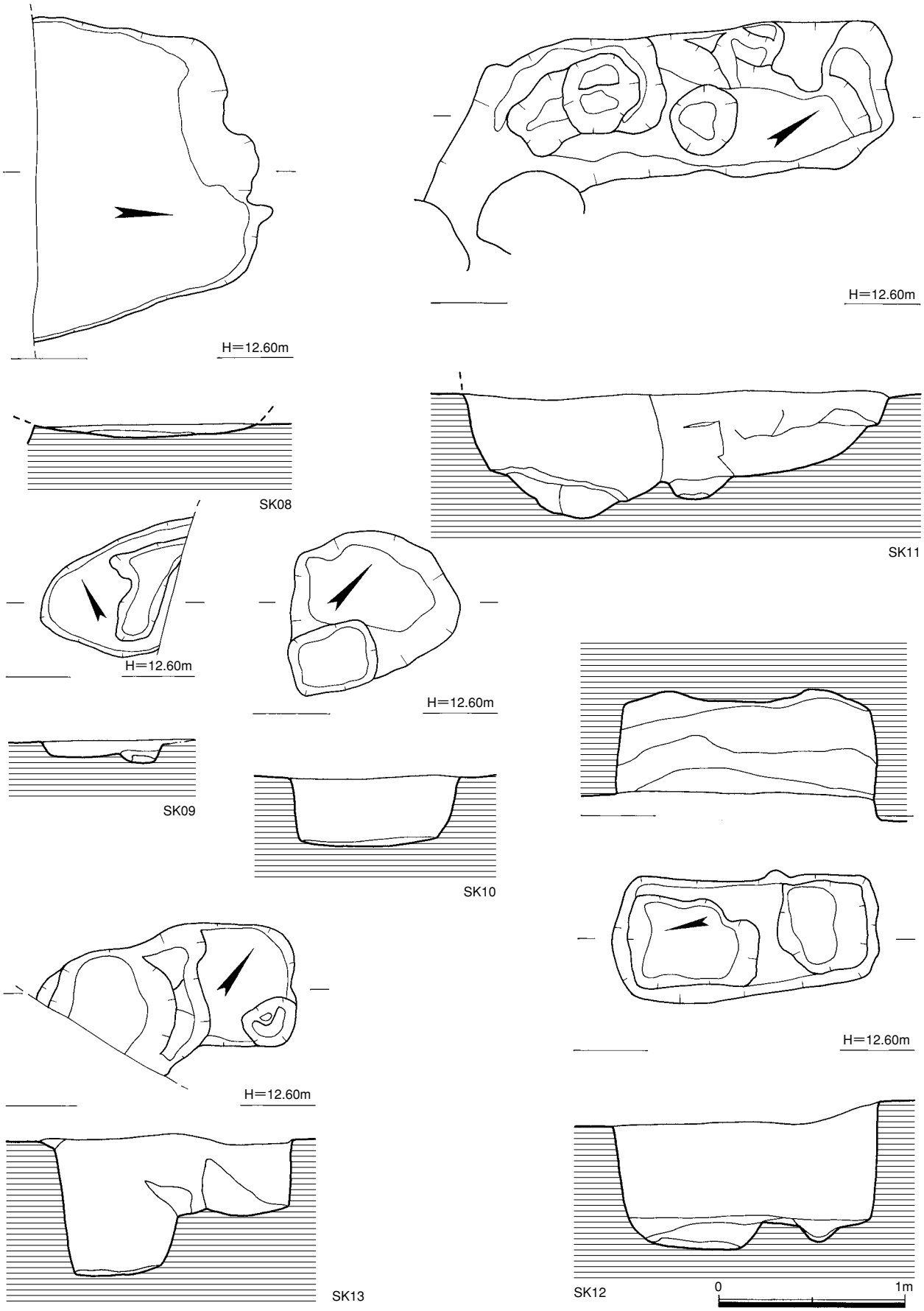


Fig.51　C区SK08～13土坑出土状況実測図（1/30）

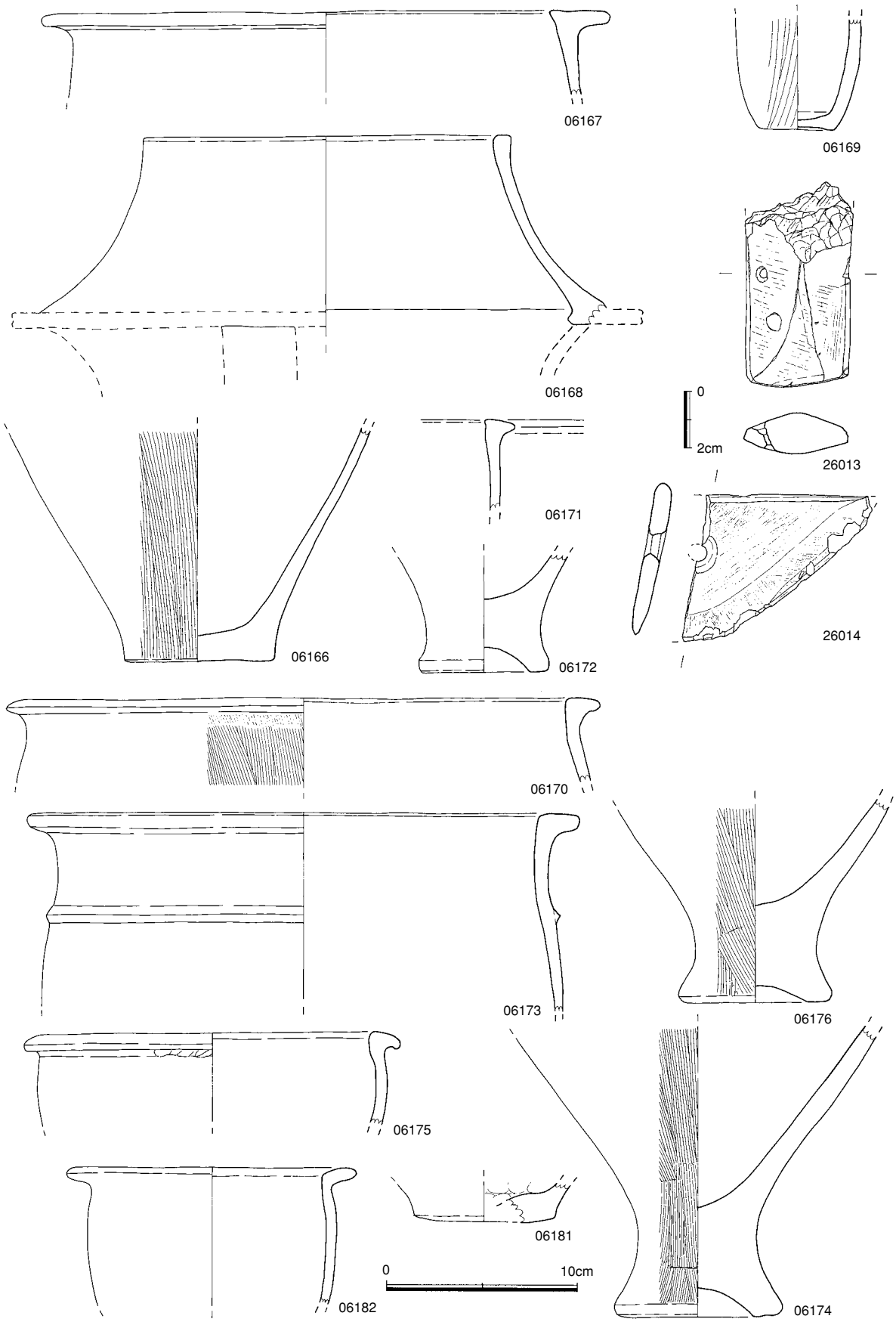


Fig.52　C区SK03・04・06・07・11・12土坑出土遺物実測図（1/3・1/2）

SK05土坑（Fig.50）

本土坑は、調査区北側中央で検出された。規模は、長幅が0.9×0.7m、深さ0.2mで、長円形をなす。本土坑からは図示できる出土遺物の出土はなかった。

SK06土坑（Fig.50・52）

本土坑は、調査区北側の西壁付近で検出された。竪穴住居SC05によって切られ、これより古い時期の所産である。規模は、長幅が1.9×1.0m、深さ0.35mを測り、平面形が隅丸の長方形となるか。坑内からは比較的まとまった土器類が出土している。

出土遺物（Fig.52）

06173は、短い平坦口縁下に低い三角突帯一条を巡らす中期前半期の甕である。器色は淡黄褐色を呈する。復元口径28.8cmを測る。**06174**は、中期初頭期の分厚い上げ底を持つ甕底部である。器色は黄褐色を呈する。底部径8.8cmを測る。**06175**は、口縁端部がやや垂れる小型甕である。内外面ともになで調整を施す。器色は淡赤褐色を呈する。口径19.6cmを測る。**06176**も**06174**と同様な中期初頭期の甕底部である。底部径８cmを測る。

SK07土坑（Fig.50・52）

調査区の中央部東端で検出された。規模は、1.1×0.8m、深さ0.5m程を測り、不定形な土坑である。

出土遺物（Fig.52）

06181は、後期甕である。

SK08土坑（Fig.51）

調査区中央部で検出された。規模は、長幅が1.2m以上×1.6m、深さ0.1m未満の浅い長円形の土坑か。SC13住居跡に切られる。本土坑からは図示できる遺物の出土は無かった。

SK09土坑（Fig.51）

調査区の中央部西側で検出された小土坑である。長幅が0.7m以上×0.6m、深さ0.1m程度の不整形土壙である。本土坑からは図示できる遺物の出土は無かった。

SK10土坑（Fig.51）

調査区の中央部西端で検出された小土坑である。一部は柱穴に切られる。規模は、１m×0.7m、深さ0.35mを測り、平面形は不整円形である。本土坑からは図示できる遺物の出土は無かった。

SK11土坑（Fig.51・52）

調査区中央部に検出された。数個の柱穴によって切り合いとなっているが、本来は長方形土坑であったと考えられる。

出土遺物（Fig.52）

06182は、後期甕である。

SK12土坑（Fig.51・52、PL.12－１）

調査区の南端側で検出された長方形ど坑である。規模は、長幅が1.4×0.7m、深さ0.6～0.65mを測る。床面は凹凸が激しい。

出土遺物（Fig.52）

26014は、両刃の半月形石包丁である。

SK13土坑（Fig.51）

調査区の南端部壁側で検出された長円形の土坑と考えられる。規模は、長幅が１m以上×１m、深さ0.4～0.74mで底面は段を有する。

本土坑からは図示できる遺物の出土は無かった。

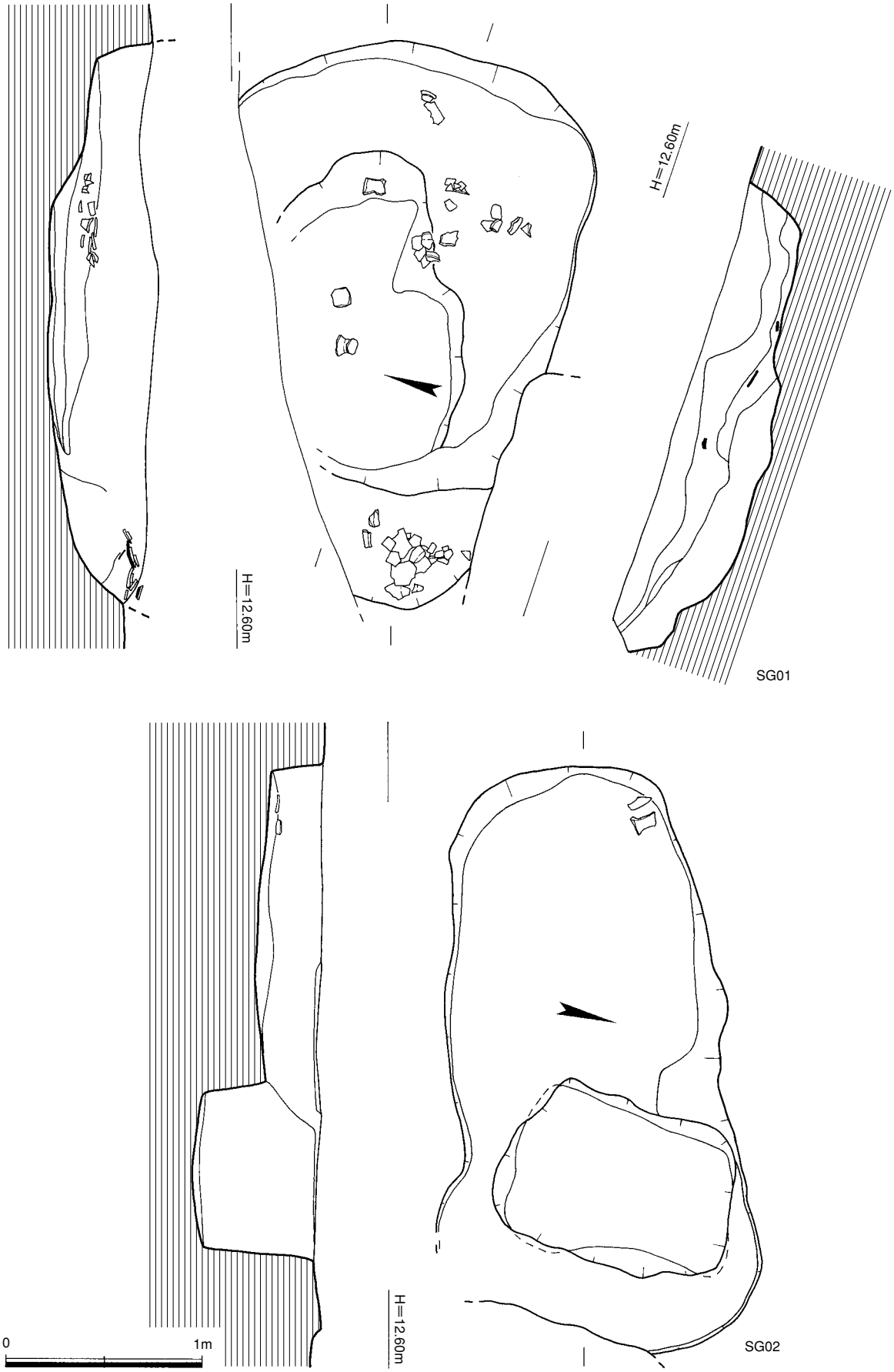


Fig.53　C区SG01・02貯蔵穴出土状況実測図（1/30）

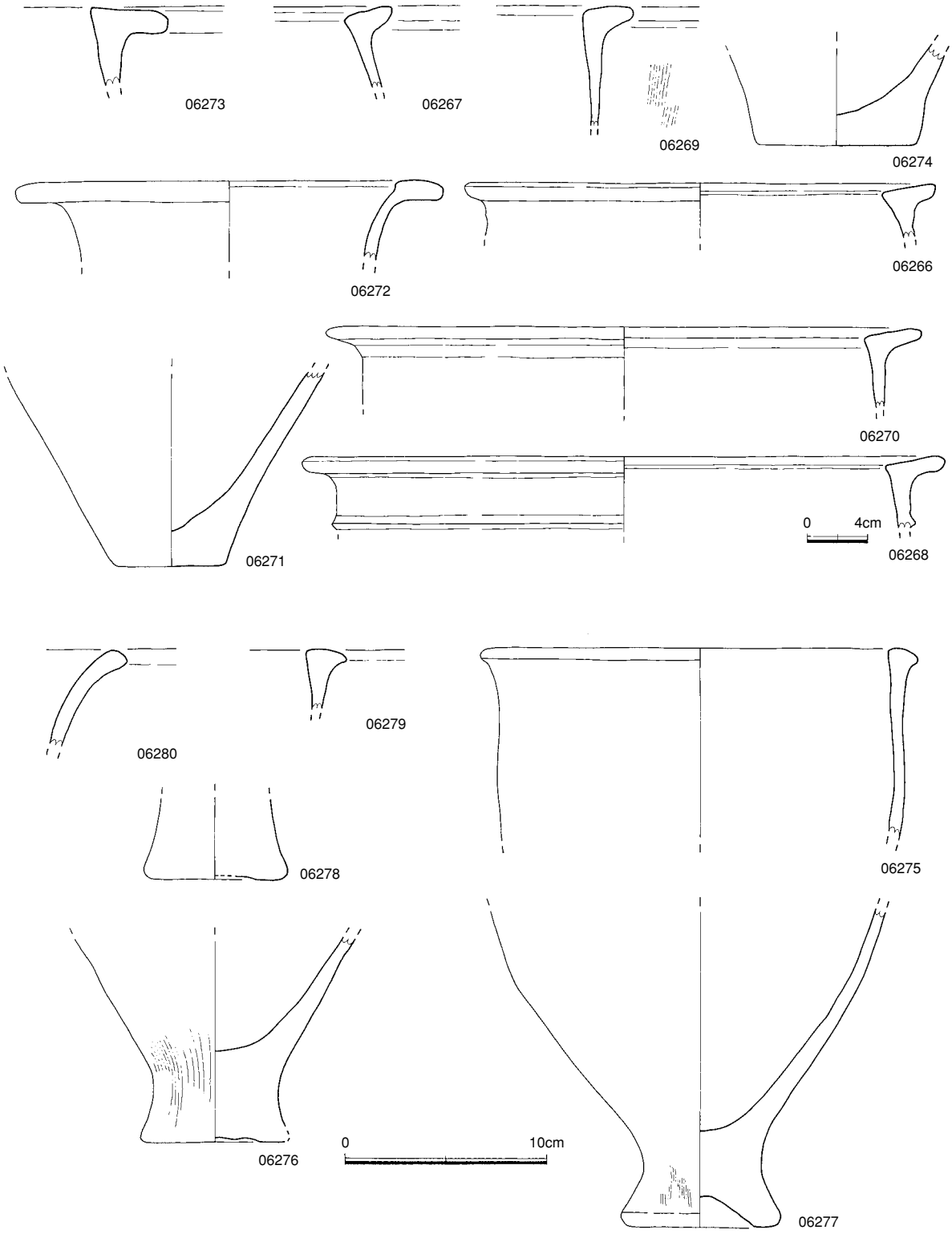


Fig.54　C区SG01・02貯蔵穴出土遺物実測図（1/3・1/4）

４．貯蔵穴（Fig. 4 ・53・54、PL. 8 ）

SG01貯蔵穴（Fig. 4 ・53・54、PL. 8 ）

調査区の中央部西寄りで検出された隅丸長方形の大型土坑である。規模は、長幅が2.8m×1.9m、深さ0.5～0.55mを測る。床面は凹凸が著しいが、二重の土坑となる。伴う遺物類は、床面より浮いた位置のものが比較的多い。

出土遺物（Fig.54）　土器類には、口縁部がやや内傾するタイプ口縁を有する甕（**06266・06267・06268・06269・06270・06273**）とその底部（**06271・06274**）や未発達の鋤先口縁を有する壷（**06272**）などがあり、中期前半期の様相である。

SG02貯蔵穴（Fig. 4 ・53・54）

調査区の中央部西寄りで検出された大型の長方形土坑である。やや不整形であるが、その規模は、長幅が、３m×1,5m、深さ0.35～0.65mを測る。床面には東壁寄りに1.25m×0.8m規模で、やや底面がオーバーハングする長方形の土坑が伴っている。

出土遺物（Fig.54）　出土土器類には、SG01貯蔵穴よりもやや古い中期初頭段階の口縁部の未発達な甕類（**06275・06276・06277・06279**）や朝顔状に開く壷（**06280**）、中実の小型器台（**06278**）が見られる。

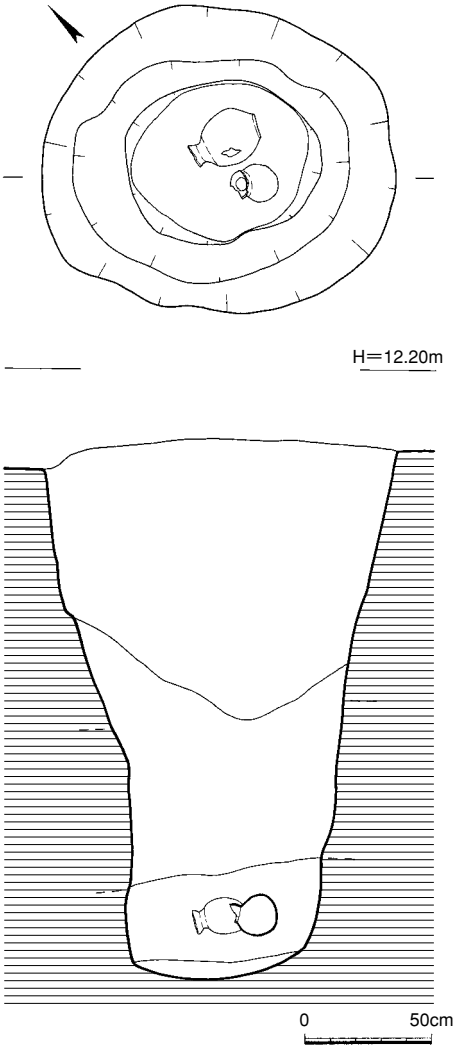


Fig.55　Ｃ区SE01井戸跡出土状況実測図（1/30）

５．井戸跡（Fig. 4 ・55～69、PL.12～17）

井戸跡は、調査区の中央部に１基（SE01）、南東部に集中して４基（SE02～05）が見つかっている。

SE01井戸跡（Fig. 4 ・55・56、PL.12－１・13－２・14）

本井戸は、調査区の中央部、SC14住居跡の床面下で検出された。規模は、1.4×1.2m、深さ2.14mを測り、不整円形を呈する。底面は丸味を持ち、壁は口部に従って大きくなる。底面近くで土器類を中心とした遺物の出土があった。

出土遺物（Fig.56）

06193は、口縁部の内傾が著しい後期壷破片である。口縁はやや肥厚する。調整は、内外面共にヨコナデである。器色は淡い橙色を呈する。復元口径19.6cmを測る。

06192は、朝顔状に開く壷口縁部破片である。外面に荒いタテハケメを残す。器色は浅い黄橙色を呈する。復元口径20.8cmを測る。

06189は、口縁がく字形に屈曲する小型の鉢である。器面調整は、外面が荒いタテハケ、内面がナデ調整、口縁部周辺にもナデを施す。胴部下半には内面からの大きい二次穿孔がなされている。器色は鈍い橙色を呈する。口径15.4cm、器高15.2cm、底部径5.2cmを測る。

06188は、半球状の胴部に緩く外開する口縁部を持つ小型壷である。底部は不安定な平底である。口縁部は一部打ち欠きとなる。器面調整は、外面がタテハケメ調整

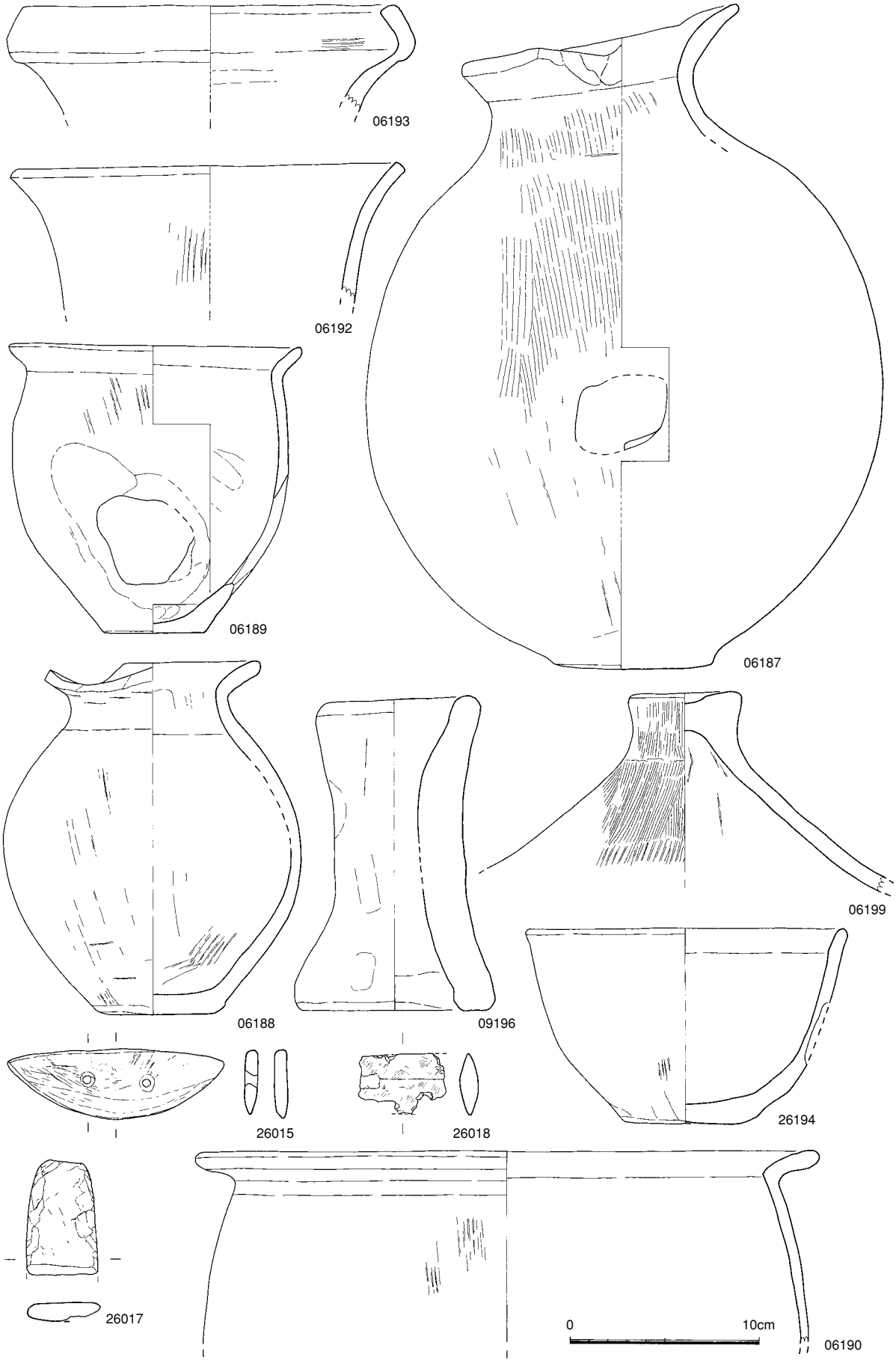


Fig.56　C区SE01井戸跡出土遺物実測図（1/3）

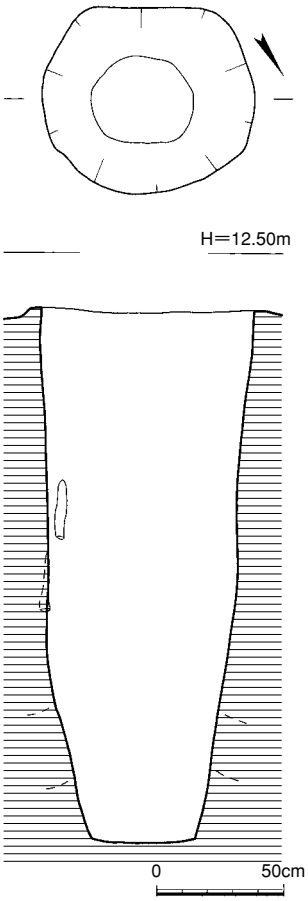


Fig.57　C区SE02井戸跡
出土状況実測図（1/30）

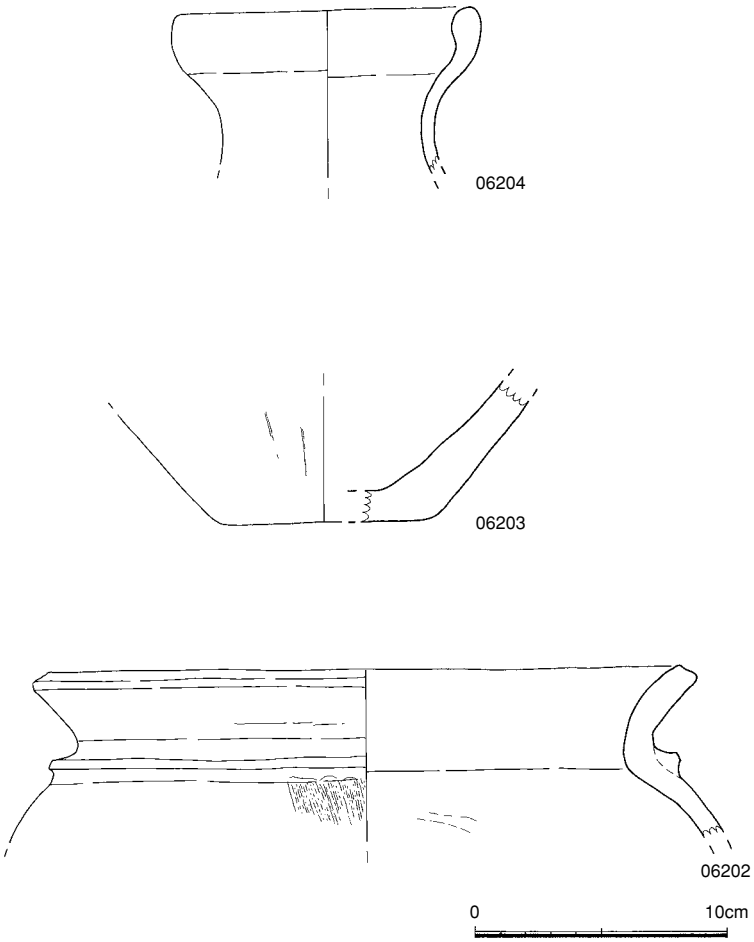


Fig.58　C区SE02井戸跡出土遺物実測図（1/3）

で、工具痕が良く残る。また、内面は口縁部付近がシボリ状となっているほか、内底部付近に荒いハケメ調整が残る。外面は丹塗である。器色は鈍い橙色を呈する。胎土には石英砂等を多量に混入する。口径11cm、器高18.6cm強、底部径6.6cmを測る。

06187は、**06188**とほぼ同器形の大型壷である。器形的にはややいびつである。底部は不安定な平底の典型である。器面調整は、外面胴部に荒いタテハケメを残し、口縁部はヨコナデを施す。また、内面は、荒いハケメ調整と考えられるが口径が小さく内部を観察できない。外面及び口縁部内面に丹塗が認められる。口縁部は一部打ち欠きで、胴部中位にも内面からの二次穿孔がなされる。器色は鈍い橙色を呈する。胎土には石英・長石砂を多量に含む。口径は15cm、器高35cm、底部径8.2cmを測る。

06190は、口縁部が内傾してく字形に屈曲する甕である。外面胴部には荒いタテハケメを施し、口縁部及び内面にはナデ、ヨコナデを残す。器色は外面が褐色、内面が灰褐色を呈する。胎土には石英、長石砂を多量に混入する。復元口径32.8cm、残存高10cmを測る。

06194は、口が大きく開く鉢である。口縁部は内面で僅かに反転して稜を持つ。また、底部付近は造りが歪で、不安定な平底の底部へと繋がる。器面調整は、外面が胴部下端に荒いタテハケメを残す他は、磨滅のために不詳である。また、器壁の剥落が一部に見られる。器色は褐色味を帯びた灰色を呈する。口径は17cm、器高10.3cm、底部径6.7cmを測る。

09196は、器壁の厚い支脚である。器面調整は、荒れのために外面の一部に指オサエが残るにすぎない。器色は浅い黄橙色を呈する。胎土には石英、長石砂の混入が多い。口径8.6cm、器高16.5cmを測る。

06199は、大型の甕蓋の破片である。天井部は窪む。調整は、外面に荒いタテハケメを施し、内面は同一工具によるナデ調整である。内外面共に丹塗の痕跡が認められる。器色は褐色を帯びた灰色を呈する。胎土には石英、長石、金雲母を含む。天井部径６cm、残存高10.7cmを測る。

26015は、背部がやや湾曲する杏仁形石包丁である。刃付けが行われた完成品である。石材は、輝緑凝灰岩を使用する。全長11.4cm、最大幅4.1cm、厚さ0.7cm、重量35.6gを測る。

26017は、片岩製の打製石斧である。刃部を欠く。残存長6.1cmを測る。

26018は、磨製石剣の身部破片である。断面は厚い紡錘形をなす。凝灰岩製か。

SE02井戸跡（Fig. 4 ・57・58）

本井戸は、調査区の南東部に集中して見つかった井戸のうち、最も北側のものである。規模は、径0.75～0.85m、深さ2.1mで、不整な円形の細身の井戸である。壁面の中位には掘削時の昇降用と考えられる縦長の窪みが認められる。また、湧水点の八女粘土と鳥栖ローム層との境は井戸底部付近にある。井戸内よりの出土遺物は少量である。

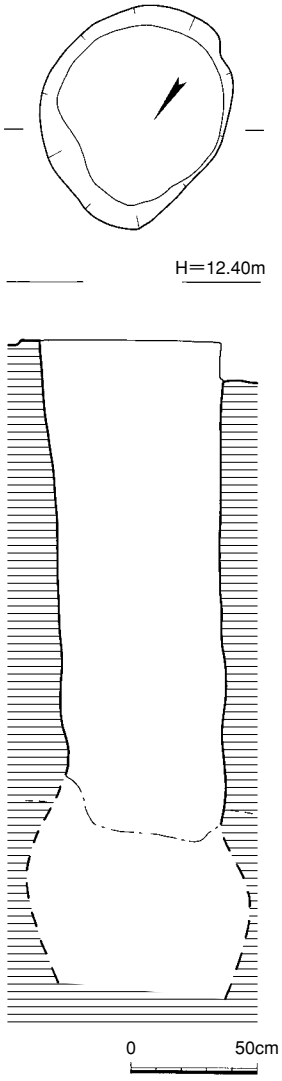


Fig.59　C区SE03井戸跡出土状況実測図（1/30）

出土遺物（Fig.58）

06204は、口縁端部の肥厚する袋状口縁様の壷破片である。胴部は玉葱形の形状となるものか。器面調整は、内面にヨコナデが残る以外は荒れのために不詳である。器色は橙色を呈する。復元口径は12.2cmを測る。

06203は、大型壷底部破片である。調整は、外面がヘラナデか。器色は褐色を帯びた灰色を呈する。また、胎土には石英、長石砂を多量に混入する。底部径8.4cmを測る。

06292は、口縁部がく字に屈曲して立ち上がる後期大型甕口縁部である。口縁下には頭部が平らな突帯一条を巡らす。調整は、胴部外面に細かいタテハケメ、内面にヨコナデを施す。器色は橙色を呈する。胎土には石英、長石砂を多く混入する。復元口径26.2cmを測る。

SE03井戸跡（Fig. 4 ・59・60、PL.14・18）

本井戸は、SE02井戸の南２mのところで検出された。規模は、0.9×0.75m、深さ2.6m以上で、不整な円形を呈する。底部付近は調査中に壁面の崩落が頻繁にあり、危険のため最下部の底面までは調査ができなかった。崩落は鳥栖ロームと八女粘土との境界付近のレベルである。

出土遺物（Fig.60、PL.14・18）

06212は、鉢形の取り瓶かと思われる。器壁は非常に分厚く、ほぼ2.8cm程度を測る。器の外面には口縁端部より8.5cm程下がった位置に同一線上に縄を巻いた様な痕跡が残る。器色は外面上部が裂後に破棄されたと考えられる。淡黄褐色～黄灰色で、残存下端部では黒褐色を呈する。また、内面は、淡灰色を呈する。器壁中には一部に籾殻が見られ、石英粗砂の混入もある。底部付近の破断面には黒色のススが付着することから破裂後に廃棄されたものと考えられる。復元外口径23cm程度、同内口径19cm程度を測る。同一個体かは不明であるが底部破片も出土した。

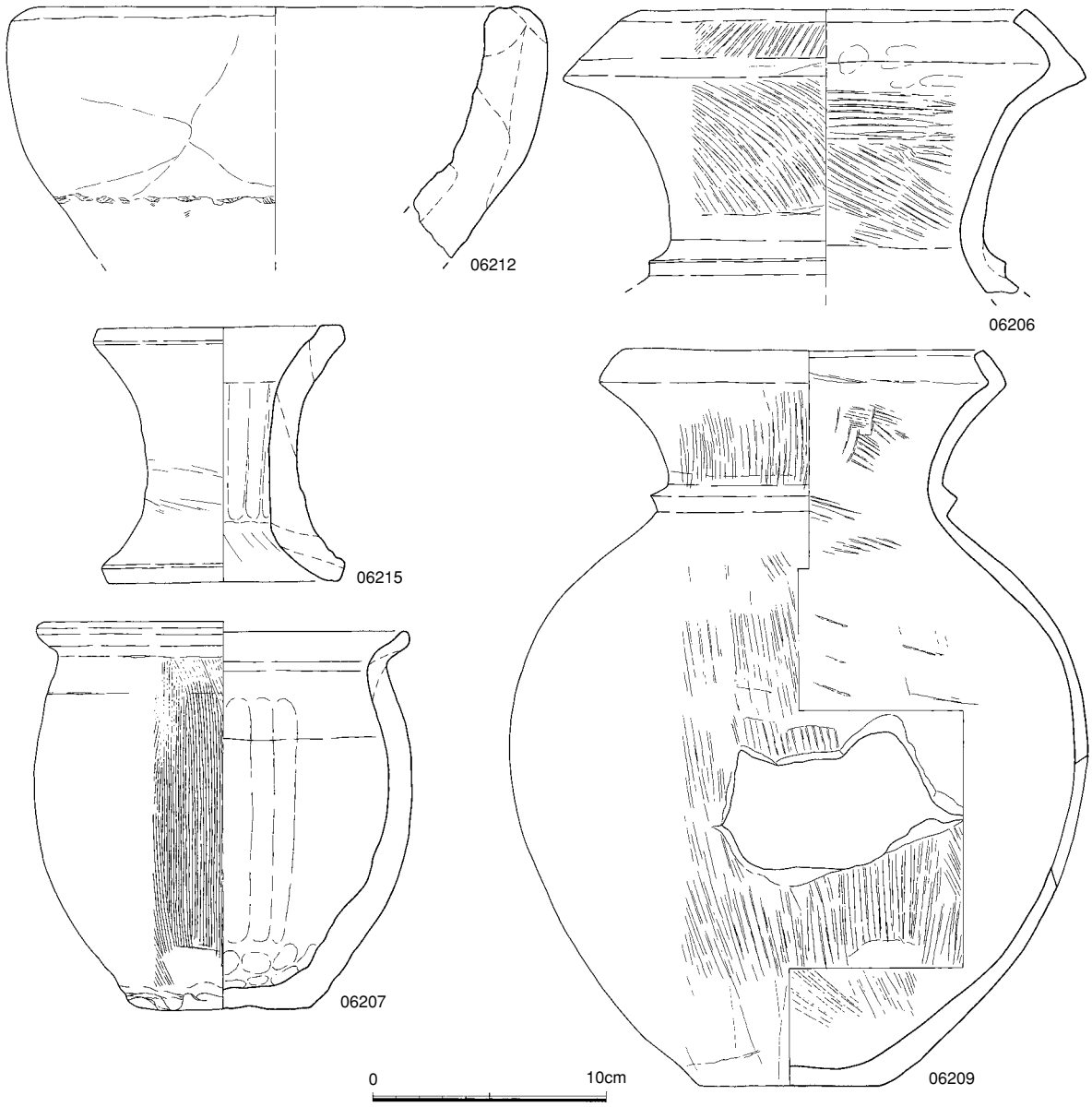


Fig.60　C区SE03井戸跡出土遺物実測図（1/3）

06207は、口縁部がく字形に屈曲し、内面端部がやや跳ね上げ状となる後期の小型甕である。器面調整は、外面が丁寧なタテハケメ調整、内面は指ナデと内底部に指オサエが残る。底部下端付近は調整が十分でなく器面の凹凸が著しい。底部製作の際に円盤との接合がはみ出しているようだ。胴部中央に大黒斑が残る。器色は黄褐色を呈する。胎土に石英砂を多く混入する。口径16cm、器高16.5cm、底部径7.8cmを測る。

06206は、口縁部が鋭く内傾する後期壷破片である。頸部には緩い一条の段状突帯を巡らす。器面調整は、内外面共に荒いハケメを施し、口縁部内外面にヨコナデが残る。器色は黄橙色を呈する。胎土には石英、長石砂を若干含む。焼成は堅緻である。口径16.7cm、残存高12cmを測る。

06209は、半球状の胴部に緩く外開する短い口縁部を有する中型壷である。不安定な底部を持つ。口縁の屈曲部はやや短く、外面には緩い稜が付く。器面調整は、荒れのために鮮明ではないが、外面で口縁と胴部に荒いタテハケメを施し、突帯の上下をヨコナデする。また、内面はハケメ調整が残る。胴部の中位では、内面からの二次穿孔が行われ、器としての役割を失っている。器色は暗灰色を呈する。胎土には石英、長石砂を大量に含む。口径は15.3cm、器高31.4cm、底部径6.8cmを測る。

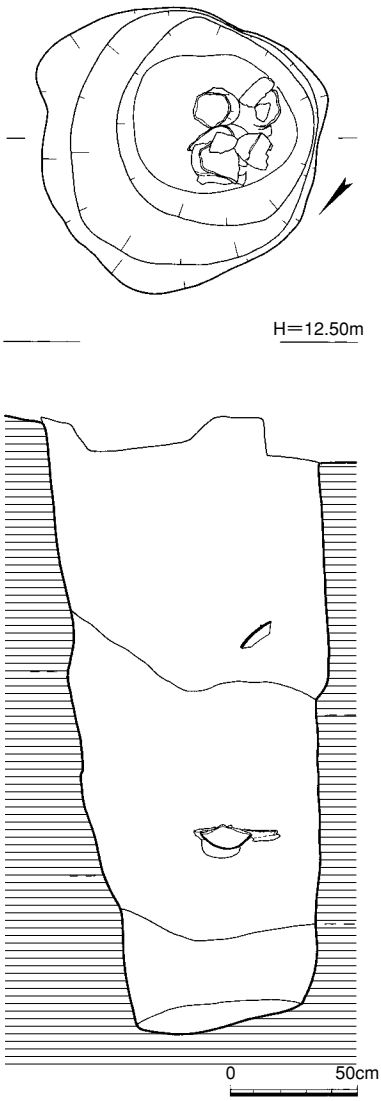


Fig.61　C区SE04井戸跡
出土状況実測図（1/30）

06215は、小型の器台である。器面調整は、外面がヘラナデ後にナデで、内面は脚端部でヘラケズリが見られる他は指ナデが顕著である。器色は灰色を帯びた茶褐色を呈する。胎土に石英砂、赤色粒を混入する。上部径10.4cm、器高10.9cm、脚部径9.8cmを測る。

SE04井戸跡（Fig. 4 ・61・62、PL.13－１・14・15）

本井戸は、SE03井戸跡の４m程南側で検出された。その規模は、径1.1～1.2m、深さ2.45mを測り、不整円形をしたやや大型の井戸である。底面近くを中心に土器の一括投棄が見られた。

出土遺物（Fig.62、PL.14・15）

06219は、口縁がく字形に屈曲する口縁部を有する小型甕である。端部の中央は沈線状に窪む。底部は不安定な平底である。口縁部は一部二次的に打ち欠きである。

器面調整は、外面が胴部に荒いタテハケメ、口縁部付近にヨコナデを施す。また、内面は指によるナデ上げが顕著に見られる。器色は浅い黄橙色を呈する。本来は丹塗りか。胎土には少量の石英、長石砂を混入する。口径は13.5cm、器高16.3cm、底部径6.8cmを測る。

06221は、半球状の胴部に緩く開く口縁部を持つ壷である。口縁部は二次的に打ち欠かれている。器面調整は、胴部外面に荒いタテハケメ調整で、口縁部はナデ調整である。また、内面は、なで調整か。内外面共に丹の痕跡が残ることから本来は丹塗土器であった可能性が高い。器色は鈍い褐色を呈する。胎土には石英、長石砂を多量に混入する。口径15cm、器高25.9cm、底部径7.5cmを測る。

06217は、半球状の細い胴部にやや長い口縁部を有する壷である。底部は非常に不安定な平底である。また、内面の胴部・口縁部の接合部は段をなしている。口縁部は一部打ち欠き、また胴部中位には内面からの二次穿孔を加え、容器としての機能を滅している。器面調整は、胴部外面が荒いタテ・ナナメ方向のハケメを残す。また、胴部内面は荒いタテハケメ、口縁部はナデ調整か。器色は浅い黄橙色を呈する。胎土には石英、長石砂を多量に混入する。口径9.2cm、器高26.4cm、底部径7.2cmを測る。

06220は、半球状の胴部にラッパ状に外開する口縁部を有する後期壷である。口縁部は鋭く内傾し、外面には稜が付く。底部は不安定な平底である。器面調整は、外面胴部が荒いナナメ方向のハケメ、頸部突帯は上下をヨコナデ、口縁部はナナメ方向の荒いハケメが残る。また、口縁内面は指オサエ、頸部との境は指オサエ、胴部内面は荒いハケメ調整が残る。器色は内外面ともに灰白色を呈する。

また、胎土には石英、長石砂を多量に混入している。復元口径は19.4cm、器高30.1cm、底部径7.1cmを測る。

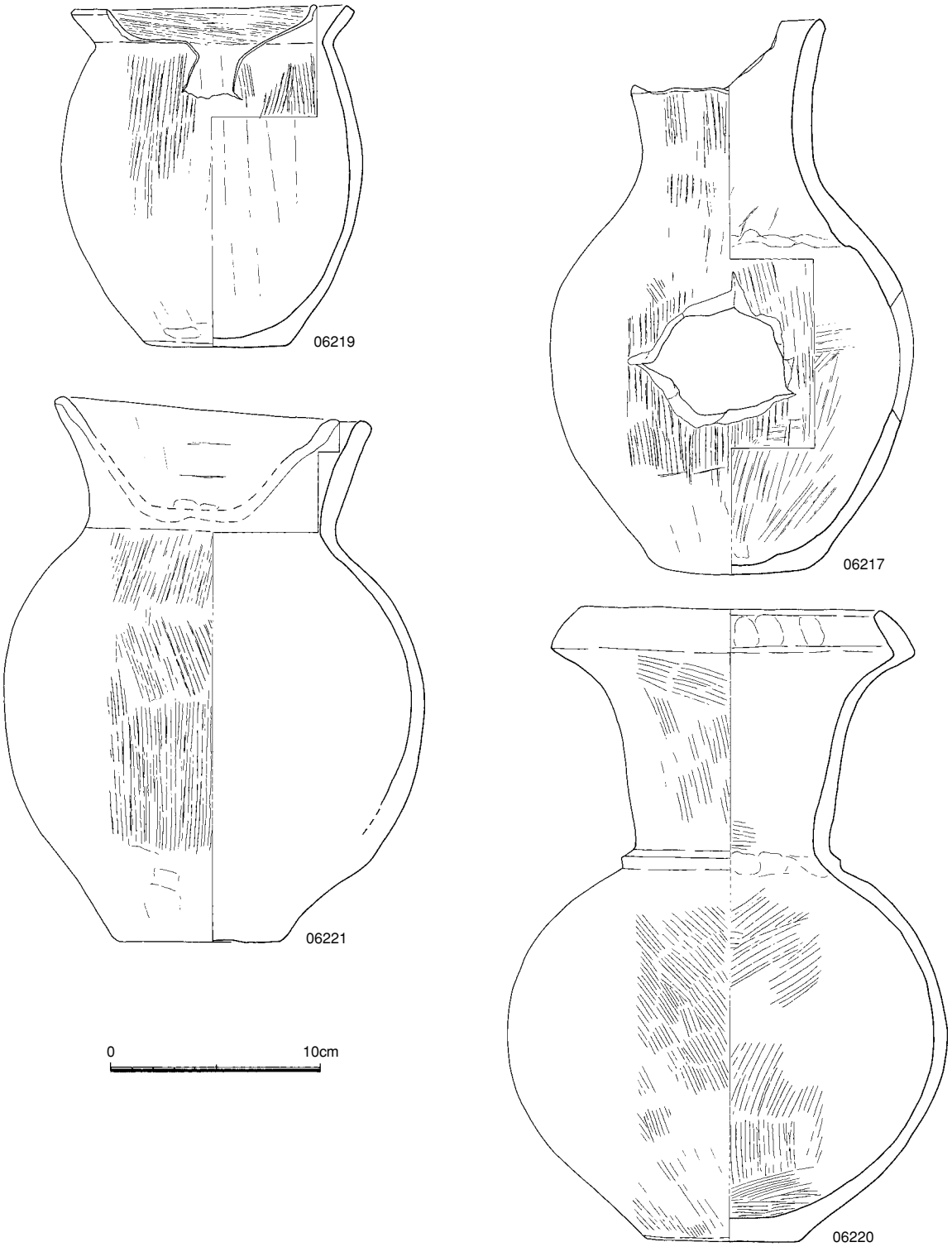


Fig.62　C区SE04井戸跡出土遺物実測図（1/3）

SE05井戸跡（Fig. 4 ・63～67、PL.15～18）

本井戸は、SE04井戸の東側３mの位置で検出された。規模は、1.4×1.2m、深さ2.5m以上であり、やや隅丸長方形に近い大型の井戸である。天端から1.8～1.9m以下では壁面の崩落が著しく、人力で掘り進める個とが困難であったために、可能なレベルまでの断面図を作成した後、重機による断ち割と内蔵遺物の取り上げに務めたが、崩落する壁面からの湧水が多く、十分な調査ができなかった。井戸内からは土器類を中心とした遺物が大量に出土した。

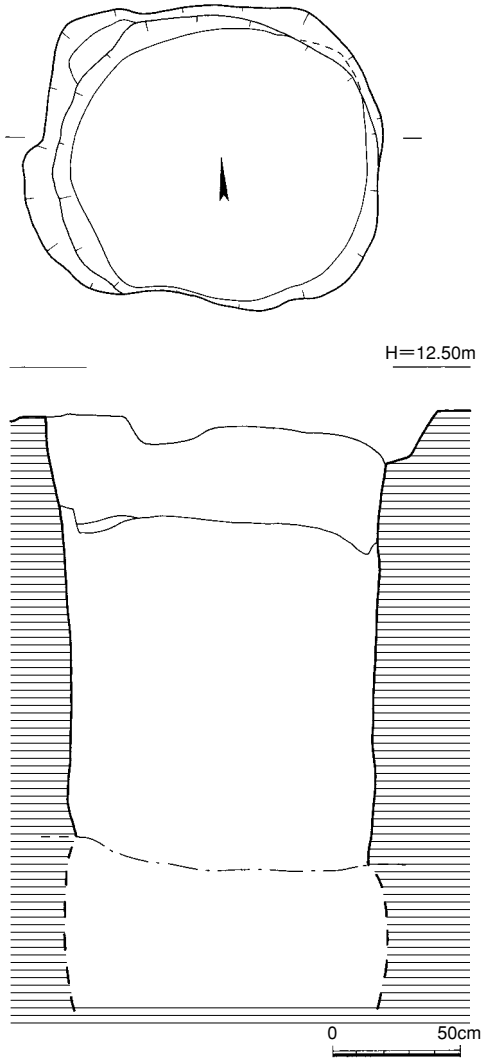


Fig.63　C区SE05井戸跡
出土状況実測図（1/30）

出土遺物（Fig.64～67）

土器類では、小型壷類の出土が多く、他に鋳造関係遺物や小型倣製鏡なども出土した。

06227は、口縁部がほぼ直立しながら立ち上がり、分厚い不安定な底部を持つ小型壷である。井戸からの出土品のために器面調整が良く残る。外面は底部付近と口縁端部付近がナデ調整の他は幅が約１cm程度の板状工具によるハケメ調整が全面に残る。また、内面は口縁部及び頸部付近でヨコナデ、下部は荒いハケメ調整が残る。

器色は灰色味を帯びた赤褐色を呈する。胎土には石英、長石砂を混入する。口径は9.4cm、器高21.4cm、底部径7.3cmを測る。

06241は、やや肩部の張る壷で、口縁端部がやや開く。底部は不安定な平底で、胴部に比べ器壁が安定していない。器面調整は、胴部外面がタテハケメ調整で、粘土接合部にハケ原体引っかかった跡が見られ、内面は荒いハケ後にヨコナデを施す。また、口縁部の内外はヨコナデである。

器色は明黄褐色を呈する。口径は11.1cm、器高26.4cmを測る。

06229は、口縁部断面がく字形をなす無頸壷である。調整は、外面が磨滅のため一部にナナメハケが僅かに残る。また、内面は胴部下半に板状工具によるナデ上げ、頸部には爪跡が残る。器色は明赤褐色を呈する。胎土には石英細砂を含む。口径は、13.5cm、器高15.1cm、底部径７cmを測る。

06224は、口縁部断面がく字形をなし、底部が不安定な平底をなす長胴の後期甕である。器面調整は、胴部外面が口縁部以下を荒いタテハケメ、底部付近を縦方向のヘラケズリを施し、口縁部はヨコナデである。また、内面は内定部に指オサエ、胴部以上は指ナデを施す。器色は淡赤褐色を呈する。口径は14cm、器高24.6cm、底部径５cm程度を測る。

06228は、半球状の胴部にやや緩く外開して、内面が跳ね上げ状となる口縁部を有する壷である。底部は不安定な平底である。器面調整は、胴部外面に荒いタテハケメを施し、口縁部は内外共にヨコナデである。また、内面は、胴部が指によるナデ上げ調整である。器色は黄褐色を呈する。口径は11.8cm、器高21.1cm、胴部最大径16.3cm、底部径７cmを測る。

06238は、胴部の肩が張らず、緩やかに開く口縁部を有する壷である。口縁端部はやや窪む。器面調整は、胴部外面全面に工具幅が約１cmのハケメ調整を施す。口縁部は端部をヨコナデである。内面は、口縁部付近に荒いヨコハケメ、胴部は縦・横方向のヘラナデである。復元口径14.9cmを測る。

06225は、やや肩の張る半球状の胴部に外開する口縁を有する壷である。調整は、外面が荒いタテハケメ、胴部内面の上部にヘラナデ・下部が指ナデ及び指オサエを施す。口径は11.8cm、器高

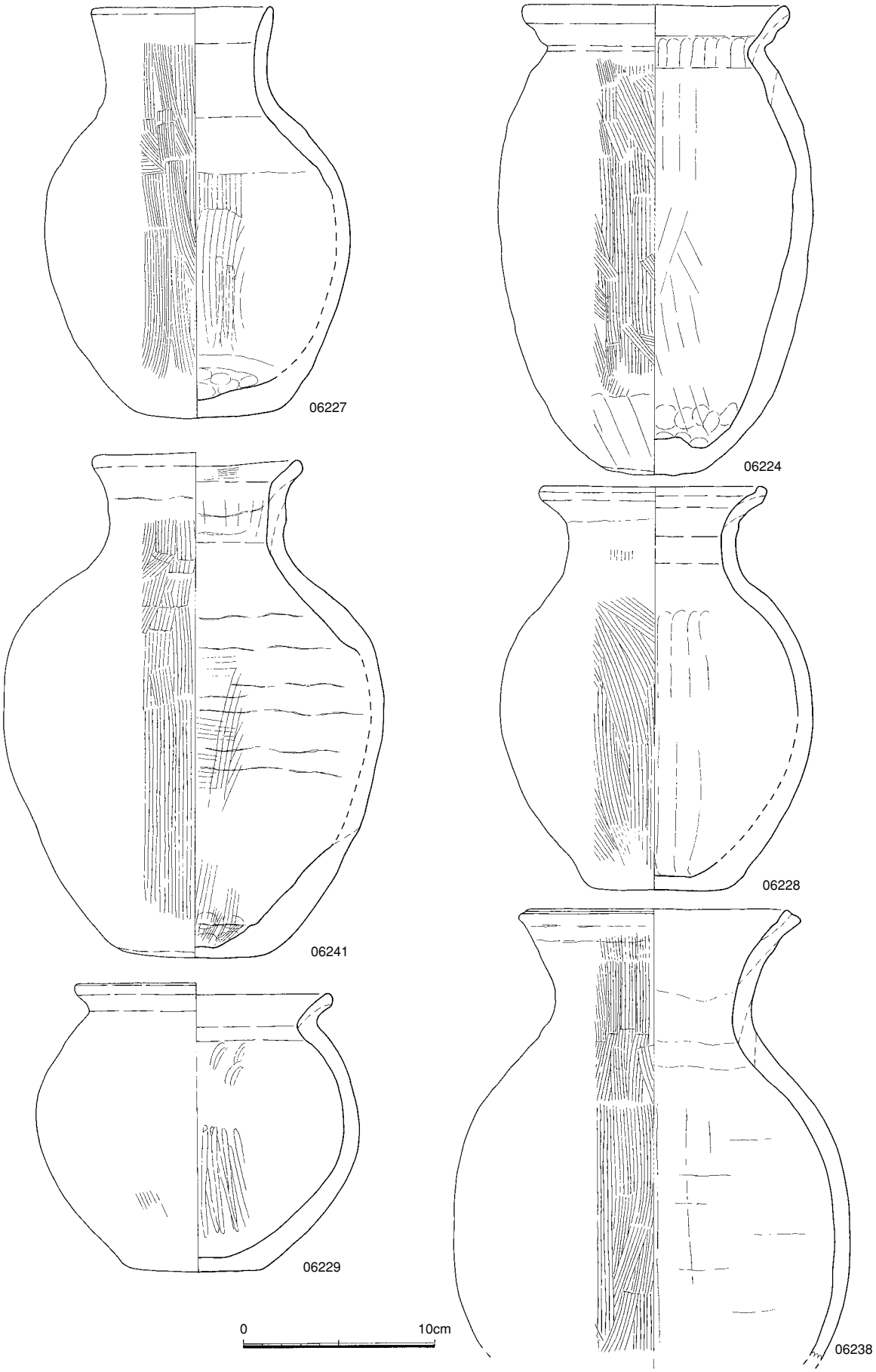


Fig.64　C区SE05井戸跡出土遺物実測図①（1/3）

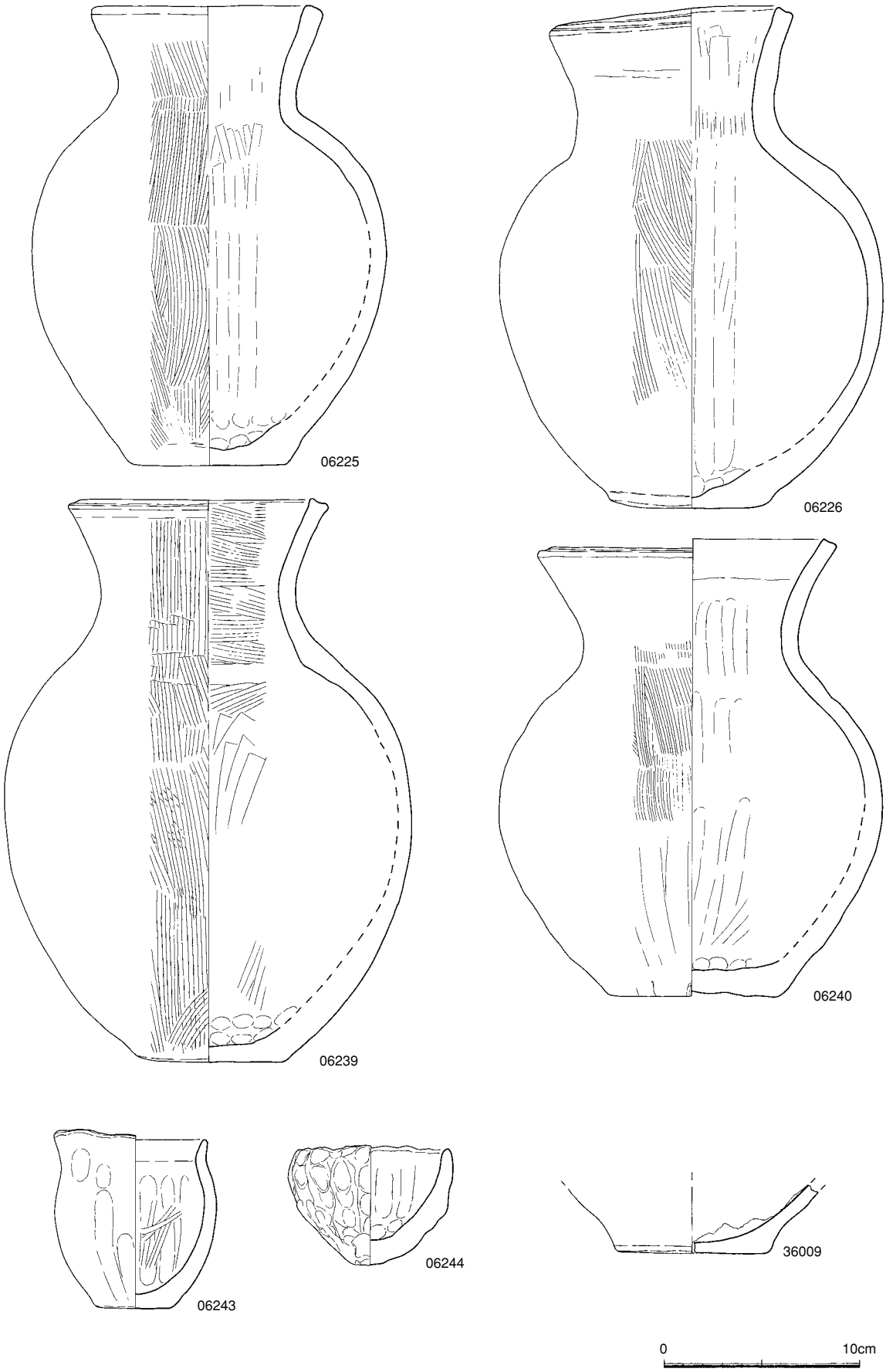


Fig.65　C区SE05井戸跡出土遺物実測図②（1/3）

23.5cm、底部径7.8cmを測る。

06239は、あまり肩の張らない半球状の胴部に反転する口縁部を有する壷である。底部は不安定な平底をなす。口縁部はその端部がやや窪む。器面調整は、胴部外面が荒いタテハケメ調整で、内面は、口縁部が荒いヨコハケメ調整で、胴部以下はヘラ状工具によるナデ上げ・内底部指オサエである。器色は明赤灰色を呈する。外面には丹の痕跡が見られ、本来は丹塗土器か。口径13.3cm、器高28.6cm。底部径7.4cmを測る。

06226は、半球状の胴部に直立気味の口縁部を有する壷である。底部は円盤部が目立ち、不安定な平底である。器面調整は、胴部外面が荒いタテハケメ調整で、口縁部はヨコナデである。また、内面は内底部に指オサエ、胴部以上は指によるナデ上げ調整・ヨコナデを施す。器色は黄色味を帯びた赤褐色を呈する。口径は12.5cm、器高25.6cm、胴部最大径19.6cm、底部径８cmを測る。

06240は、半球状の胴部に緩やかに開く口縁部を持つ壷である。調整は、胴部外面が上半部に粗雑なハケメ調整、下半部は底部からのケズリ上げである。内面は内底部が指オサエ、他が指によるナデ上げである。表裏の対向位置に黒斑が見られる。器色は黄褐色である。口径15.4cm、器高23.4cm、底部径8.6cmを測る。

06243は、小型の手づくね鉢である。口縁部はやや外方に引き出している。調整は内外面共に指ナデである。器色は灰褐色を呈する。胎土に石英細砂を含む。口径7.9cm、器高9.1cm、底部径3.9cmを測る。

06244は、手づくねの小型鉢である。外面には全面に指頭痕が残る。内面は指頭によるナデ上げ調整である。器色は灰褐色を呈する。口径８cm、器高6.2cmをはかる。

36009は、底部端が丸味を持つ後期小型壷の底部である。内底部から胴部内面に銅サビを放つ銅塊が付着する。器色は外面が暗黄褐色で、内面は黒褐色を呈する。底部径8.2cm、残存高3.1cmを測る。この出土資料については鉛同位体分析成果を第Ⅴ章に掲載している。

06235は、半球状の胴部に短く反転する口縁部を有する壷である。頸部は良く絞まっている。器面調整は、胴部外面が荒いタテハケメ調整で、口縁部はヨコナデである。内面は、口縁部に荒いヨコハケ、胴部はヘラナデと考えられる。器色は外面が灰白色、内面は灰白色を呈する。胎土には石英、長石粗砂を多量に混入する。口径は16.3cm、残存器高26.2cmを測る。

06236は、口縁部の殆どを打ち欠き、胴部中位に大きく二次穿孔を加え容器としての機能を滅した壷である。底部は不安定な平底をなす。器面調整は、胴部外面が荒いハケメを残し、内面は指オサエ、指ナデ上げによる調整である。器色は外面が鈍い橙色、内面は明褐色を呈する。口径14cm、残存器高24cmを測る。

06242は、内湾気味の口縁を有する小型鉢である。器面の荒れで調整は不明である。口径13.5cm、器高７cmを測る。

06247は、やや器壁が肉厚の器台破片である。調整は、外面が荒いハケメ、内面は指ナデ・オサエが見られる。器色は鈍い橙色を呈する。脚部径は12.6cmを測る。

06245は、やや大型の器台脚部である。器面調整は、内外面共に荒いハケメ調整を施す。器色は外面が淡い赤橙色、内面は明褐色を呈する。胎土には多量の石英、長石砂を混入する。焼成は堅緻である。脚部径16.2cmを測る。

06249は、大型の器台脚部である。内面は器壁の剥落が多い。器面調整は、外面が指オサエ、ナデが部分的に残る。内面は脚端ぶ近くに指オサエ、指ナデが見られる。器色は外面が灰白色、内面は鈍い橙色を呈する。復元脚部径16.5cmを測る。

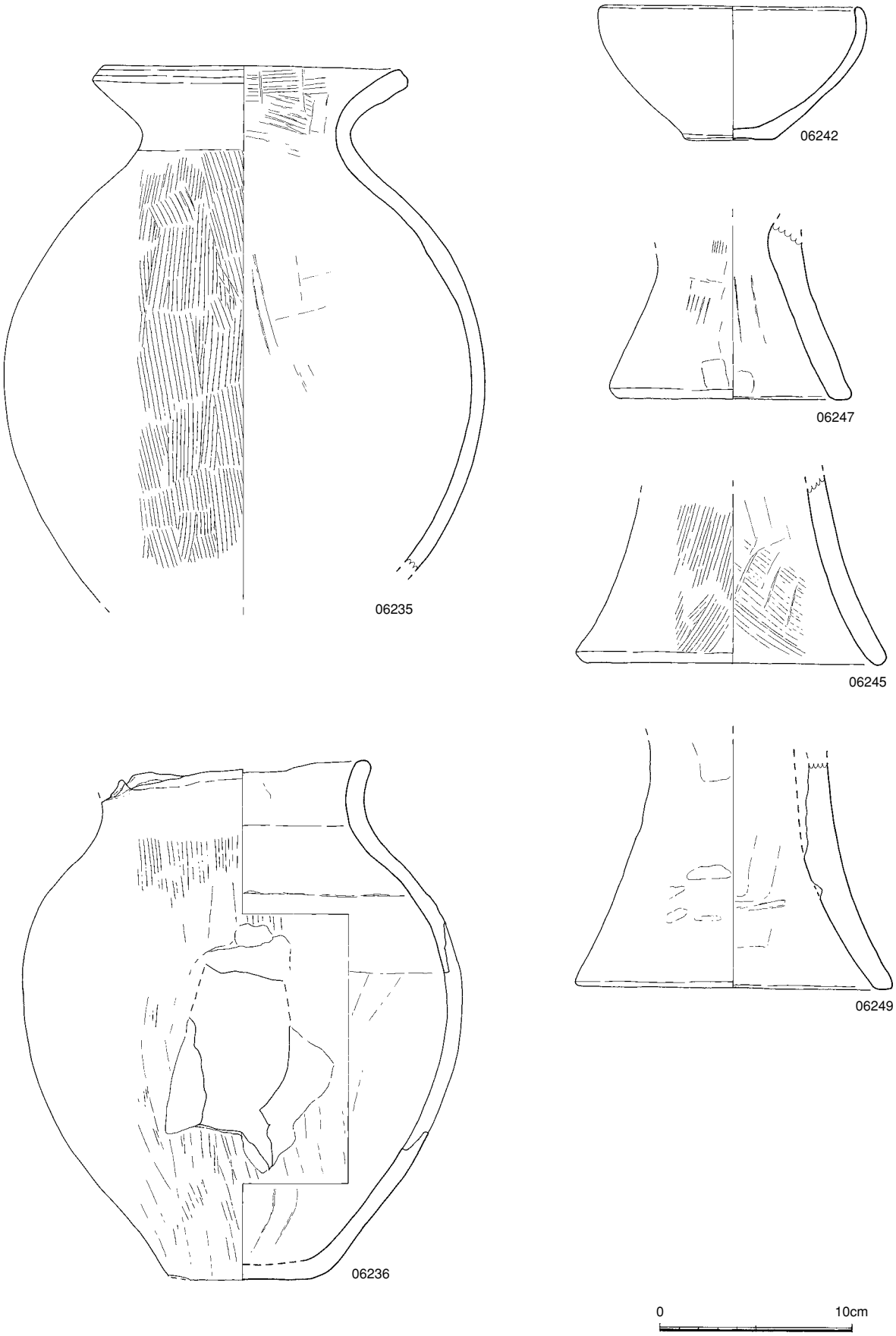
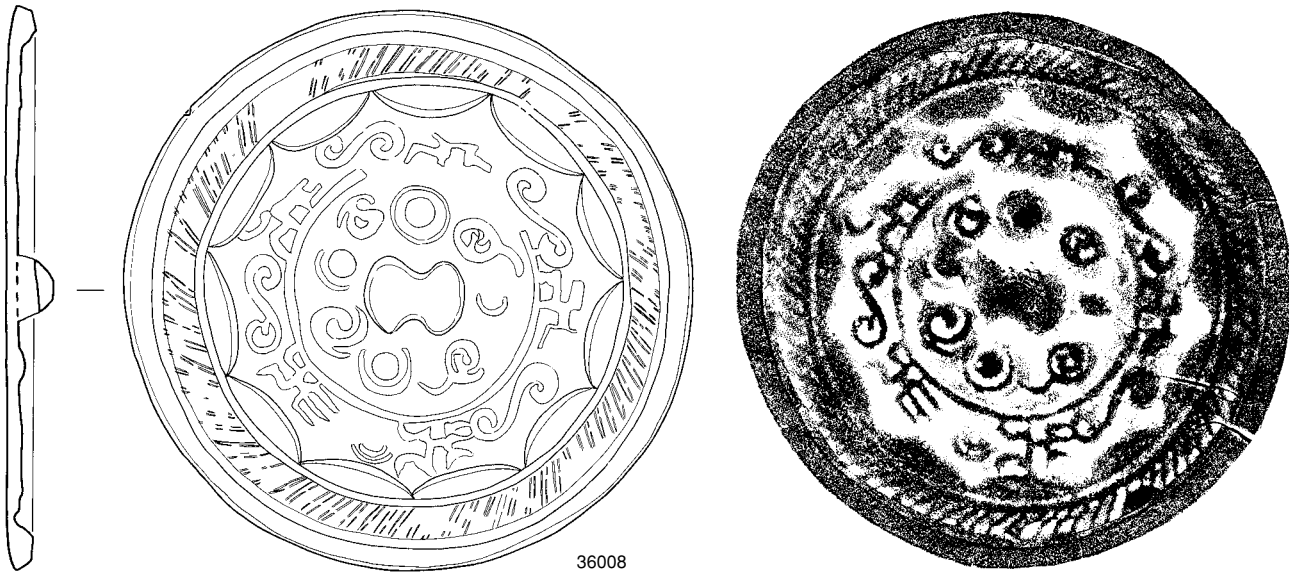


Fig.66　C区SE05井戸跡出土遺物実測図③（1/3）



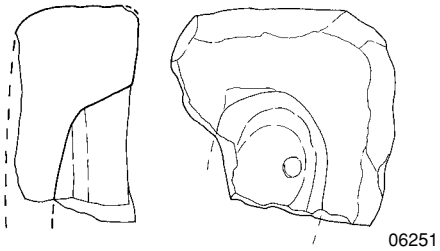


Fig.67　C区SE05井戸跡出土遺物実測図④（1/1）

36008は、井戸埋土中より採集した小型仿製鏡である。発見時には未だ赤銅色をなし、光沢が認められたが、数時間の後に現在の様に錆をふき、鏡背の文様や文字を具に観察できない。

鏡は、面径が7.4cm、厚さ２～1.5mmを測る。紐周辺の文様は珠文といはば双脚輪状文風の文様を交互に配置する。また、文様帯にはデフォルメされた「光」と「S」字文を交互に配置するものと考えられる。

なお、外区の孤文は11個である。X線撮影によると紐部分がやや器壁が薄いが、他は均一に鋳あがっていると見ることができる。

06251は、土製ガラス管玉の鋳型破片である。器色は鋳型部分が淡赤褐色で、周辺部は灰黒色を呈する。勾玉の鋳型面には孔部も見られる。鋳型は３×2.7cm以上、厚さ1.6cm程度のものである。非常に計量である。

勾玉の頭部の厚さは鋳型平坦面から底部までが約１cmあることからこれをうわまることはないものと考えられる。

６．溝状遺構（Fig. 4 ・68）

溝遺構は、調査区全体で８条が検出されたが、このうちの７条（SD01～06・08）は南北溝であり、東西溝は１条（SD07）にすぎない。攪乱や削平のために連続性が無く、非常に浅いものが多い。

SD01溝（Fig. 4 ・68）　調査区の北端部で検出した南北溝で、西辺が未調査である。延長2.5m以上である。溝内からは土器類などが出土した。**06255**は、手づくね鉢である。器色は浅い黄褐色。口径９cm、器高6.7cmである。**06254**は、鉢底部か。器色は黄褐色。底部径7.3cmである。**06253**は、口縁がく字を呈する甕である。器色は黄橙色。口径15.3cm、器高19cmである。

SD02溝（Fig. 4 ・68）　調査区北側で検出した南北溝である。延長5.7m以上・幅0.4mを測る。非常に浅い。弥生中期甕**06256**が覆土内から出土したが、遊離した遺物であろう。

SD03溝（Fig. 4 ・68）　調査区北側中央で検出した南北溝である。延長１m以上、幅0.3mを測る。非常に浅い。覆土から中期甕底部**06257**が出土したが、遊離した遺物であろう。

SD04溝（Fig. 4 ・68）　調査区北側西壁で検出した南北溝である。延長1.8m以上、幅0.6m以上を測る。覆土中より後期二重口縁壷小破片**06258**が出土している。

SD05溝（Fig. 4 ・68）　調査区中央部で検出した浅いコーナーを残す溝である。南北４m以上・東西1.5m以上で、幅１mを測る。非常に浅い。覆土内から須恵器杯蓋**06259**が出土しており、少なくとも６Ｃ後半以降の所産であろう。

SD06溝（Fig. 4 ・68）　調査区南側で検出した南北溝である。延長11m以上、幅１mを測る。覆土

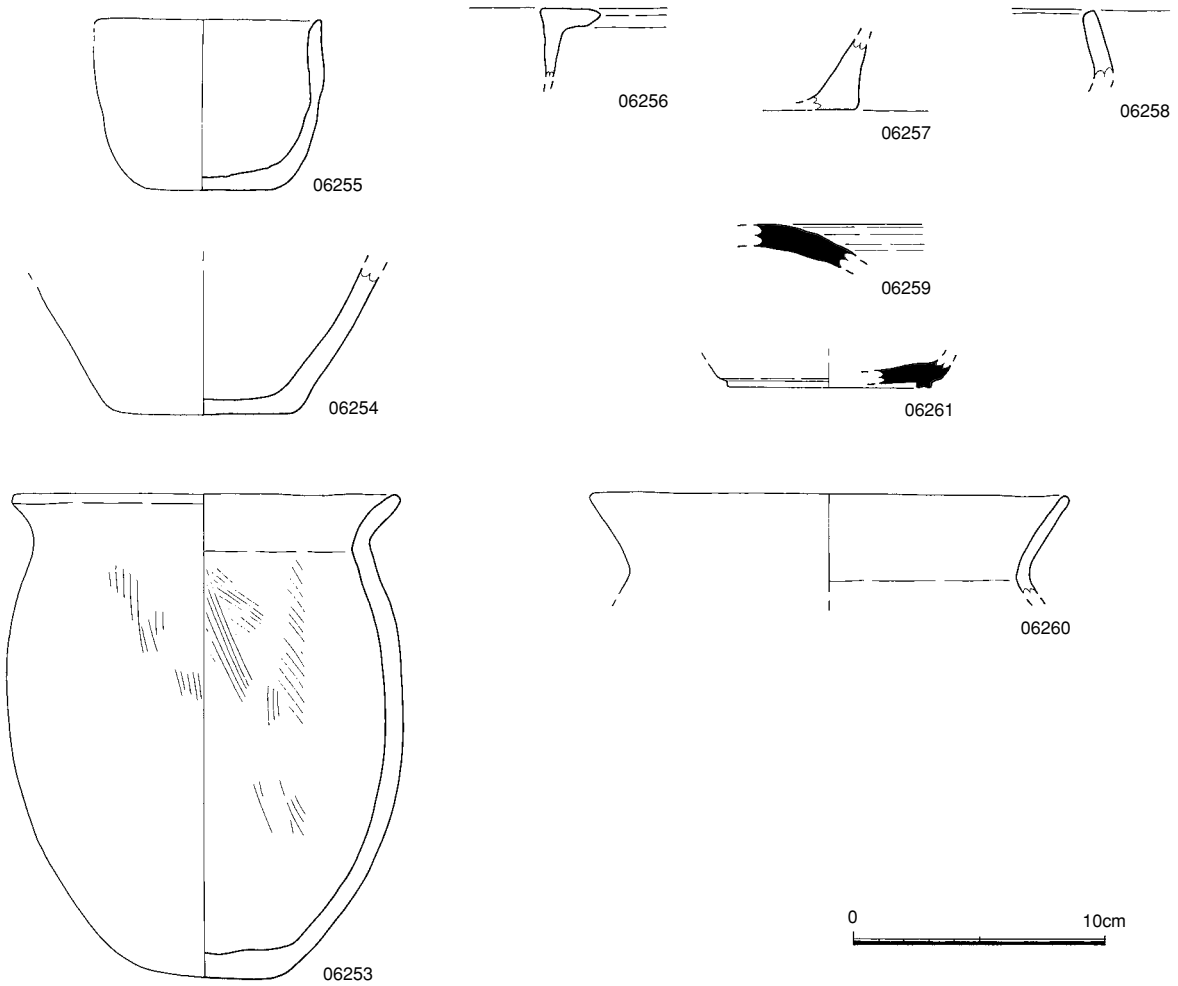


Fig.68　Ｃ区SD01～06溝出土遺物実測図（1/3）

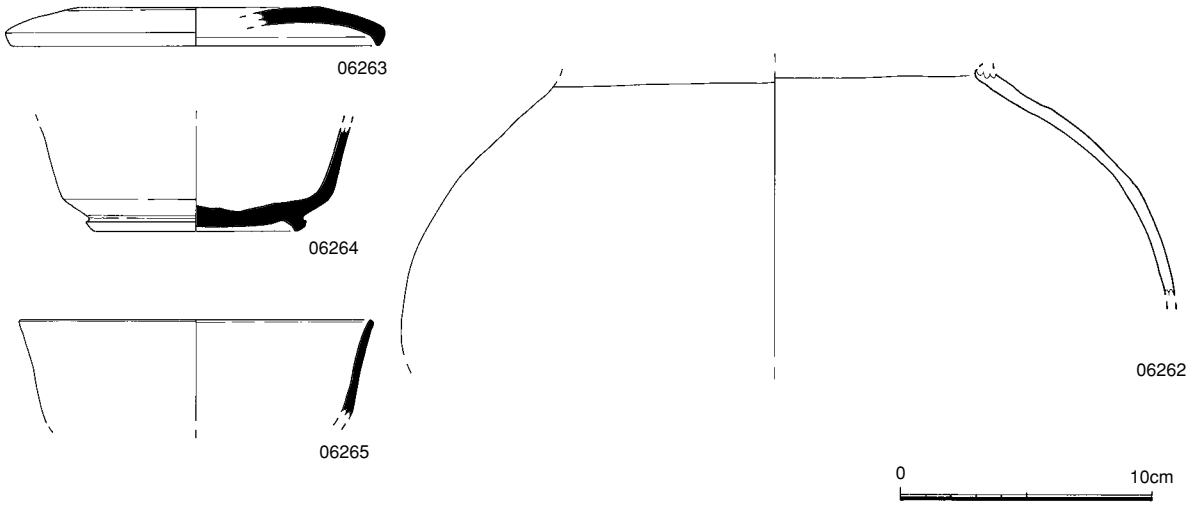


Fig.69　C区SF01溝出土遺物実測図（1/3）

内から須恵器高台杯**06261**や土師器甕**06260**が出土しており、少なくとも平安期以降の所産か。

SD07溝（Fig. 4）　調査区南端で検出した東西溝である。延長３m以上、幅0.7mを測る。

SD08溝（Fig. 4）　調査区南東部端で検出した南北溝である。延長2.3m以上、幅0.6mを測る。

７．道路状遺構（Fig. 4 ・69）

道路状遺構は、調査区の北端部から南に延びるもので、両側には幅が約１mの側溝が付設される。確認できる側溝の規模は、西側延長で17m、東側5.7mが検出できた。溝は浅く、皿状の断面となる。溝内からは小破片ながら須恵器破片が出土している。

また、側溝に挟まれる平坦面が道路面と考えられ、幅員は5.5m規模であり、現在の道路地割と殆ど一致する形状である。調査区では17次調査Ａ区で瓦を伴う溝遺構が検出され、これらと連続する可能性が高い。

出土遺物（Fig.69）

06263は、須恵器杯蓋である。器面調整は、内外面共にヨコナデである。器色は灰白色～灰色を呈する。口径14.5cm、器高1.5cmを測る。

06264は、須恵器高台杯である。高台は低く、杯の底部端に近く付く。器面調整は、内外面共にヨコナデである。器色は灰白色を呈する。高台部径８cm、残存高4.1cmを測る。

06265は、須恵器杯口縁部である。器面調整は、内外面共にヨコナデである。器色は灰白色を呈する。復元口径14cm、残存高4.1cmを測る。

06262は、弥生土器壷胴部破片である。器色は浅い黄橙色を呈する。胴部最大径31.8cmを測る。

第Ⅳ章　D区調査の記録

ー概　要ー　D区は、現道を挟み、C区の北西側に位置する。調査は、南側部分で近接する家屋の日常的な通路等を確保する必要があり、一部が未調査となったことと北西隅部分では後世の大攪乱で遺構が失われていたことから調査を除外した。

しかしながら、C区に比較するとD区は全体的には遺構の遺存状況は良好であった。

調査では、弥生時代中期初頭期～同後期末までの竪穴住居跡18軒、同後期掘立柱建物２棟、同中期初頭期～後期終末期の土坑27基、同中期後半～後期後半期井戸跡３基、同後期～中世期溝状遺構７条、道路状遺構３条等を検出したが、特に竪穴住居跡の遺存は良かった。これはより西側にあり、丘陵斜面にあたることから削平の程度に差が生じた可能性も考えられよう。

また、遺構からの出土遺物では、SE03井戸で中期後半期の丹塗り壺や甕・大型器台なども多く出土し、周辺に同時期の墓地があったものと推測される。SD07溝では須恵器杯や平瓦などが知られ、Ａ・C区の溝・道路状遺構と一体をなすものと考えることができる。

以下、遺構毎に成果を列記する。

１．竪穴住居跡（Fig.70・71～91、PL.23～32）

竪穴住居跡は、狭隘な調査区ながら16軒相当が検出された。相互に重複が見られるが、比較的残存状態は良好である。

SC01住居跡（Fig.70・71・73、PL.23－２）

本住居跡は、調査区の北端部西側で検出した方形或いは長方形住居である。調査では南側隅部を露出するにとどまった。現存で南壁長4.7m以上、東壁で1.5m以上を測る。また、深さは0.1mを前後する。南壁では幅が0.8m前後の不整なベッド状施設が取り付く。

また、東壁には壁溝内に径0.1m程度の小ピットが連続して打ち込まれており、壁構造の一部をなすものと考えられる。

出土遺物（Fig.73）

05001は、頸部に三角突帯一条を巡らす壷破片である。調整は、器面の荒れが著しく、突帯の上下にナデが残る。器色は内外面共に橙～黄橙色を呈する。胎土に石英粗砂の混入が多い。

05002は、胴部に二条の鈍い突帯を巡らす壷破片である。調整は、外面がヨコナデを残す。器色は内外面共に黄橙色を呈する。外面に黒斑が見られる。胎土に石英細砂を少量含む。

25001は、円礫の縁辺を使用する磨石である。また、平坦面には打痕があり、叩石としても使用している。石材は、花崗岩である。

SC02住居跡（Fig.70・71・73、PL.24）

本住居跡は、調査区の北端壁付近で検出した。北側隅部を除きほぼ全体が調査できた。平面プランは長方形を呈し、南・北壁長4.7m、東・西壁長2.3m、深さ0.1～0.2mを測る規模である。主柱穴は特定できないが、南壁及び北壁に沿って小ピットが不定間隔に並ぶことからこれらが主柱穴であった可能性がある。住居跡の覆土は黒褐色粘質土で単一である。共伴する土器破片が少量出土した。

出土遺物（Fig.73）

05004は、上端がやや内傾する小型の平坦口縁を有する甕破片である。中期初頭期の所産である。器色は橙色を呈する。

05005は、肥厚する平坦口縁を有する甕口縁破片である。器色は内外面共に赤褐色を呈する。器面

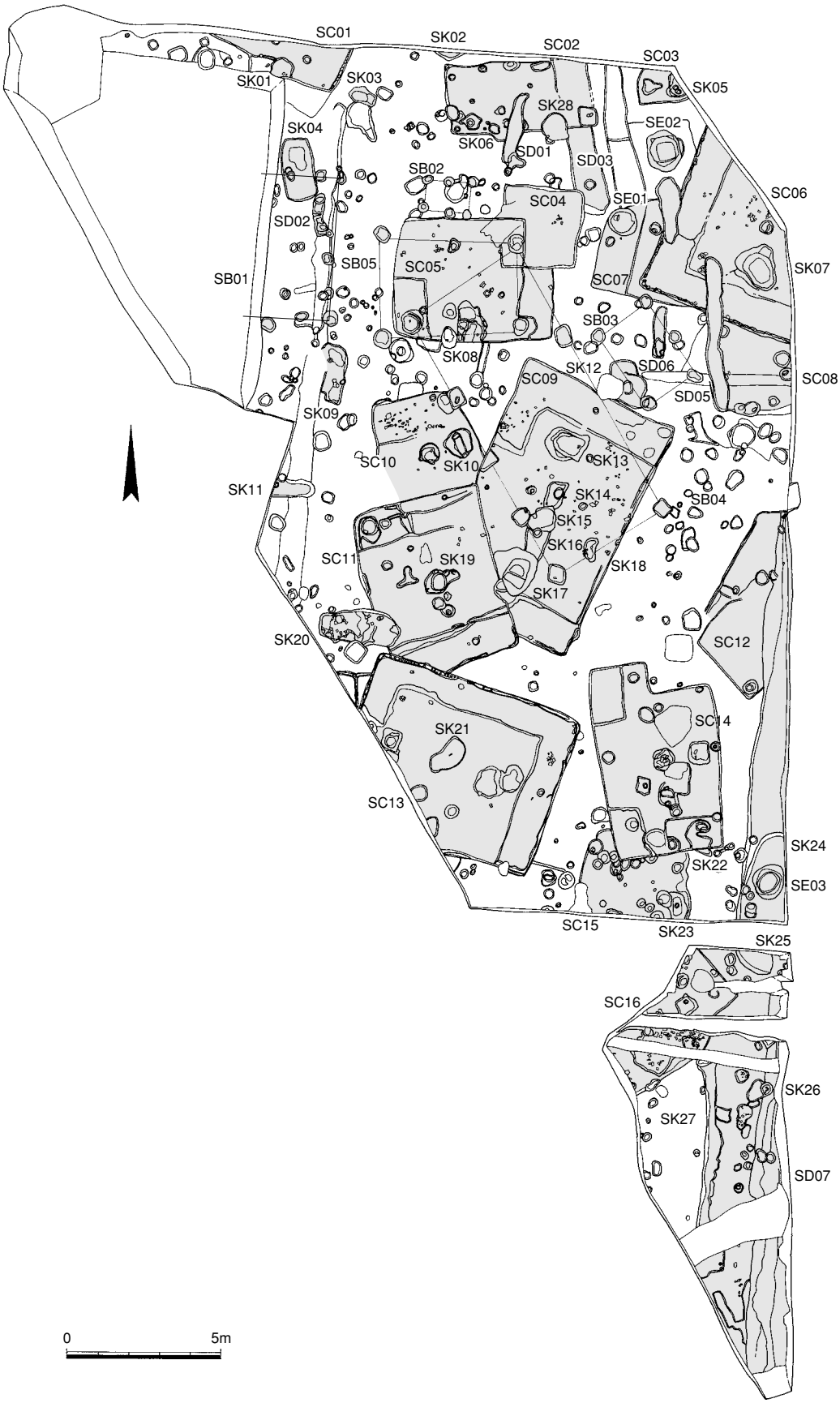


Fig.70　D区遺構出土状況全体図（1/200）

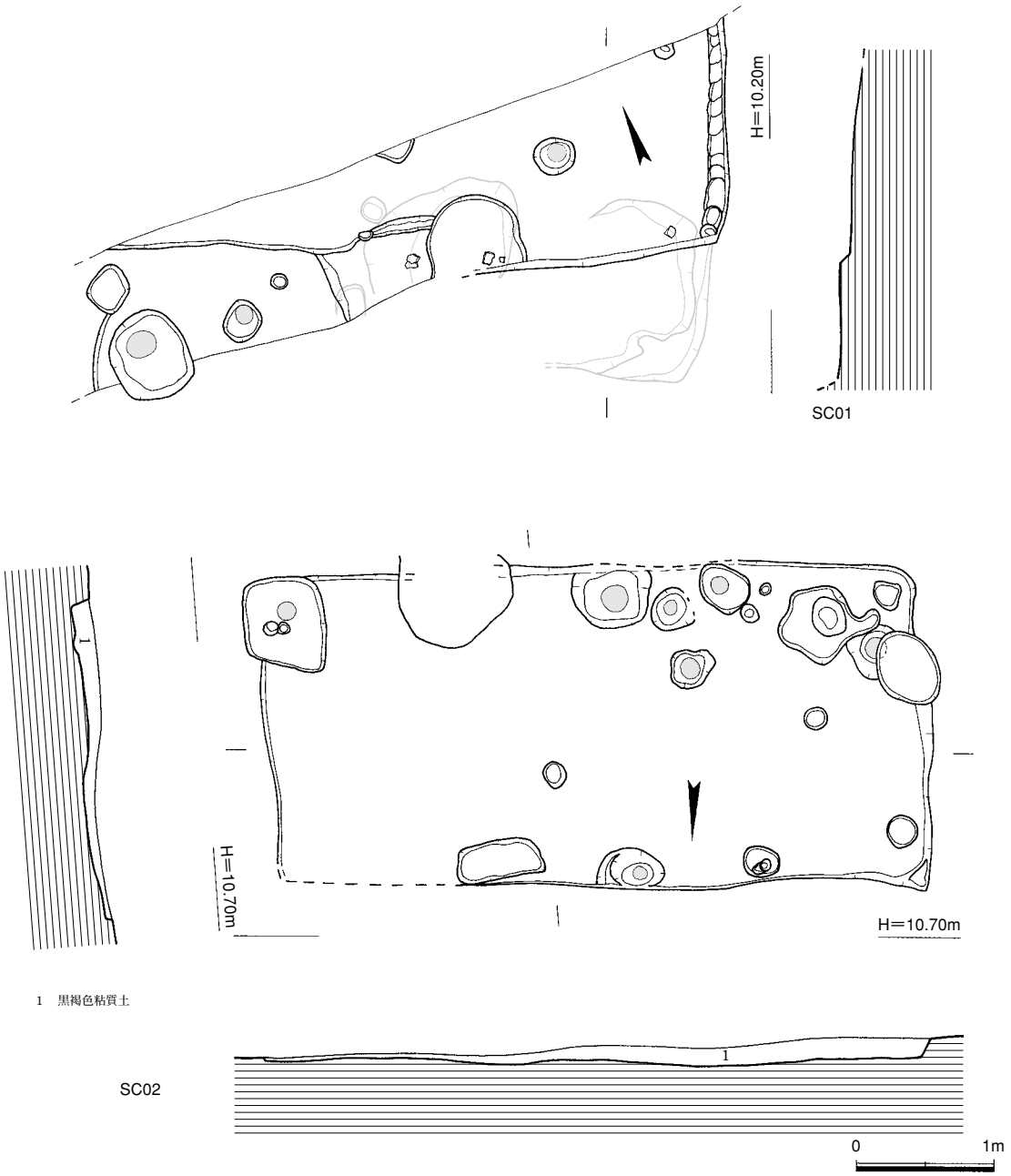


Fig.71　D区SC01・02竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）

の荒れが著しく、内面にナデが残る。胎土には石英細砂を少量含む。中期初頭の所産である。

05003は、口縁が内径する甕破片である。平坦口縁をなし、造りは良好である。器面調整は、外面にヨコナデが残る。器色は内外面共に鈍い橙色～橙色を呈する。胎土には石英・長石の細砂～粗砂を多量に含む。

05006は、底部を欠く小型鉢である。外面には条痕状のナデ、内面にナデ調整が残る。器色は橙～黒褐色を呈する。胎土は粗で、石英細砂～粗砂を大量に含む。

SC03住居跡（Fig.70・72・73）

本住居跡は、調査区の北端部東隅で検出した方形或いは長方形住居である。西側隅部が露出しているものと考えられる。南壁長1.7m、西壁長1.2m、深さは床面まで0.1m強を測る。主柱穴やその他の施設については不詳である。

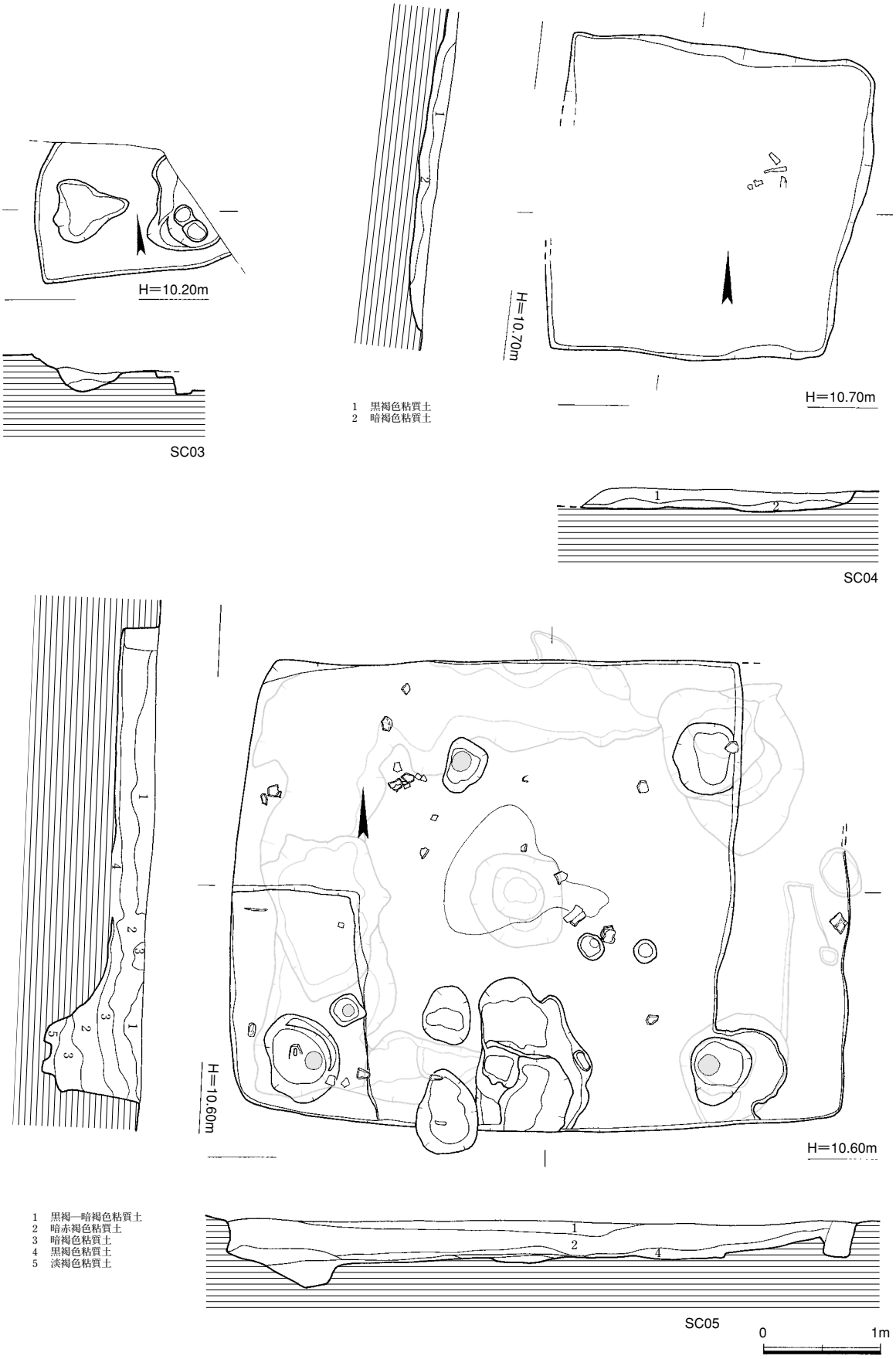


Fig.72　D区SC03・04・05竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）

出土遺物（Fig.73）

05007は、杯部が小型の椀で、外方に良く踏ん張る脚部を有する土師器器台である。器面の荒れのために調整は不詳である。器色は内外面共に黄橙色を呈する。胎土には石英・長石砂を含む。焼成は軟質である。

05008は、住居跡に共伴するものではないが、平面上の位置で出土した平瓦破片である。器壁は２cm程度を測る。調整は、外面がナデ調整、内面には荒い布目圧痕・指頭痕が残る。器色は灰色である。

SC04住居跡（Fig.73、PL.25）

本住居跡は、調査区北端からやや南側中央で検出された方形プランの住居と考えられる。住居は、SC05住居と切り合い、これより新しい時期の所産である。その規模は、南壁長2.35m、北壁長2.6m、東壁長2.45m、西壁長2.7mを測り、ややいびつである。また、深さは約0.2mを測り、断面形は壁が垂直に立たず、床面も皿状に窪む。その覆土は２層に区別される。第１層は黒褐色粘質土、第２層ー暗褐色粘質土であり、何れからも土器類の小破片が出土した。

出土遺物（Fig.73）

05011は、中期甕の口縁部破片である。器面の荒れが著しく、調整不明である。器色は黄橙色を呈する。胎土には石英細砂を混入する。

05013は、大型の中期甕口縁部破片である。甕棺使用の可能性もある。調整は磨滅のために不明である。器色は内外面共に橙色を呈する。胎土に石英、長石細砂を少量含む。焼成は堅緻である。

05009は、甕底部破片である。調整は、外面ナデか。他は不詳である。器色はハイガイ面共に橙色を呈する。胎土には石英、長石細砂を少量混入する。小背は堅緻である。

05012は、不安定な平底を有する甕底部破片である。器面調整は、荒れのために不明である。器色は内外面共に橙色を呈する。胎土に石英細砂を少量含む。焼成は堅緻である。

05010は、不安定な平底を有する甕破片である。器面の荒れのために調整は不明である。器色は内外面共に橙色を呈する。焼成は堅緻である。

05014は、丸味を帯びた端部を有する甕底部破片か。調整は、磨滅のために不明である。器色は内外面共に明黄褐色を呈する。胎土には石英、長石粗砂を含む。焼成は軟質である。

SC05住居跡（Fig.70・72・73・74、PL.27）

本住居跡は、調査区北辺の中央付近で検出された住居で、SC04住居に切られる。住居の平面プランは、東西に長い長方形を呈し、東壁側と西壁側の一部にベッド状施設が付設されている。北東隅側の壁を失う。その規模は、南壁長5.2m、北壁長４m以上、東壁長2.3m以上、西壁長3.8mを測る。また、深さは0.3m程度で、幅が１m強のベッド状施設との比高差は0.1m以下である。

主柱穴は北西側で検出できなかったが、西・東・北位置に同規模の柱穴が配置されており、４本であった可能性がある。柱穴内で確認できた柱痕は径0.1～0.15mを測る。なお、中央部には浅い皿状に窪む炉跡が見られる。住居に伴う土器類は破片が多い。

出土遺物（Fig.73・74）

05026・05030・05023は、平坦口縁を有する中期壷・甕の破片である。

05028は、口縁端部がやや垂れる鉢形土器破片である。磨滅のために調整は不明である。器色は内外面共に橙色を呈する。胎土には石英粗砂等を多量に混入する。焼成は堅緻である。

05029は、中期壷の底部か。器色は明黄褐色を呈する。復元底部径７cmを測る。

05021は、大型の壷底部破片である。外底はやや上げ底気味である。調整は、外面に荒いナナメハケが一部に残る。器色は内外面共に明黄褐色を呈する。また、外面には黒斑が残る。胎土は粗である。

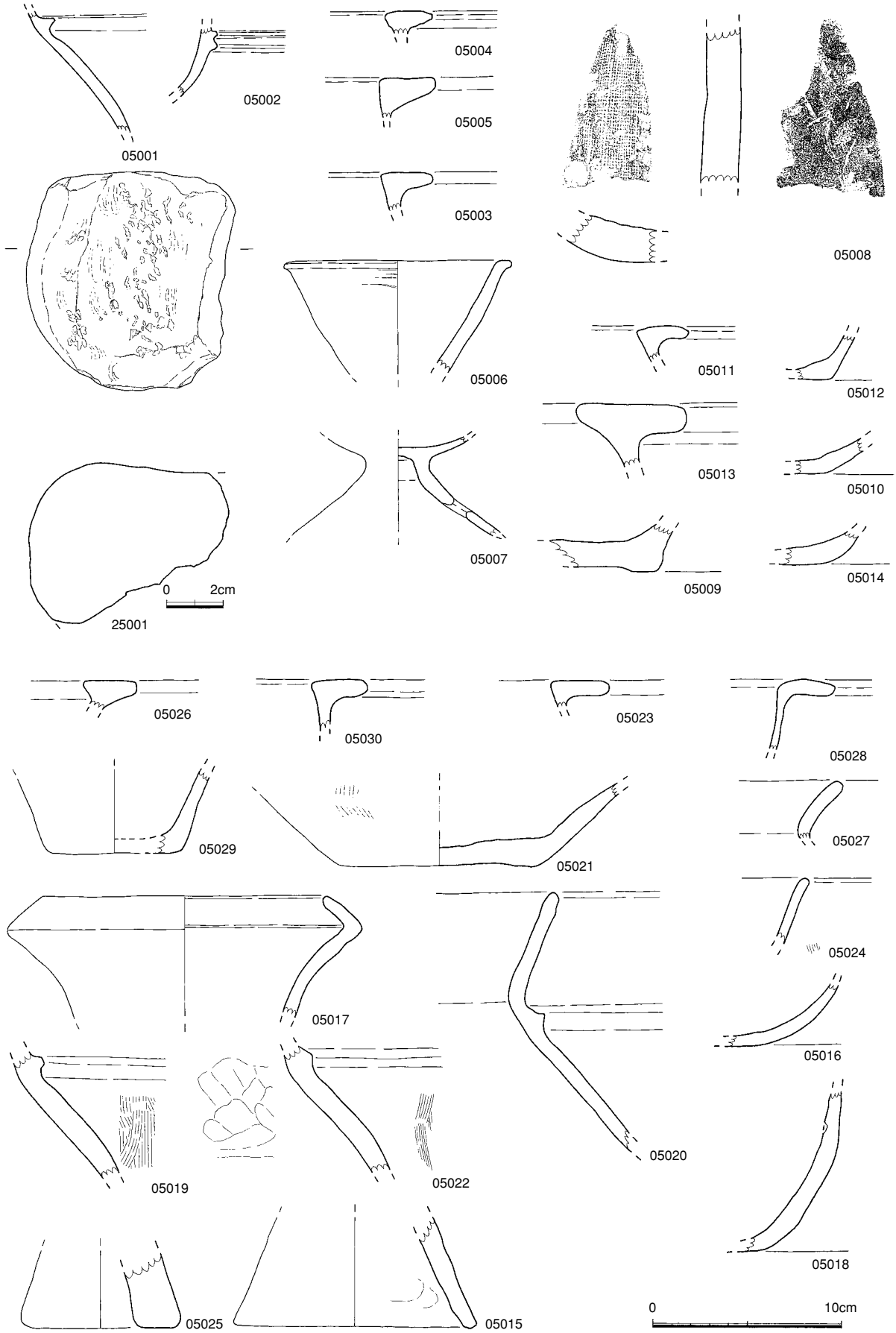


Fig.73　D区SC01～05竪穴住居跡出土遺物実測図①（1/3・1/2）

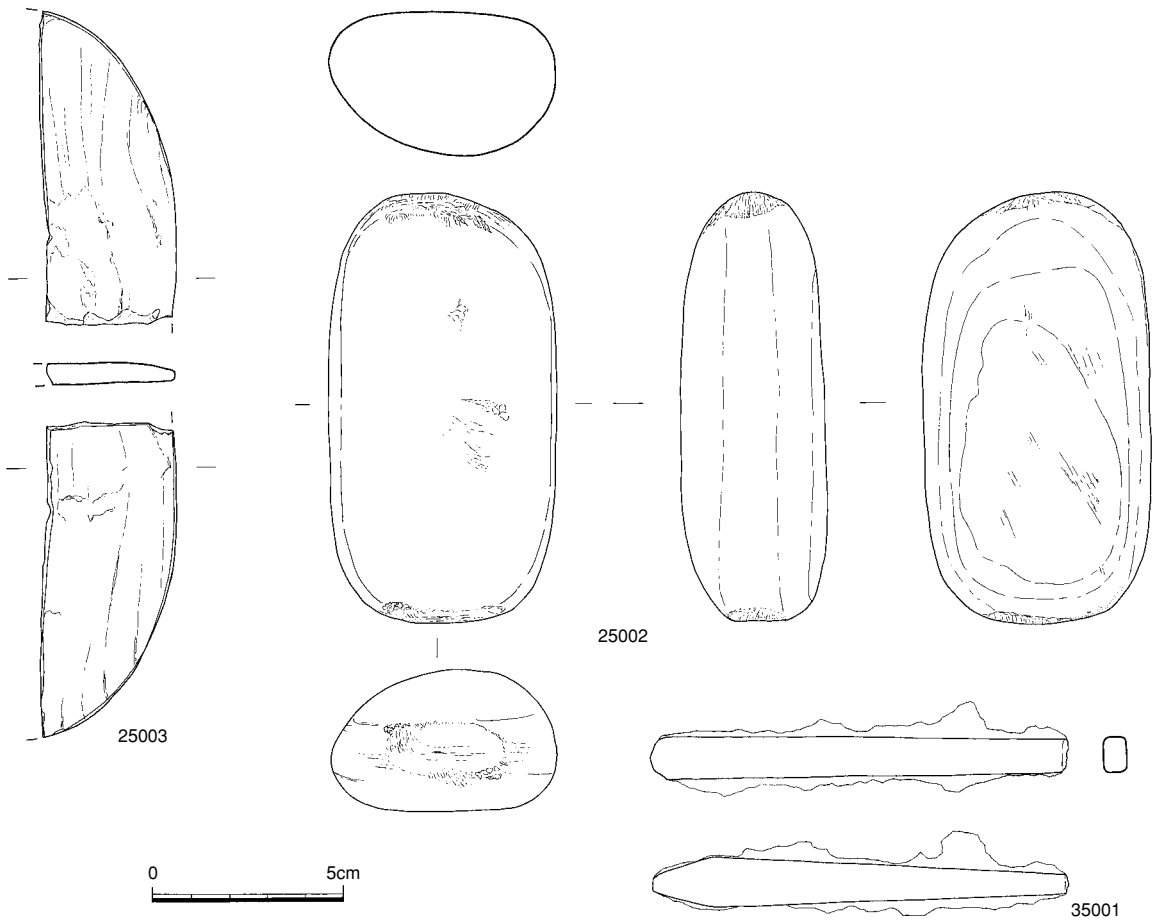


Fig.74　D区SC05竪穴住居跡出土遺物実測図②（1/2）

復元底部径10.5cmを測る。

05027は、小型の甕口縁破片である。**05024**は、小型の鉢口縁部小破片である。

05017は、口縁端部の内傾が強く、外面に稜を有する後期複合口縁壷破片である。調整は、磨滅のため不明である。器色は外面が橙色で、内面は明黄褐色を呈する。胎土には石英、長石の粗砂を多量に含む。焼成は堅緻である。復元口径18.8cmを測る。

05020は、口縁がハ字に開き、口縁下に一条の三角突帯を巡らす大型の甕破片である。器面は荒れのために調整が不詳である。器色は内外面共に浅い黄橙色を呈する。口縁と胴部の一部に黒斑が見られる。胎土には石英粗砂の混入が多い。焼成は堅緻である。

05016は、椀の底部破片か。調整は、不明である。器色は内外面共に橙色を呈する。

05018は、底部が丸底にちかい小型甕である。器面調整は、荒れのために不明である。器色は外面が明灰褐色で、内面は灰白色を呈する。胎土には石英、長石細砂を少量含む。焼成は堅緻である。

05019は、頸部に端部の鈍いコ字形突帯一条を巡らす後期壷破片である。調整は、外面にタテハケメを残すほか、突帯の上下はヨコナデである。また、内面はナデ調整である。器色は内外面共に橙～明赤褐色を呈する。胎土には石英、長石細砂を含む。焼成は堅緻である。

05022も頸部に鈍い三角突帯を巡らす後期壷破片である。調整は、外面に細かいタテハケメ、内面は指オサエである。器色は内外面共に橙色を呈する。胎土に石英、長石細砂を多量に混入する。焼成は堅緻である。

05025は、肉厚の器台脚部破片である。器色は内外面共に橙色を呈する。器壁は2.4cm前後を測る。

胎土には多量の石英、長石砂を混入する。焼成は堅緻である。

05015は、器台の脚部である。内面に指オサエが残る。器色は内外面共に橙色を呈する。また、胎土には石英、長石砂を多量に混入する。焼成は堅緻である。復元脚径12.8cmを測る。

25002は、円礫の両端部に打痕を有する叩石である。また、平坦面は磨石としても使用する。石材は、細粒砂岩である。長短が11.2×７cm、厚さ3.8cmを測る。

25003は、板状の珪化木の周辺に研磨を加えた石製品破片である。長短が、8.3×3.5cm、厚さ５mmを測り、周辺に従って薄く研ぎ出す。

35001は、下端部が楔状の断面をなす鉄器である。下端は潰れており、上端は折損しているものと思われる。身部は断面が長方形をなすことからタガネと考えられる。全長11cmを測る。

SC06住居跡（Fig.70・75・76、PL.28－１）

本住居跡は、調査区の北端部東側の壁際で検出した。住居は、南壁と西壁の一部が調査区内で確認できた。住居の平面プランは長方形と考えられ、南・西壁に沿って幅１m程度のベッド状施設が付設されている。また、両壁に沿う壁溝内には径が５～10cm程度の小ピットが連続して検出され、壁構築の芯材と考えられる。住居跡の残存規模は、南壁長が5.35m、西壁長5.7m以上を測る。床面までの残りが0.2m程度を測る。主柱穴は、中央の壁際に検出した径0.4mの柱穴が南側の主柱穴にあたるかと思われる。いずれにしても住居跡は、短辺長６m、長辺長9.5m前後のサイズに想定ができ、本調査区の中で最も大型のものと考えられる。住居に伴う遺物は床面近くで比較的多くの土器類が出土した。

Fig.75　Ｄ区SC06竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）

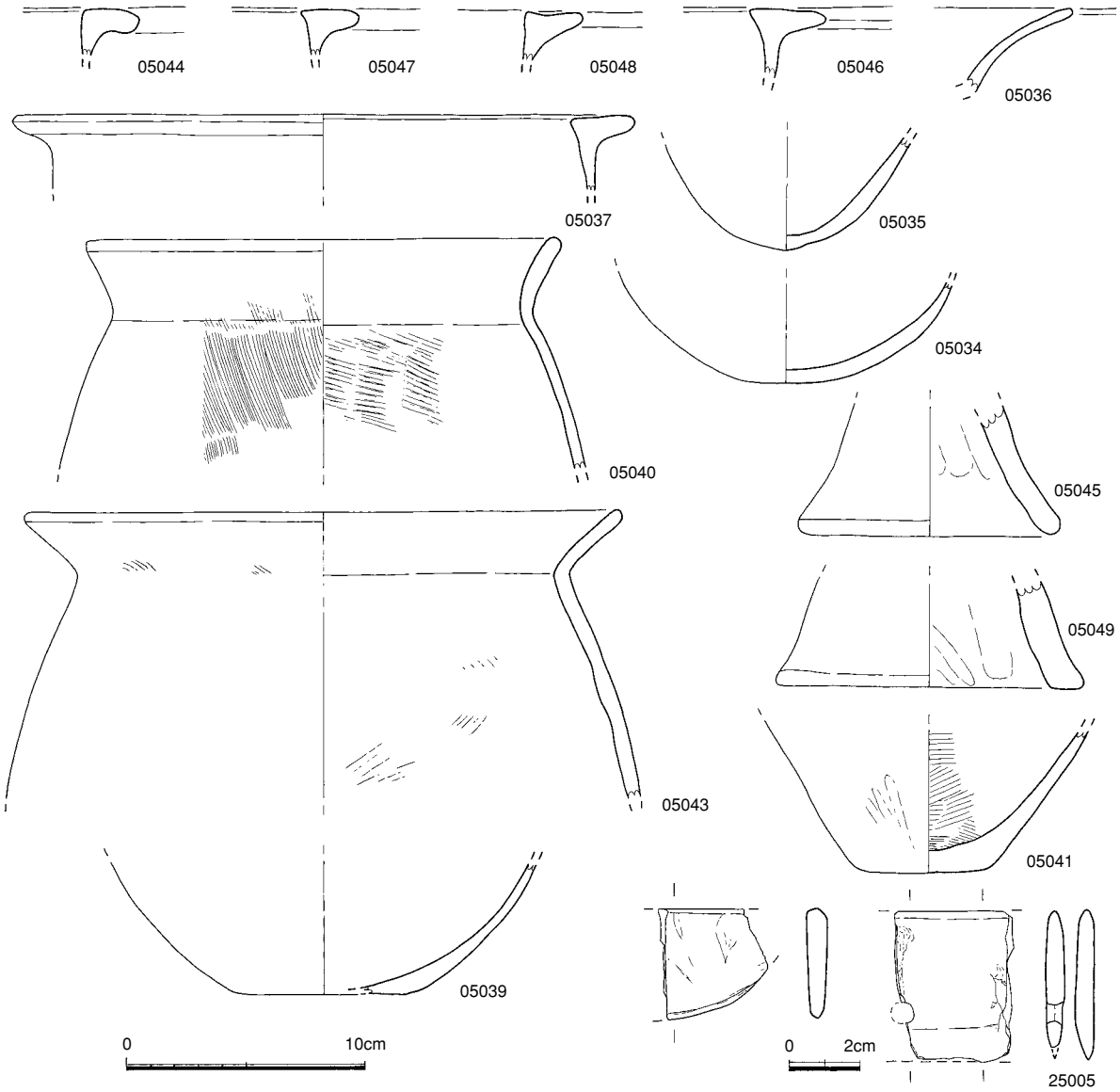


Fig.76　D区SC06竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3・1/2）

出土遺物（Fig.76）

05044・05047・05048・05046・05037は古式の平坦口縁を持つ中期甕口縁部破片である。遊離した遺物である。

05036は、高杯杯部破片である。調整は、ナデか。器色は内外面共に橙色を呈する。胎土には少量の石英、長石砂を混入する。焼成は堅緻である。弥生終末期の所産か。

05034は、丸底の壷破片か。器面は荒れのために調整不明である。器色は内外面共に橙色を呈する。

05035は、やや底部の尖る甕の破片か。器面の荒れのために調整は不明である。器色は鈍い黄橙色を呈する。焼成は堅緻である。

05040・05043は、口縁が緩やかに外開する長胴の甕破片である。調整は、いずれも内外面ともハケメ調整を残す。それぞれ口径20cm・25cmを測り、器色は黄橙色～橙色を呈する。

05039は、不安定な平底を有する壷底部破片である。調整は荒れのために不明である。器色は浅い黄橙色を呈する。焼成は堅緻である。

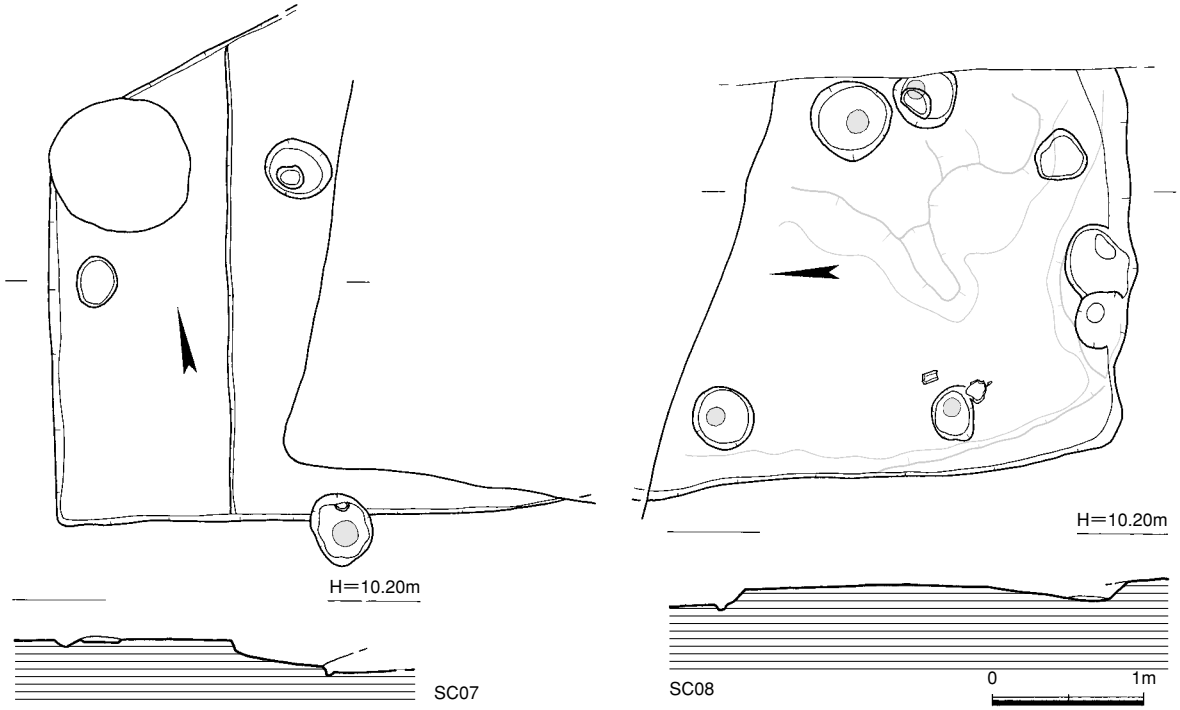


Fig.77　D区SC07・08竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）

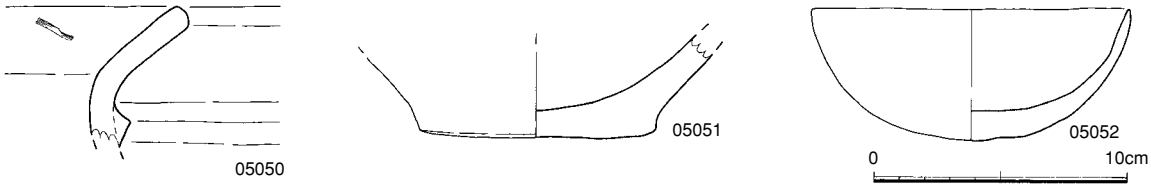


Fig.78　D区SC08竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）

05045・45049は、小型の器台脚部である。いずれも内面に指ナデを残す。器色は内外面共に橙色を呈する。焼成は堅緻である。

05041は、不安定な平底を有する甕破片である。外面がヘラナデで、内面は細かいハケメ調整である。器色は黄褐色を呈する。焼成は堅緻である。底部径5.6cmを測る。

25005は、石包丁破片である。石材は、頁岩を使用する。

SC07住居跡（Fig.70・77）

本住居跡は、調査区北端部東側で検出した。SC06住居跡によって切られ、これより遡る時期の所産である。住居跡は、南側隅部を残し、西側に幅１mを測るベッド状施設が付設されていることから東西方向に軸を向ける長方形住居の可能性がある。規模は、南壁長４m以上、西壁長2.3m以上を測り、壁から床面までは10cm程度しか残さない。ベッド施設の東床面にある柱穴が主柱穴である可能性がある。覆土内で出土した遺物には図化できるものは無かった。

SC08住居跡（Fig.70・77・78）

本住居跡は、調査区北端部の東壁付近で検出した。平面形は長方形プランと考えられ、SC06住居跡によって切られることから、これより遡る時期の所産である。南壁と西壁の一部が残る。現存規模は、南壁延長2.5m以上、西壁延長３m以上、深さ0.1m以下である。

主柱穴は、床面の西壁及び東側に柱穴が４個程検出されているが、特定ができない。床面近くで少量の土器類が出土した。

出土遺物（Fig.78）

05050は、く字に屈曲する口縁部直下に大型の三角突帯一条を巡らす後期甕である。調整は器面の

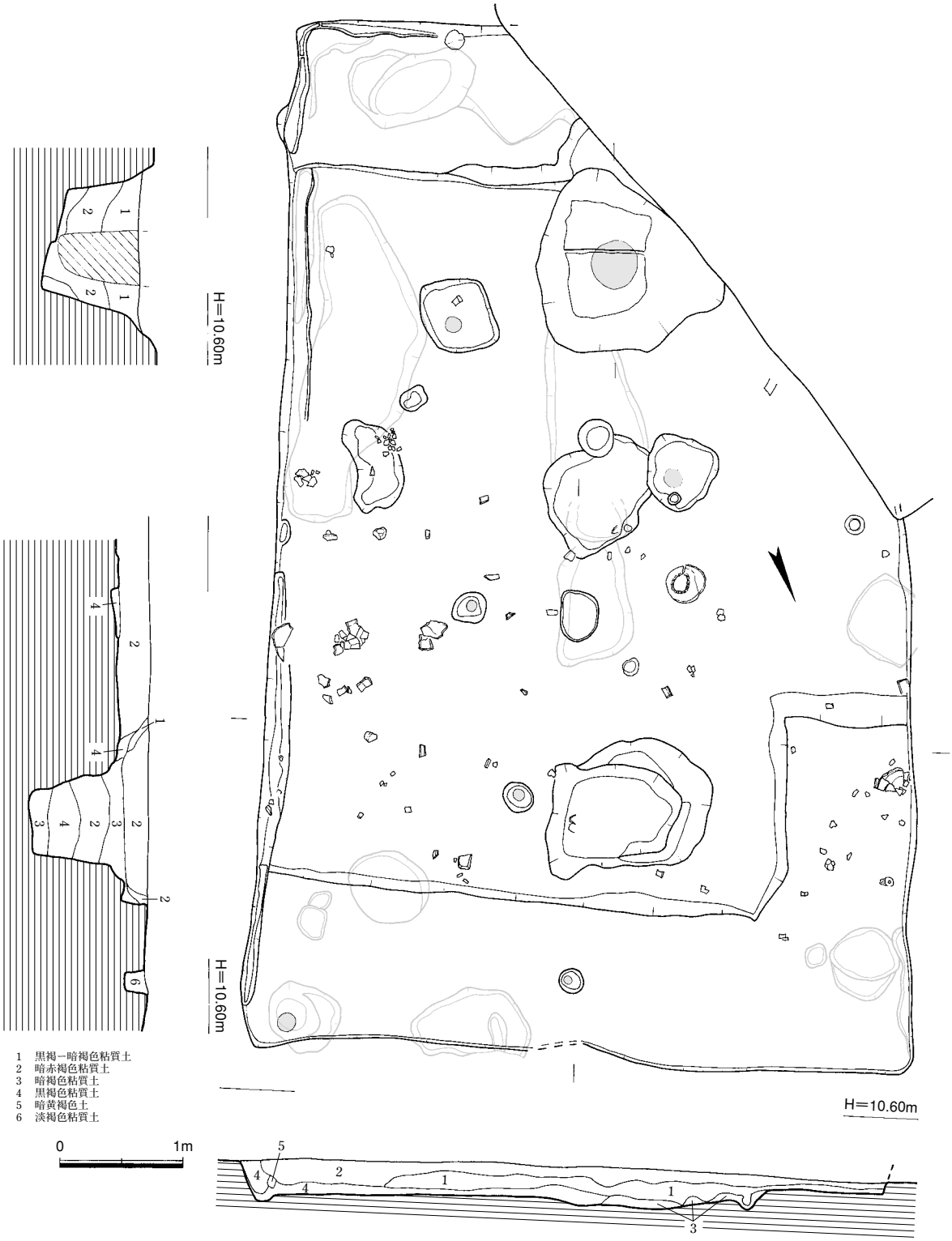


Fig.79　D区SC09竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）

荒れで、突帯上下にヨコナデを加える以外は不詳である。器色は内外面共に橙色を呈する。胎土には石英砂を大量に混入する。焼成は堅緻である。

05051は、不安定な平底を持つ後期壷底部破片である。調整は不明である。器色は内外面共に橙色を呈する。焼成は堅緻である。復元底部径9.4cmを測る。

05052は、丸底の鉢である。器面調整は不明である。器色は内外面共に橙色を呈する。胎土には石英、長石砂を多く混入する。口径12.6cm、器高5.2cmを測る。

SC09住居跡（Fig.70・79・80、PL.28～30）

本住居跡は、調査区中央で検出した。平面プランは、ほぼ南北に軸をとる長方形をなし、北壁及び西壁の一部、南壁にベッド状施設を付設する。また、主柱穴は軸線中央上にあり、南北のベッド状施設に接して配置される。掘方は比較的大型で、北側が１×1.3m、深さ１mの不整な長方形・南側が1.5×1.5m、深さ0.8m程度の不整円形をなす。主柱穴の間隔は4.5m前後であり、南側主柱穴は柱痕が0.35mを測る。住居壁の規模は西南隅が調査区外となっているが、ほぼ全体像を知ることができる。南壁長5.4m、西壁長4.5m以上、東壁長8.35m、南壁長1.7m以上で、壁高は0.25m程度が残る。

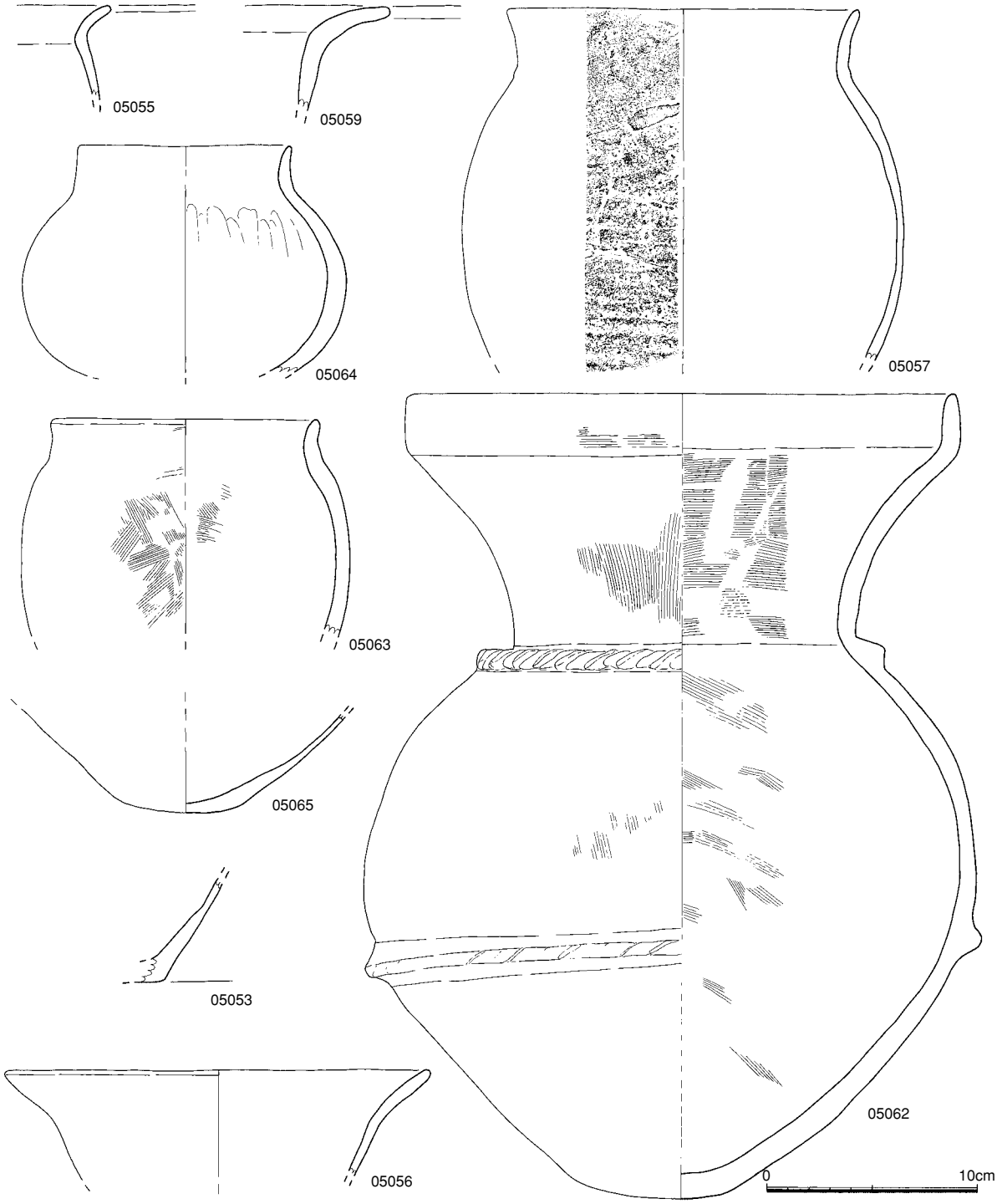


Fig.80　D区SC09竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）

また、東壁及び南壁下には壁溝が巡る。ベッド状施設と床面の比高差は10cm程度である。

遺物類は床面に近い位置で比較的多量の土器類が出土した。

出土遺物（Fig.80）

05055・05059は、小型の甕、鉢である。調整は器面の磨滅のために不明である。

05064は、球状胴部に直線的に立ち上がる口縁を有する直口壷である。外面は荒れのため調整不明、内面は指によるナデ上げ調整である。器色は浅い黄橙色を呈する。胎土に石英、長石砂を大量に含む。焼成は堅緻である。口径10cm、残存器高10.6cmを測る。

05063は、口縁立ち上がりの小さい甕である。調整は内外面共に細かいハケメを残す。器色は内外面共に橙色を呈する。焼成は堅緻である。復元口径12.6cmを測る。

05065は、不安定な平底を有する後期壷である。器色は黄橙色を呈する。底部径5.5cmを測る。

05053は、**05065**と同様の不安定な平底となる後期甕破片である。器色は浅い黄橙色を呈する。

05056は、薄手の鉢形をなす土器である。高杯杯部の可能性もある。調整は不明である。器色は黄橙色を呈する。焼成は堅緻である。復元口径20cmを測る。

05057は、膨らみの少ない胴部から緩やかに外開する口縁を持つ甕である。胴部外面は平行タタキで、内面はナデ調整か。器色は内外面共に浅い黄橙色～橙色を呈する。胎土には石英、長石粗砂を多量に含む。焼成は堅緻である。復元口径16.6cm、残存器高16.5cmを測る。

05062は、器壁が厚く、全体にぼったりしたメリハリのない複合口縁壷である。頸部には太い段状突帯を巡らし、ナナメの刻み目を施す。また、胴部中位にも丸味を持った突帯一条を巡らし、これにもナナメ方向の、間隔の広い刻み目を施す。底部は不安定な平底である。調整は、内外面共に細かいハケメが残る。器色は内外面共に橙～黄橙色を呈する。胎土には石英、長石粗砂を大量に混入する。焼成は堅緻である。口径25.6cm、器高37.9cm、胴部突帯部径29.3cmを測る。

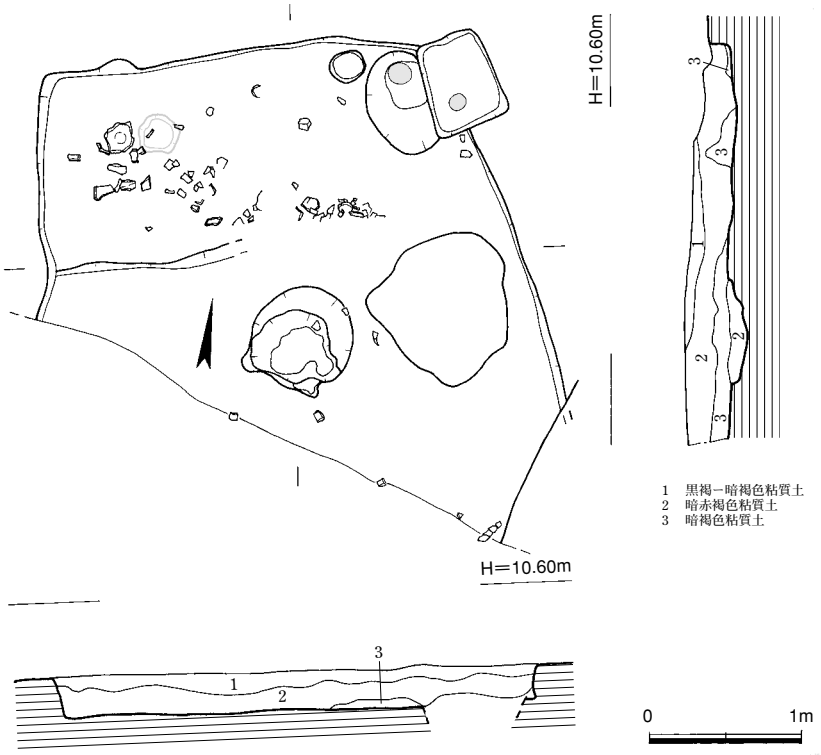


Fig.81　D区SC10竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）

SC10住居跡（Fig.70・81・82、PL.30・31）

本住居跡は、調査区西側に位置し、SC 9 ・11住居に切られており、これらより先行する時期の所産である。住居跡の平面プランは本来南北に軸をとる長方形であったことが考えられる。平面形はやや歪であるが、北側の壁側に幅1.2m程度のベッド状施設が認められる。また、検出部分中央には主柱穴と考えられる径0.6m程度の柱穴が知られる。

住居内ではベッド状施設の床でまとまった土器類の出土があった。

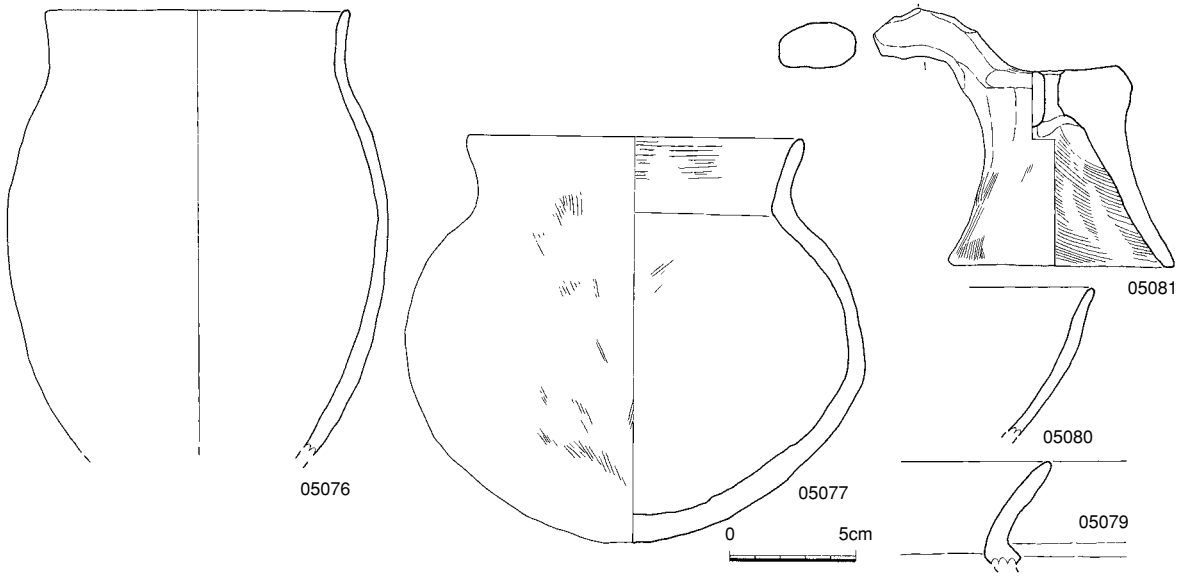


Fig.82　D区SC10竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）

出土遺物（Fig.82）

05076は、細身の胴部に直立する口縁部が付く小型甕である。調整は、磨滅のために不明である。器色は内外面共に黄橙色を呈する。胎土には石英、長石細砂を含む。焼成は堅緻である。復元口径12cm、残存器高17.4cmを測る。

05077は、半球状の胴部に直線的に開く口縁を有する中型壷である。調整は、内外面共に細かいハケメ調整を施す。また、器色は鈍い橙色を呈する。焼成は堅緻である。肩部～胴部に黒斑がある。胎土には砂粒の混入が多い。焼成は堅緻である。口径1.3cm、器高16.6cmを測る。

05081は、変形沓形器台とも言うべき製品である。本来平らな突出部が馬首のように伸び上がる。調整は、内外面共に細かいハケメで、突出部は指によるナデ調整が顕著である。

05080は、端部が緩く反転する杯破片である。器色は橙色を呈する。焼成は堅緻である。

05079は、急激に外開する口縁直下に鈍い三角突帯を巡らす甕破片である。調整は、内外面共にヨコナデである。器色は内外面共に橙色を呈する。焼成は堅緻である。

SC11住居跡（Fig.70・83・84、PL.31－２）

本住居跡は、調査区の西側で検出された小型の長方形住居である。住居は、北側でSC09・10住居を切り、南側ではSC13住居に切られていると考えられる。

その規模は、東壁長5.35m、西壁長4.5m以上、北壁長4.2m、南壁長2.5m以上を測り、壁は約0.2m程度を残す。内部は、短辺側の南・北にベッド状施設を配置し、南側のものは壁に沿って小溝を附ける。また、主柱穴は、長軸線上には複数のものはなく、床面中央に径0.5m、深さ0.4mを測る円形ピットがその一端かと推定される。床面からは少量の遺物が出土した。

出土遺物（Fig.84）

05084は、口縁がく字に屈曲する小型甕破片である。器面調整は不明である。器色は内外面共に淡黄色を呈する。胎土には石英粗砂を多量に混入する。焼成は軟質である。

05082は、不安定な平底となる甕底部破片である。調整は、外面底部端付近にハケメが残る。内面はナデか。器色は内外面共に橙色を呈する。焼成は堅緻である。復元底部径5.7cmを測る。

05087は、小型の鉢か。器面の調整が不十分である。底部は不安定な平底をなす。器面調整は磨滅

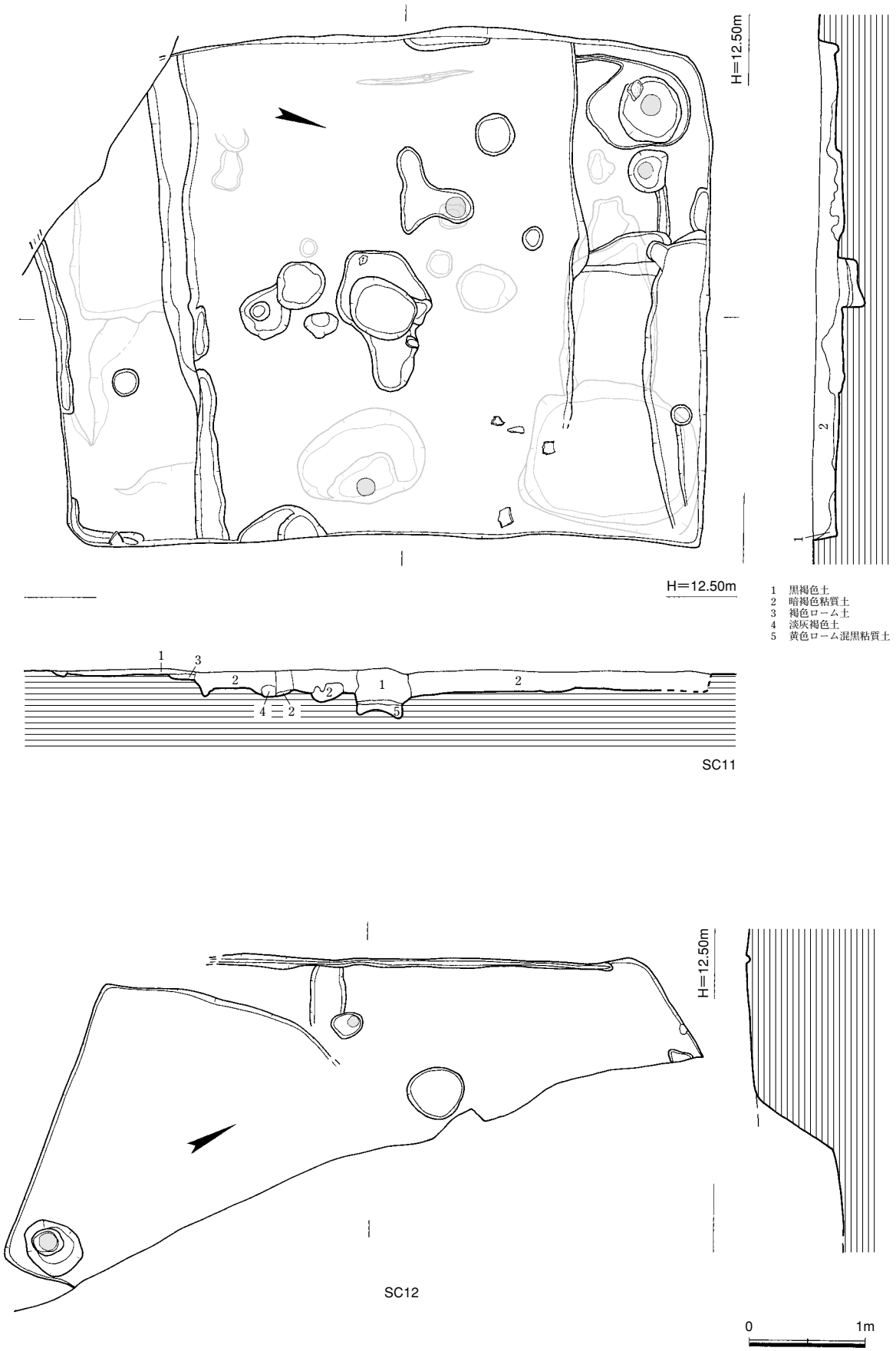


Fig.83　D区SC11・12竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）

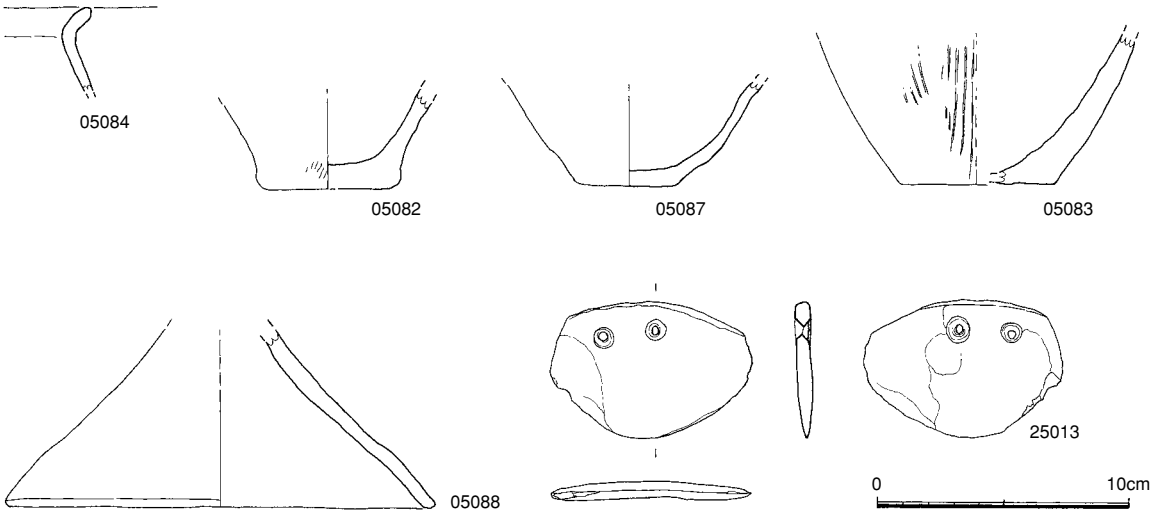


Fig.84　D区SC11竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）

のため不詳である。器色は浅い黄橙色を呈する。焼成は堅緻である。底部径4.1cmを測る。

05083は、中期鉢底部か。器色は黒褐色～橙色を呈する。焼成は堅緻である。復元底部径6.2cmを測る。

05088は、外方に良く踏ん張る高杯脚である。調整は、内外面共に丁寧なナデ調整を施す。器色は内外面共に橙色を呈する。胎土は密で、砂粒の混入は少ない。焼成は堅緻である。復元脚径17cmを測る。

25013は、いはば杏仁形とも言える２孔を穿つ小型石包丁である。頻繁な研ぎ出しによるものか周辺が減っている。穿孔は両面からなされている。長さ7.9cm、幅5.4cm、厚さ６mmを測る。

SC12住居跡（Fig.70・83、PL.32－１）

本住居跡は、調査区の中央部東壁際で検出した。周辺の削平により壁は殆ど残っていない。

平面プランは、歪であるが壁溝と考えられる西側延長から考えると小型の長方形かと考えられる。その規模は、西側壁相当で3.5m以上、南壁相当で2.5m以上を測る。床面付近で少量の遺物が出土した。図示の困難な小破片が多い。

SC13住居跡（Fig.70・85・86、PL.32－２）

本住居跡は、調査区中央部の西壁際で検出した。西側隅部が調査区外となる。平面プランは、東西に軸を取る長方形となる。内部には東壁・北壁・西壁に沿って幅が１m強のベッド状施設が「コ」字に付設されている。また、主柱穴は長軸線上に２本が配置されている。いずれもベッド端に接する位置にあり、間隔は4.2mを測る。また、主柱穴のうち、東側のものは径0.9×0.7m、深さ0.6mの不整円形である。西側にものは、径0.7×0.6m、深さ0.7mを測る長方形である。また、柱痕は約25cm程度を測る。なお、北側と西側の壁溝の一部には径が10cm以下の小ピットがほぼ10cm前後の間隔で連続して打ち込まれており、壁材の一部をなすものと考えられる。

住居の規模は、北壁長７m、東壁長5.3m、南壁長2.7m以上、西壁２m以上を測る。また、壁の残りは良く、約0.4mを測る。床面とベッドとの比高差は約20cmである。

また、炉は主柱穴の中間にあり、径1.4×0.7mの浅い不整形土坑として区別できる。住居内からは東側のベッド床面や壁に近い床面などから土器類や石包丁等が出土した。

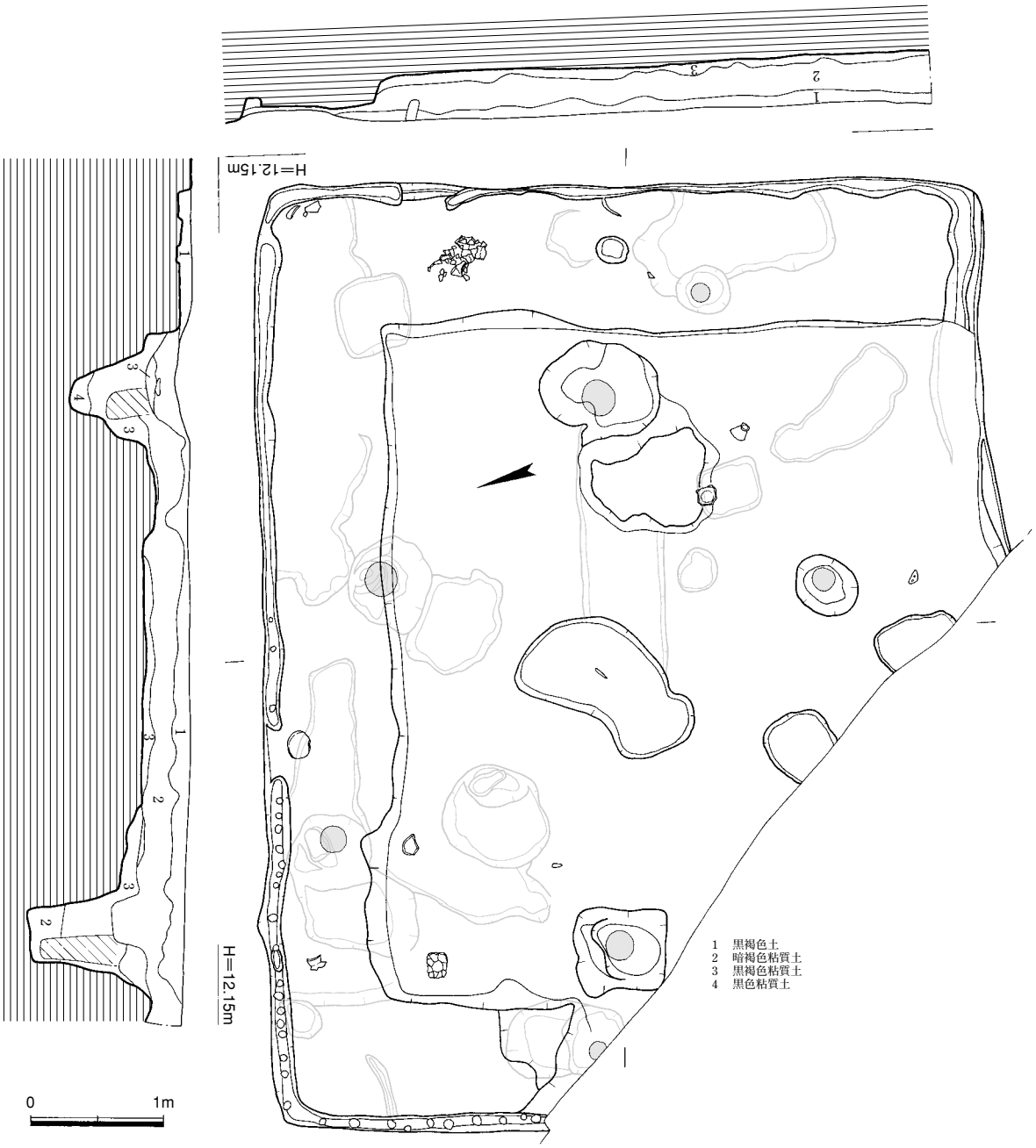


Fig.85　D区SC13竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）

出土遺物（Fig.86）

05096は、小型の手づくね鉢である。内面底部はヘラによる研磨か。口径５cm前後、器高3.7cmを測る。床面出土。

05093は、不安定な平底をなす後期壷破片である。調整は、外面がヘラによる研磨か。内面は不明である。器色は黄褐色を呈する。外面は丹塗か。また、外底部に黒斑が見られる。焼成は堅緻である。復元底部径8.8cmを測る。

05095は、非常に不安定な平底を有する後期壷破片である。調整は、内外面共に磨滅のために不明である。器色は淡黄褐色を呈する。胎土には砂粒の混入が非常に多い。焼成は堅緻である。復元底部径７cm前後か。

05092は、しっかりした底部で、外底部がやや上げ底となる小型鉢である。調整は、外面が斜め方

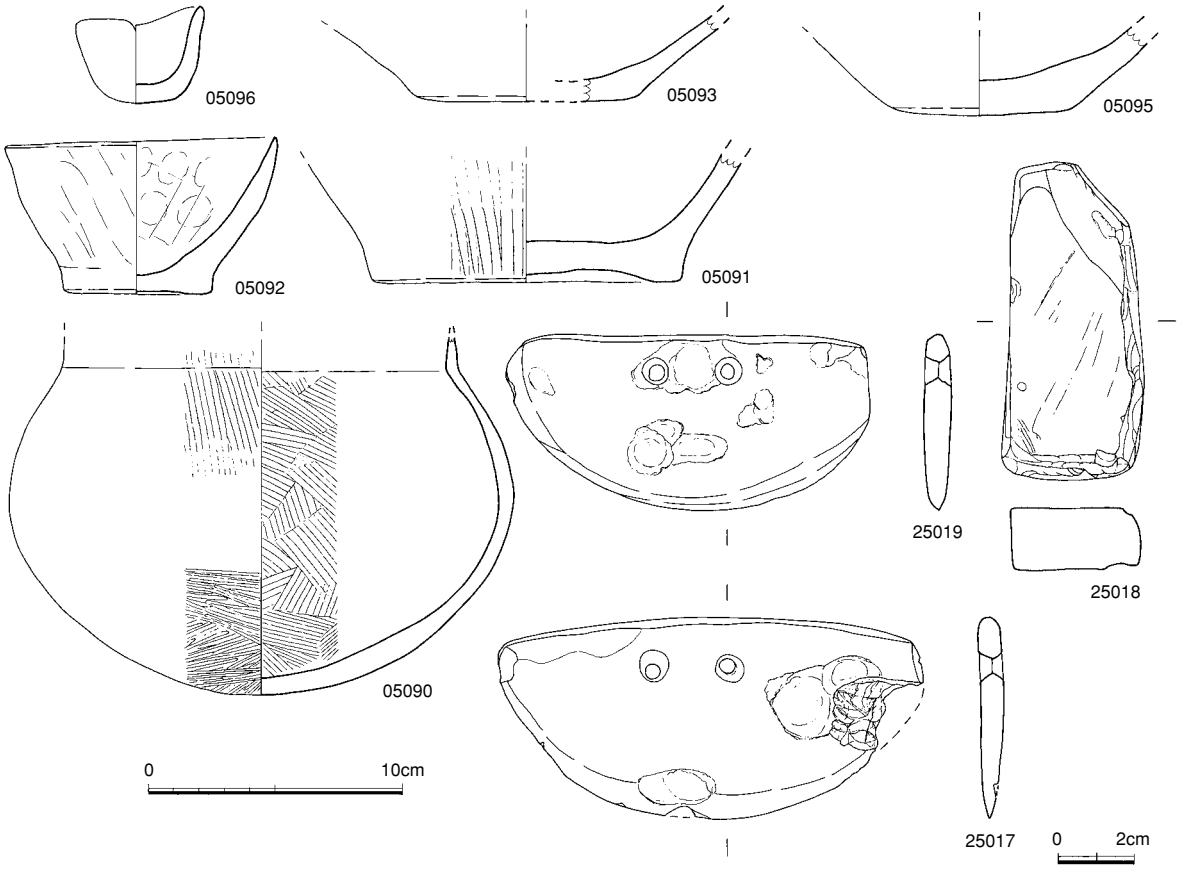


Fig.86　D区SC13竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3・1/2）

向のヘラナデ調整か。また、内面は指によるナデ・オサエが顕著である。器色は内外面共に明るい赤褐色を呈する。胎土に砂粒の混入が多い。焼成は堅緻である。口径10.6cm、器高6.3cmを測る。床面出土。

05091は、中期甕の底部破片である。外面に荒いタテハケメを残す。器色は明るい赤褐色を呈する。底部径12.2cmを測る。

05090は、中型の丸底の直口壷か。調整は、胴部上半が荒いハケメ調整、下半部はヘラケズリの後研磨仕上げを施す。また、内面は底部から口縁部方向へのハケメ調整である。器色は明るい赤褐色を呈する。胎土には砂粒の混入が多い。復元口径15.5cm、残存器高14.2cmを測る。床面出土。

25019は、半月形石包丁である。一部に制作時の剥離痕を残す。両刃である。完形品である。現存長9.6cm、幅4.6cm、厚さ８mmを測る。床面出土。

25017は、ほぼ同型の半月形石包丁である。両刃である。やや破損するがほぼ完形品である。全長11.2cm、幅5.3cm、厚さ５mmを測る。床面出土。

25018は、砥石である。側面・正面・裏面共にすべて砥面として使用している。全長8.4cm、幅3.7cm、厚さ1.5cm程度を測る。

SC14住居跡（Fig.70・87・88・89）

本住居跡は、調査区の南側中央で検出した。平面プランは、長方形で北壁部分に飛び出し部が見られる。長軸は、ほぼ南北方向に向けている。内部は、西壁の北隅部と南隅部にベッド状施設があり、南壁の東隅部にもベッド状施設が付設されている。

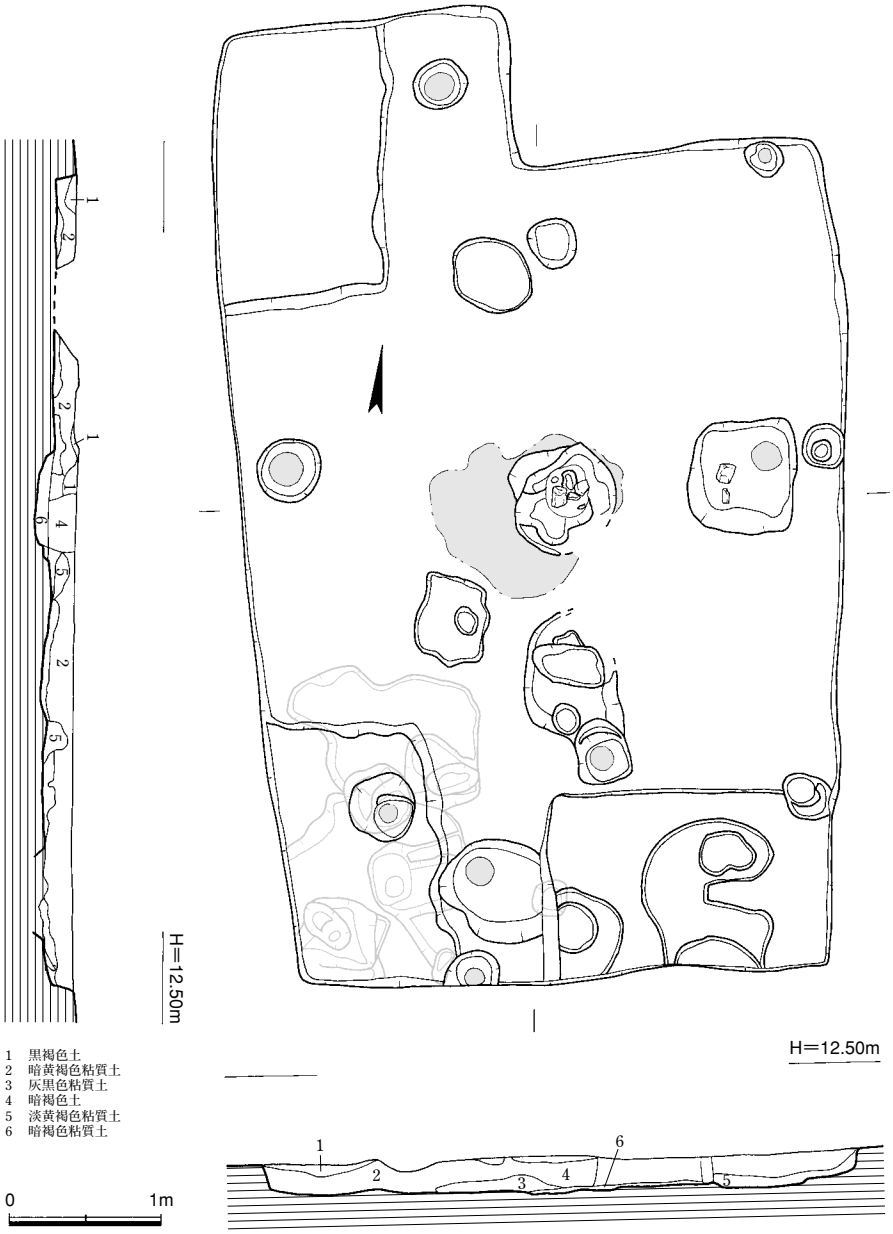


Fig.87　D区SC14竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）

主柱穴は、中央部の炉を挟んで東西方向に２本あり、芯身間は3.2mを測る。また、南北方向にも炉を挟んで２本の柱穴があり、芯身間で5.2mを測る。これらが同時に存在したものか、構造上も判断が困難である。

規模は、前述のように形状がいびつであるが、西壁長5.25m、南壁長3.5m、北側壁差し渡し長４mを測る。壁高は、全体に0.25m程度を測る。

また、炉は、径が約0.6×0.7mの円形土坑で、中央部に焼土塊が残る。中央部での深さ10cm程度である。住居内からは土器類の小破片が少量出土した。

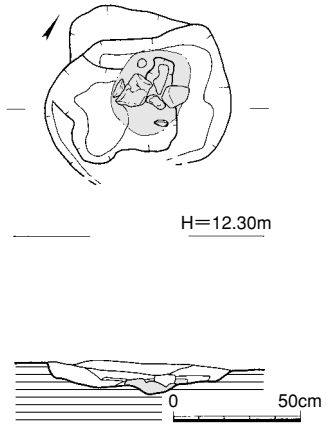


Fig.88　D区SC14竪穴住居跡炉跡出土状況実測図（1/30）

出土遺物（Fig.89）

05107は、肉厚の器壁を持つ器台の頭部破片である。内外面共にタテハケメが残る。また、内面に指オサエ調整が見える。器色は内外面共に橙色を呈する。**05106**は器台脚部破片である。器色は内外面共に橙色を呈する。**05109**は、不安定な平底破片である。外底部にハケメが残る。器色は浅い黄橙色を呈する。復元底部径8.6cmを測る。**05105**は、甕底部破片である。器色は黄橙色を呈する。復元底部径5.6cmを測る。**05108**は、不安定な平底の甕底部破片である。調整は不明である。器色は内外面共に黄橙色を呈する。

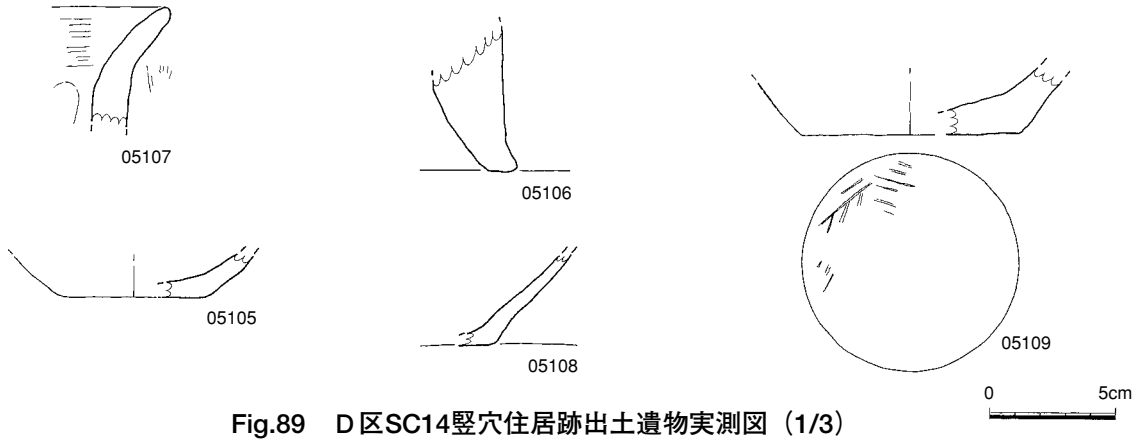


Fig.89　D区SC14竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）

SC15住居跡（Fig.70・90・91）

本住居跡は、調査区南側に位置し、SC14住居から切られており、これより遡る時期の所産である。住居は北側隅部がかろうじて確認できた。遺存状態は非常に悪く、壁高が10cm足らずである。平面プランは、南北に軸をとる長方形住居と考えられる。床面に柱穴が数本確認できるが、伴う柱を特定できない。覆土からは少量の遺物が出土した。

Fig.90　D区SC15・16竪穴住居跡出土状況実測図（1/50）

出土遺物（Fig.91）

伴出した遺物は弥生中期のものに限られる。

05110は、L字形口縁下に一条の低い三角突帯を巡らす甕である。調整は不明である。復元口径18.8cmを測る。

05111もやや古式の中期甕である。調整は不明である。復元口径24cmを測る。

05112も中期甕底部である。外面にタテハケメが残る。底部径6.1cmを測る。

05113は、肉厚の器壁を有する器台頭部である。調整は不明である。頭部径10.8cmを測る。

25022は、両面に窪みを持つ磨石である。窪みには打痕

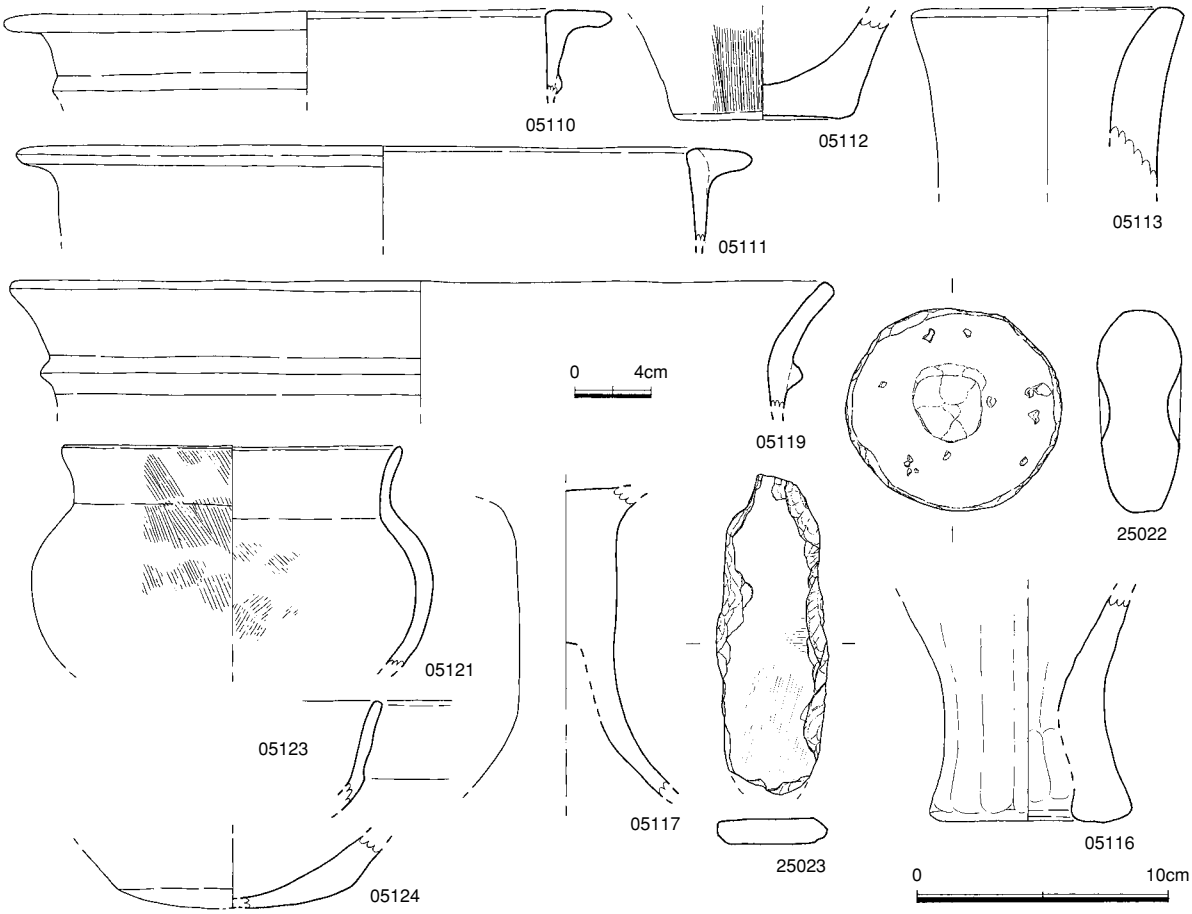


Fig.91　D区SC15・16・5032・5143竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3・1/4）

が著しい。長径8.6cm、短径８cm、厚さ3.3cmを測る。石材は、花崗岩を使用する。

SC16住居跡（Fig.70・90・91、PL.33－１）

本住居跡は、調査区の南端近くで検出した。攪乱や未掘部分があるため形状などについて十分に把握できていない。東側にコーナー部分があり、平面プランは長方形かと考えられる。規模は、東壁長4.7m以上、北壁長２m以上、壁高0.3mの部分もある。住居内からは、少量の遺物が出土した。

出土遺物（Fig.91）

05119は、口縁部が緩く字形に開き、直下に鈍い大型の突帯一条を巡らす後期大型甕である。器面調整は荒れのために内外面共に観察できない。復元口径42.6cmを測る。

05121は、底部を欠く丸底壷である。口縁部は、扁球状の胴部から緩く立ち上がる。調整は、内外面共に細かいハケメ調整である。復元口径13.2cm、胴部径15.8cm、残存器高8.7cmを測る。

05117は、中実の筒部をもつ高杯脚部破片である。調整は磨滅のために不明である。筒部径４cm、残存器高12.2cmを測る。

05116は、底部のいびつで不安定な小型器台破片である。器面調整は、外面がナデ調整で、内面は指ナデ・オサエが残る。

25023は、磨製石器未製品である。周辺の打剥調整がほぼ終了している。主に側辺部に両面から階段状剥離を加えている。正面には研磨を加える。石材は、頁岩か。

２．掘立柱建物（Fig.70・92～95）

本調査区では掘立柱建物５棟分が検出された。その分布は調査区の北側に集中する。建物は柱通りが不整であるものもあり、また全体で数多く検出した柱痕のある柱穴についてもさらに検討を加えれば建物として組み立つものも存在すると考えられる。

SB01建物（Fig.70・92）

本建物は、調査区北西部で検出した不整なものである。建物は、東西棟かと考えられる。

東側の梁間全長は4.4mで、柱間は１m前後と考えられる。柱掘り方は、径0.4～0.25m程度とやや不揃いである。また、桁行き全長は北側で1.5m以上、南側で２m以上を測る。柱穴に残る柱痕は径10cmのものが多い。

柱穴内からは網掛けのものから土器類等の出土があった。全体に弥生中期前半期から後半期の甕類破片が多いが、柱穴２・６・７では図示できない弥生後期の甕破片が出土し、これ以降の所産である。

SB02建物（Fig.70・92）

調査区北端部に位置する東西棟の小型建物である。その規模は、梁間１間、桁行き２間である。

梁間全長は１m、桁行き全長1.5mである。柱穴内に残る柱痕は径10cm程度である。

柱穴内からは弥生中期前半代の甕破片とともに、柱穴１・３・４で弥生後期甕・壷破片が出土することからこれ以降の所産である。

SB03建物（Fig.70・92・93）

調査区の北端東側に位置する南北棟建物と考えられる。その規模は、梁間１間、桁行き２間である。梁間全長は３m、桁行き全長２mである。柱穴は径が50cm前後を測る円形である。また、柱穴内に残る柱痕は径15cm前後である。

柱穴内からは殆どのものから後期土器類が出土している。柱穴２・３・４・５では甕類・器台破片が見られる。

出土遺物（Fig.93）

05125は、弥生後期壷の胴部破片である。胴部に鈍い刻み目突帯を巡らす。器面調整は、外面がタテハケで、突帯上下は強いヨコナデを加える。器色は内外面共に明るい黄褐色を呈する。

また、胎土には石英粗砂を多量に混入する。焼成は堅緻である。柱穴３出土。

05127は、口縁がく字形に屈曲する小型の甕である。器面調整は、荒れのために不明である。器色は内外面共に黄橙～橙色を呈する。

また、胎土には石英砂を多く混入する。焼成は堅緻である。柱穴５出土。

05126は、器壁の薄い小型器台の脚部破片である。器面調整は、荒れのために不明である。器色は内外面共に橙～黄橙色を呈する。

また、胎土には石英砂を多量に混入する。焼成は堅緻である。柱穴３出土。

SB04建物（Fig.70・94）

調査区の中央で検出した南北棟の大型建物である。その規模は、梁間１間、桁行き４間である。梁間全長は４m、桁行き全長9.5mを測る。桁間距離は約2.2mを測る。

柱穴は長径が70cm前後を測る長方形のものが多く見られ、掘り方深さは50cm程度が残る。また、

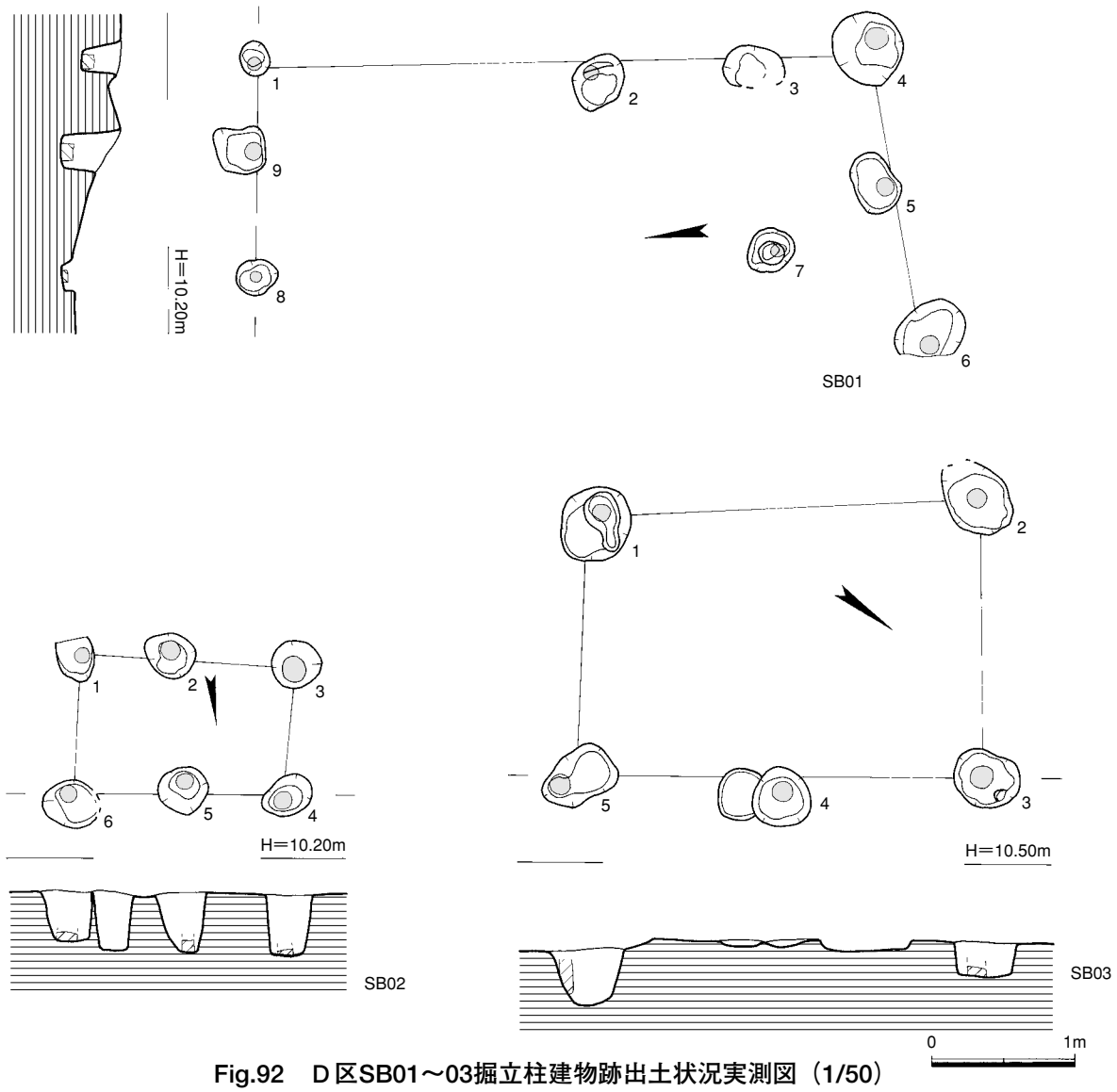


Fig.92　D区SB01～03掘立柱建物跡出土状況実測図（1/50）

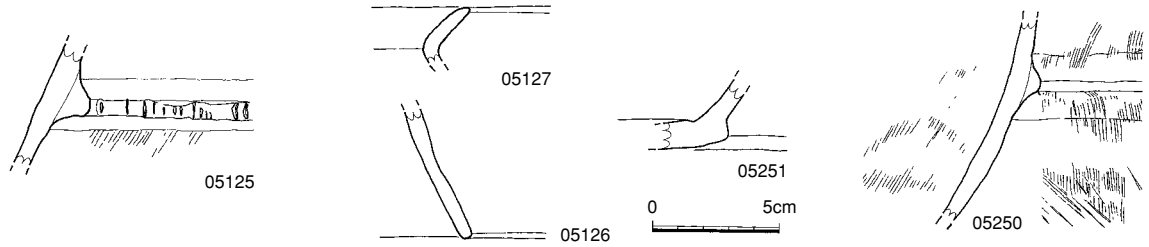


Fig.93　D区SB03・05掘立柱建物跡出土遺物実測図（1/3）

柱穴内からは後期の甕・高杯破片を出土している。

SB05建物（Fig.70・93・95）

調査区の北端で検出した東西棟建物である。その規模は、梁間２間、桁行き２間規模である。梁間全長は3.3m、桁行き全長4.5mを測る。桁間距離は約2.5mを測る。柱痕は径10cm程度を測るものが多い。

出土遺物では、柱穴１から出土した不安定な平底を持つ壷底部破片**05251**や胴部に鈍い突帯を巡らす壷破片**05250**などがある。また、他の柱穴でも中～後期土器破片の出土がある。

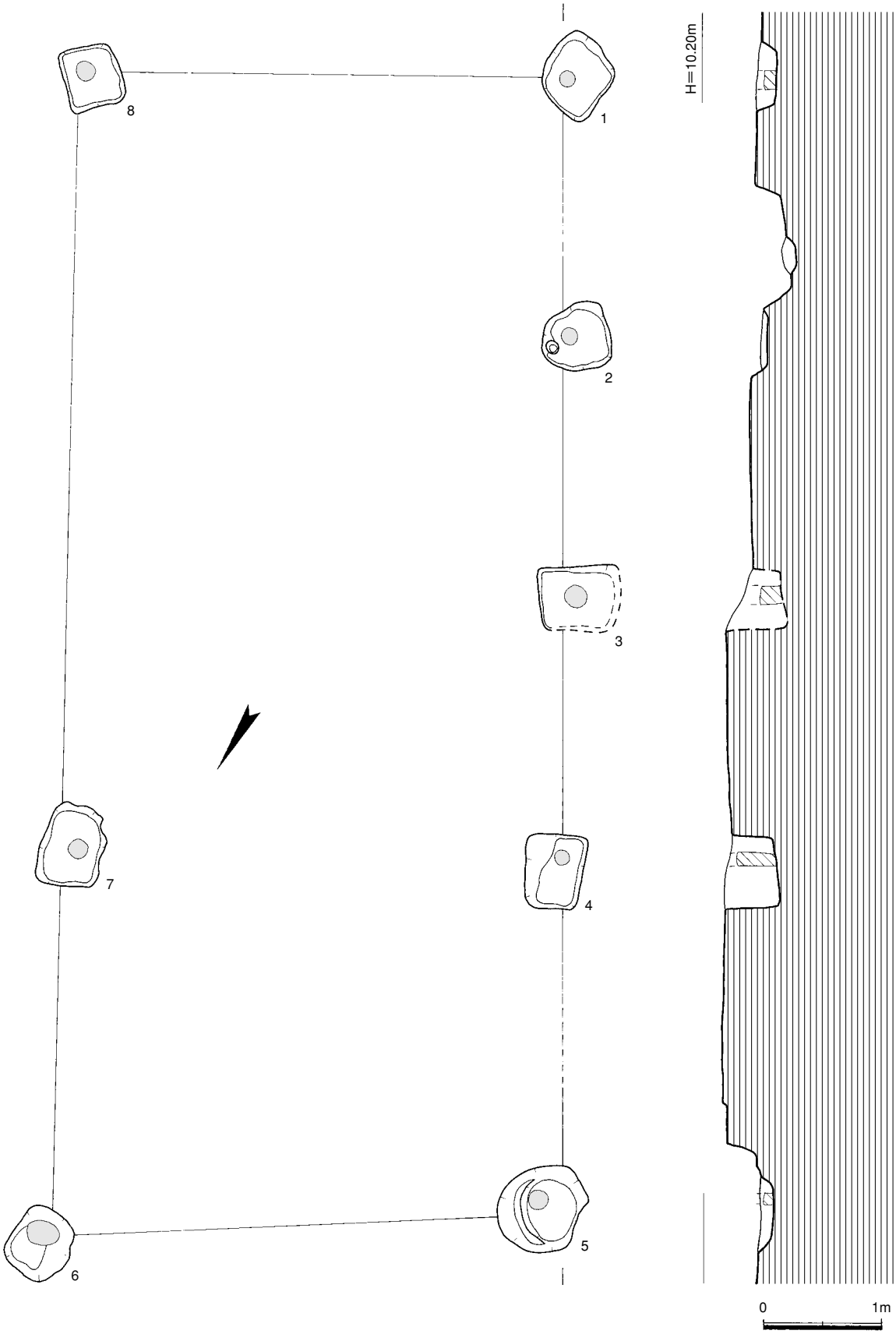


Fig.94　D区SB04掘立柱建物跡出土状況実測図（1/50）

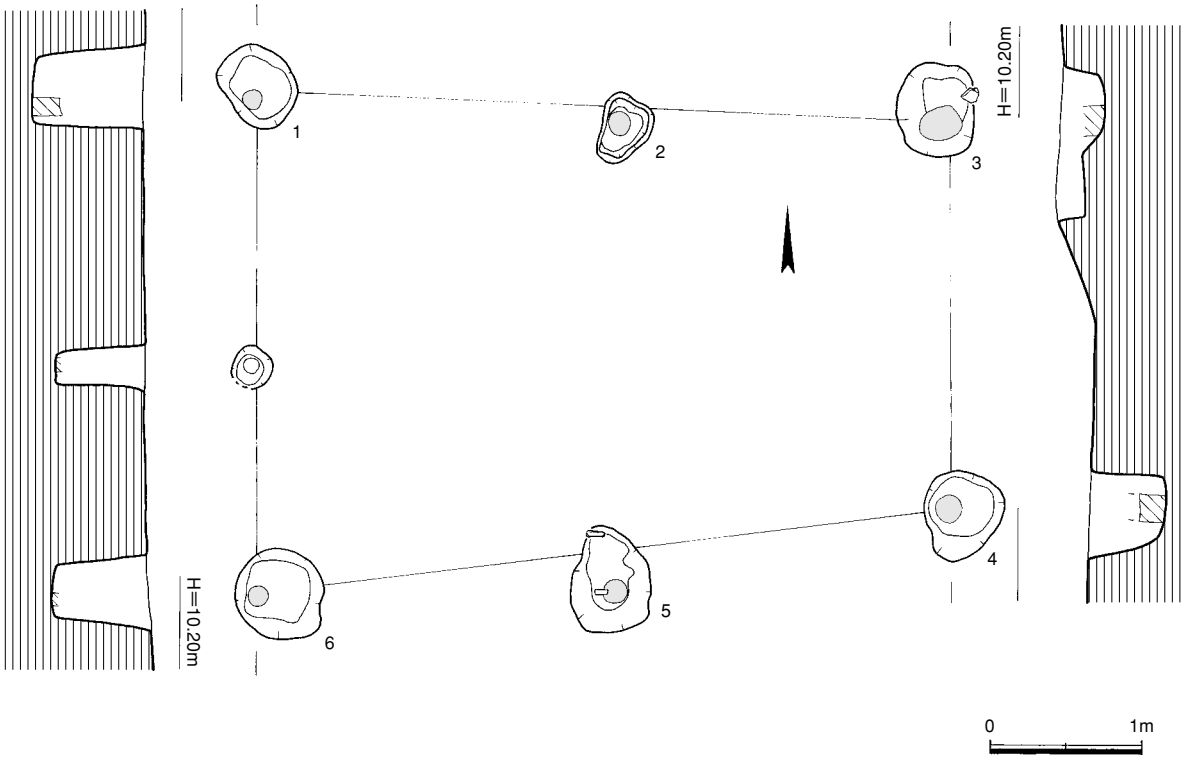


Fig.95　D区SB05掘立柱建物跡出土状況実測図（1/50）

３．土　坑（Fig.70・96～101、PL.33～35）

いわゆる土坑と考えられる竪穴は、調査区内で28基が確認された。その分布は散在的であるが、竪穴住居や溝、道路状遺構等の主要遺構と関連するものも多いと考えられる。また、その形状も様々である。以下個別の土坑について述べる。

SK01土坑（Fig.70・96・97）　調査区北西部に検出した長円形土坑で、長幅0.8×0.5m以上、深さ0.2mを測る。出土遺物には弥生中期初めの甕**05128**がある。

SK02土坑（Fig.70・96・97）　調査区北端部に検出した円形土坑で、長幅0.9×0.3m以上、深さ0.14mを測る。出土遺物には弥生後期の小型器台頭部**05130**がある。

SK03土坑（Fig.70・96・97）　調査区北端部に検出した不整円形土坑で、長幅0.9×0.6m以上、深さ0.15mを測る。出土遺物には弥生期の小型鉢破片**05131**がある。

SK04土坑（Fig.70・96、PL.33・34）　調査区北端部に検出した長方形土坑で、長幅2.05×1.08m、深さ0.2mを測る。墳墓の可能性がある。出土遺物で図化できるものはない。

SK05土坑（Fig.70・96・97）　調査区北東端部に検出した不整円形土坑で、長幅0.85×0.5m以上、深さ0.3mを測る。出土遺物には弥生後期の複合口縁壷**05132**がある。

SK06土坑（Fig.70・96）　調査区北端部に検出した不整形土坑で、長幅0.5×0.25m、深さ0.15mを測る。出土遺物で図化できるものはない。

SK07土坑（Fig.70・96・97）　調査区北東端部に検出した不整円形土坑で、長幅1.45×1.35m、深さ0.75mを測る。出土遺物には弥生後期の甕破片**05133**・**05134**、壷**05136**がある。

SK08土坑（Fig.70・96・97、PL.35－１）　調査区北端部に検出した不整円形土坑で、長幅1.3×0.95mを測る。出土遺物には弥生後期の壷破片**05137**がある。

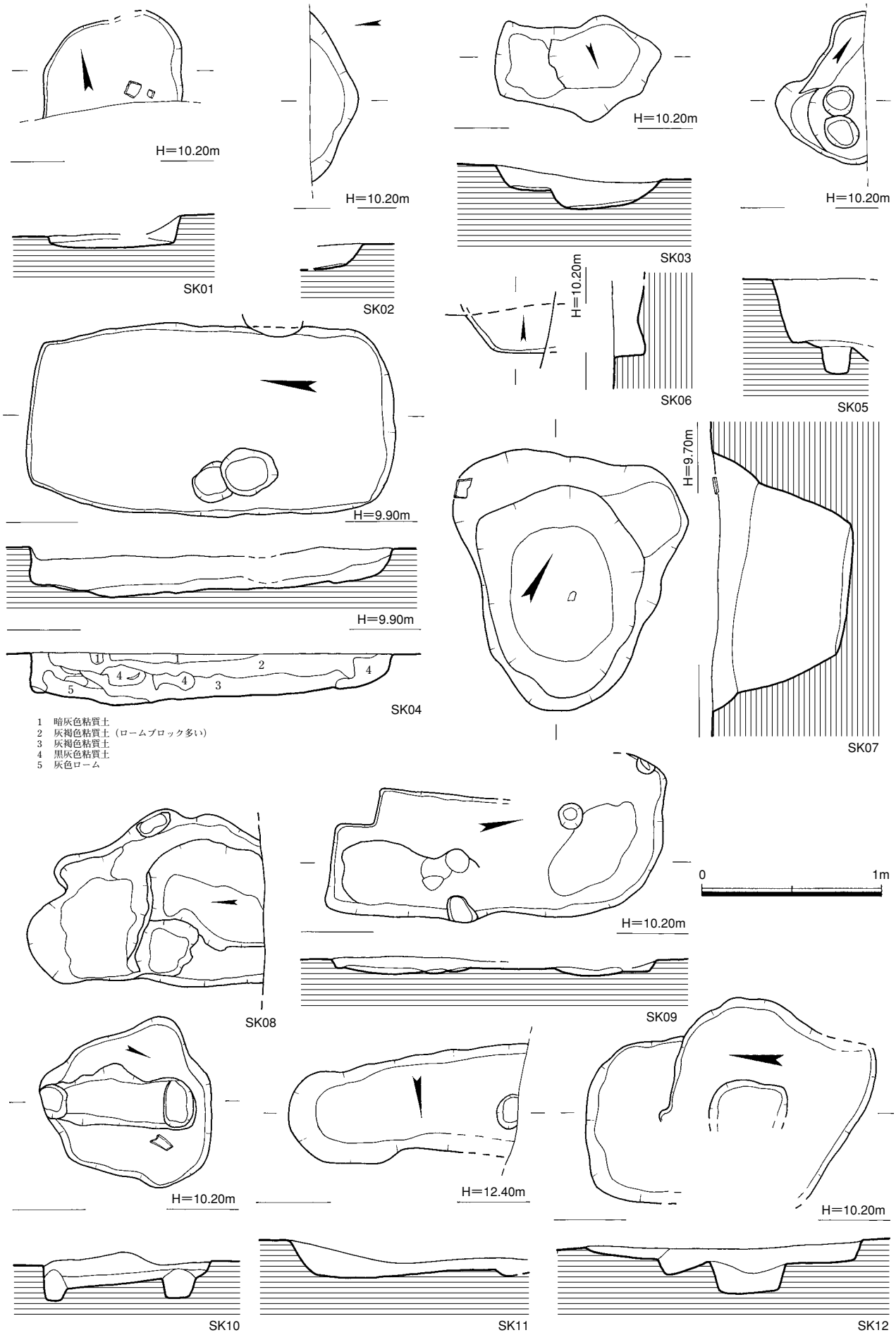


Fig.96　D区SK01～12土坑出土状況実測図（1/30）

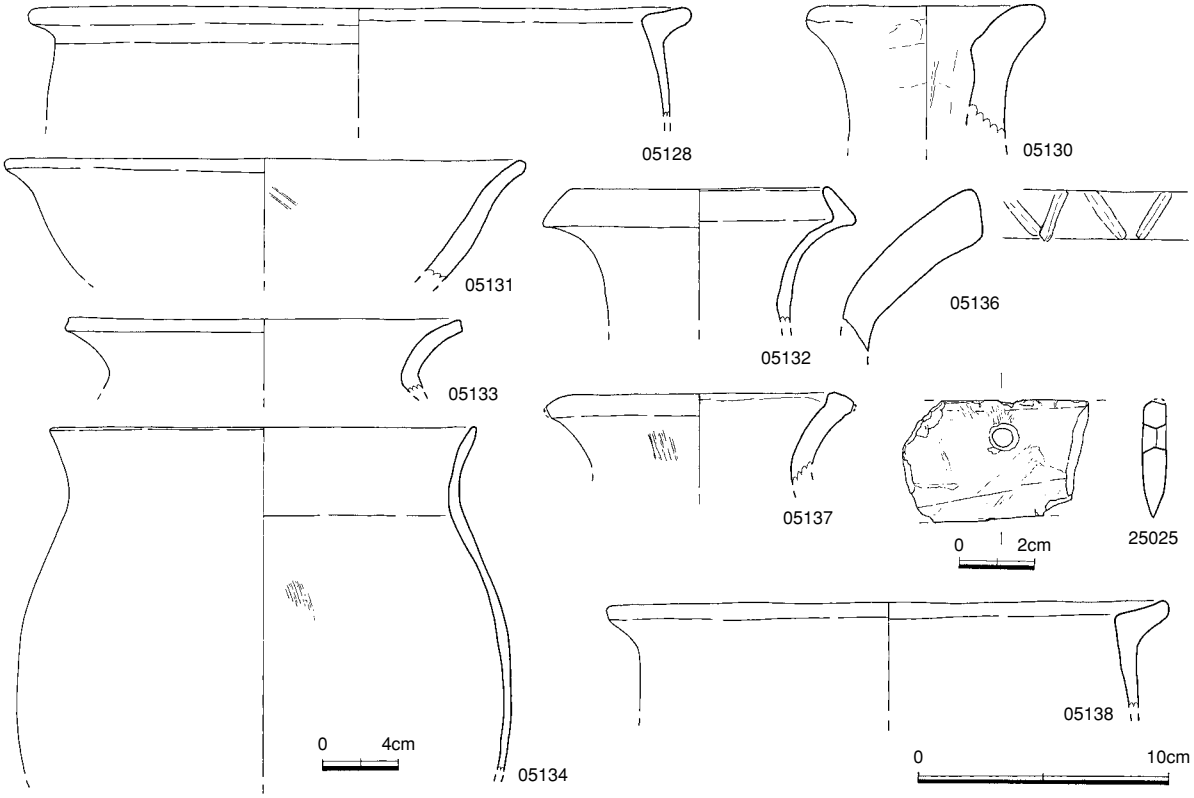


Fig.97　D区SK01～03・05・07・08・12・13土坑出土遺物実測図（1/2・1/3・1/4）

SK09土坑（Fig.70・96）　調査区北西端部に検出した不整方形土坑で、長幅1.8×0.85m、深さ0.1mを測る。出土遺物には図化できるものはない。

SK10土坑（Fig.70・96）　調査区北端部のSC10住居内に検出した不整円形土坑で、長幅1.0×0.9m、深さ0.2mを測る。坑内に長方形土坑があり、木棺墓の可能性もある。出土遺物はない。

SK11土坑（Fig.70・96）　調査区北西端部に検出した長方形土坑で、長幅1.3×0.6m、深さ0.15mを測る。出土遺物には図化できるものはない。

SK12土坑（Fig.70・96・97）　調査区北端部中央に検出した不整形土坑で、長幅1.5×1.1m、深さ0.1～0.2mを測る。出土遺物には弥生中期初頭期の甕**05138**がある。

SK13土坑（Fig.70・98・97）　調査区北端部中央に検出した長方形土坑で、SC09住居の北側主柱穴である。長幅1.3×１m、深さ0.56mを測る。出土遺物には弥生期石包丁**25025**がある。

SK14土坑（Fig.70・98）　調査区北端部中央に検出した長方形土坑で、SC09住居の炉跡である。長幅0.9×0.5m、深さ0.1mを測る。出土遺物はない。

SK15土坑（Fig.70・98）　調査区北端部中央に検出したSC09住居内の円形土坑である。長幅0.9×0.8m、深さ0.15mを測る。出土遺物はない。

SK16土坑（Fig.70・98）　調査区北端部中央に検出したSC09住居内の溝状土坑である。長幅1.1×0.75m、深さ0.15mを測る。出土遺物はない。

SK17土坑（Fig.70・98・99）　調査区北端部に検出したSC09住居の南側主柱穴で、長幅1.55×1.5m、深さ0.7mを測る。出土遺物には弥生後期の頸部に太い突帯を巡らす大型壺破片**05139**や器壁の厚い器台**05140**などの出土がある。

SK18土坑（Fig.70・98・99）　調査区北側部に位置し、SC09住居内で検出した不整土坑で、長幅

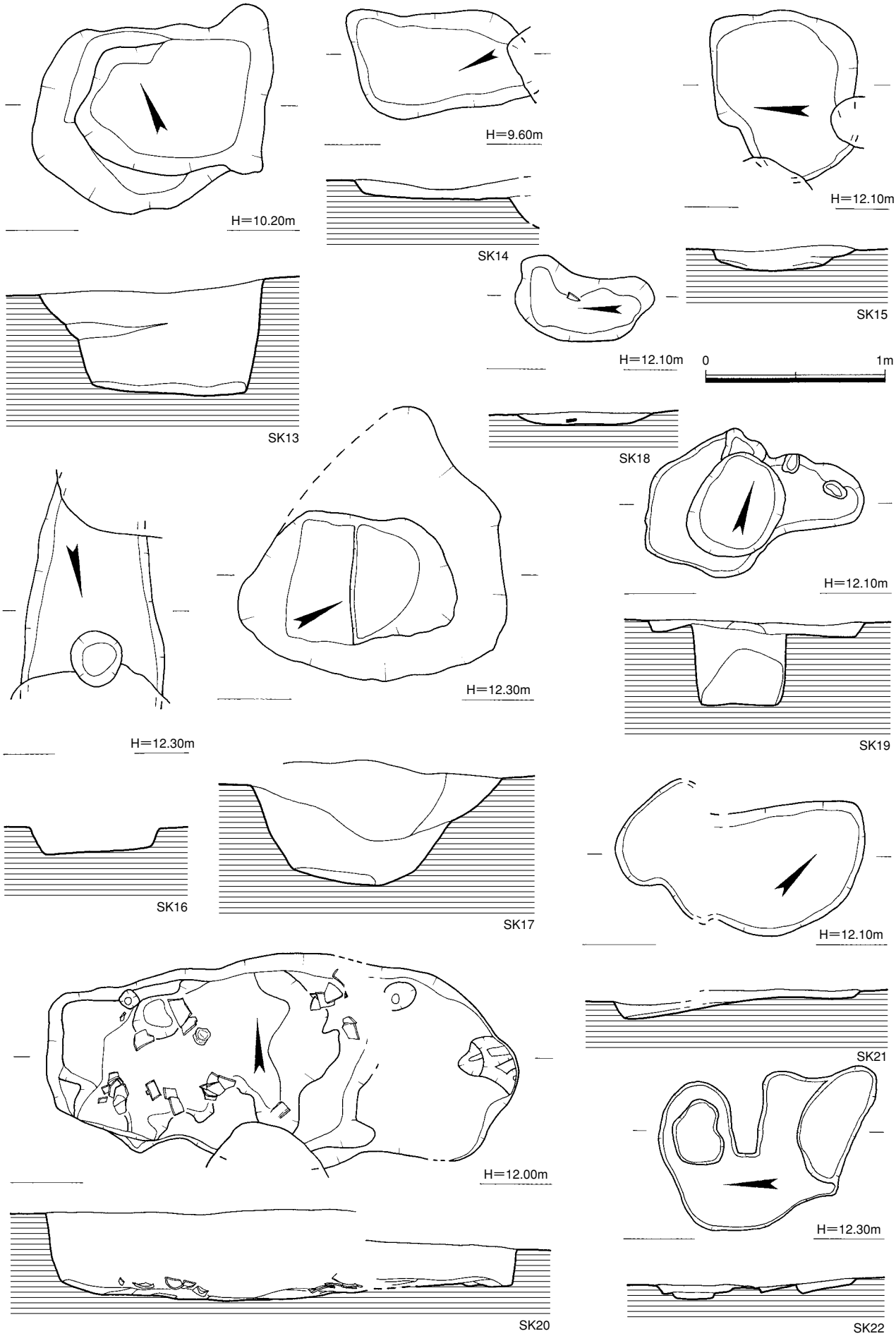


Fig.98　D区SK13～22土坑出土状況実測図（1/30）

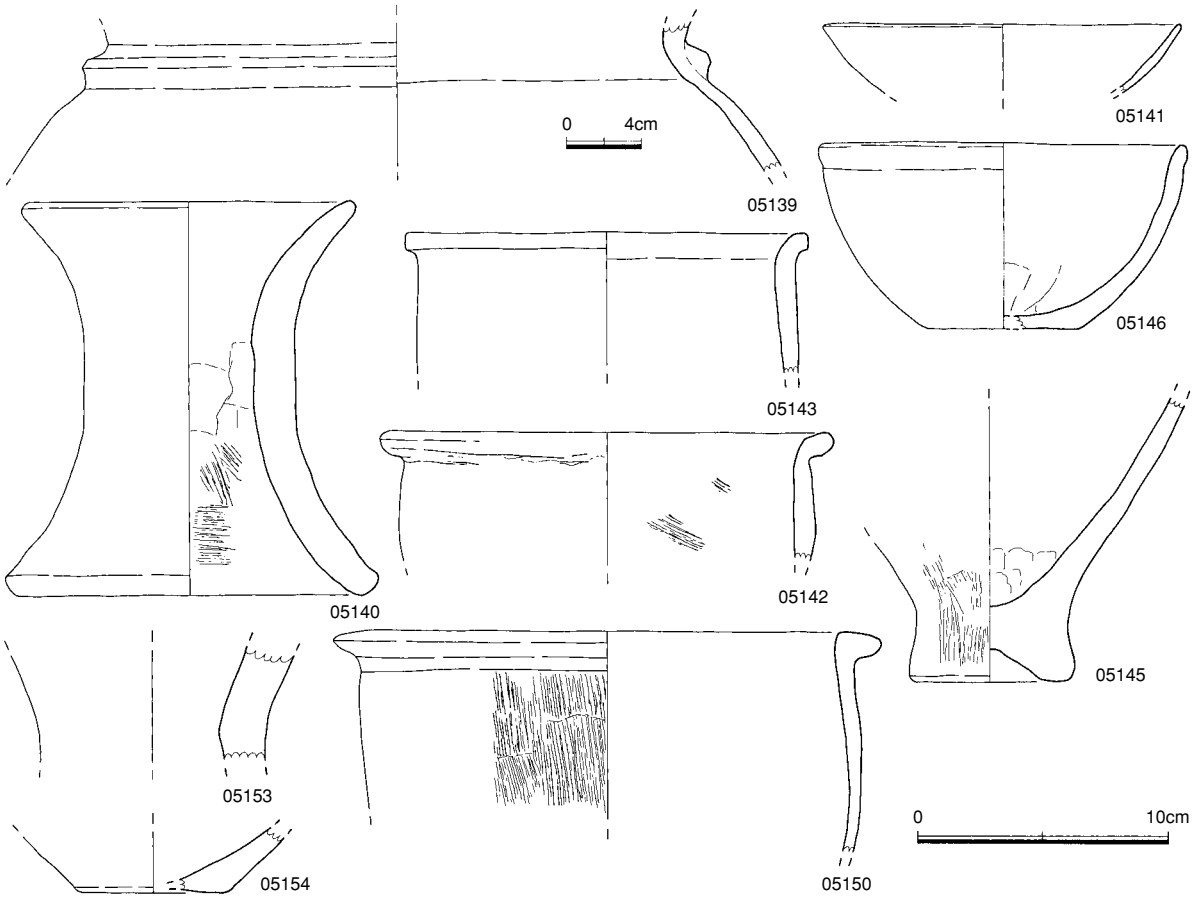


Fig.99　D区SK17～22土坑出土遺物実測図（1/3・1/4）

0.8×0.35m、深さ0.1m弱を測る。出土遺物には器壁の薄い浅い鉢**05141**がある。

SK19土坑（Fig.70・98・99）　調査区北側部に位置し、SC11住居内で検出した不整土坑で、長幅1.2×0.8m、深さ0.48mを測る。出土遺物には弥生中期初頭期の甕**05142**・**05143**がある。

SK20土坑（Fig.70・98・99）　調査区北西側で検出した大型の長方形土坑で、長幅2.65×1.2m、深さ0.5mを測る。出土遺物は比較的多量で、弥生中期初頭期土器類が殆どである。分厚い底部が上げ底となる甕底部**05145**、口縁部が小さな平坦部をなす甕**05150**、口縁端部を僅かに外方に引き出す鉢**05146**などがある。

SK21土坑（Fig.70・98・99）　調査区北西側のSC13住居の炉跡で、長幅1.4×0.7m、深さ0.1m弱を測る。出土遺物は分厚い器壁を持つ大型器台の胴部破片**05153**がある。

SK22土坑（Fig.70・98・99）　調査区南側のSC14住居のベッド状施設上の不整形土坑である。長幅1.1×0.8m、深さ0.1m弱を測る。出土遺物は弥生中期の丹塗壷底部破片**05154**がある。

SK23土坑（Fig.70・100・101）　調査区南端部近くに検出した長円形土坑で、長幅0.85×0.65m以上、深さ0.5mを測る。出土遺物には扁平片刃石斧**25026**がある。

SK24土坑（Fig.70・100・101）　調査区南端部東側で検出した大型の長円形土坑で、長幅2.8以上×1.5m以上、深さ0.2mを測る。SE03井戸と重複する。出土遺物には中期甕**05156**・**05157**がある。

SK25土坑（Fig.70・100）　調査区南端部近くに検出した円形土坑で、未調査区を挟んだ北側のSK24と連絡する可能性が高い。長幅1.3以上×0.7m以上、深さ0.2mを測る。出土遺物には図化できるものはない。

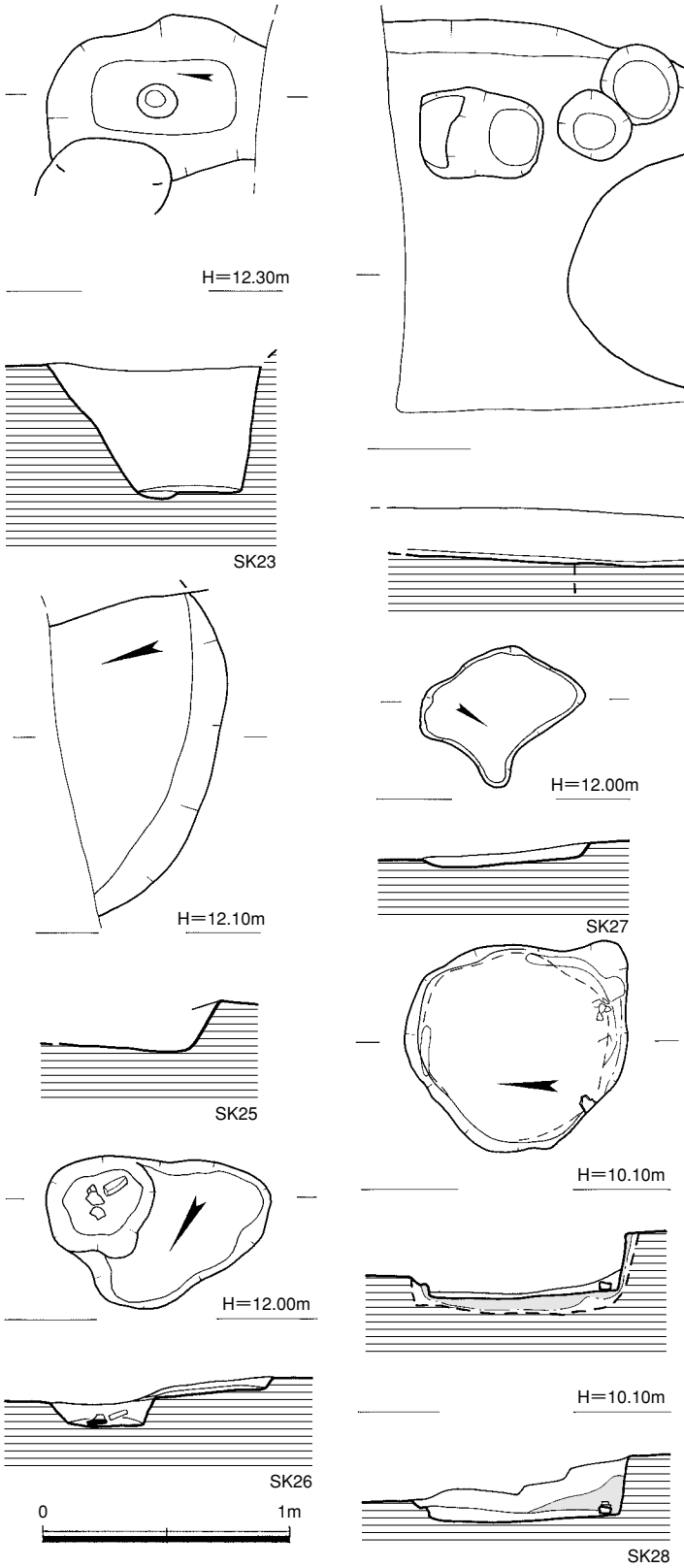


Fig.100　D区SK23～28土坑出土状況実測図（1/30）

赤く変色する。これに伴う出土遺物はなかった。

SK26土坑（Fig.70・100）　調査区南端部近くに検出した長円形土坑で、道路状遺構の路面内に位置する。坑内には瓦・須恵器・磁器片・円礫等を突き込んだ状況であり、道路修復の工作と考えられる。長幅0.9×0.6m、深さ0.1m程度を測る。出土遺物には図化できるものはない。

SK27土坑（Fig.70・100・101）

調査区南端部近くで検出した不整形の土坑で、SK26土坑と同様に道路状遺構の路面上に位置する。

長幅は、0.7×0.6m、深さ0.1m足らずを測る浅いものである。出土遺物には後期甕**05158**・同壷**05159**がある。

SK28土坑（Fig70・100、PL.35－２）

調査区の北端部SC02住居跡の南壁と切り合う円形の焼土坑である。調査では住居に伴う炉跡と考えていたが、切り合いの調査でも関係が明確にならなかった。径0.85×0.9m、深さ0.2mを測る。床面及び南側壁面は熱を受けて

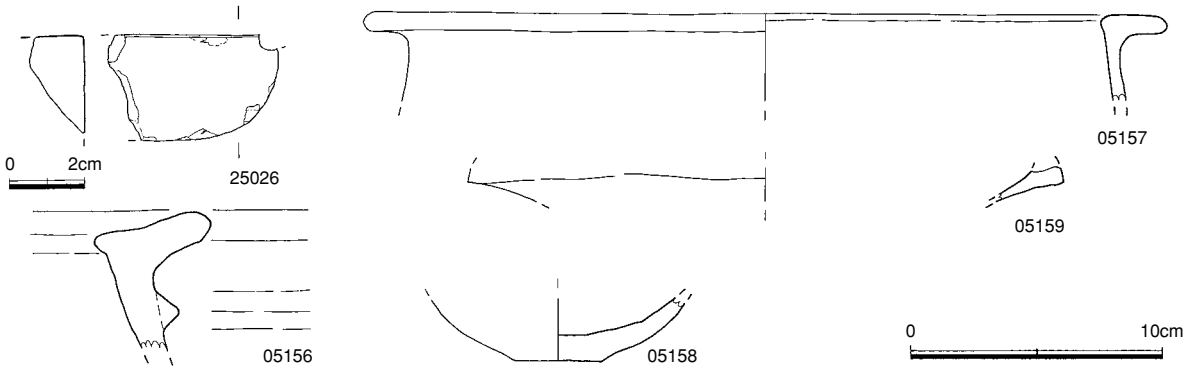


Fig.101　D区SK23・24・27土坑出土遺物実測図（1/3・1/2）

4．井戸跡（Fig.70・102～111、PL.36～40）

井戸跡は、調査区の北東隅で２基（SE01・02）、南側の東壁際に１基（SE03）検出した。道路を挟んだ東側のＣ区では南東側の１群（４基）と北側のSE01を含めると幅10mの範囲で南東から北西方向に井戸群が連なっているように考えられる。当時、良好な水が豊富に得られる場所がどこであるかについて十分な知識があったことを窺わせる。

SE01井戸跡（Fig.70・102～104、PL.37・38）

本井戸跡は、調査区北端で検出され、SC07住居跡のベッド状遺構面に重複している。その規模は、径が0.9～0.95m程度の不整円形をなし、深さ3.5mを測る。壁面は殆ど円筒状をなすが、天端から2.2mの位置で湧水が顕著である。床面より上がった位置で小型鉢（**05172**）が出土した。他に木製二又鍬、柄なども同時に出土している。

出土遺物（Fig.102～104、PL.37・38）

土　器（Fig.104、PL.37・38）

05176は、く字形に屈曲する口縁部がやや内湾気味に開く長胴の甕である。器面調整は、胴部外面が荒いナナメハケで、内面は荒いハケメ調整の後に指オサエが見られる。口縁部内外面は、ヨコナデ調整である。器色は鈍い橙色を呈する。胴部には黒斑が見られる。復元口径19.8cm、残存高17cmを測る。

05183は、短く外開する口縁部を有する長胴の甕である。器面調整は、胴部外面が細かいナナメハケ調整後、平行タタキを加える。また、内面は荒いナナメハケを施す。口縁部内外面はヨコナデである。器色は外面が明るい赤褐色、内面は橙色を呈する。胎土は非常に密で、石英、長石細砂を含む。復元口径21.6cm、胴部最大径27.85cm、残存高23cmを測る。

05173は、扁球状の胴部に低い外開する口縁部を持つ壷である。器面調整は、内外面共にナデを施し、底部下端では強い指ナデ及び外底にはハケメ調整である。また、内底部には指オサエが顕著である。器色は浅い黄橙色を呈する。胎土は密で、石英、長石細砂を含む。口径11.4cm、胴部最大径16.4cm、器高15.5cm、底部径6.2cmを測る。

05178は、扁球状の胴部と不安定な底部を持ち、口縁部を欠く壷である。頸部には低い段状の突帯一条を巡らす。器面調整は、外面がナデで、内面には荒いハケメ調整と内底に指オサエが残る。器色は橙色を呈する。胎土は密で、砂質である。石英、長石砂を多く含む。胴部最大径18.7cm、残存高13.5cm、底部径６cmを測る。

05174は、球状胴部に強く内傾する口縁部を有する壷である。

器面調整は、胴部外面下半部・口縁部で荒いハケメ、上半部は細かいナナメ方向のヘラミガキを施す。内面はハケメ調整である。器色は淡い橙色を呈する。胎土は密で、石英、長石砂を混入する。復元口径11.1cm、器高20cm、胴部最大径17.7cm、底部径5.1cmを測る。

05175は、口縁部を欠く小型壷である。半球状の胴部に急激に立ち上がる口縁部をもつ形態となるか。器色は浅い黄橙色を呈する。胎土はやや粗である。胴部最大径11.5cmを測る。

05182は、口縁が内湾気味の手づくね鉢である。内外面に指オサエ・ナデを残す。器色は淡橙色を呈する。口径8.6cm、器高5.3～5.75cmを測る。

05172は、半球状の胴部に、口縁が大きく外開する鉢である。底部は不安定な平底をなす。器面調整は、外面が荒いハケメ調整で、口縁部内外面はヨコナデである。また、胴部内面は荒いハケメ調整で、後に指オサエが残る。器色は浅い黄橙色を呈する。胎土には石英粗砂を含む。口径17.4cm、器高13.9cm、底部径6.1cmを測る。

05177は、胴部中位に太い三角突帯一条を巡らす大型甕である。底部は不安定な平底をなす。器面調整は、外面に非常に荒いハケメ調整を施す。また、内面は内底部に指オサエ・胴部には外面と同様の荒いハケメ調整を施す。器色は内外面共に橙色を呈する。胴部最大径24.6cm、残存高19.65cm、底部径７cmを測る。

木　器（Fig.103）

45004は、二又鍬破片である。全長24cmを測る。

45005は、鍬柄である。全長26.8cmを測る。

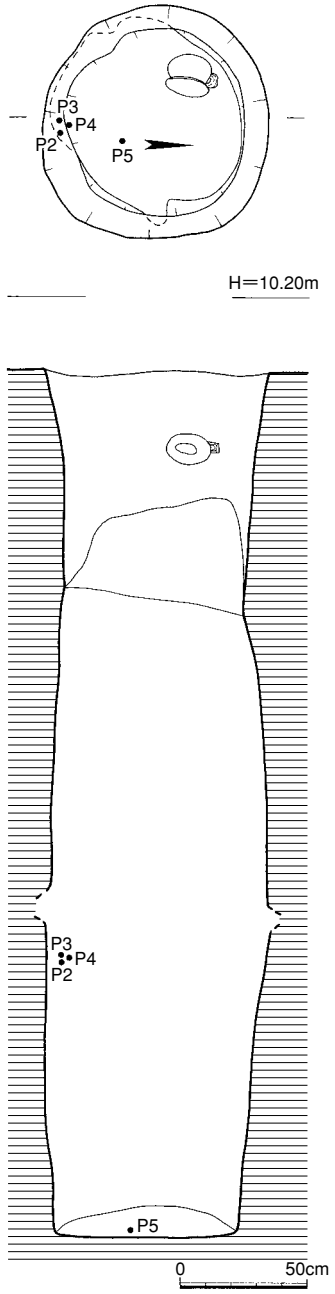


Fig.102　Ｄ区SE01井戸跡出土状況実測図（1/30）

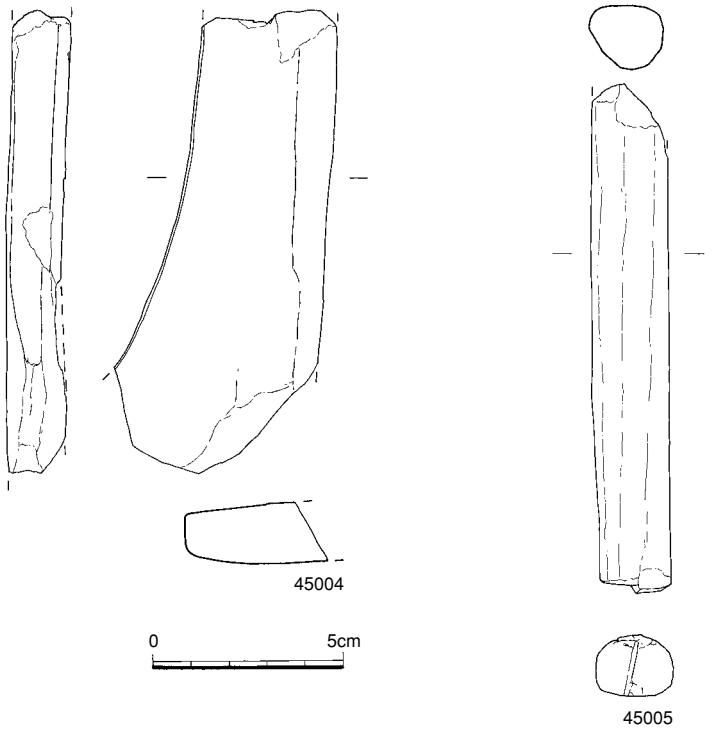


Fig.103　Ｄ区SE01井戸跡出土木器実測図（1/2）

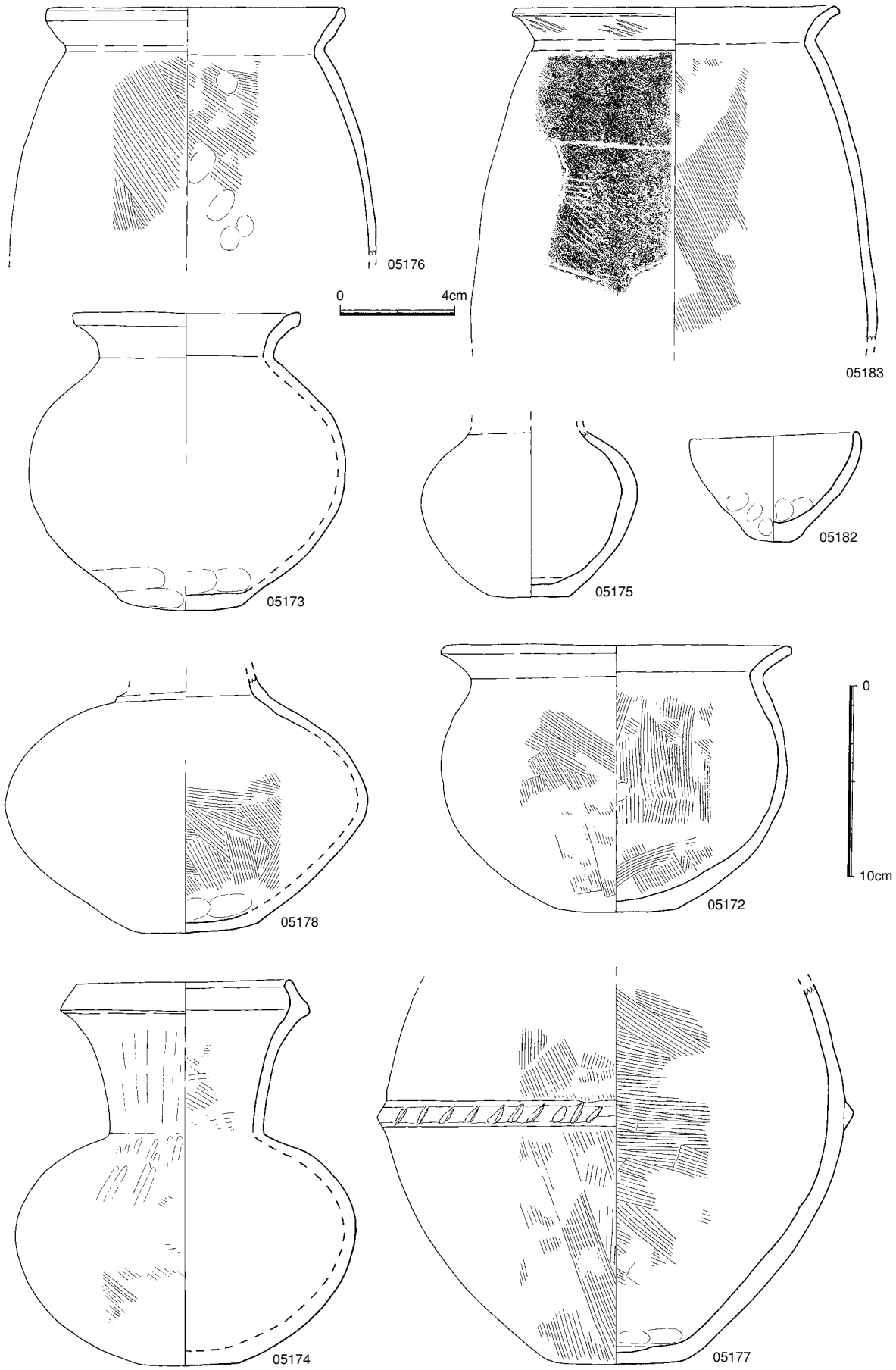


Fig.104　D区SE01住居跡出土遺物実測図（1/3・1/2）

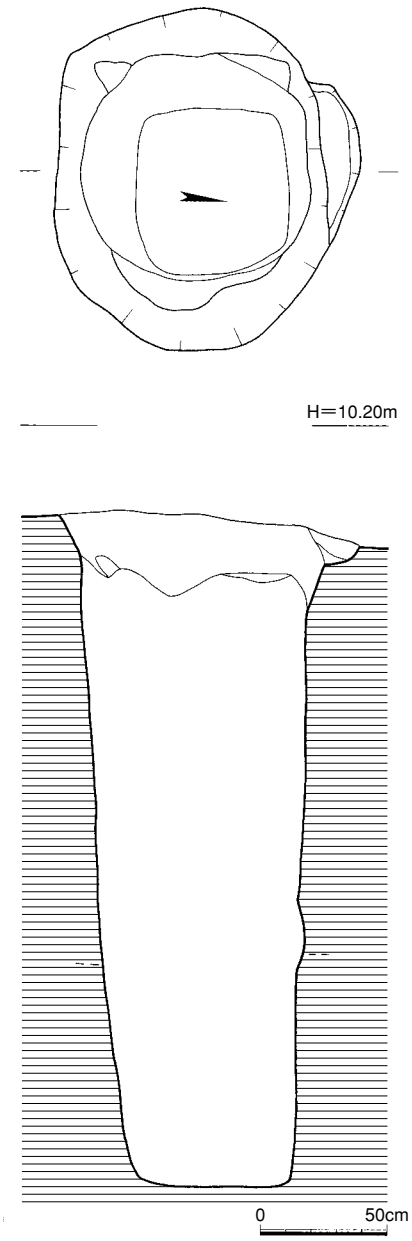


Fig.105　D区SE02井戸跡
出土状況実測図（1/30）

SE02井戸跡（Fig.105・106、PL.38）

本井戸は、SE01井戸の北側３m付近で検出した。その規模は、長幅が1.35×1.1m、深さ2.65mで、隅丸長方形に近い形状をなす。

出土遺物（Fig.106、PL.38）

05191は、口縁部がく字に屈曲する長胴の甕である。器壁は調整されて薄い。調整は、外面には平行タタキが痕跡的に残る。また、内面は荒いハケメ調整後にナデを加える。器色は橙色を呈する。胎土は密である。復元口径23.7cm、残存高28.5cmを測る。

05192は、口縁がほぼ直立する小型の甕である。底部には内面からの二次穿孔が見られる。器面調整は、外面が荒いハケメ調整後にナデを加える。また、内面は外面と同様の荒いハケメ調整である。器色は内外面ともに橙色を呈する。口径10.6cm、器高16.6cmを測る。

SE03井戸跡（Fig.107～111、PL.36・38～40）

本井戸は、SE02井戸の南側22mのところで検出した。その規模は、長幅が1.18～1.07m、深さ1.28mを測り、不整円形をなす。残りは浅いが、井戸内から大量の投入された土器類が出土した。

出土遺物（Fig.108～111、PL.38～40）

05239は、口縁がく字形に内傾する甕である。外面にタテハケを残す。内面にスス付着。口径32.4cmを測る。**05242**は、平坦口縁を有し、口縁下に断面三角の高い突帯一条を巡らす鉢である。外面はタテハケ調整後に丁寧なヨコナデを施す。器色は橙色を呈する。胎土は密である。口径46cmを測る。**05195**は、口縁がやや内傾する平坦口縁を持つ小型甕である。胴部中位よりやや上に三角突帯一条を巡らす。器面調整は、外面が板状工具によるナデ調整、口縁部と胴部内面がナデ調整である。胴部下半には黒斑が見られる。口径14.8cm、器高16.2cm底部径6.5cmを測る。**05220**は、口縁部が内傾してく字に屈曲する甕である。外面はタテハケメ、内面はナデ調整及び指オサエを加える。内外面共にスス付着。器色は浅い橙色を呈する。口径19.5cm、器高20.7cmを測る。**09221**は、小さい平坦口縁を持つ甕で、張る胴部の中位に一条の三角突帯を巡らす。調整は、胴部下半に荒いタテハケメ、上半は板状工具によるナデである。胴部に黒斑あり。器色は鈍い橙色を呈する。口径16.9cm、器高15.65cmを測る。**05194**は、平坦口縁を持つ大型鉢である。底部中央には外面からの二次穿孔が残る。調整は、外面がハケメ後ナデで、口縁部・内面はナデ・指オサエを施す。器色は赤橙色を呈する。口径26.4cm、器高17.85cmを測る。**05203**は、半球状の胴部を持つ壷で、口縁部を欠く。調整は、内外面共に指ナデ、オサエが残る。外面に黒斑あり。胴部径15cm、底部径7.1cmを測る。**05229**は、半球状の胴部にほぼ垂直に立ち上がる口縁を持つ壷である。調整は、外面がハケメ後にナデで、内面はヘラナデである。

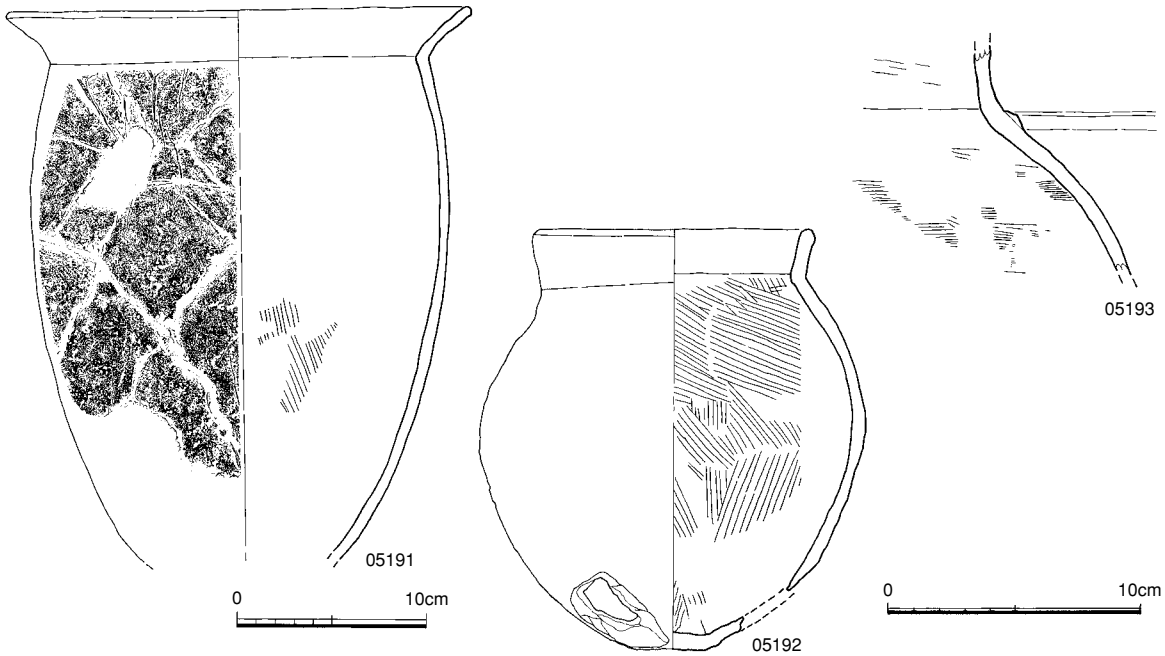


Fig.106　D区SE02井戸跡出土遺物実測図（1/3・1/4）

器色は淡黄色を呈する。残存器高15.6cm、底部径８cmを測る。天端下0.8～１m出土。**05205**は、胴部が玉葱状に膨らみ、垂直な口縁部を有する中型壷である。調整は、外面がタテハケ後にナデ調整で、内面はナデである。器色は橙色を呈する。胴部径22.45cm、底部径8.7cmを測る。

井戸の出土土器類の中で最も器種として多いのが小型の壷である。**05233**・**05202**・**05224**・**05246**・**05222**・**05235**がこれにあたる。Ⅰ類は、胴部中位を最大径とし、口縁はしまりのない頸部からやや開き気味に立って端部が反転する器形のもの（**05233**・**05202**・**05224**・**05222**）で、胴部に三角突帯を巡らすものとこれが無いものが見られる。口径13cm前後、器高14～15cm前後を測る。調整は外面ナデのものが多い。

また、Ⅱ類には同一器形で口縁端部が平坦な鋤先状をなすものがある。**05246**・**05235**などがあり、中型ではあるが**05201**の様な定型化したタイプも見られる。**05246**のように細かいハケメを残すものもある。大きさはⅠ類と変わらない。

また、中型壷類では、小さい平坦口縁を有する古式の**05232**がある。玉葱状の胴部やや垂れる平坦口縁を付す。調整は、内外面共に丁寧なナデである。器色は橙色を呈する。口径12.8cm、器高22cm、底部径7.4cmを測る。**05248**は、口縁を失うが、球状胴部が特徴である。調整は、外面がナナメ・ヨコ方向の丁寧なヘラミガキ、内面は指ナデ・オサエである。器色は明赤褐色を呈する。胴部最大径21.5cm、底部径７cmを測る。**05223**は、玉葱状胴部に直口の口縁をもつ壷である。口縁ー底部までの一部に丹の塗布が見られる。調整はタテ・ヨコ方向のヘラナデである。口径8.4cm、器高22.35cm、胴部径19.4cm、底部径６cmを測る。器色は、橙色

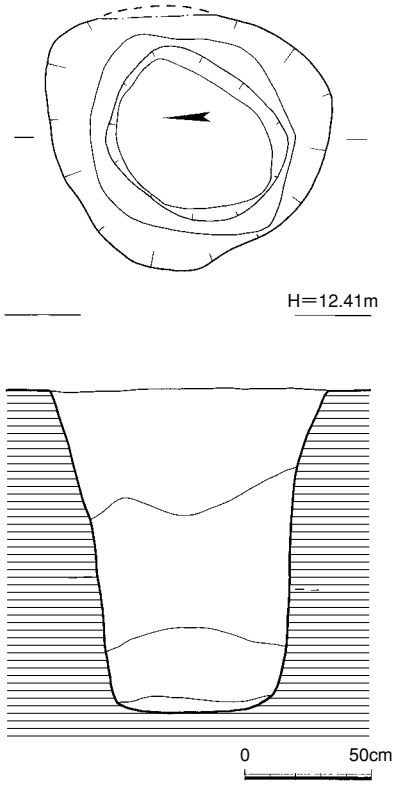


Fig.107　D区SE03井戸跡出土状況実測図（1/30）

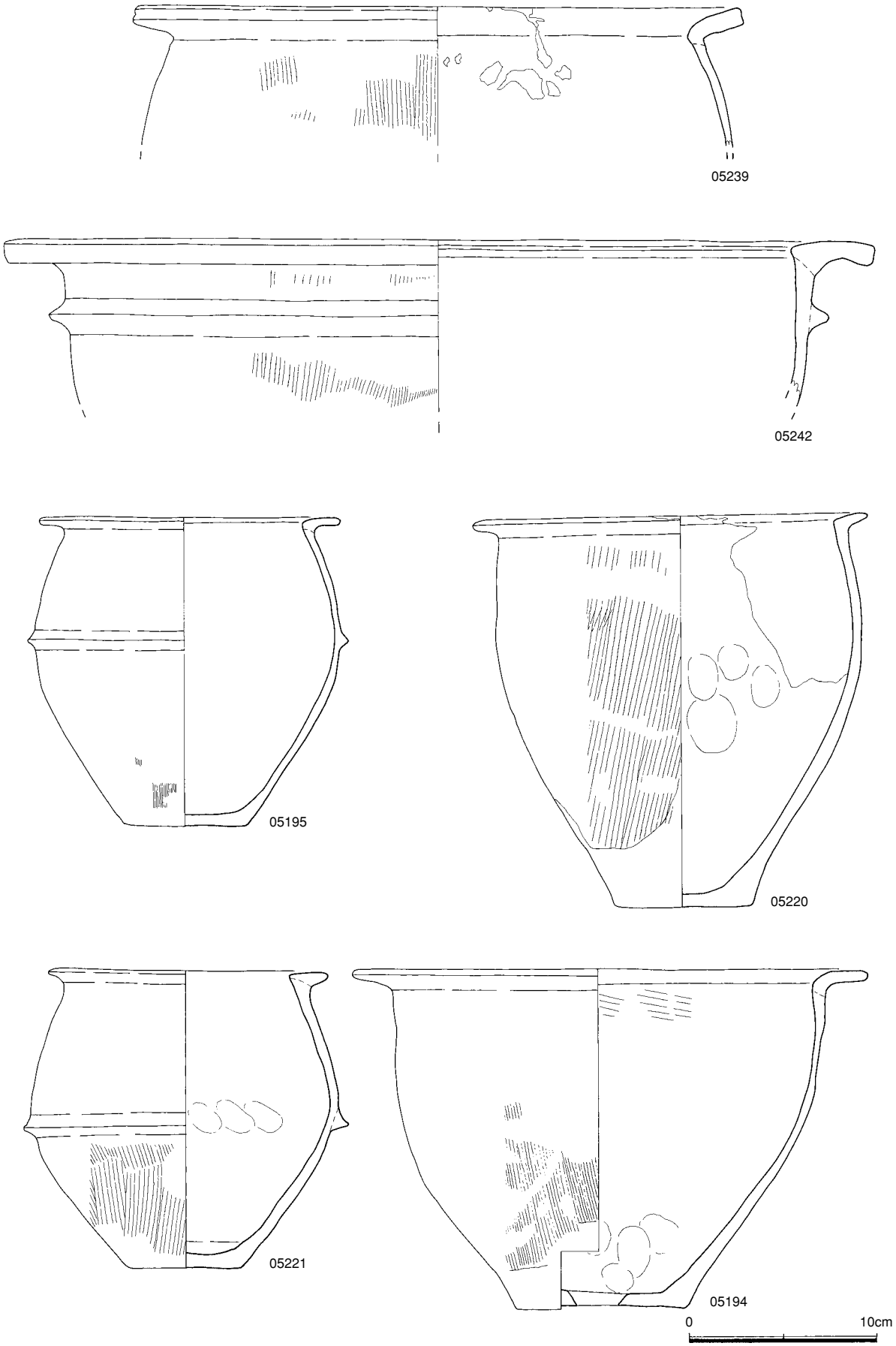


Fig.108　D区SE03井戸跡出土遺物実測図①（1/3）

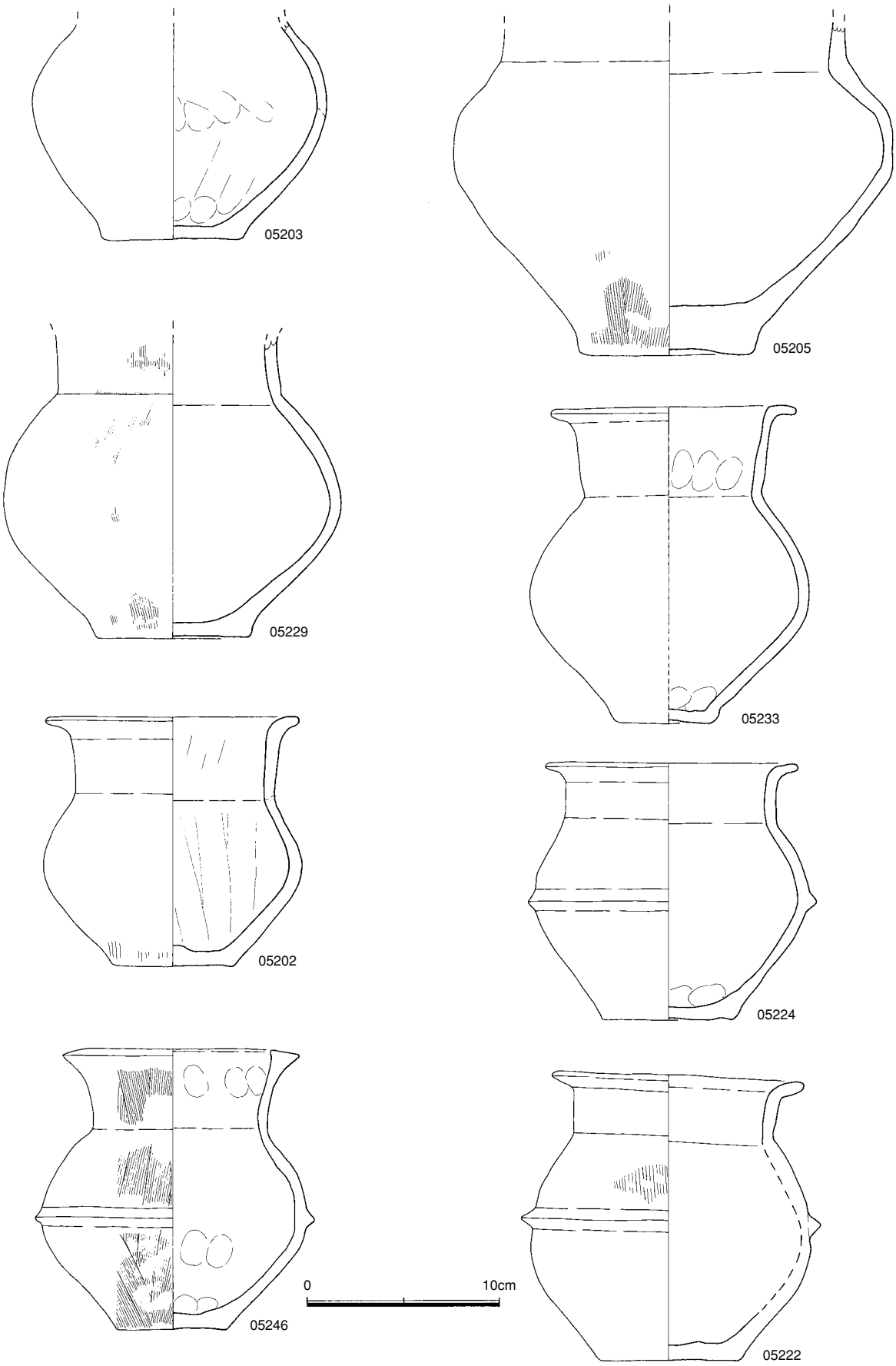


Fig.109　D区SE03井戸跡出土遺物実測図②（1/3）

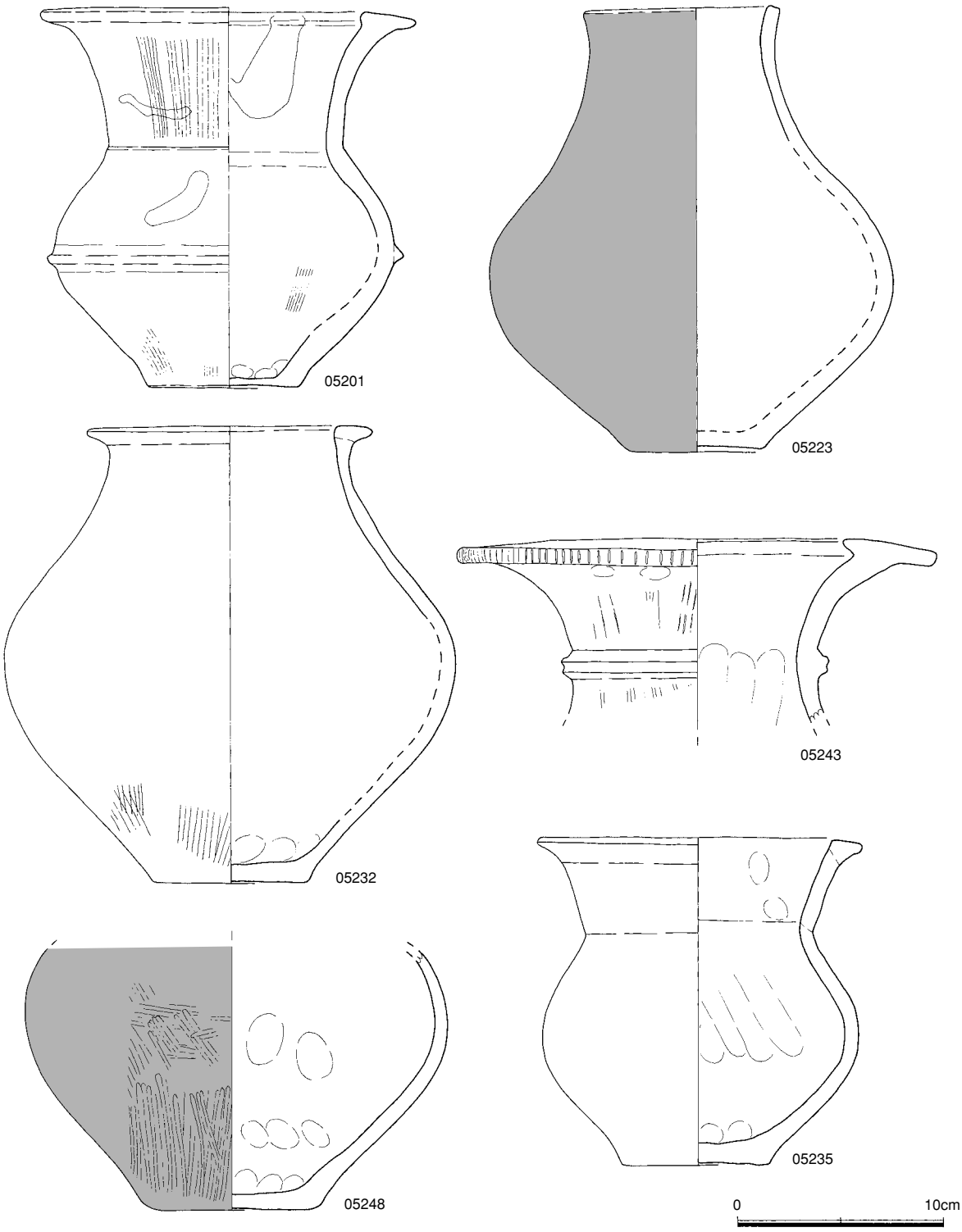


Fig.110　D区SE03井戸跡出土遺物実測図③（1/3）

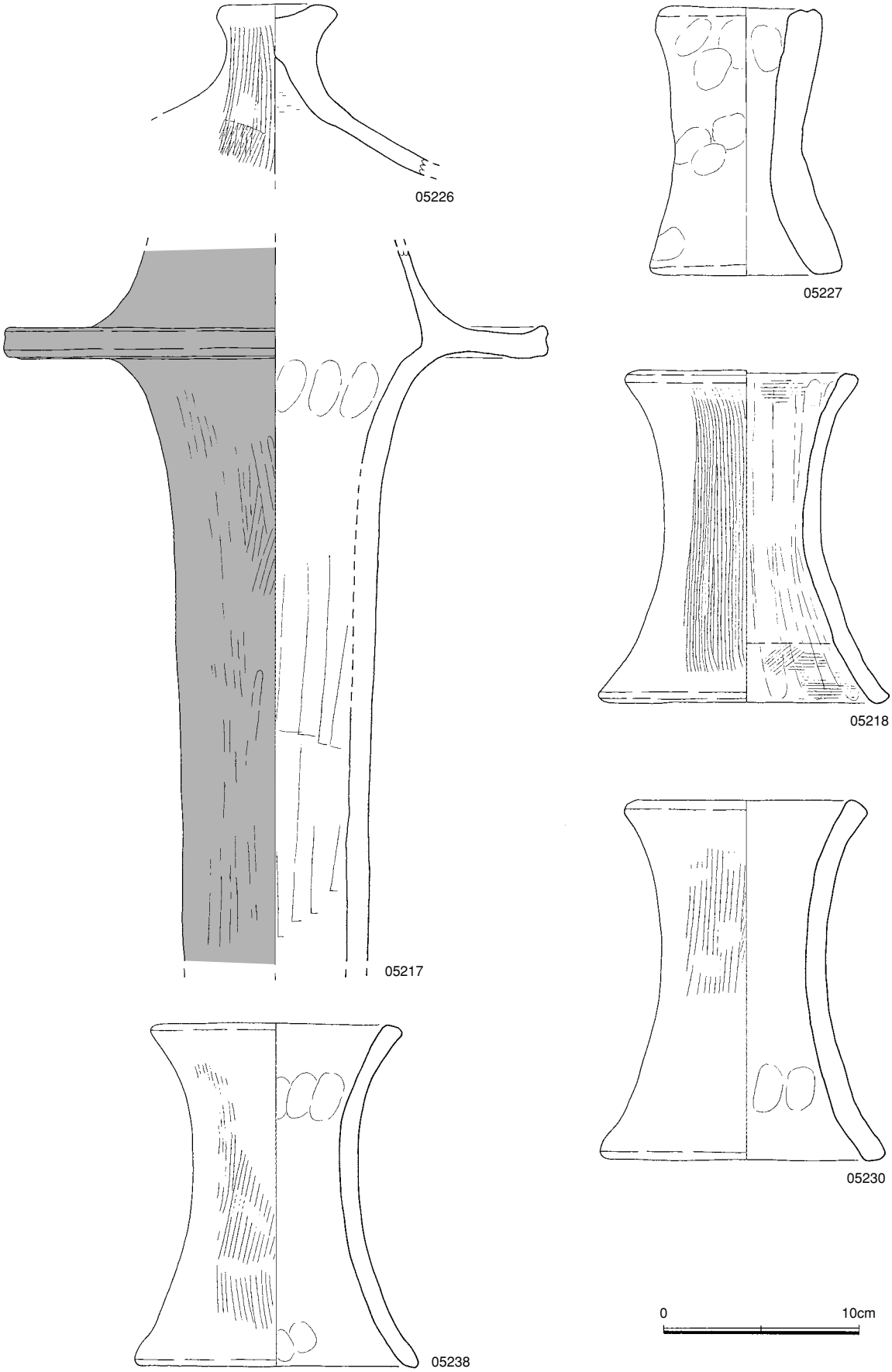


Fig.111　D区SE03井戸跡出土遺物実測図④（1/3）

を呈する。**05243**は、端部がやや垂れる鋤先口縁を有する中期壷である。口唇部には刻み目を施す。外面は丹塗で、口縁下に幅１mm、２mm間隔の暗文を施す。また、口縁下には断面M字の突帯を巡らす。器色は赤褐色を呈する。口径22.9cm、残存高8.9cmを測る。

甕蓋には**05226**がある。天井部は窪み、調整は外面が荒いハケメで、内面ナデである。器色は淡橙色を呈する。天井部径5.5cmを測る。

筒形器台**05217**は、口縁、脚を欠くが、残存高36.1cmを測る。調整は、外面筒部に縦方向の丁寧なミガキ・口縁部に幅が１mm、間隔２mmの暗文を施す。器色は赤褐色を呈する。内面は縦方向のヘラケズリ・指オサエを残す。外面は丹塗である。鍔部径27.6cmを測る。

小型器台は、二種類に区別される。**05227**の様に器壁が肉厚で、やや小型のもので、器面調整が指オサエを主とするものと薄手で左右がシンメトリーな形態で、外面調整がハケメのもの**05218**・**05230**・**05238**とが見られる。

５．溝状遺構（Fig.70・112・113）

調査区では、溝と認識したのは７条（SD01～07）である。後世の攪乱や削平によってその殆どが浅く、延長の短いものである。

SD01溝（Fig.70）

調査区の北端で検出した全長2.8m、幅0.5mの浅い不整形な溝である。溝内からは図化可能な遺物は出土しなかった。時期は不詳である。

SD02溝（Fig.70）

調査区の北端部西側で検出した全長1.4m、幅0.3mの浅い不整形な溝である。溝内からは図化可能な遺物は出土しなかった。時期は不詳である。

SD03溝（Fig.70・113）

調査区の北端部で検出した南北方向の溝である。規模は、全長が3.7m以上、幅１m、深さ0.1m程度を測る。

出土遺物は、中期甕**05160**や鉢**05161**がある。遊離した遺物であり、溝には伴わないと考えられる。いずれも小破片である。

SD04溝（Fig.70）

調査区の北端部東側で検出した南北方向の溝である。規模は、全長が2.1m、幅0.7～0.4mを測る浅い不整形な溝である。溝に伴う遺物で図化できるものは無かった。

SD05溝（Fig.70・113）

調査区の北端部東側で検出した南北溝である。両端部は立ち上がっており、その規模は全長５m、幅0.4m、深さ0.1m以上の浅い溝である。溝内からの出土遺物は少量である。

出土遺物（Fig.113）

05162は、手づくね鉢である。器色は橙色を

Fig.112　Ｄ区SD07溝跡土層断面実測図（1/40）

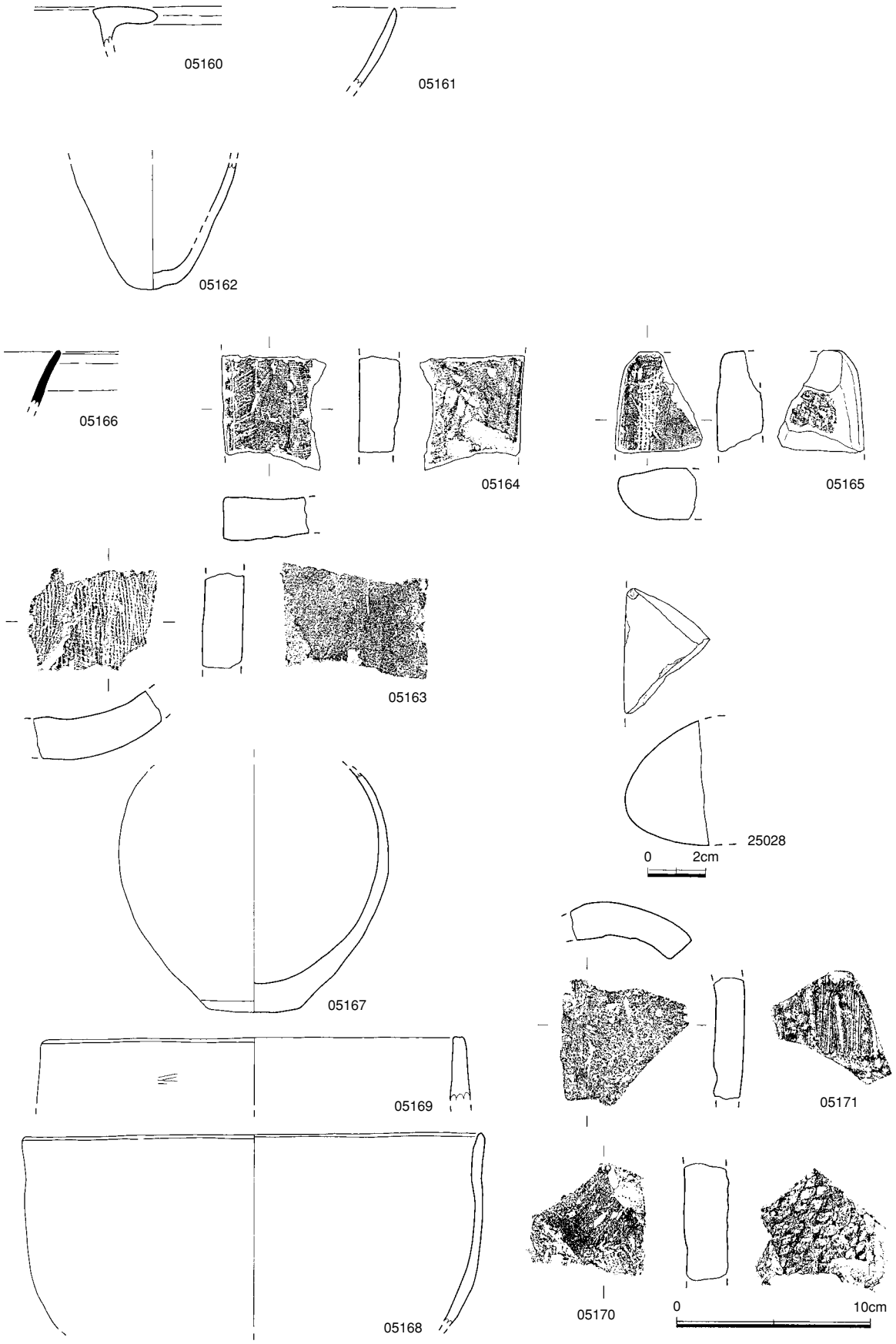


Fig.113　D区SD03・05・07溝跡・遺構検出面・試掘トレンチ出土遺物実測図（1/3・1/2）

呈する。胎土には石英粗砂を多量に含む。焼成は堅緻である。残存高6.3cmを測る。

SD06溝（Fig.70）

調査区の北端部で検出した全長1.7m、幅0.5mを測る南北溝である。深さは0.1m前後である。溝内からは図化の可能な遺物の出土は無かった。

SD07溝（Fig.70・113）

本溝は、調査区南側の東壁付近に沿う大型の溝である。今回の調査では溝西側のラインを確認したことになる。その方向は殆ど現在の道路線と一致しており、本来溝であったものを埋め立てて道路としたものと考えられる。

溝は、延長28mを測り、断面形から溝壁はかなり傾斜が弱く、底面は平らな箱掘りと考えられる。また深さは1.1m程度を測り、上端部からの埋土は、第１層が淡黄褐～暗黄褐色粘質土、第２層ー暗褐色粘質土、第３層ー黒褐色砂質土である。溝内からは小破片であるが、瓦片等が出土した。

出土遺物（Fig.113）

05166は、第１層出土の須恵器杯破片である。器色は灰色を呈する。調整は、内外面共にヨコナデである。胎土は密である。

05164は、外面に斜格子タタキにナデ調整、内面に布目とケズリを残す平瓦破片である。また、側面にはケズリが見られる。器厚は２cm程度を測る。器色は灰色を呈する。

05165は、外面に斜格子タタキ、内面に布目を残す平瓦か。側辺はケズリを加え、丸味を帯びている。器色は灰色を呈する。焼成は堅緻である。

６．道路状遺構（Fig.70・113）

道路状遺構は、調査区南側のSD07溝の西側に平行して走る幅２m、延長5.5m程度が確認できる。道路面には長径が１・0.5mを測る不整円形のピット（SF01～03）が見られ、内部には須恵器破片や磁器片、小礫などが充填されていることから路面の修理痕と考えた。なお、道路西側のラインは切り落としのためか周辺と10cm程度の段差が認められる。

出土遺物（Fig.113）

25028は、太型蛤刃石斧破片である。SF01出土。

他に周辺で採集された遺物には、後期の壷と考えられる不安定な平底の**05167**や弥生期の鉢**05168**・**05169**、外面に斜格子タタキ、内面ナデ調整の残る平瓦破片の**05170**、同じく平瓦の**05171**等が見られる。

第Ⅴ章　おわりに

市道御供所井尻線建設に伴う井尻Ｂ遺跡の第17次調査は、今回の報告が最終のものである。

本調査では南北に長い遺跡範囲のほぼ北半部について、道路幅員20m分を調査したこととなる。いわば細長い丘陵の脊梁部に幅20mの試掘トレンチを入れ、遺構の探査を行ったようなものである。

調査で検出した主要な遺構は、弥生時代中期初頭～前半期、弥生中期後半期、弥生後期であり、他に古墳前期・古代・中世期である。

以下では各時期の遺構の構成についてその特徴を記し、調査の簡単なまとめとしたい。

まず弥生時代中期初頭～前半期では、散在的ではあるが、全域に亘って小型円形・長方形の竪穴住居跡・土坑・貯蔵穴等が知られ、集落の形成が始まっている。また墓地については集落内に収まる小規模のものとものと考えられる。

続く弥生時代中期後半期では、削平を受けた竪穴住居跡・井戸・甕棺墓地等が知られるが、後出する時期特に後期の竪穴住居跡や井戸・土坑の覆土内からは破片となった中期後半期の丹塗り土器を含む生活土器や大型甕棺破片等が数多く出土することから、本来の集落規模はかなりまとまったものであった可能性が高い。また、集落に伴う甕棺墓地は、遺跡群北東部で一群が調査されているが、特に突出した大型成人墓は無く、副葬品の出土も無いことから一般共同体成員の墓地と理解される。

続く弥生時代後期が本遺跡では最も遺構分布密度が濃く、特に後期後半以降のものが多いと考えられる。竪穴住居跡を中心にしてこれに伴う倉庫としての小規模掘立柱建物、井戸などがそれらである。

竪穴住居跡は遺存状況が良くないが、平面プランが長方形を基本形としている。これに伴う土器類などの遺物は出土量が少ない。また掘立柱建物は、２×３間規模のものが普通サイズである。

また井戸は、丘陵が西側へ緩く傾斜する変換点付近に連鎖的に分布することから、日常的に使用する地下水が豊富に得られる地点について十分な知識が当時の人々にあったと考えることができる。各井戸の覆土内からは、層位的にいくつかの投入時期を違えた土器群が大量に出土している。

後期の遺構では、竪穴住居跡・井戸等から多くの土器群とともに青銅器・ガラス玉類の鋳造関係遺物が出土した。それらの資料については、遺跡内のこれまでの調査で出土したものをFig.114に掲載した。青銅器鋳型については、６次調査土壙10で茎の短い連鋳式鏃・鏡の鋳型、11次調査包含層上層出土の銅矛鋳型、17次調査Ｂ区SC4063住居跡出土の広形銅戈がある。また、製品と考えられる青銅器には、11次調査包含層下層出土の有茎鏃や17次調査Ｂ区SC4664住居跡出土の小銅鐸、同Ｃ区SE05井戸出土の銅鏡などが見られる。また、11次調査包含層下層や17次Ｃ区SC01住居跡出土の銅鐸形土製品が知られる。また、ガラス勾玉鋳型が17次調査Ｃ区SE05井戸や同Ｂ区SC4064住居跡、同Ｃ区SC01住居跡から出土しており、後２点は複数を同時に鋳出す鋳型であり、型の合わせ記号も残る。さらに、鋳造関連遺物として、17次調査Ｂ区SC4169住居跡や同Ｃ区SE03井戸出土の取り瓶があり、同Ｃ区SE05井戸から甕内底部に銅塊の付着する例が見られる。

以上から、井尻Ｂ遺跡でも弥生時代奴国の中枢である須玖岡本遺跡近くにあって、集落内での青銅器の鋳造やガラス勾玉の製造が広範に行われていたことが改めて明らかとなった。

また、古代では、現在の地割りとほぼ同方向の溝やこれに伴う瓦類、建物群があり、特に「評」字を記した瓦は「郡」への転換を具体的に物語るとともに本区域に官衙的施設が置かれたことが想定できることとなった。

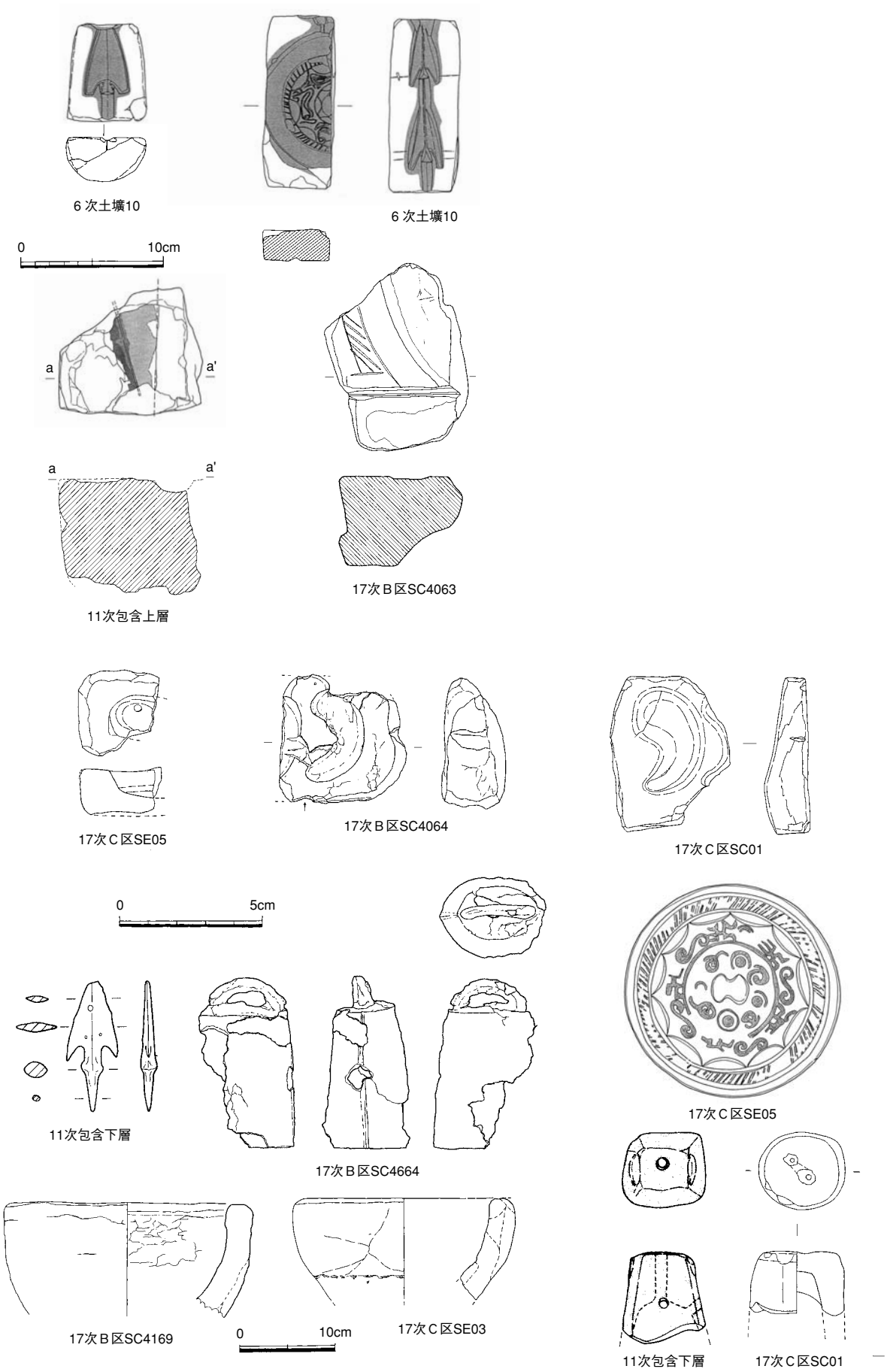


Fig.114　井尻Ｂ遺跡出土の鋳造関係遺物集成（1/2・1/4・1/6）

井尻Ｂ遺跡出土の青銅器並びに鋳造関連資料等に関する自然科学的調査

比佐陽一郎（福岡市埋蔵文化財センター）

はじめに

井尻Ｂ遺跡では本報告で取り扱われている遺物の他にも、過去の調査で多くの青銅器やその製作に関わる遺物などが発見されている。これらの遺物は、金属に関わる材質情報などにおいて特に、肉眼観察ではわかり得ない部分も多く、近年、自然科学的な調査手法の援用によって多くの成果が得られている。今回、17次調査出土資料を中心に、井尻Ｂ遺跡で出土した資料に対して行った、蛍光Ｘ線分析による材質調査、並びに鉛同位対比分析の結果をここに記す。なお、鉛同位対比分析は、東京文化財研究所（当時）の平尾良光・鈴木浩子両氏によって行われたもので、昨年度報告で一度、文章と図の一部が掲載されているが、試料採取箇所などを含めて改めて報告書の必要部分を抜粋、掲載するものである。また鉛同位対比分析の手法についての詳細は、平尾氏の著書（平尾1999）を参照いただき、ここでは紙幅の関係上割愛する。

蛍光Ｘ線分析による材質調査

分析によって、青銅器はその成分を、また青銅及びガラスの製作関連遺物については使用痕跡の有無を明らかにし得た。調査対象遺物やその内容については、表に示すとおりである。

資料名	調査次数	資料登録番号	出土遺構	分析装置と調査内容	分析内容
市報No.	掲載Fig	時期	備考		
銅付着土器	6次	950100110	土壙10	底部の残留物を微量採取し、EDXにて分析	珪素やアルミニウムなどの土壌に由来すると見られる成分の他に、銅、鉛、錫の青銅を構成する元素を検出。
529	22-1	後期中頃	比佐2005b参照		
鋳型（鏡・鏃）	6次	950120001	土壙M10-R1	鋳型使用部分のＥＤＸ/WDX分析および顕微鏡観察	鏡笵面、鏃笵面ともに、微弱な銅、鉛のピークが認められる。鏡笵文様線刻内には黒褐色の付着物が残留、塗型剤などの可能性も考えられる。
529	22	後期中頃	比佐2005a参照		
鋳型（鏃）	6次	950120002	土壙M16-R5	鋳型使用部分のＥＤＸ/WDX分析および顕微鏡観察	非常に僅かで不明瞭ながら、銅のピークが認められる他、鉛、錫の部分にも微弱な高まりが見られ、観察結果とも合わせ使用されたことを窺わせる。
529		後期後半			
銅滓?	6次	950130011	撹乱	表面のEDX分析	銅、錫、鉛を基調とする青銅成分の他、ヒ素、銀、アンチモンといった微量元素を検出。
529	未図化	不明	比佐2005b参照		
鋳型（中細形銅矛）	11次	980900179	包含層B-13上層	鋳造範囲のWDX分析	変色(黒色化)部分で、鉛、錫を検出したことから、使用されたことが推測される。
644	57-179	中期中頃～後半	比佐2005a参照		
銅鏃	11次	980900180	包含層C-12下層	表面のEDX分析	微量元素としてヒ素、銀を含む、青銅を構成する元素を検出するが、銅が極端に強く、鉛と錫は弱い。湿地還元環境下出土青銅器に多く見られる組成となっている。
644	57-180	中期中頃～後半			
鋳型（広形銅戈）	17次	20002740066	B区SC-4063	鋳造範囲と石材表面をWDXにより分析	使用範囲では銅、鉛、錫を検出しており、使用されたことが推測される。
834	18-066	後期後半			
小銅鐸	17次	20002740232	B区SC-4664	表面のEDX分析	銅、錫、鉛を基調とする青銅成分の他、微量な銀のピークを検出。
834	56-232	後期			
取瓶	17次	20002740257	B区SE-4169	付着残留物部分表面（＝内面）及び外面のWDX分析	内面で非常に強い鉛と明瞭な錫、銅のピークが認められる。また内外面関わらず亜鉛が若干検出されるがその原因は不明。
834	72-257	後期後半			
取瓶	17次	20002740016	B区SC-4019	付着残留物部分表面のEDX分析	非常に強い銅、鉛、錫のピークが見られる他、微弱な元素としてヒ素、銀、アンチモンを検出。これらは弥生時代の青銅器に通有の組成であり、使用されたことを物語る。
834	'7-016	中期中頃～後半			
取瓶	17次	20002706211	C区SE-03	付着残留物部分表面（＝内面）及び外面のWDX分析	内面で非常に強い鉛と明瞭な錫、銅のピークが認められる。また内外面関わらず亜鉛が若干検出されるがその原因は不明。
本報告	未図化	後期中頃			
取瓶	17次	20002706212	C区SE-03	付着残留物部分表面のWDX分析	非常に強い鉛と明瞭な錫、銅のピークが認められる。また亜鉛が若干検出されるがその原因は不明。
本報告	60	後期中頃			
銅付着土器	17次	20002736009	C区SE-05	表面及び、土器に接していた面のEDX分析	土壌由来元素の他に金属元素として銅、鉛、錫が検出され、青銅と見られる。また分析箇所によっては銀が僅かに認められる。
本報告	65	後期中頃			
銅鏡（小型仿製鏡）	17次	20002736008	C区SE-05	表面（鈕頂部）のEDX分析	銅、錫、鉛を基調とする青銅成分の他、微弱ながらも比較的明瞭な銀のピークを検出。
本報告	67	後期中頃			
鋳型（ガラス勾玉）	17次	20002740121	B区SC-4064	勾玉凹み部分のEDX分析	若干の鉛が検出されており、鉛系ガラスの鋳造に使用されたことが窺える。
834		終末～古墳初頭			
鋳型（ガラス勾玉）	17次	20002706165	C区SC-01	勾玉凹み部分及び側面ガラス付着部分のEDX分析	付着ガラス部分では鉛、バリウム、銅を検出。弥生時代に通有の青または青緑色の鉛バリウムガラス製作に使用されたと推測される。
本報告	5	後期前半			
鋳型（ガラス勾玉）	17次	20002706251	C区SE-05	勾玉凹み部分のEDX分析	微弱ながら明瞭な鉛のピークが検出されており、鉛系ガラスの鋳造に使用されたことが窺える。
本報告	67	後期中頃			

Tab. 1　蛍光Ｘ線による材質調査表

分析方法におけるEDXはエネルギー分散型微小領域用装置、WDXは波長分散型大型資料用装置をそれぞれ示す。各装置の名称及び動作環境は下記のとおり。

EDX：微小領域用エネルギー分散型蛍光X線分析装置（エダックス社製・Eagle μprobe）／対陰極：モリブデン(Mo)／検出器：半導体検出器／印加電圧：40kV・電流：任意／測定雰囲気：真空／測定範囲：0.3mm φ／測定時間200秒

WDX：大型資料用波長分散型蛍光X線分析装置（フィリップス社製／PW2400）／対陰極：スカンジウム(Sc)／印加電圧・電流：30～60kV・50～100mA／測定雰囲気：真空／測定範囲20mm φ／分光結晶：フッ化リチウム・ゲルマニウム・PET・金属多層累積膜／検出器：シンチレーション計数管・ガスフロー検出器

(参考文献)

比佐陽一郎　2005a「鋳造関連資料における使用痕跡の保存科学的調査(予察)」『鏡笵研究Ⅲ』奈良県立橿原考古学研究所・二上古代鋳金研究会

比佐陽一郎　2005b「「奴国」域（福岡平野）で出土した青銅器製作関連資料について」『九州考古学』第80号　九州考古学会

平尾良光(編)　1999『古代青銅器の流通と鋳造』鶴山堂

鉛同位対比分析

小銅鐸がＤ領域に、その他の資料はＡ領域の中でも、近畿三遠式銅鐸や広形銅矛など弥生時代後期青銅器の値が集中するａ両お行き及びその付近に位置した。Ａ領域を図②に拡大した。小型ホウ製鏡と銅鏃は、ａ領域から少し離れたところに位置した。この２資料は、小型ホウ製鏡が弥生時代後期前半、銅鏃が弥生時代中期（？）とのことである。これまでの研究でも、弥生時代中期から後期前半の資料はＡ領域に位置することが多く、これら資料もそれらと同じと理解できる。また他の資料も弥生後期とのことであり、ａ領域に位置することは広形銅矛など後期青銅器と類似した材料が使用されていると判断できる。なおａ領域は非常に狭い範囲なので、値が近似していても同一鋳造かの判断はできない。小銅鐸はこれまで17資料（共伴の舌も含む）の測定が行われており、井尻Ｂ出土資料が18例目である。これまで測定した小銅鐸はすべてＡ領域に位置しており、井尻出土銅鐸が初めてＤ領域に位置した。これまでは、小銅鐸は弥生後期の資料であることからＡ領域に位置することは問題ないように思えた。井尻出土小銅鐸も弥生時代後期～古墳時代初頭と位置づけられているので、他の資料と同じ様な値を示すかと思われたが結果は違った。この時期の青銅器でＤ領域に位置する資料はほとんどなく、井尻出土小銅鐸がＤ領域に位置したことは単に小銅鐸だけの問題にとどまらず、何を意味するのか今後の問題点として留意したい。(平尾良光・鈴木浩子)

資料名	調査次数	出土地区・遺構	資料登録番号	206Pb/204Pb	207Pb/204Pb	208Pb/204Pb	207Pb/206Pb	208Pb/206Pb	測定番号
青銅付着土器	６次	土壙10	950100110	17.741	15.548	38.406	0.876	2.165	HS1144
青銅付着土器	17次	C区SE-05(6264)	20002736009	17.741	15.550	38.422	0.877	2.166	HS1145
坩堝or取瓶1	17次	B区SE-4169	20002740257	17.740	15.542	38.386	0.876	2.164	HS1147
坩堝or取瓶2	17次	C区SE-03(6349)	20002706211	17.739	15.543	38.394	0.876	2.164	HS1148
小型仿製鏡	17次	C区SE-05(6264)	20002736008	17.772	15.549	38.450	0.875	2.164	HS1146
銅鏃	11次	包含層C-12下層	980900180	17.782	15.559	38.480	0.875	2.164	HS1149
小銅鐸	17次	B区SC-4664	20002740232	19.322	15.792	40.024	0.817	2.071	HS1133

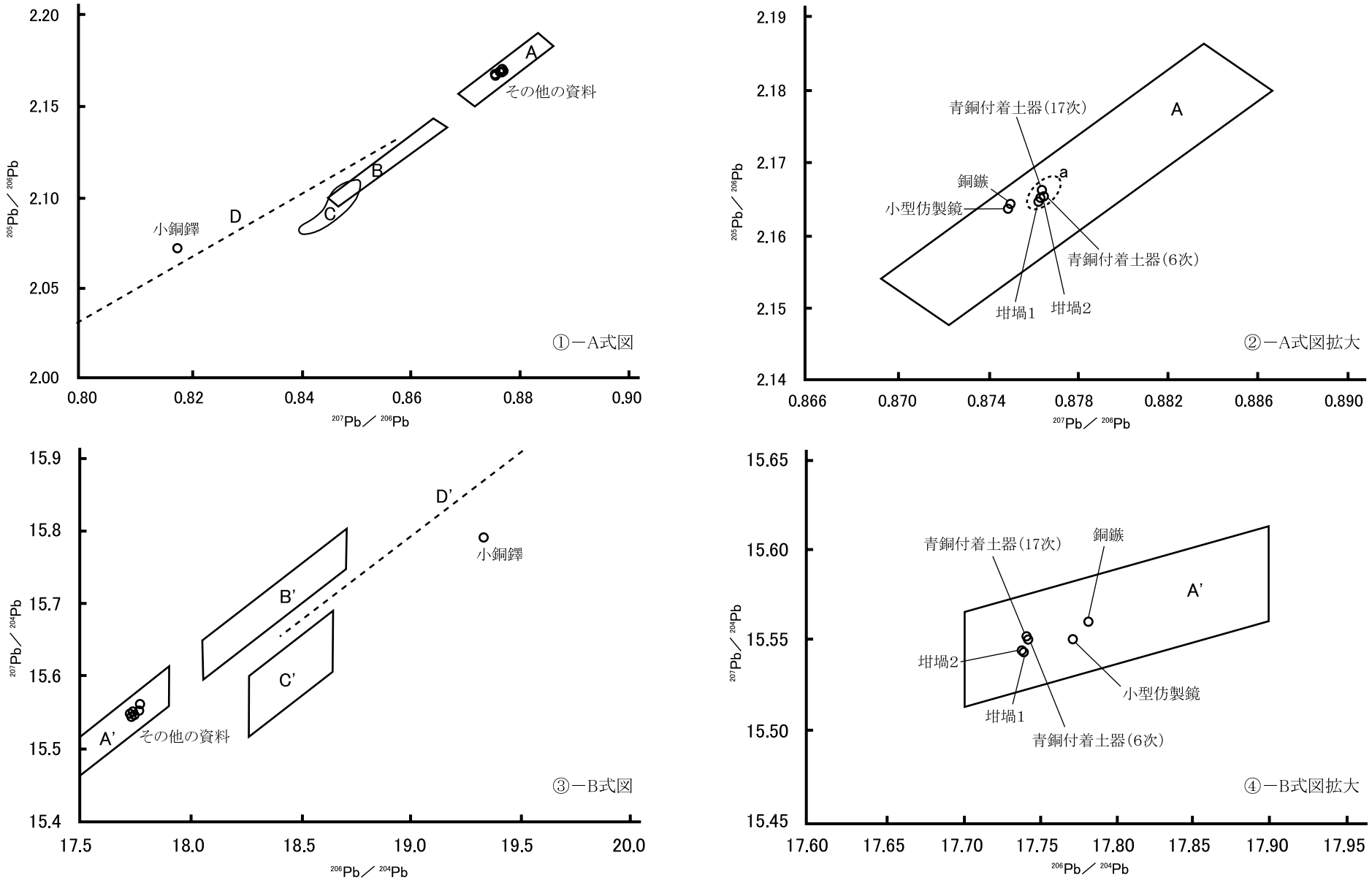
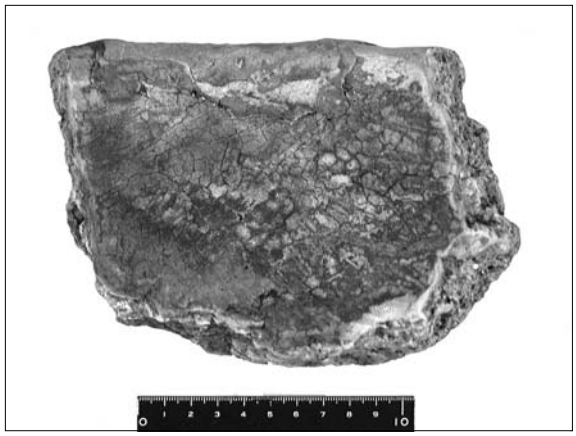


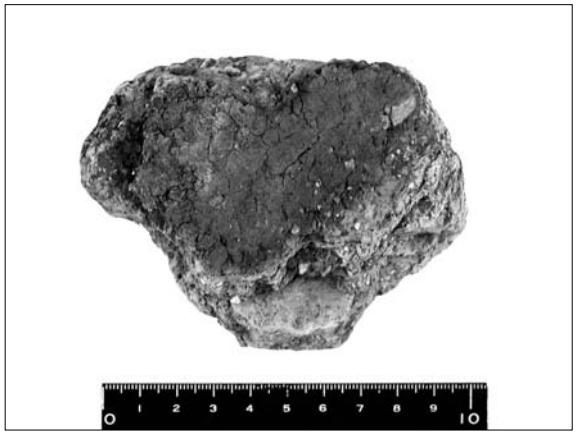
Fig.115　鉛同位対比分析の結果図

1．青銅付着土器（６次）

2．青銅付着土器（17次）

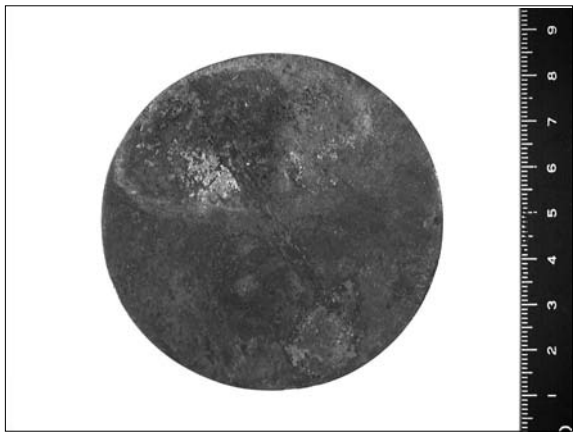


3．坩堝①（17次）

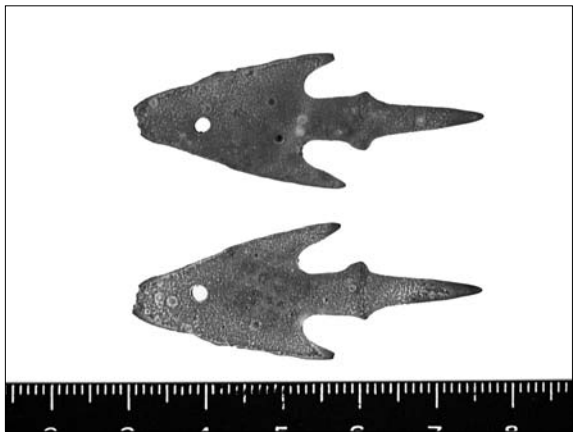


4．坩堝②（17次）

5．小型仿製鏡（17次）



6．同左　鏡面



7．銅鏃（11次）

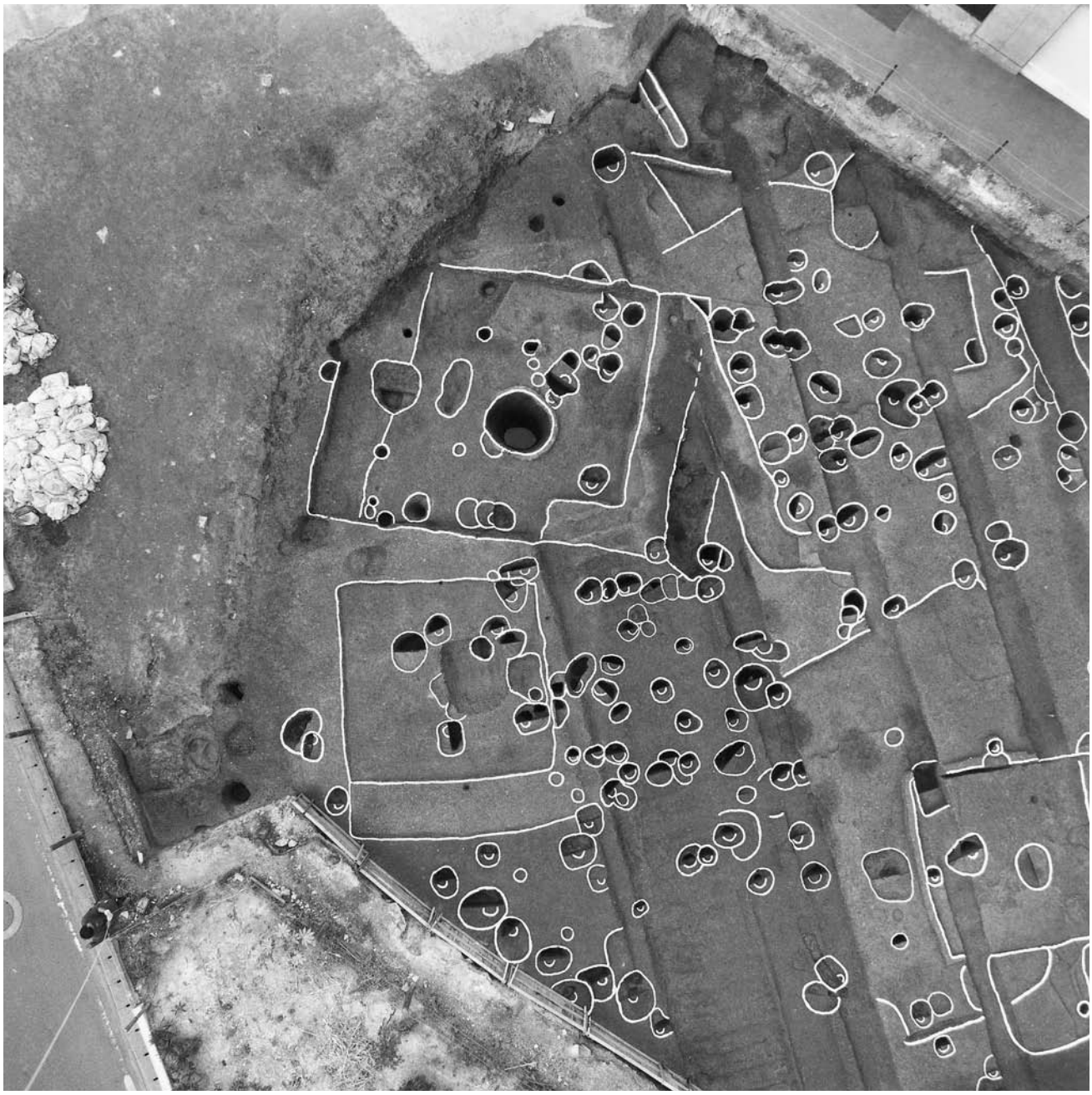
8．小銅鐸（17次）

鉛同位対比分析に供した資料と試料の採取場所（白抜き矢印部分）

図　　版

PLATES

井尻Ｂ遺跡17次Ｃ調査区南半部全景（南から）



井尻Ｂ遺跡17次Ｃ調査区北側住居跡出土状況全景（南西から）

井尻Ｂ遺跡17次Ｃ調査区周辺状況全景（北から）

井尻Ｂ遺跡17次Ｃ調査区北側住居跡出土状況全景（南から）

井尻Ｂ遺跡17次Ｃ調査区南端部遺構出土状況全景（南から）

1　井尻Ｂ遺跡17次Ｃ調査区北端部遺構出土状況全景（南から）

2　井尻Ｂ遺跡17次Ｃ調査区SC05竪穴住居跡出土状況（南東から）

1　井尻Ｂ遺跡17次Ｃ調査区SC05竪穴住居跡主柱穴土器出土状況

2　井尻Ｂ遺跡17次Ｃ調査区SC05竪穴住居跡床面土器出土状況（西から）

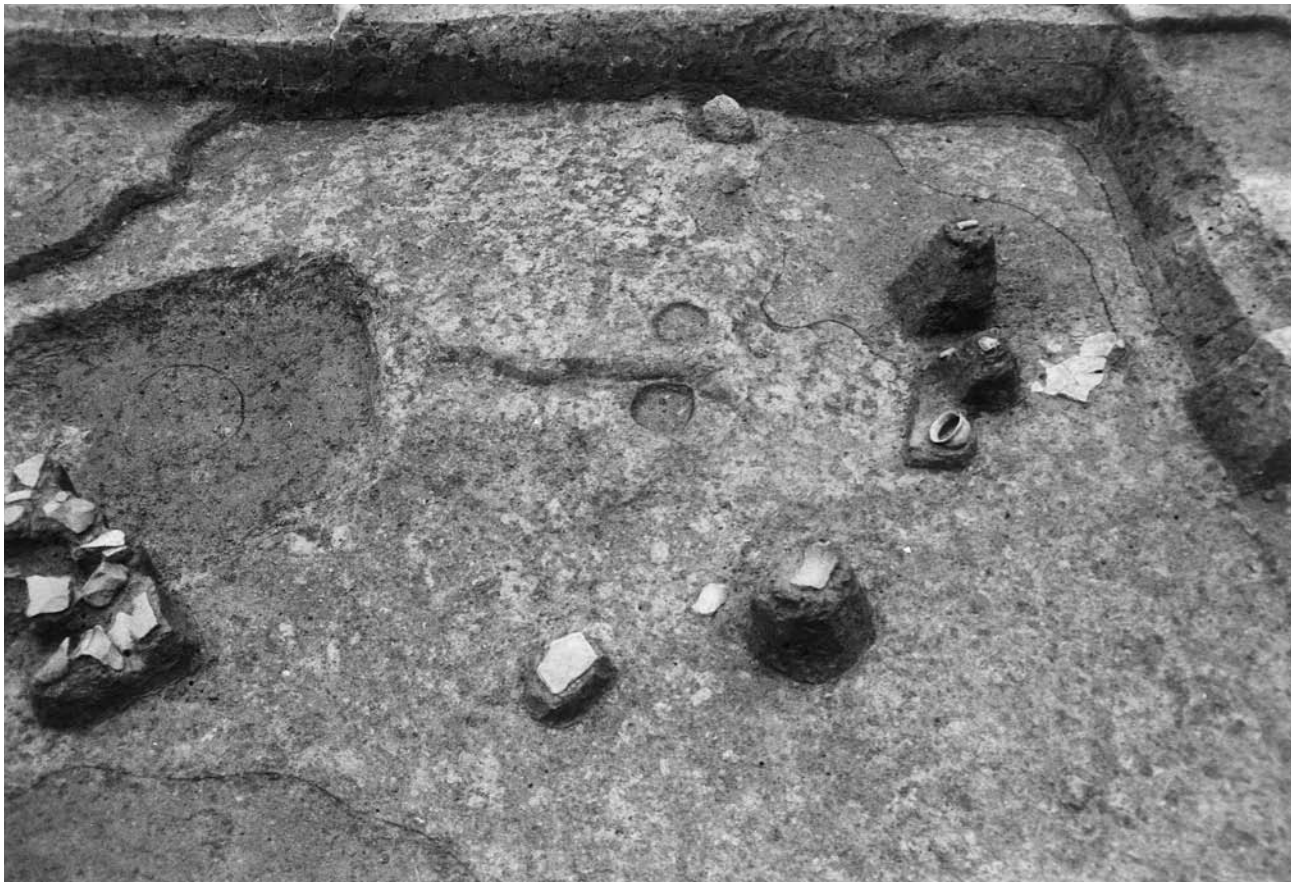
1　井尻Ｂ遺跡17次Ｃ調査区SG01貯蔵穴出土状況（北から）

2　井尻Ｂ遺跡17次Ｃ調査区SG01貯蔵穴土器出土状況（東から）

1　井尻Ｂ遺跡17次Ｃ調査区SC12竪穴住居跡出土状況（東から）

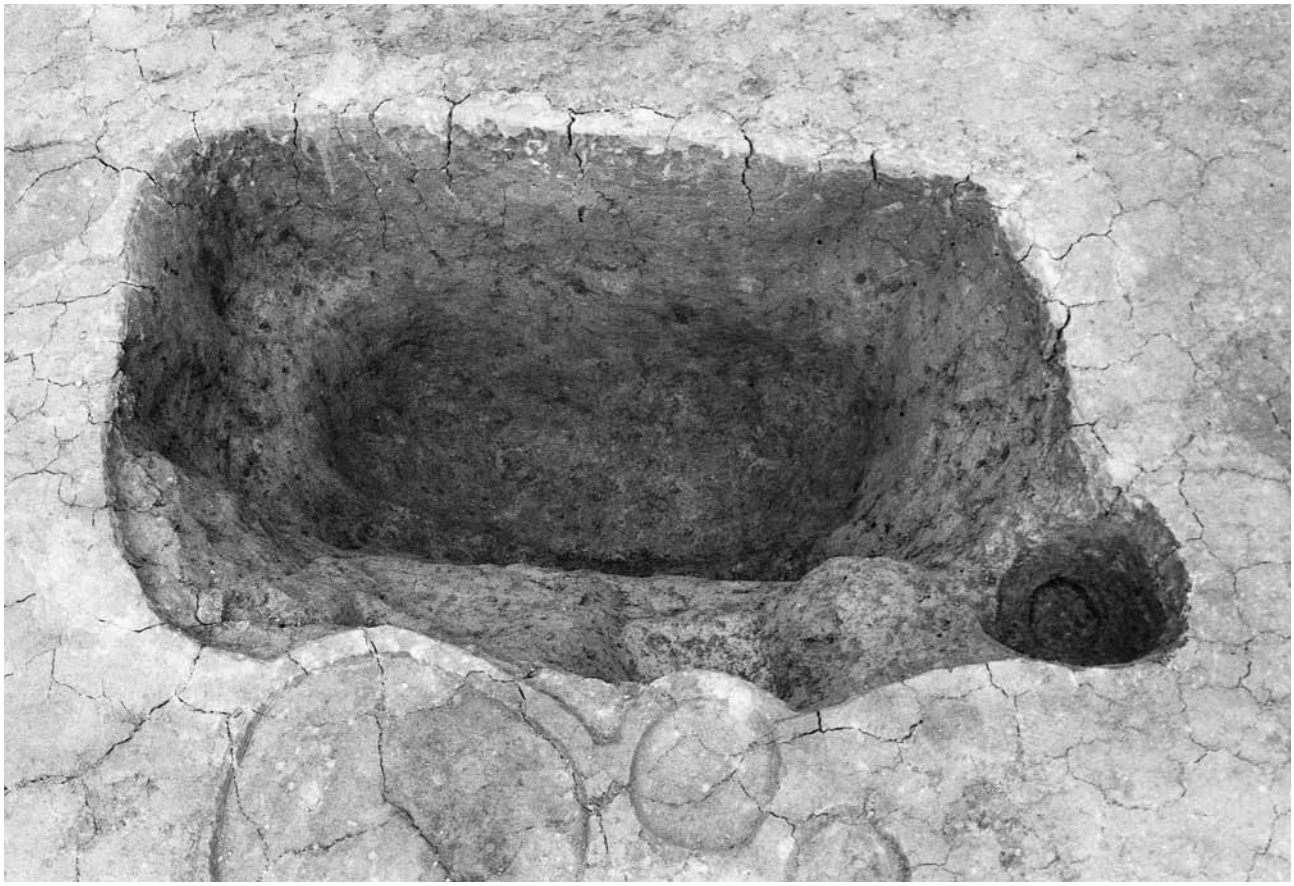
2　井尻Ｂ遺跡17次Ｃ調査区SC12竪穴住居跡床面土器出土状況（東から）

1　井尻Ｂ遺跡17次Ｃ調査区SC14竪穴住居跡出土状況（南東から）

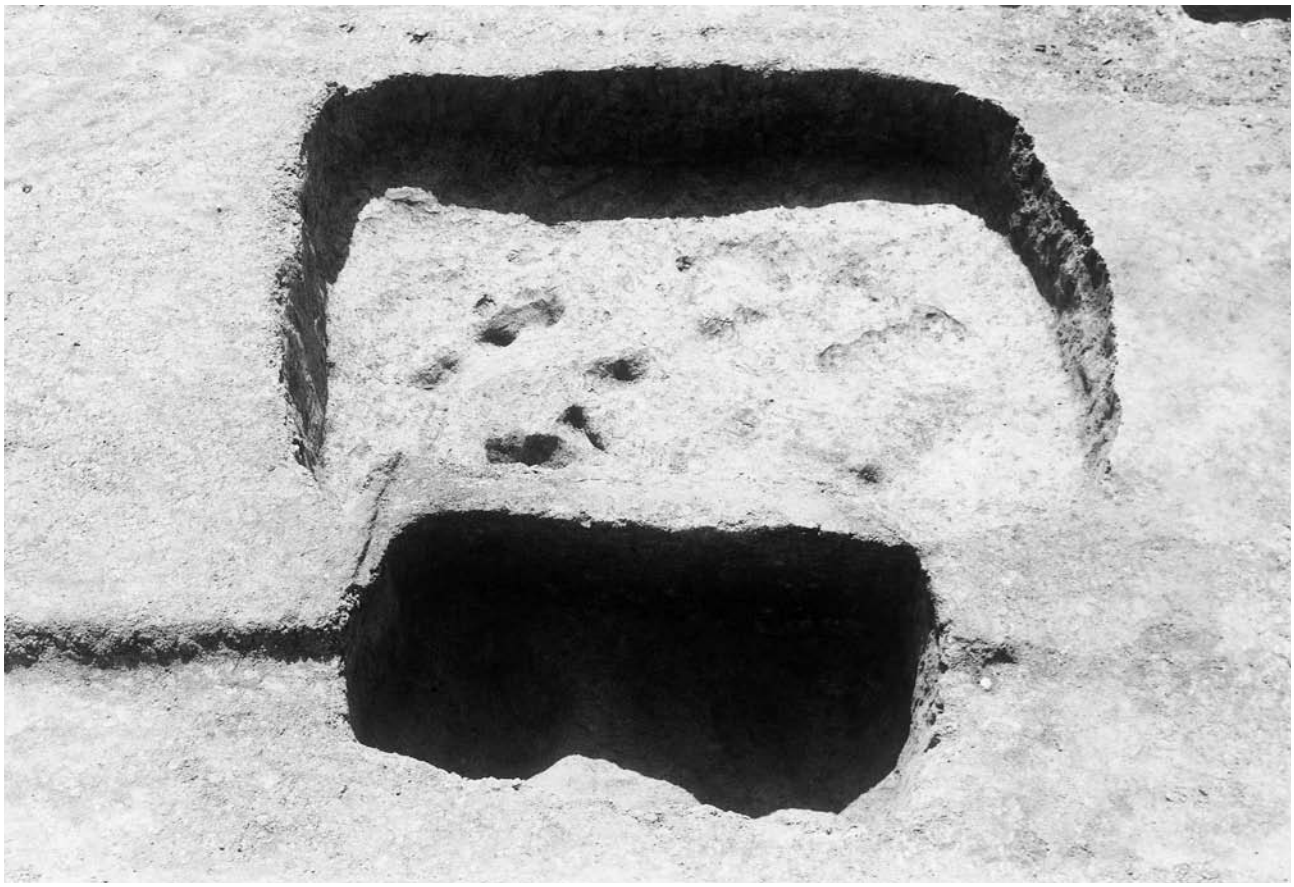


2　井尻Ｂ遺跡17次Ｃ調査区SC14竪穴住居跡床面土器出土状況（南東から）

1　井尻Ｂ遺跡17次Ｃ調査区SC15竪穴住居跡出土状況（東から）

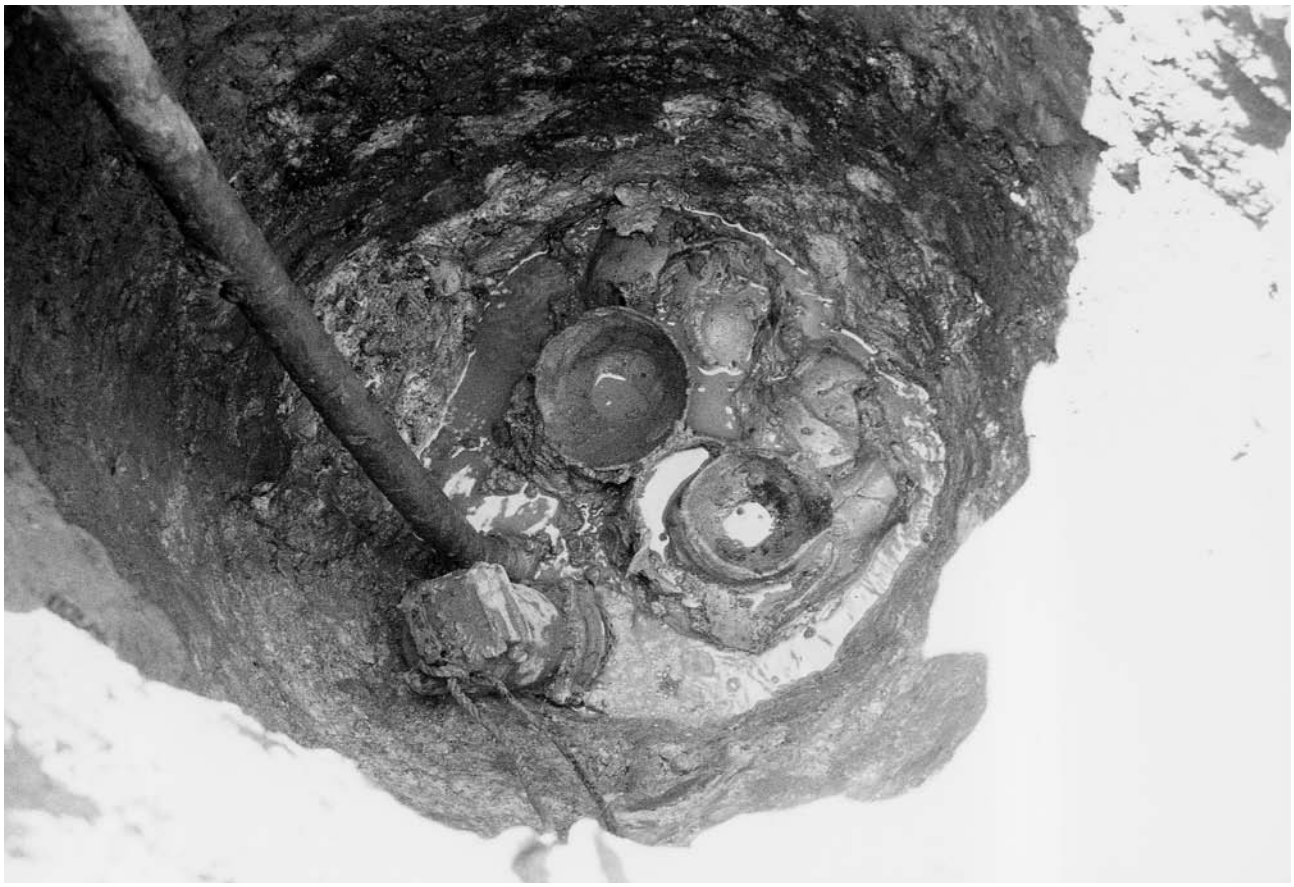


2　井尻Ｂ遺跡17次Ｃ調査区SK04土坑出土状況（南から）



1　井尻Ｂ遺跡17次Ｃ調査区SK12土坑出土状況（東から）

2　井尻Ｂ遺跡17次Ｃ調査区SE01井戸内土器出土状況（北から）



1　井尻Ｂ遺跡17次Ｃ調査区SE04井戸内土器出土状況（北から）

2　井尻Ｂ遺跡17次Ｃ調査区出土遺物①

06217

06196

06219

06209

井尻Ｂ遺跡17次Ｃ区出土遺物②

06224

06225

06235

06220

井尻Ｂ遺跡17次Ｃ区出土遺物③

06227

06226

06239

06236

井尻Ｂ遺跡17次Ｃ区出土遺物④

06243

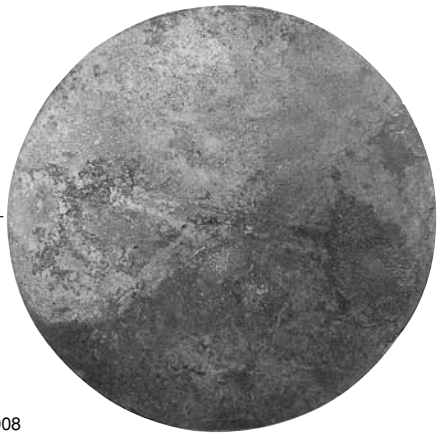
06240

06244

06242

06241

井尻Ｂ遺跡17次Ｃ区出土遺物⑤



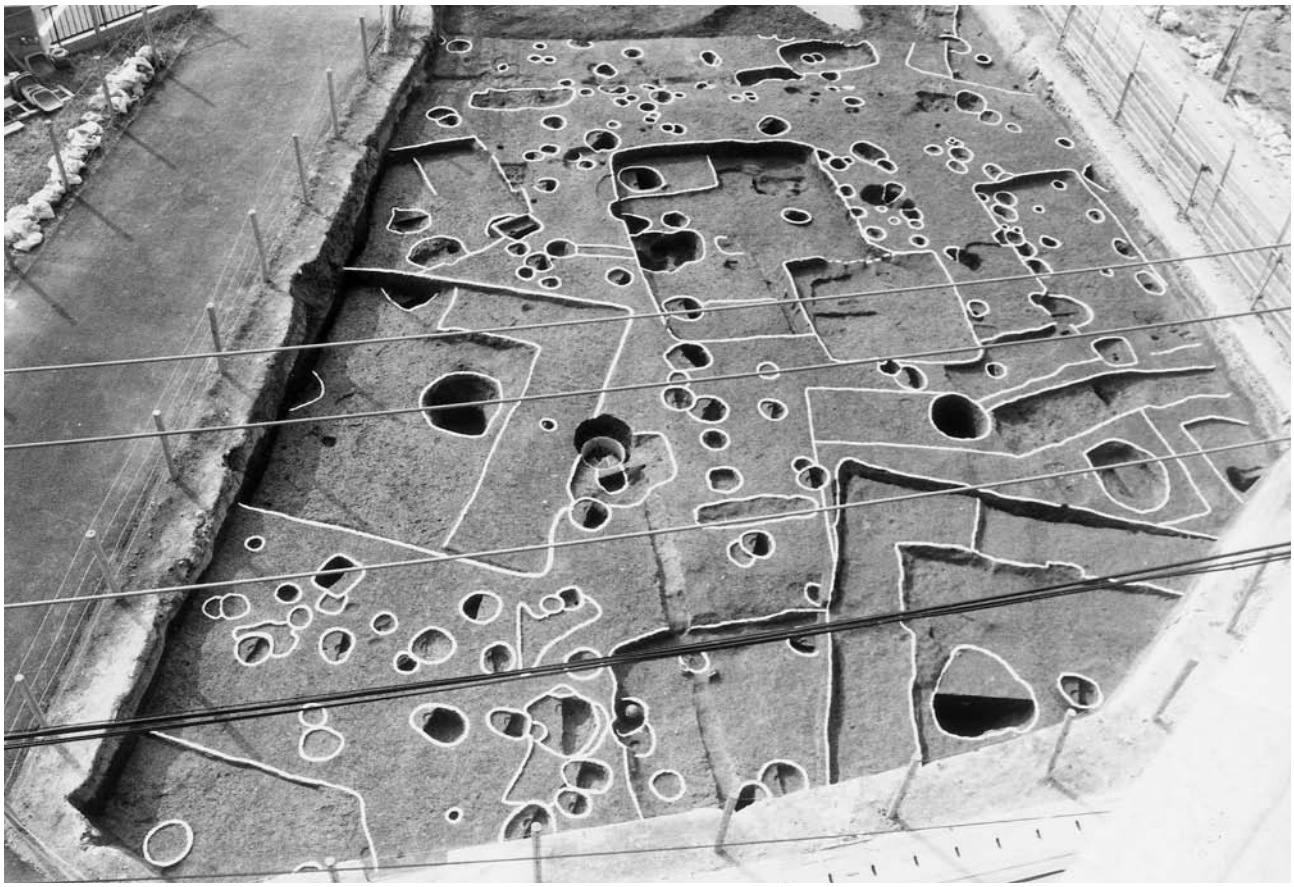
36008

36009

06212

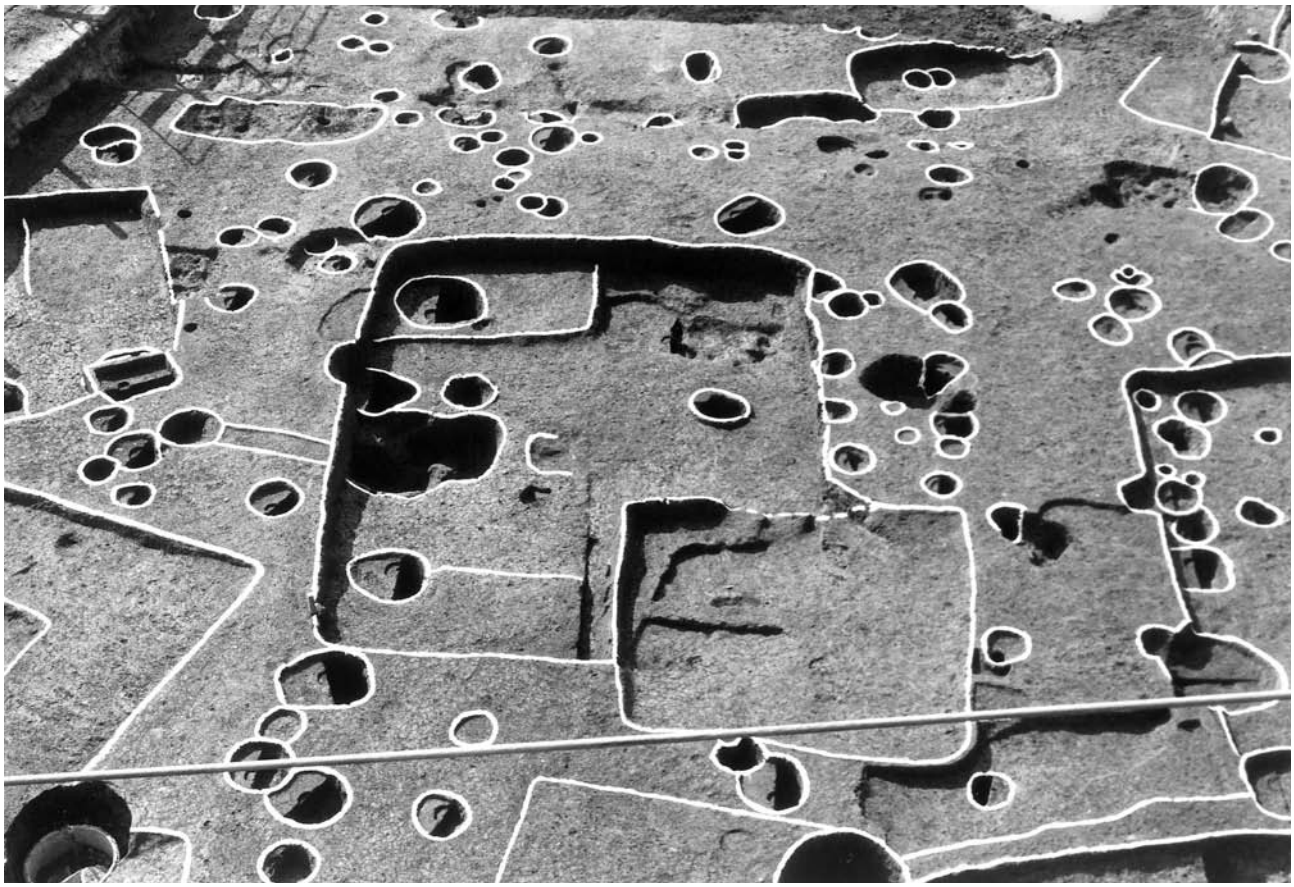
06165

井尻Ｂ遺跡17次Ｃ調査区SE05井戸・SC01住居跡出土遺物
（小型仿製鏡・銅塊付着甕底部・勾玉鋳型・土製坩堝）

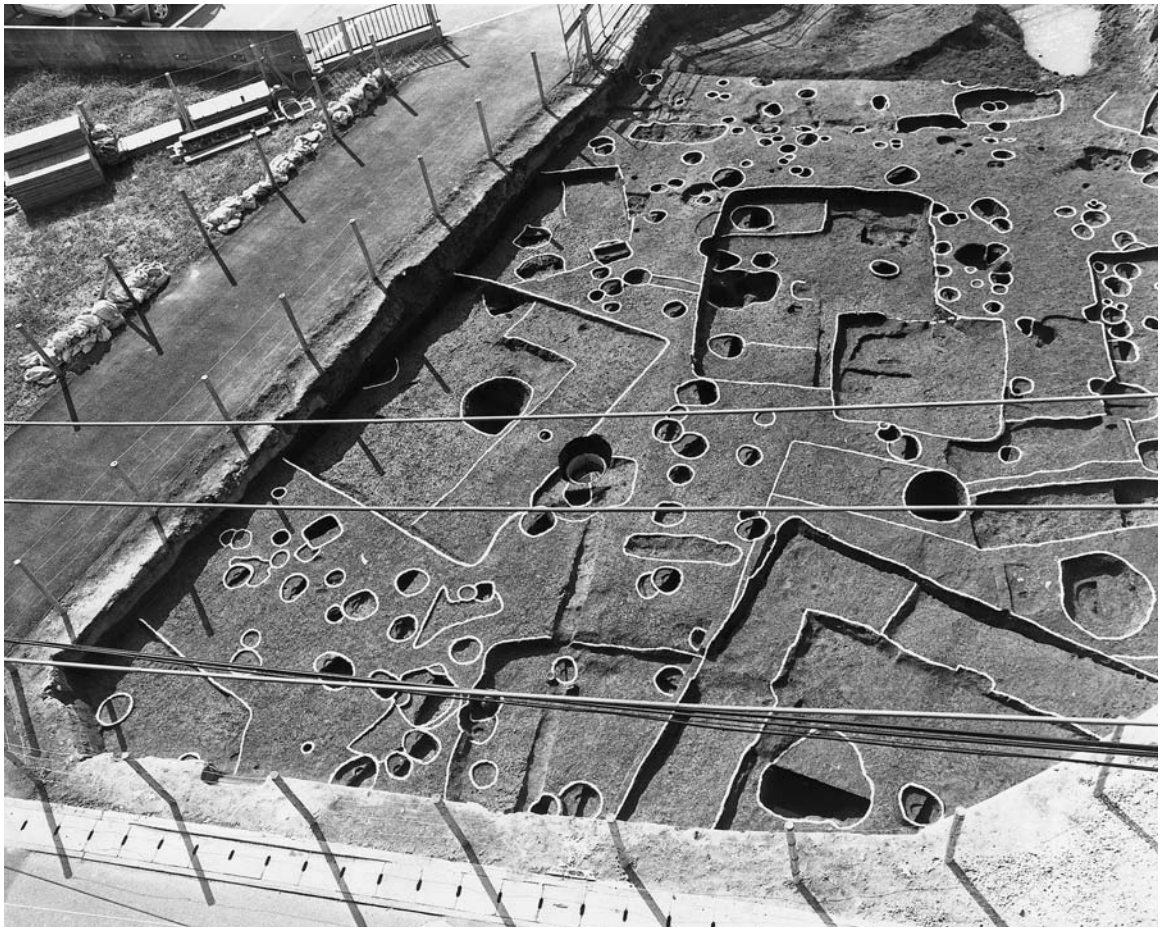


1　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区遺構出土状況全景（東から）

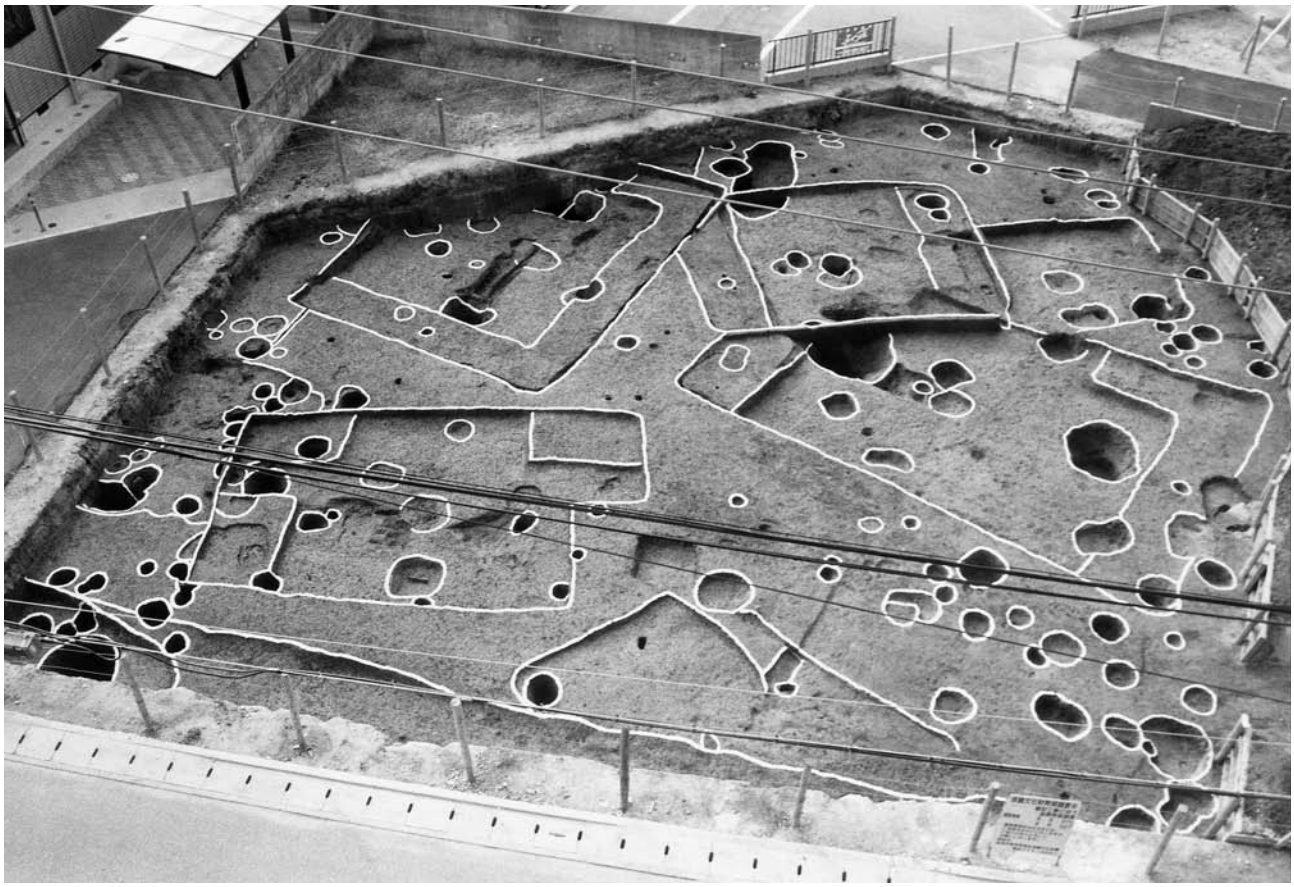
2　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区SC01・02・04・05・09・10竪穴住居跡出土状況全景（東から）



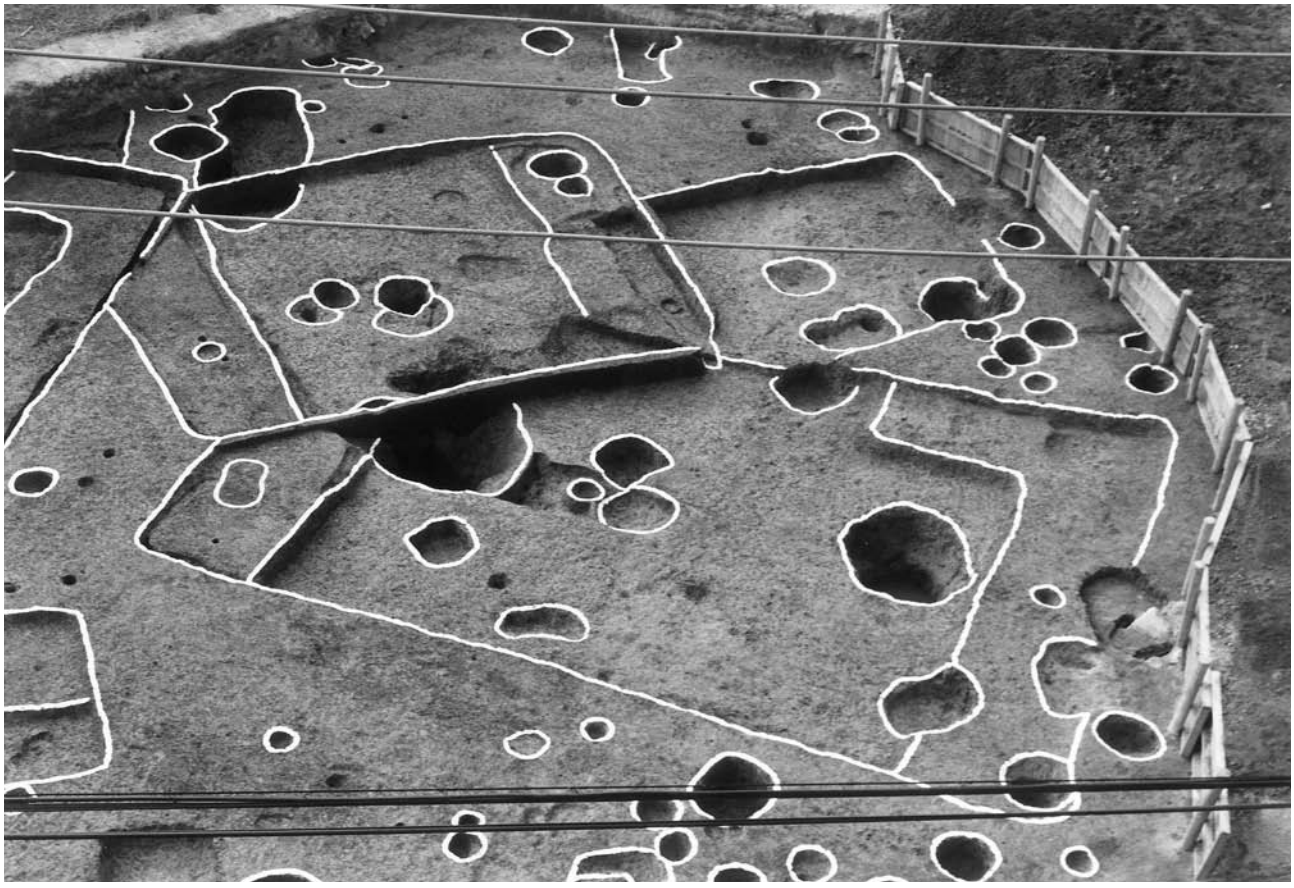
1　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区SC04・05竪穴住居跡出土状況（東から）



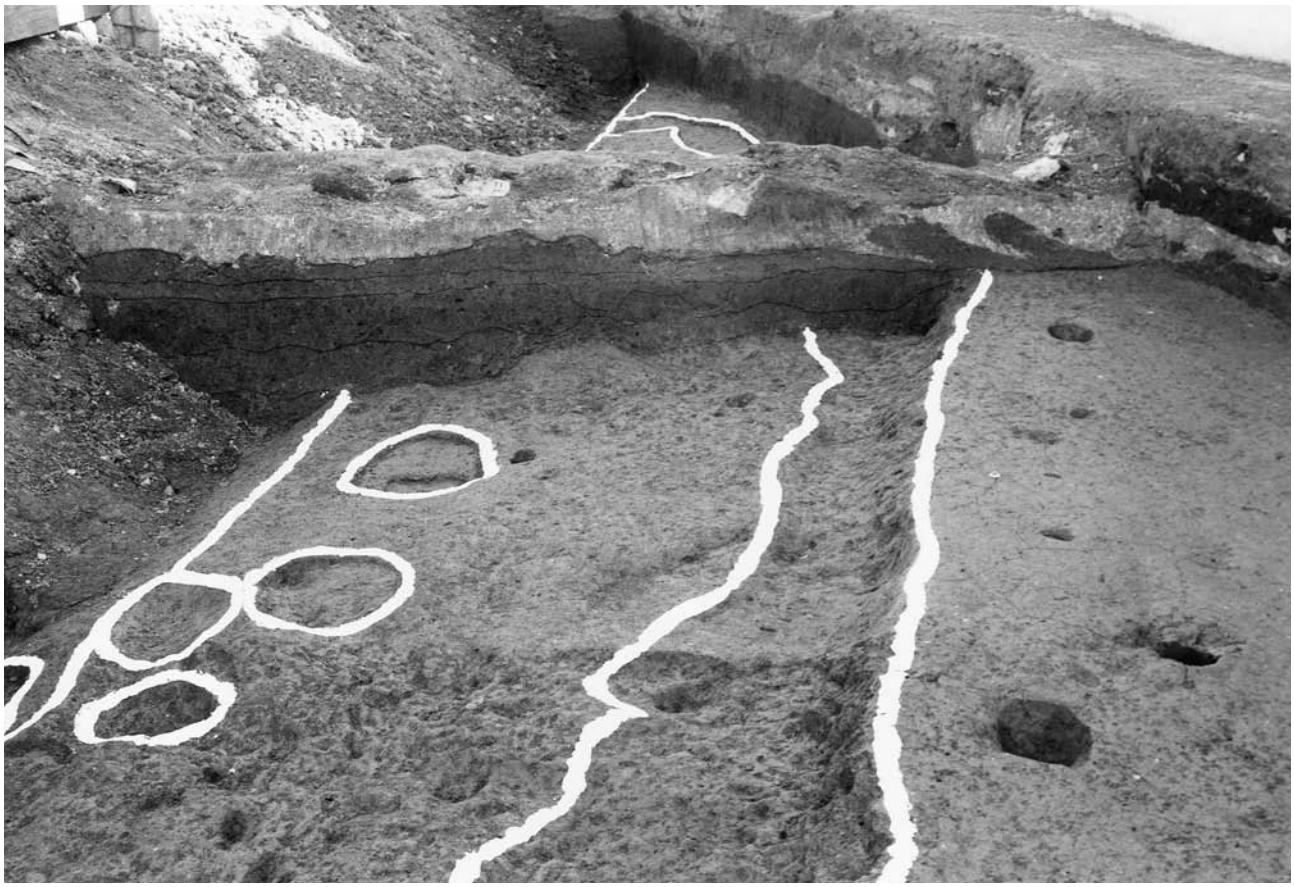
2　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区南側遺構出土状況全景（東から）



1　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅡ調査区遺構出土状況（東から）

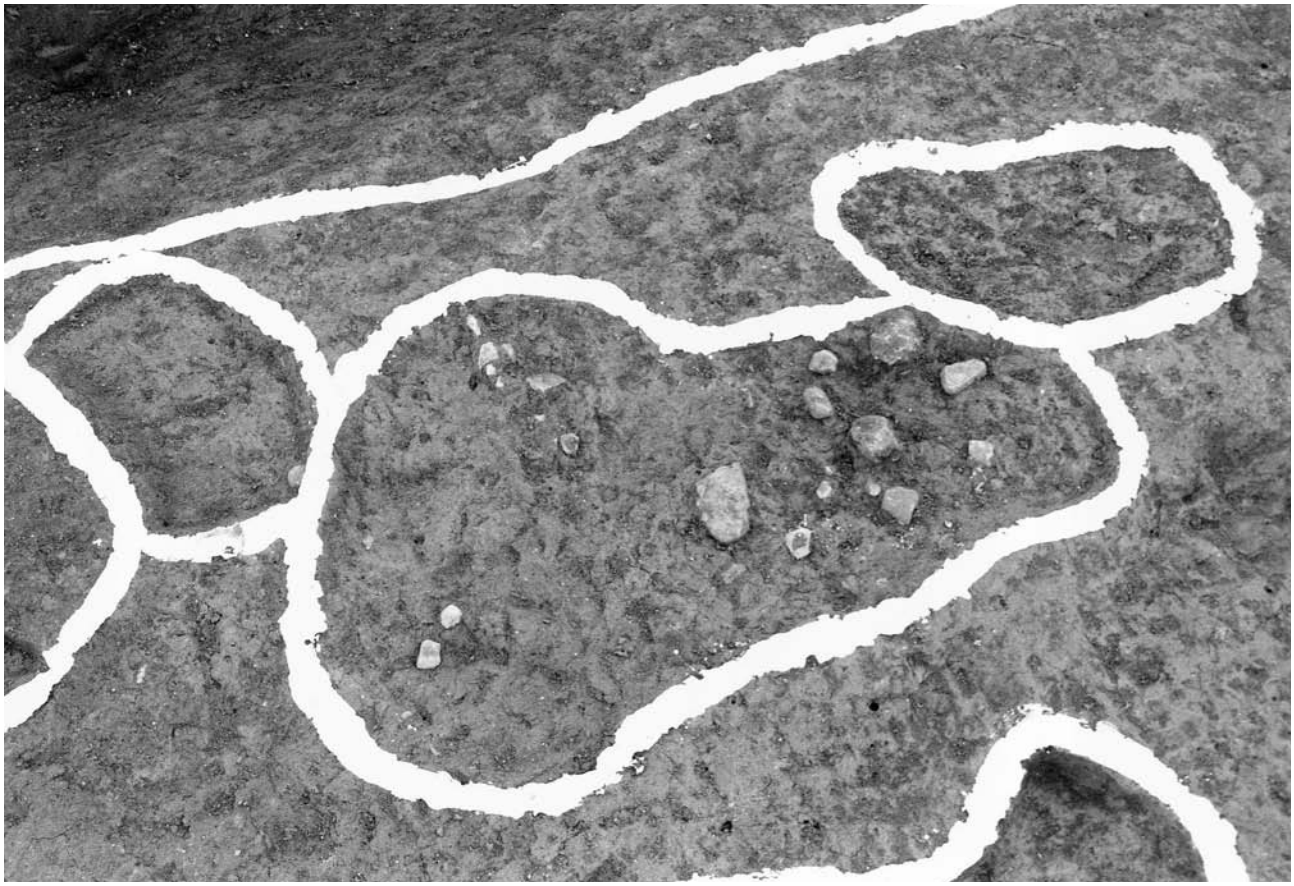


2　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅡ調査区SC09～11竪穴住居跡出土状況（東から）



1　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅢ調査区SF02道路遺構出土状況（北から）

2　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅢ調査区SD07溝土層断面（北から）



1　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅢ調査区SF02道路遺構補修状況（西から）

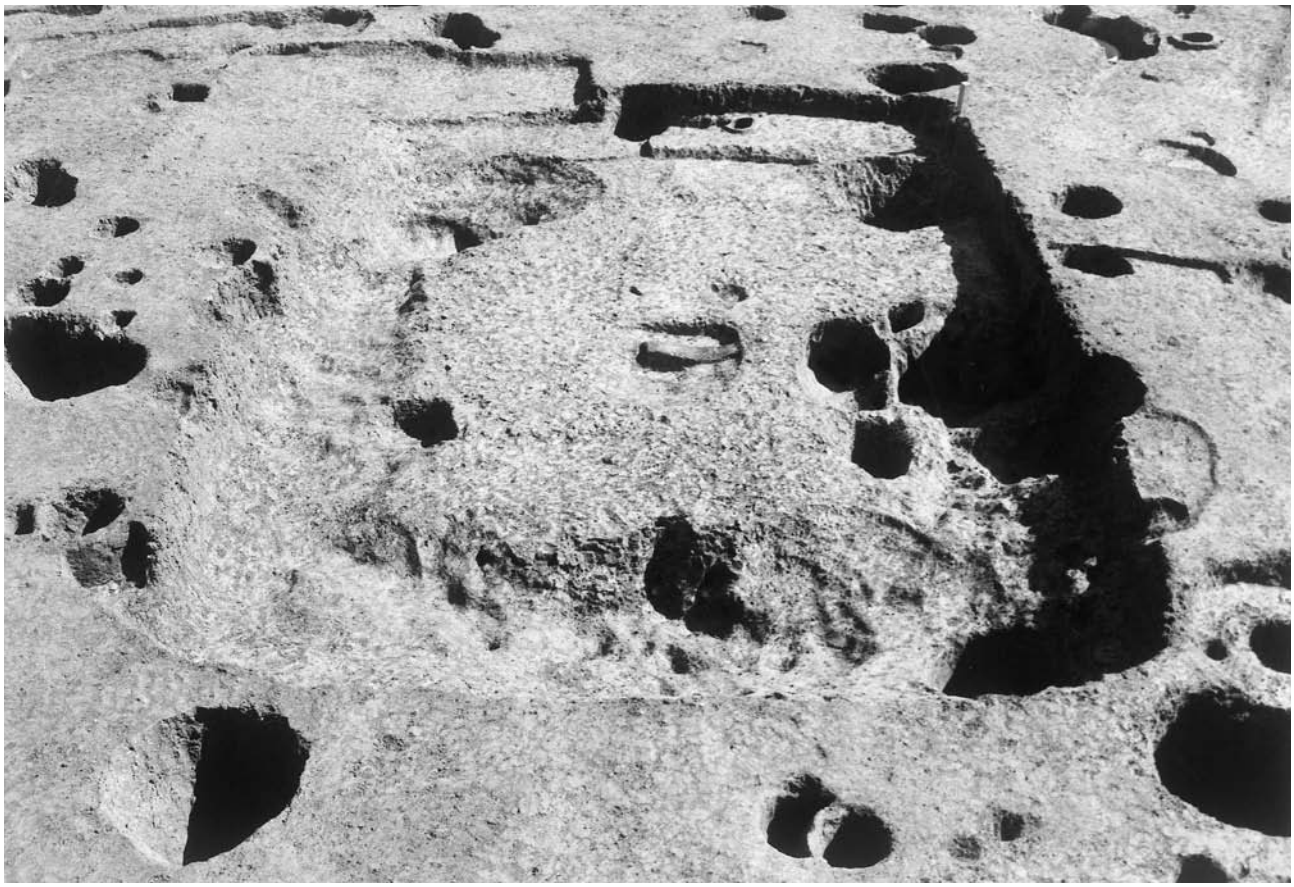
2　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区SC01竪穴住居跡出土状況（東から）

1　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区SC02竪穴住居跡出土状況（西から）

2　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区SC02竪穴住居跡出土状況（西から）

1　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区SC04竪穴住居跡出土状況（北から）

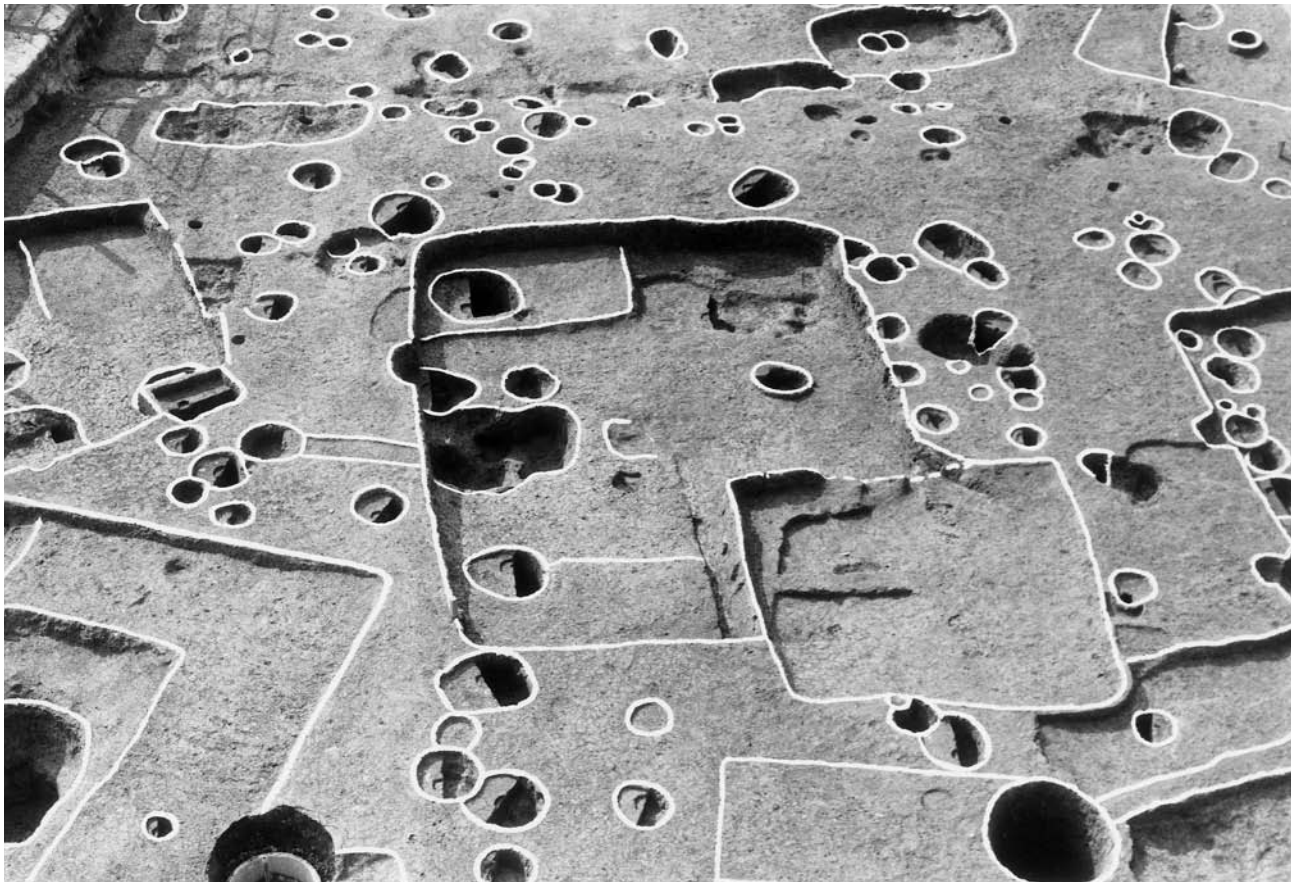
2　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区SC04竪穴住居跡出土状況（北から）



1　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区SC05竪穴住居跡出土状況（西から）

2　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区SC05竪穴住居跡出土状況（西から）

1　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区SC05竪穴住居跡出土状況（西から）

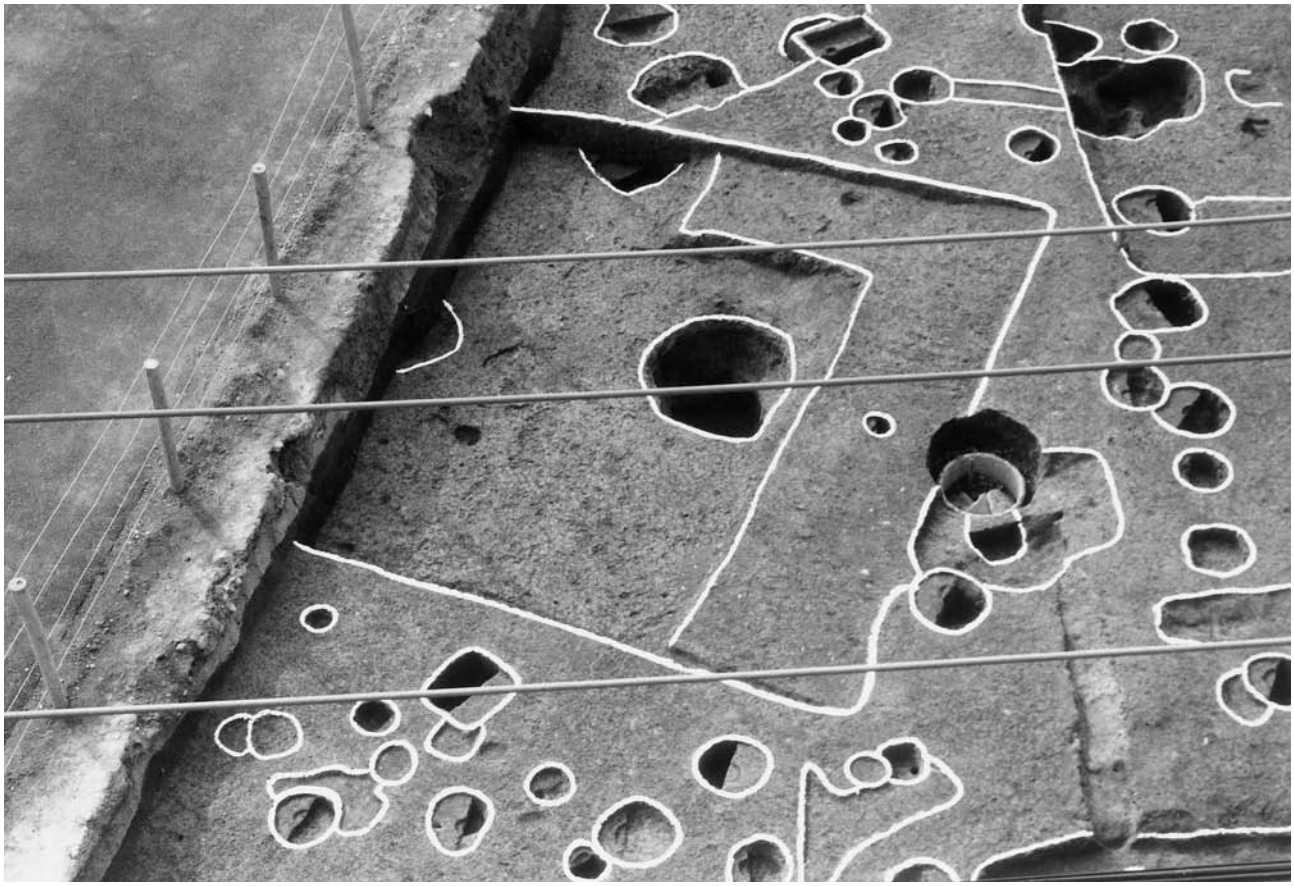


2　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区SC04・05竪穴住居跡出土状況（東から）

1　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区SC06竪穴住居跡・SK07土坑出土状況（南西から）

2　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区SC09竪穴住居跡出土状況（東から）

1　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区SC09竪穴住居跡出土状況（東から）

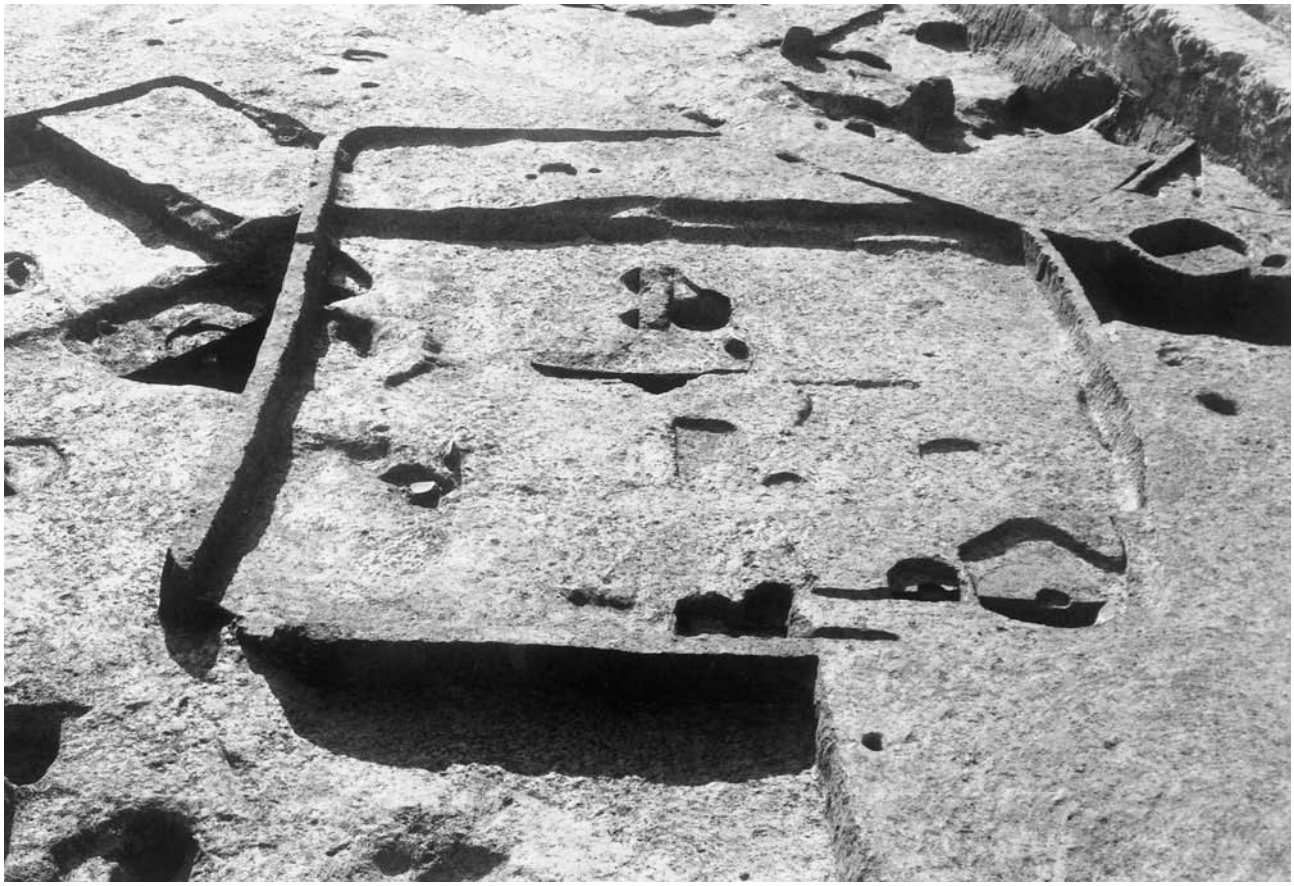


2　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区SC09竪穴住居跡出土状況（東から）

1　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区SC09竪穴住居跡出土状況（東から）

2　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区SC10竪穴住居跡出土状況（北から）

1　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区SC10竪穴住居跡出土状況（北から）



2　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区SC11竪穴住居跡出土状況（北から）

1　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区SC12竪穴住居跡出土状況（北から）

2　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区SC13竪穴住居跡出土状況（北から）

1　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区SC16竪穴住居跡出土状況（東から）

2　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区SK04土坑出土状況（東から）

1　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区SK04土坑出土状況（東から）

2　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区SK09土坑出土状況（西から）

1　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区SK08土坑出土状況（北から）

2　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区SK28土坑出土状況（北から）

1　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区SE03井戸出土状況（西から）

2　井尻Ｂ遺跡17次ＤⅠ調査区SE03井戸内土器出土状況（西から）

05172

05175

05173

05178

05174

05176

井尻Ｂ遺跡17次Ｄ調査区出土遺物①

05182

05194

05183

05192

05201

05202

井尻Ｂ遺跡17次Ｄ調査区出土遺物②

05218

05222

05221

05223

05220

05229

井尻Ｂ遺跡17次Ｄ調査区出土遺物③

05233

05243

05232

05246

05224

05249

05235

井尻Ｂ遺跡17次Ｄ調査区出土遺物④

報告書抄録

書名	井尻Ｂ遺跡　15		
副書名	井尻Ｂ17次（Ｃ・Ｄ区）の調査		
巻次	15		
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書		
シリーズ番号	918集		
編著者名	横山邦継		
編集機関	福岡市教育委員会	発行機関	福岡市教育委員会
発行年月日	20070330	作成法人ＩＤ	40134
住所	〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1	電話番号	092-711-4667
遺跡名ふりがな	いじり		
遺跡名	井尻Ｂ遺跡		
所在地ふりがな	ふくおかしみなみくいじり		
所在地	福岡市南区井尻		
市町村コード	40135		
北緯	33° 33′ 11. 5″	東経	130° 26′ 34. 9″
調査機関	福岡市教育委員会	調査面積	1,300㎡
調査原因	市道新設	種別	集落
主な時代	弥生時代中期　弥生時代後期　古代		
遺跡概要	弥生時代中期－竪穴式住居 弥生時代後期－竪穴式住居＋井戸＋土壙＋溝－土器など 古代－道路状遺構など		
特記事項	弥生時代後期後半を主とする集落で青銅器生産を行っている。 古代では現代の地割りに近い方向で道路状遺構が検出されている。		

井尻Ｂ遺跡 15

—井尻Ｂ遺跡第17次調査（Ｃ・Ｄ区）の報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書第918集

2007年３月30日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神１－８－１
電話 092-711-4667

発　行　セントラル印刷㈱
福岡市中央区大宮１－５－13
電話 092-522-3181